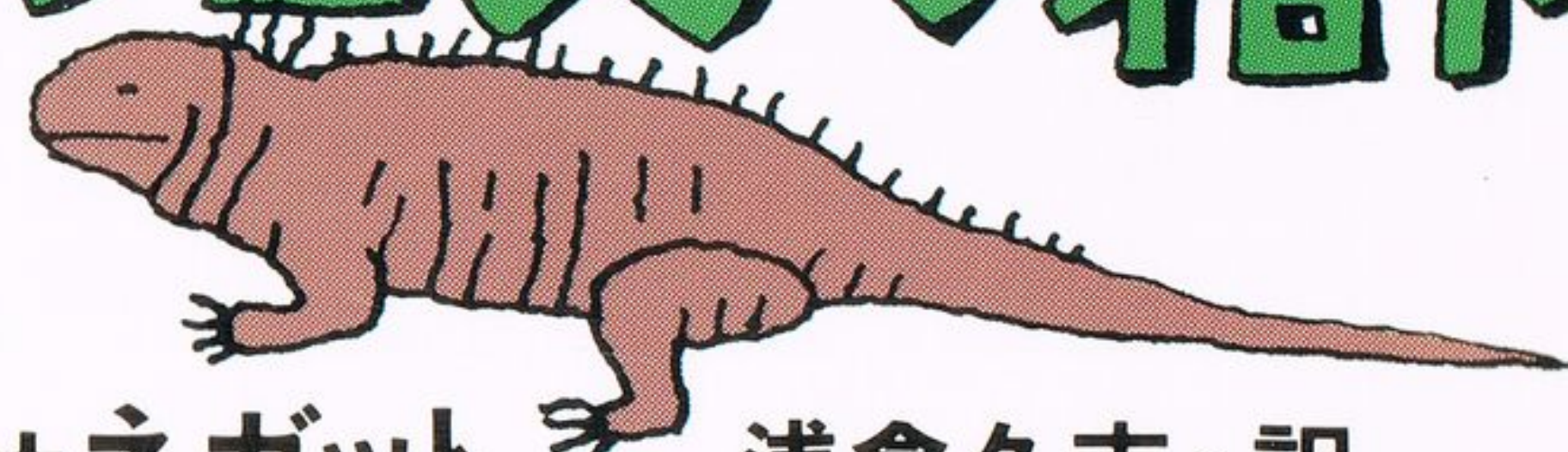
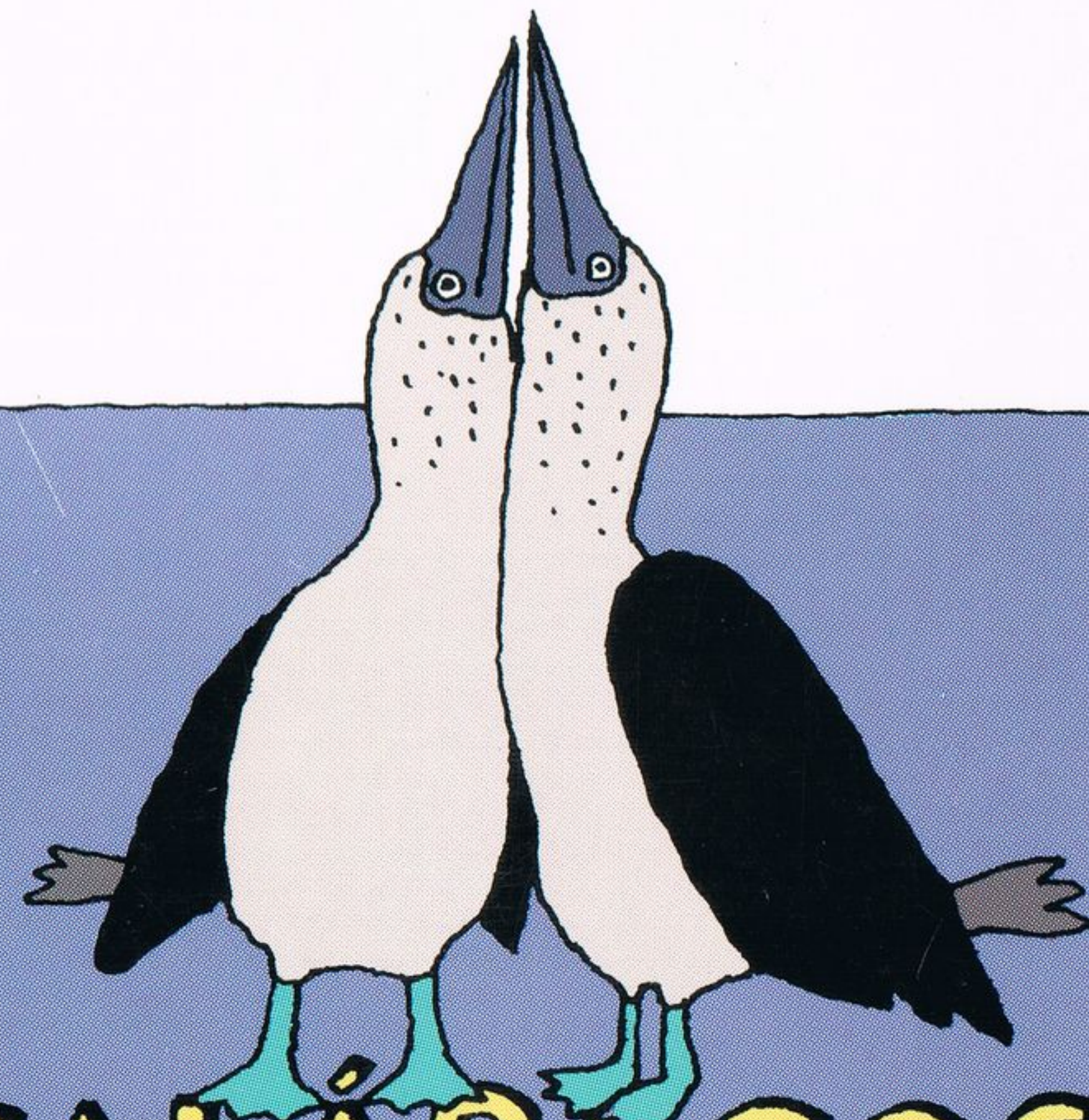
ガラパゴスの箱舟

カート・ヴォネガット　浅倉久志・訳

早川書房

SF
1118
ガラパゴスの箱舟
カート・ヴォネガット
SF
ウ
4
12
ハヤカワ文庫
定価
620

カバー・和田　誠

1986年、世界的な経済恐慌と戦争と疫病に見舞われた人類は滅亡の危機に瀕していた。折りしもエクアドル崩壊の直前、ガラパゴス諸島遊覧の客船バイア・デ・ダーウィン号が何人かの男女を乗せて海へ漂い出ていた。船長、女教師、結婚詐欺師、盲目の娘、インディオの少女たち――ダーウィンの進化論で知られるガラパゴス諸島に漂着した彼らとその子孫たちが、百万年を経て遂げた新たな進化とは？　鬼才が描く旧人類への挽歌

ISBN4-15-011118-9

C0197 P620E

定価620円(本体602円)

ハヤカワ文庫SF/カート・ヴォネガットの作品

プレイヤー・ピアノ
タイタンの妖女
スローターハウス5
猫のゆりかご
ローズウォーターさん、あなたに神のお恵みを
スラップスティック
ジェイルバード
母なる夜
モンキー・ハウスへようこそ①
モンキー・ハウスへようこそ②
チャンピオンたちの朝食
ガラパゴスの箱舟

ハヤカワ文庫 <SF1118>

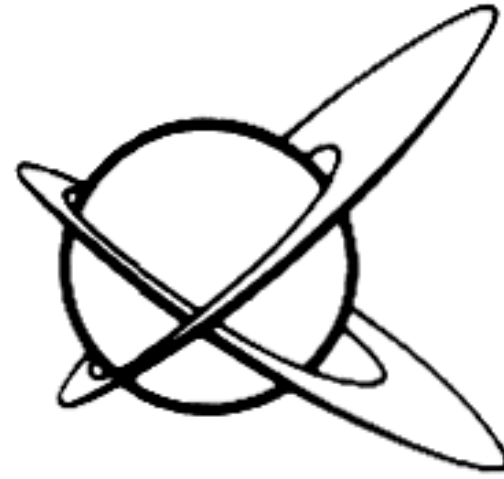
ガラパゴスの箱舟

カート・ヴォネガット
浅倉久志訳

早川書房

ハヤカワ文庫SF
〈SF1118〉

ガラパゴスの箱舟

カート・ヴォネガット
浅倉久志訳

早川書房
3742

アマチュア博物学者
ヒリス・L・ハウイー（一九〇三―一九八二）の思い出に捧げる――

このりっぱな人物は
一九三八年の夏
わたしと親友のベン・ヒッツ
そのほか何人かの少年を
インディアナ州インディアナポリスから
アメリカの大西部へ連れていってくれた。

ハウイーさんは本物のインディアンを紹介し
毎晩われわれを野外で眠らせ
自分のクソを土に埋めさせ

馬の乗りかたを教え
たくさんの動植物の名前だけでなく
それらの生き物が生きつづけ
子孫をふやすために
どんなことをしているかを教えてくれた。

ある晩ハウイーさんはキャンプのそばで
わざと山猫そっくりのさけびをあげ
われわれは死ぬほどぶったまげた。
本物の山猫がさけびかえした。

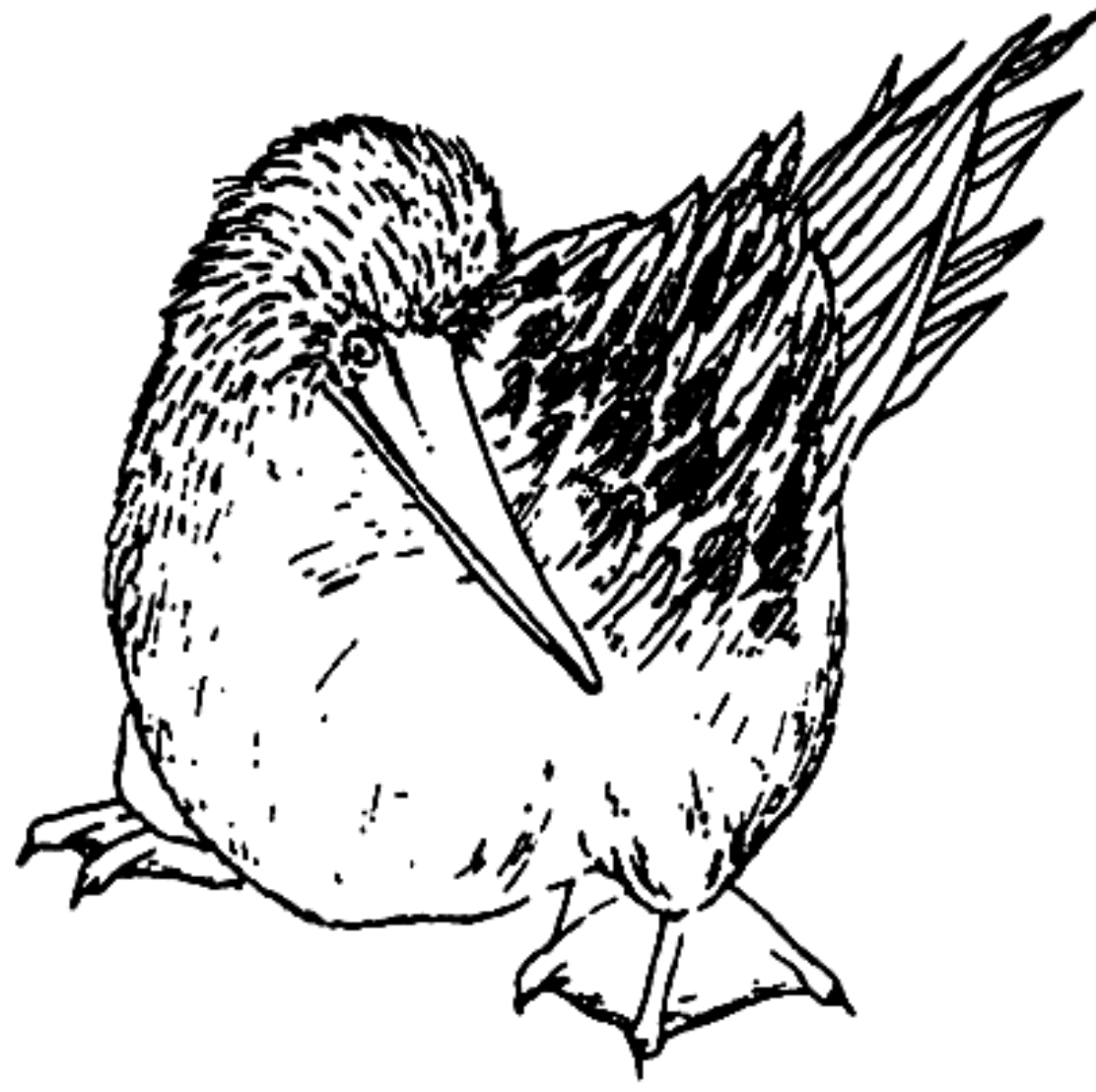
いろんなことはありましたが、それでもわたしは
だれもが心底は善人だと信じています。

アンネ・フランク（一九二九―一九四四）

目次

ガラパゴスの箱舟

第一部　そのむかし

1

そのむかし——

いまから百万年前の西暦一九八六年、グアヤキルは、エクアドルという南米の小さな民主国が持つ最大の貿易港だった。この国の首都キートは、アンデス山脈の高地にあった。グアヤキルは、赤道から二度南に位置していた。赤道（equator）というのは地球が巻いている想像上の腹帯で、これがエクアドルという国名の由来でもある。グアヤキルは年中暑くて、しかも湿度が高かった。赤道無風帯に属している上に、山々からの水を集めた何本かの川が合流する、じめじめした沼沢地に作られた町であったからだ。

この港は外海から数キロ奥に入った河口にあった。そこでは上流から流されてきた草木がしょっちゅうからまりあって、濁った水面をふさいでは、杭や錨綱を包みこんでいた。

そのころの人間はいまよりもずっと大きな脳を持っていたので、いろいろの謎で退屈しのぎをすることができた。一九八六年当時のそうした謎のひとつは、長い距離を泳げない生物がどうしてこんなにたくさんガラパゴス諸島へたどりつくことができたのか、というものだった。ガラパゴスは海底火山の噴出がつくりだした群島で、グアヤキルの真西に当たり、本土から一千キロも離れている――そのあいだを隔てているのは、南極から直輸入の、きわめて冷たくて、きわめて深い海水だ。人間がこれらの島々を発見したときには、すでにヤモリ、イグアナ、コメネズミ、溶岩トカゲ、クモ、アリ、カブトムシ、バッタ、ハエ、ダニなどが、ここに住みついていた。そして、いうまでもなく、巨大なゾウガメも。

彼らはどういう移住の手段を使ったのだろうか？

おおぜいの人間が、こんな答で自分たちの大きな脳を満足させた――彼らは草木のからまりあった天然の筏（いかだ）に乗ってやってきたのだ。

●

べつの人たちはそれに対してこう反論した。そのような筏（いかだ）はすぐに塩水で腐ってばらばらになるから、陸地を遠く離れた外海ではお目にかかったためしがないし、それにガラパゴス諸島と大陸のあいだを通る海流が、そのての原始的な船を西ではなく北へ押し流してしまうだろう。

また、こんな説も立てた。これら陸者（おかもの）の動物たちは、自然の橋の上を足を濡らさずに渡っ

たか、それとも、飛び石づたいに短い距離を泳いでいったかのどちらかで、その後に橋または飛び石が海の下にもぐってしまったのだろう、と。しかし、科学者たちは、大きな脳と抜けめのない計器を使って、一九八六年よりもっと前に海底地形図を完成していた。それによると、大陸とこの島々をつなぐ陸地らしいものの痕跡はどこにもなかった。

●

大きな脳と風変わりな考え方のはびこったその時代には、ほかにもこんな主張をする人たちがあった。この島々は、かつては大陸の一部であったが、なにかとてつもない天変地異によって大陸からひきちぎられたのだろう。

しかし、この島々は、なにかからひきちぎられたようには見えなかった。どれもが明らかに若い火山で、いまある場所の噴火によってできあがったものだった。その多くはごく新しい火山であり、いつまた爆発するともかぎらない。一九八六年当時は、まだそれほどサンゴが発達していなかったため、当時の多くの人間が、理想の来世の味見だと考えていた、快適な青い礁湖や白い砂浜はあいにく見当たらなかった。

それから百万年後の現在では、この島々もりっぱに白い砂浜と青い礁湖を持っている。しかし、この物語のはじまる時代、この島々にはまだ殺風景な溶岩のこぶやドームや円錐や尖塔がそそりたち、その亀裂や穴や盆地や谷は、ゆたかな表土や淡水ではなく、きわめて細かい、乾ききった火山灰でいっぱいだった。

当時のもうひとつの仮説には、こんなものがあった。全能の神は、そもそもこれらすべての生き物を探検家たちが発見した場所で創りだされたのであるから、移住の必要などあるわけがない。

●

それともまた、こんな仮説もあった。どの動物もひとつがいずつ岸へ追い上げられたのである——ノアの箱舟の道板を渡って。

●

もし、本当にノアの箱舟が存在したのなら——そしてその可能性もあるが——この物語の題名を『第二のノアの箱舟』としたいところだ。

2

いまから百万年前には、たとえばジェイムズ・ウェイトという三十五歳のアメリカ人が、まったく泳げないのに、南アメリカ大陸からガラパゴス諸島へ行こうと考えても、べつにふしぎでも謎でもなかった。また本人としても、天然の植物製の筏に乗って、運を天にまかせるつもりは断じてなかった。彼はグアヤキルのダウンタウンにあるホテルで、二週間の船旅のキップを買ったばかりだった。この船旅はある新造客船の処女航海であり、その船は〝ダーウィン湾〟のスペイン名にちなんでバイア・デ・ダーウィン号と名づけられていた。エクアドル国旗をひるがえした新造客船がはじめてガラパゴス諸島へ向かうこの船旅は、その前年から〝世紀の大自然クルーズ〟として、全世界に大きく宣伝されていた。

ウェイトはひとり旅だった。若禿で、でっぷり太り、安カフェテリアのパイ皮のように冴えない顔色をして、メガネをかけていたので、もしそんな主張をするほうが有利なら、五十代だといっても通ったかもしれない。この男は自分を無害で内気に見せたがっていたから。

ウェイトは、広いディエス・デ・アゴスト通りに面したホテル・エルドラドに部屋をとっ

ていて、いまカクテル・ラウンジにいる客は彼ひとりだった。バーテンはヘスース・オルティスという二十五歳の青年で、誇り高いインカ貴族の後裔だったが、この冴えないひとりぼっちの自称カナダ人を見て、おそらくなにかの災難か不幸ですっかりうちひしがれているのだろう、と考えた。ウェイトは、どんな人間にも自分をそんなふうに見せたがっていた。

ヘスース・オルティスは、この物語の中でもいちばん心優しい人間なので、この孤独な観光客を軽蔑したりはせずに、むしろ同情をよせた。ウェイトの麦藁帽子と、ロープ・サンダルと、黄色のショーツと、青と白と紫のコットン・シャツが、ホテルのブティックのばか高い買物であることを見てとって、オルティスは悲しい思いをしたが、これまたウェイトの思惑にはまったわけだった。空港からビジネス・スーツ姿で到着したときのウェイトはけっこう堂々としていたのに、と、オルティスは思った。だが、いまではわざわざ大金をかけて、この男は自分を道化師に、熱帯を訪れる北米人観光客のカリカチュアに変えてしまったのだ。

ウェイトが着ているまっさらのシャツの裾には、まだ値札がくっついていた。オルティスは正確な英語で、ごく丁重に、そのことを彼に注意した。

「ありゃ」とウェイトはいった。値札がそこにくっついているのは承知の上で、それをはずす気はさらさらなかったのだ。いかにも自嘲的に、きまり悪そうなしぐさで、彼は値札をちぎりとろうとしかけた。だがそこで、自分が逃れようとしている悲しみにまたとらえられたという思い入れよろしく、そのことを忘れてしまったふりをした。

ウェイトは漁師であり、その値札はいわば餌だった。見ず知らずの他人から話しかけられるきっかけを作って、ちょうどオルティスがいったのと大同小異のことをむこうにいわせるための策略だった。

「セニョール、失礼ですが、シャツの裾になにか――」

ウェイトは、偽のカナダ旅券に記載されたウィラード・フレミングという名前で、ホテルに泊っていた。彼はすばらしい大成功をおさめた詐欺師だった。

オルティスなら、この詐欺師に話しかけてもどうということはない。だが、小金を持っていそうなひとり旅の女性、しかも、夫がいなくて、年齢的にもう子供が産めない女性がそうするのは、危険きわまりないことだった。すでにウェイトは、十七人ものそうした女性に対して、求愛と結婚をくりかえしてきた――そのたびに、妻の宝石箱や、金庫や、銀行口座の中身をすっかりいただいて、姿をくらますのだ。

この事業は大成功で、彼はすでに百万長者となり、北アメリカ各地の銀行にいろいろの偽名で預金口座を作って利子を生ませている上に、これまでただ一回の逮捕歴もなかった。どうやら、だれも彼をつかまえる気がないらしい。本人はこう推測していた――警察から見るかぎり、自分は十七人の不実な夫、それぞれちがった名前を持った夫のひとりにしかすぎず、それが本名ジェイムズ・ウェイトという単一の常習犯罪者のしわざとは、夢にも思っていな

いのだろう。

人間がジェイムズ・ウェイトのように巧みな二枚舌を使えたとは、現在ではとうてい信じられない。わたしにしても、このことを思いだしてようやくなっとくがいく——当時の人間のおとなの大部分が、三キログラムもの重さの脳を持っていたのだ！　それほどふくれあがった思考機械が想像し実行できる邪悪な計画には、およそ限界というものがなかった。

そこで、質問に答えてくれる相手がまわりにだれもいないのを承知で、こうたずねてみたい——かつては三キログラムの脳が人類の進化におけるほぼ致命的な欠陥だったことを、だれが疑えるだろうか？

●

第二の質問——その当時われわれがいたるところに見聞きしていた悪の根源は、この精巧すぎる神経系をべつにすると、いったいなんだったのだろうか？

わたしの答——ほかにはどんな根源もない。お化けじみた巨大脳をべつにすれば、この惑星はとても純粋無垢だった。

3

ホテル・エルドラドは、まっさらの五階建ての観光宿泊施設——なんの飾りもないコンクリート・ブロック造りだった。そのプロポーションとムードはガラス戸つきの書棚そっくりで、背が高く、幅が広く、奥行きが浅い。どの寝室も、天井から床までのガラス壁が西を見晴らしている——喫水の深い船舶が入港できるようにデルタを浚渫(しゅんせつ)した、三キロ先の波止場を。

過去にはこの波止場も貿易で栄え、地球上の各地からやってきた船が、食肉や穀物や野菜や果物や乗り物や衣服や機械や家電器具などを積みおろし、そのひきかえにエクアドル産のコーヒーやココアや砂糖や石油や金、それにインディオの美術品や民芸品を積みこんでいった。民芸品の中には〝パナマ帽〟も含まれていたが、もともとこれはパナマでなく、エクアドルで作られたものだった。

しかし、いまそこに入港している船はたった二隻しかなく、こちらではジェイムズ・ウェイトがバーでラム・コークをちびちびなめていた。実をいうと、彼は酒飲みではなかった。自分の才覚にたよって世渡りをしている関係上、頭蓋におさまった大コンピュータの精密な

回路を、アルコールでショートさせるわけにはいかなかったからである。彼が手にした飲み物は、芝居の小道具だった——ちょうど、滑稽なシャツにくっついた値札とおなじように。

ウェイトは、この波止場の現状が正常か否かを判断できる立場になかった。その二日前までで、グアヤキルという地名さえ聞いたことがなく、おまけに赤道を越えて南へきたのはこれがはじめてだった。彼から見るかぎり、ホテル・エルドラドは、過去に隠れ家として利用した数多くの無個性なホテルと、なんのちがいもなかった——サスカチェワンのムース・ジョーや、メキシコのサン・イグナシオや、ニューヨーク州のウォーターヴリート、その他ほうぼうのホテルと。

ウェイトがこの町の名前を拾いあげたのは、ニューヨーク市のケネディ国際空港の発着表示ボードからである。ちょうど十七人目の妻——シカゴのすぐ外側のイリノイ州スコーキーに住む七十歳の未亡人——を無一文にして逃げだしたところだったのだ。かりにむこうが夫の行方を探すにしても、まさかグアヤキルに目をつけたりはしないだろう、と思われた。

この女性は、ひどく不器量で愚鈍で、生まれてきたのがまちがいだったかもしれない。それなのに、彼女と結婚したのは、ウェイトがすでに二人目だった。

もっとも、彼はエルドラドにもそんなに長く滞在する気はなかった。ロビーにデスクをおいた旅行代理業者から〝世紀の大自然クルーズ〟のキップを買ってある。いまはちょうど昼過ぎで、戸外は地獄の釜より暑かった。戸外にはそよとの風もなかったが、それは気にならなかった。彼はホテルの中にいて、室内は冷房がきいていたし、それにどのみち、もうすぐ

この町をおさらばするつもりでもあった。彼の予約したバイア・デ・ダーウィン号は、翌日の正午に出航の予定だった。翌日というのは、一九八六年十一月二十八日、金曜日――いまを去る百万年のむかしのことである。

●

ウェイトが選んだ輸送機関の名前の由来は、ガラパゴスのヘノベサ島の南岸から扇形に開いた湾である。ガラパゴス諸島の名は、ウェイトには初耳だった。だが、彼はこう期待していた。きっとその島々は、一度ハネムーンにでかけたことのあるハワイか、一度隠れ家に利用したことのあるグアムに似たところだろう――大きな白い砂浜と、青い礁湖と、風に揺れる椰子の木があって、くるみ色の肌をした島の娘たちがいるにちがいない。

旅行代理業者からこのツアーの案内パンフレットをもらってはいたが、ウェイトはまだ中を読んでいなかった。パンフレットはバーのカウンターの上で仰向けになっていた。そこにはこの島々の大半がどれほど険しい地形であるかが正直に書かれているだけでなく、ホテルの旅行業者がウェイトに注意しなかったことも注意してあった。つまり、参加希望者は健康状態がそこそこに良好であるほうが望ましいし、頑丈なブーツと手荒な扱いに耐える衣服を持参するのが望ましい。なぜなら、浅瀬を歩いて岸へ渡ったり、上陸作戦部隊なみに岩の上をよじ登ったりしなければならないことも、ちょくちょくあるからだ。

ダーウィン湾は、イギリスの大科学者、チャールズ・ダーウィンにあやかって名づけられた。ダーウィンは、一八三五年、五週間にわたってヘノベサ島やその付近の島々を訪れたことがあり、そのときはいまのウェイトより九つも若い二十六歳の青年だった。当時のダーウィンは、測量調査のため五年間で世界を一周する予定の英国軍艦ビーグル号に乗りこんだ、無給の博物学者だった。

ツアーのパンフレットは、観光客よりも自然愛好家をよろこばせるのを目的に作られていて、ガラパゴスの典型的な島に関するダーウィン自身の記述が、彼の最初の著書『ビーグル号航海記』からそのまま転載されていた――

「これ以上に無愛想な景色はないというのが、その第一印象だった。黒い玄武岩質の溶岩でできた、荒々しい波浪を思わせるでこぼこの原野には、いくつもの巨大な亀裂が刻まれ、どちらを見ても、日ざしに炙られ、ほとんど生命の徴候の見当たらない、いじけた灌木の茂みに覆われていた。真昼の太陽に熱せられて乾ききった地表の熱で、ちょうどストーブをつけたように、空気は息苦しいほどの蒸し暑さだった。なんとなく、灌木の茂みが不快な臭気を発しているようにさえ思われた」

ダーウィンは、さらにこう書いている――「全表面を……まるで篩にかけたように、地下の蒸気が通りぬけたらしかった。ここかしこで溶岩が、まだ軟らかいうちに、大きな風船の

ようにふくらまされた跡があった。また別の場所では、それとおなじようにして形作られた洞窟の天井が陥没して、険しい側面に囲まれた円形の穴を残していた」そして、彼の筆によると、そこからさまざまと連想されるのは、「……巨大な鋳鉄製造工場の並びたつ、スタッフォードシャーの一地方だった」

●

エルドラドのバーの壁には、棚と酒瓶に縁どられて、ダーウィンの肖像画が飾られていた――鋼版画の複製で、そこに描かれたダーウィンは、ガラパゴス諸島探検当時の青年ではなく、母国イギリスにもどってから、クリスマスの花輪のようにふさふさしたあごひげをたくわえた、小肥りの家庭人だった。これとおなじ肖像画は、ホテルのブティックで売っているTシャツの胸にもプリントされており、ウェイトもすでにそれを二枚買っていた。ここに描かれたダーウィンは、友人や身内からうながされたすえに、全世界の生物が、彼自身と友人と身内、それに女王陛下をも含めて、どんな経過で十九世紀現在の状態に行きついたかという持論を、紙に書きとめはじめたころの姿だった。こうしてダーウィンが書きあげたものは、巨大脳が栄えた時代ぜんたいをつうじても、とりわけ広い範囲に影響をおよぼす科学書となった。それは成功と失敗をどうやって見分けるかについて、それまで流動的だった人びとの意見を安定させるのに、ほかのどんな学術書よりも大きな役割を果たしたのだ。想像できますか？　そして、本の題名も、その無慈悲な内容をみごとに要約したものだった――『自然

選択による種の起源、すなわち生存闘争に有利なる種族の存続について』

●

ウェイトはその本を読んだこともなかったし、ダーウィンという名前からなんの感銘も受けなかった。もっとも、ときどき教養人にうまく化けたことはある。こんどの〝世紀の大自然クルーズ〟には、サスカチェワンのムース・ジョーで最近妻をガンで失ったばかりの機械技師、というふれこみで参加するつもりだった。

実のところ、彼が正式に受けた教育は、生まれ故郷であるオハイオ州ミッドランド・シティの職業高校にはいり、自動車の整備と修理を二年間習った時点で終わっていた。そのころの彼は、転々と里親が変わって、五人目の家に預けられていたのだ。みなしご同然だったのは、父と娘の近親相姦の産物で、両親は彼が生まれてまもなくいっしょに町から逃げだし、行方知れずになったからである。

ウェイトもひとりで町から逃げだせる年ごろになるのを待って、ヒッチハイクでマンハッタン島へたどりついた。そこのポン引きが彼に目をかけ、男娼として成功する方法を仕込んでくれた。服に値札をくっつけたままにしておくこと、できればいつでも本気で客とたのしむこと、などなど。昔のウェイトは、なかなかの美形だったのだ。

容色が衰えはじめると、ウェイトはダンス教室で社交ダンスの教師になった。生まれながらのダンサーだった。ミッドランド・シティにいたときに、両親もやはりダンスの名手だっ

たという話を聞かされたことがある。彼のリズム感は、おそらく親譲りのものなのだろう。このダンス教室にいるあいだに、彼が出会い、求愛し、結婚した女性が、これまでの十七人の妻の第一号だった。

●

子供時代を通じて、ウェイトは里親たちからなにかにつけてきびしく折檻された。むこうは近親相姦で生まれた子供ということで、彼が道徳面での怪物になるのを予想したからだ。そしていま、このホテル・エルドラドにいるのがその怪物だった――その怪物は、本人が自覚するかぎりにおいて幸福で、裕福で、健康で、自己の生存技術に対するつぎのテストを待ちわびていた。

●

ちなみに、ジェイムズ・ウェイトとおなじく、このわたしもむかしは家出少年だった。

4

英国人のチャールズ・ダーウィン、この無口で温厚で、控え目で無性的で、著作の中ではきわめて観察力の鋭い人物が、賑やかで情熱的で、多国語の飛びかうグアヤキルの町の英雄になったのは、彼が観光ブームの生みの親だったからである。もしダーウィンなかりせば、ホテル・エルドラドも、バイア・デ・ダーウィン号もなく、ジェイムズ・ウェイトがそこを利用しようにもできなかったことだろう。ウェイトにあんなに滑稽な服を着せたブティックもなかったことだろう。

もしチャールズ・ダーウィンが、ガラパゴス諸島こそすばらしい自然の教訓だと言明しなかったら、グアヤキルは暑くらすぎたない海港のひとつにすぎず、またガラパゴス諸島も、エクアドルにとって、スタッフォードシャーのぼた山ほどの価値しかなかったろう。

ダーウィンはこの島々を変えはしなかった。この島々に対する人間の意見を変えただけである。巨大脳の時代には、たんなる意見がそれぐらいに重要だった。

事実、たんなる意見が、たしかな証拠とおなじように人間の行動を支配していたばかりか、とつじょとしてくるりと裏返ることもあった。たしかな証拠にはとうていできない芸当だっ

た。このために、ガラパゴス諸島がある瞬間まで地獄だったかと思うと、つぎの瞬間には天国になったり、ジュリアス・シーザーがある瞬間まで大政治家といわれていたかと思うと、つぎの瞬間には殺戮者といわれたり、エクアドル紙幣がある瞬間まで食物や住居や衣服と交換できていたかと思うと、つぎの瞬間には鳥籠の敷き紙にされたり、また、宇宙もある瞬間まで全能の神の創造物だったかと思うと、つぎの瞬間には大爆発によって生じたものとされたりした――その他いろいろ。

その後の知力の減退のおかげで、今日の人間は、もはや意見という妖怪によって人生の本筋から目をそらされたりはしない。

●

白人がガラパゴス諸島を発見したのは、一五三五年、嵐に吹き流されて航路をそれたスペインの船が、ここに漂着したときである。島にはだれも住んでおらず、また、人間の住居跡らしいものもまったく見つからなかった。

この不運な船は、つねに南アメリカ大陸の海岸線が見える距離をたもって、パナマ司教をペルーへ送りとどけることとしか考えていなかった。ところが、たまたま起こった嵐が乱暴にも、船を西へ西へと押し流していった。当時の人間の多数意見からすると、そこにはどこまでもどこまでも大海原がひろがっているはずだった。

しかし、嵐がやんだとき、このスペイン人たちは、船乗りの悪夢の中へ司教を送りとどけ

てしまったことに気がついた。そこに点々と散らばる小さな陸地はいわばまがいもので、安全な投錨地もなければ、木陰も、真水も、木になった果実もなく、ましてやどんな人間も住んでいなかった。おまけに風が凪いで船は動けず、飲料水と食料はなくなりかけていた。海は鏡のようになめらかだった。彼らはロングボートを舷側からおろし、オールを漕いで、自分たちの帆船と精神的指導者をやっとそこからひっぱりだした。

彼らはその島々をスペイン領と宣言しなかった。そんなことをするのは、地獄をスペイン領と宣言するようなものだった。当時の多数意見があらためられ、この群島が地図に記載されるようになってからまる三世紀が経っても、どこの国もそれを領有したがらなかった。ところが、一八三二年になって、この惑星でもいちばん小さく、いちばん貧乏な国のひとつ、すなわちエクアドルが、世界の人々にむかって、こんな意見を自分たちと共有してくれと要求した。つまり、この島々はエクアドルの一部である、と。

どこからも文句は出なかった。その当時、この意見は無害であるだけでなく、滑稽にさえ思われたのだ。まるでエクアドルが帝国主義性狂気の発作にかられ、たまたま通りかかった小惑星群をその領土に併合したかのように。

しかし、それからわずか三年後、若き日のチャールズ・ダーウィンが、こんなふうにみんなを説得しはじめた。この島々で生きのびるすべを見つけた風変わりな植物や動物は、もしもみんなが自分とおなじように——つまり科学的な視点から——それをながめさえすれば、きわめて貴重なものになる、と。

ダーウィンのおかげで、この島々が塵の山から宝の山に生まれ変わった現象を表現するのにふさわしい単語は、ただひとつしかない――それは〝魔法〟である。

●

そう、そしてジェイムズ・ウェイトのグアヤキル到着以前から、博物学に興味のあるおおぜいの人びとが、自分たちもその島々へ渡って、ダーウィンの見たものを見、ダーウィンの感じたことを感じようと、グアヤキルの港へ集まってきたので、いちばん新しいバイア・デ・ダーウィン号を含めて三隻の遊覧船がそこを根城にするほどの賑わいになった。この町にはいちばん新しいエルドラドを含めて数軒の近代的な観光ホテルがあり、またディエス・デ・アゴスト通りのいたるところに、観光客相手のみやげ物店や、ブティックや、レストランがあった。

しかし、困ったことに――ジェイムズ・ウェイトがそこに着いたときには、全世界的な経済危機が押しよせてきたため、つまり、紙幣や株券や債券や抵当などの価値に対する人間の意見にとつぜんの逆転があったため、エクアドルだけでなく、およそいたるところで観光事業が壊滅していた。その結果、グアヤキルでまだ営業しているホテルはエルドラドだけ、まだ出航準備がととのっているのはバイア・デ・ダーウィン号だけというありさまだった。

エルドラドがまだ営業中だというのも、〝世紀の大自然クルーズ〟の予約客の集合場所であるだけのことで、それはこのホテルの持ち主であるエクアドルの会社が、その船の持ち主

でもあるからだった。しかし、そのツアーの開始まで二十四時間弱をあますのみとなっても、二百人を収容できるこのホテルには、ジェイムズ・ウェイトを含めて六人の客しか泊っていなかった。ほかの五人の客は、つぎのような顔ぶれである――

＊ゼンジ・ヒログチ、二十九歳、日本人、コンピュータの天才。
ヒサコ・ヒログチ、二十六歳、日本人、彼の身重の妻で、生け花、つまり日本のフラワー・アレンジメント技術の教師。

＊アンドルー・マッキントッシュ、五十五歳、アメリカ人、親譲りの巨万の富を持つ実業家で冒険家、男やもめ。
セリーナ・マッキントッシュ、十八歳、アメリカ人、彼の先天性盲目の娘。
そして、メアリー・ヘップバーン、五十一歳、アメリカ人。ニューヨーク州イリアム出身の未亡人。このホテルでは、ほとんどだれも彼女の顔を見ていない。前日の夜にひとりで到着して以来、五階の自室にこもりきりで、食事も部屋へ運ばせている。

名前の頭に星印のついたふたりは、日暮れまでに死ぬことになる。ちなみに、特定の人名の頭に星印をつけるこの手法は、この物語のおしまいまで継続され、登場人物の一部が、まもなく体力と狡知の面で究極のダーウィン的試練にかけられることを、読者に予告することになるだろう。

このわたしもその場に居合わせたが、だれの目にも見えなかった。

バイア・デ・ダーウィン号もやはり余命いくばくもないが、まだ船名の頭に星印がつくほどではない。この船のエンジンが永久に停止するのは、太陽がもう五回沈んでからだし、海底に沈むのはもう十年先である。バイア・デ・ダーウィン号は、グアヤキルを母港にした最新、最大、最速、最豪華な遊覧船であるだけではなかった。ガラパゴス諸島の観光用として特別に設計された唯一の船で、その運命は、竜骨が造船台に置かれた最初の瞬間から、島々へでかけては帰り、島々へでかけては帰る、着実な往復運動だと予想されていた。

この船はスウェーデンのマルメーで建造されたが、わたしもそのときの工員のひとりだった。この船をマルメーからグアヤキルへ送りとどけたスウェーデン人とエクアドルの基幹定員にいわせると、たまたま北大西洋で遭遇した嵐が、この船の経験する最後の荒波と寒気になるはずだった。

この船は、金を払った百名の乗客にとっての、浮かぶレストラン、浮かぶ講堂、浮かぶナイトクラブ、浮かぶホテルだった。レーダーとソナーのほかに、地球上での自分の位置を百

メートル以内の誤差でたえず表示しつづける電子ナビゲーターを備えていた。すっかりオートメーションが行きとどいているので、ブリッジにひとりでも人間が乗っていれば、機関室や甲板にだれもいなくても、エンジンを始動させ、錨を巻き上げ、自家用車のようにギアを入れて走らせることができた。船内には八十五個の水洗トイレと十二個のビデがあり、また、客室とブリッジに備えつけられた電話機は、通信衛星経由で全世界のどこの電話機とも通話することができた。

船内にはテレビもあり、乗客は居ながらにしてその日のニュースを知ることができた。船主はキートに住む年とったドイツ人の兄弟だったが、このふたりは、この船が全世界の出来事に一瞬たりとも遅れをとらないことを自慢していた。運命を知るよしもなく。

●

この船は七十メートルの長さがあった。

チャールズ・ダーウィンが無給の博物学者として乗りこんだ軍艦ビーグル号は、二十八メートルの長さしかなかった。

バイア・デ・ダーウィン号がマルメーで進水したとき、千百メートル・トンの海水がよそに行き場を見つけなくてはならなかった。わたしはそのとき、すでに死んでいた。

ビーグル号がイングランドのファルマスで進水したとき、よそに行き場を見つけなければならなかった海水は、わずか二百十五メートル・トンだった。

バイア・デ・ダーウィン号は金属性の内燃機船だった。
ビーグル号は木材で作った帆船で、海賊や野蛮人を追いはらうために、十門の大砲を備えていた。

バイア・デ・ダーウィン号の競争相手になるはずの二隻の古い客船は、生存競争がはじまる前からすでに脱落していた。どちらもむこう何ヵ月かの予約で満員だったのに、経済危機によるキャンセルが殺到したのだ。いま、この二隻は、町からは見えず、どんな道路や集落からも遠く離れた、沼沢地のよどんだ水に投錨していた。ふたりの船主は、すでにこの二隻から電子装置やその他の貴重品を取りはらっていた——無秩序状態が長引くだろうことを予想して。
エクアドルも、ガラパゴス諸島とおなじように土地の大半が溶岩と火山灰におおわれているので、九百万の国民の食料を自給自足するのはとうていむりだった。しかも、いまやこの国は破産状態で、たっぷり表土を持ったほかの国から食料を買うこともできなかった。そこでグアヤキルの港には閑古鳥が鳴き、人びとはぼつぼつ餓死しはじめていた。
ビジネスはきびしい。

●

お隣りのペルーとコロンビアも破産状態だった。バイア・デ・ダーウィン号をべつにすると、グアヤキルの波止場にいる唯一の船は、錆だらけのコロンビアの貨物船サン・マテオ号だが、この船は食料も燃料も買えなくなったあげくにそこへ取り残されたのだ。サン・マテオ号は沖合に投錨していたが、それから長い日数が経っているために、錨綱のまわりには天然の植物製の巨大な筏がまとわりついていた。これだけ大きい筏なら、象の赤ん坊が乗ってもガラパゴス諸島へたどりつけたかもしれない。

メキシコとチリとブラジルとアルゼンチンも、おなじように破産状態だった——またインドネシアもフィリピンもパキスタンもインドもタイもイタリアもアイルランドもベルギーもトルコもそうだった。どこも国ぜんたいがサン・マテオ号とおなじ状態になり、自国の紙幣や硬貨では、それともまた、あとで払うという書面の約束では、ぎりぎりの生活必需品さえ買えなくなっていた。生命維持のたしになる物資の持ちぬしは、外国人だけでなく、自国民も、自分の持っている物資を金と交換するのを断わった。富の表示のある紙きれしか持っていない人びとに向かって、とつぜん彼らはこういいはじめた。「目をさませ、このあほうども！　紙きれがそんなに貴重だなんて考えを、いったいどこから思いついたんだ？」

●

いくら人間がふえたといっても、この惑星にはまだすべての人間にたっぷりいきわたるだけの食料や燃料などがあったが、いまや何百万人もの人びとが飢えで死にかけていた。

いちばん健康な人間でも、食べ物がなければせいぜい四十日ぐらいしか生きられない。それを過ぎると死がやってくる。

そして、この飢饉は、ベートーヴェンの第九交響曲とおなじく、純然たる巨大脳の産物だった。

すべては人間の頭の中にあった。もとはといえば、人びとが紙きれでできた富に対する自分たちの意見を変えただけのことだが、その実際の効果は、この惑星にルクセンブルクほどもある隕石がぶつかって、軌道からたたきだしたのにも匹敵するものだった。

6

今日では絶対に起こりえないこの経済危機は、二十世紀に続発した恐ろしい大激変の中でも最新のものだったが、それらのすべては完全に人間の脳の内部から発生していた。人間が自分自身やおたがい同士に加えている暴行、ことのついでにいうならば、ほかのすべての生物に加えている暴行を、もしどこかの惑星からの訪問者がながめたとすれば、環境ぜんたいが発狂したからだと思ったかもしれない。みんながこんなに逆上しているのは、自然がみんなを殺そうとしたからだ、と思ったかもしれない。

しかし、百万年前の地球は、今日とおなじように水気も栄養もたっぷりで——その点では、全銀河系の中でもユニークな惑星だった。つまりは、その惑星に対する人びとの意見が逆転しただけのことである。

むかしの人類の名誉のためにひとこと。当時でも、こんなことをいう人びとの数はどんどんふえていた。人間の脳は無責任で、たよりにならず、おまけに恐ろしく危険で、まるっきり現実離れしている——つまりは、完全なできそこないだ、と。

たとえば、ホテル・エルドラドという小宇宙の中でも、三度の食事を部屋に運ばせている

メアリー・ヘップバーンは、自分の脳に向かって、おまえはなんという助言をするのかと、小声で悪態をついていた。脳がよこした助言は、早く自殺しろ、というものだった。「おまえはわたしの敵よ」と彼女はささやいた。「なぜ、こんな恐ろしい敵を自分の内部にかかえてなくちゃいけないの?」彼女はニューヨーク州イリアムのいまはない公立高校で四分の一世紀間も生物の教師をしていたので、当時すでに絶滅していたある動物、人間が〝オオツノジカ〟と名づけた動物のとても奇妙な進化の話をよく知っていた。「おまえのような脳と、オオツノジカの枝角と、どちらを選ぶかといわれたら」と、彼女は自分の中枢神経系を相手にたんかを切った。「わたしはオオツノジカの枝角を選ぶわ」

このオオツノジカという動物は、かつてダンスホールのシャンデリアほどもでっかい枝角を生やしていた。メアリーがよく生徒たちに話した言葉をかりると、それは明らかにばかばかしい進化の過ちに自然がどれほど寛容であるかを示す、おもしろい一例だった。この枝角が、戦うにも自分を守るにも、ひどく使い勝手が悪い上に、よく茂った森や下生えの中で食物を探すじゃまになったにもかかわらず、オオツノジカは二百五十万年も生きながらえたのだ。

●

メアリーは生徒たちに、人間の脳こそ進化の生みだした最もすばらしい生存の道具だ、とも教えた。しかし、いま、そのメアリーの巨大脳は、彼女にこう催促していた。グアヤキル

の部屋のクローゼットに吊るされたイブニングドレスから、ポリエチレンのガーメントバッグをひっぱがし、それで頭をすっぽりくるみ、自分の細胞から酸素を奪え、と。

●

メアリーの脳は、それ以前にも、空港にいた泥棒にスーツケースを預けるへまをやらかしていた。スーツケースの中には、化粧道具一式と、ホテルの中で着るのにふさわしい衣装がはいっていた。それがキートからグアヤキルへの旅での、機内持ちこみの手荷物だったのだ。機内へ持ちこまずにカウンターへ預けたスーツケースはすくなくともまだ無事だった。その中身のひとつがバイア・デ・ダーウィン号のパーティーで着るつもりだった例のイブニングドレスで、いまクローゼットにぶらさがっていた。あとは、潜水用のウェットスーツとフリッパーとマスク、二着の水泳着、頑丈な登山ブーツと、それに、いま彼女が着ている放出品のアメリカ海兵隊の陸上用戦闘服である。キートからの機内で彼女が着ていたパンツスーツはどうなったか――彼女の巨大脳は、それをホテルのランドリーに渡すように催促し、悲しい目をしたホテルの支配人を信用して、朝食に間にあうよう、まちがいなく朝までに仕上げさせます、と約束させた。しかし、支配人が頭をかかえたことに、そのパンツスーツもどこかへ消えうせていた。

しかし、自殺をすすめたことをべつにすれば、彼女の脳がやったいちばんひどい仕打ちは、あらゆるニュースがこの惑星の経済危機を伝えているにもかかわらず、また、わずか一ヵ月

前には予約で満員だった〝世紀の大自然クルーズ〟が、乗客不在で中止になる見込みがほぼ確実であるにもかかわらず、しゃにむにグアヤキルへ行けと彼女をうながしたことだった。

メアリーの巨大な思考機械は、また、ひどく狭量でもあった。そのホテルにほとんど客がいないにもかかわらず、そんな身なりで出ていけばみんなの笑いものになるという理由で、彼女が戦闘服姿で階下に行くのをどうしても許そうとしなかった。彼女の脳は、彼女にこう教えた。「みんなはおまえのいないところでおまえのことを笑って、頭のおかしい、あわれな女だと思うわ。それにどのみち、おまえの人生は終わったのよ。夫をなくし、教師の仕事をなくし、子供はいないし、ほかになんの生きがいもない。だから、ガーメントバッグを使って、さっさと不幸からおさらばしなさい。これ以上に簡単なことがある？　これ以上に苦痛のすくない方法がある？　これ以上にすじの通った話がある？」

●

メアリーの脳の名誉のためにひとこと。一九八六年がこれまで不幸つづきの年だったのは、全部が全部その脳の責任ではなかった。それどころか、一九八六年の出足はきわめて好調だった。メアリーの夫のロイは、一見申し分のない健康状態で、イリアム最大の企業ゲフコ社の機械工という安定した職場についていたし、キワニス・クラブは、二十五年間教育につくした功績をたたえて、メアリーのために晩餐会を催し、記念額を贈り、生徒たちは十二年連続で、彼女を最も人気のある教師に選んだのだ。

一九八六年のはじめに、彼女はこういった。「ねえ、ロイ——わたしたちはたくさんのことに感謝しなきゃいけないわ。たいていの人たちに比べたら、本当に幸福ですもの。あんまり幸福で泣きたいぐらいよ」

そしてロイは彼女を抱きよせながら、こういった。「そうかそうか、じゃ遠慮なく泣けばいい」

メアリーは五十一歳、ロイは五十四歳、夫婦そろって野外スポーツ、つまり、ハイキングやスキーや登山やカヌーやランニングやサイクリングや水泳の熱心な愛好家だったから、どちらもひきしまって若々しい体をしていた。夫婦そろって酒もタバコもたしなまず、おもに新鮮な果物と野菜を食べることにしていた。それにときどき少量の魚も。

この夫婦はまた財産の運用もうまく、自分たちの貯金に対して、経済学的にいうなら、自分たちの体に与えているのとおなじように賢明な栄養と運動を与えていた。

もし、メアリーが自分とロイの財産運用の知恵を物語ったとしたら、それはいうまでもなくジェイムズ・ウェイトにとって胸のおどる話題だったろう。

●

そういえば、ウェイトという未亡人専門の骨抜き師は、エルドラドのバーでメアリー・ヘップバーンのことに思いをめぐらしていた。もっとも、ウェイトはまだメアリーに会ってもいなかったし、どれほど彼女が裕福であるかも知らなかった。ただ、彼女の名前を宿帳で見

かけ、ホテルの支配人にその客のことをたずねてみたのだ。
支配人が答えられたことはわずかだったが、ウェイトはその情報が気に入った。階上にいるこの内気で孤独な学校教師は、これまで彼が食いものにしてきたどの妻よりも若いが、あつらえむきの獲物に思えた。彼は〝世紀の大自然クルーズ〟のあいだにゆっくり時間をかけて、この獲物に接近するつもりだった。

●

もしよければ、ここに個人的な覚え書きを挿入させてほしい。まだ生きていたころ、わたしもしばしば自分の巨大脳から忠告を受けたが、その忠告は自分の生存という点から見て、いや、それをいうなら、人類の生存という点から見ても、いかがわしいという形容でさえ手ぬるいほどのしろものだった。たとえば——その忠告を真に受けて、わたしはアメリカ海兵隊に志願し、ベトナムで戦ったのだ。
おおきにありがとさんよ、巨大脳め。

7

エルドラドに泊っている六人の客、つまり、ひとりの自称カナダ人を含めた四人のアメリカ人と、ふたりの日本人の持っている自国の通貨は、この惑星のいたるところで、まだりっぱに通用していた。くりかえそう——彼らの所持金の価値は架空のものだった。この宇宙そのものの性質とおなじく、アメリカのドルと日本の円の魅力は、すべての人間の頭の中にあるだけだった。

経済危機が発生中であることさえ知らないウェイトが、もしもカナダ人としての変装をもう一歩押しすすめて、エクアドルにカナダ・ドルを持ちこんだとしたら、これほど丁重には迎えられなかったろう。カナダはまだ破産していなかったが、カナダを含めた世界各地に住む人間の想像力は、本当に利用価値のあるものとカナダ・ドルを交換することに、ますますためらいを深めていた。

これと似た想像上の価値の下落は、イギリスのポンド、フランスとスイスのフラン、西ドイツのマルクにも起こっていた。一方、国民の英雄アントニオ・ホセ・デ・スクレ（一七九五－一八三〇）にあやかって命名されたエクアドルのスクレは、バナナの皮ほどの価値もな

くなっていた。

五階の客室で、メアリー・ヘップバーンは、ひょっとすると自分は脳腫瘍ではないか、自分の脳がいつも最悪の忠告をするのはそれが原因ではないか、と疑いはじめていた。そんな疑いを持つのもむりからぬことだった。というのは、つい三ヵ月前に彼女の夫のロイの命を奪ったのも、もとはといえば脳腫瘍だったからだ。しかも、この脳腫瘍は彼の命を奪っただけではなかった。まず最初に彼の記憶を混乱させ、彼の判断力を破壊したのだった。

ロイの脳腫瘍がそうした害をおよぼしはじめたとき、彼女はこんな疑いを持たずにはいられなかった——最終的には恐ろしいものとなったその年の順調な一月に、ロイが夫婦で〝世紀の大自然クルーズ〟に参加を申し込んだのも、ひょっとするとその脳腫瘍のなせるわざではなかったのか、と。

●

ロイがそのツアーの申し込みをしたことを、メアリーが知ったいきさつはこうである。ある日の午後、彼女はロイがまだゲフコ社にいると思いこんで、学校から帰宅した。ロイの勤めがひけるのは、彼女より一時間あとである。ところが、ロイは家に帰っているだけでなく、きいてみると、昼から会社を早退したというのだ。これが機械をいじる仕事にうちこんで、

ゲフコ社に勤めて二十九年間、病気にしろ、なんにしろ――といってもロイは病気しらずの体だったが――ただの一時間も仕事を休んだことのない男のすることとだろうか。
体のぐあいでも悪いのかとたずねると、ロイは、こんなに気分がいいのは生まれてはじめてだ、と答えた。その誇らしげなようすは、メアリーから見ると、優等生扱いにうんざりした少年のようだった。これがいつも選びぬいた言葉しか口にせず、軽薄さや青臭さのかけらもなかった男だろうか。しかも、信じられないことに、いまのロイは、まるでメアリーが彼を叱ろうとしている母親であるかのように、それに見合ったうつろな表情をうかべて、こういうのだった。「サボってきたんだよ」
あんなことをロイにいわせたのは脳腫瘍にちがいない、とメアリーはいまグアヤキルで考えた。その上、いくら無責任なずる休みをとらせるにしても、脳腫瘍が選んだ日は最悪だった。その前夜に着氷性の暴風が吹いたあと、吹き降りのみぞれが一日中やまなかったのである。しかし、ロイはイリアムのメイン・ストリートであるクリントン通りを歩きまわって、あっちこっちの商店に立ちよっては、自分が会社をサボっていることをみんなにいいふらしたのだった。
そのときのメアリーは、それをよいほうに解釈しようと努力した。そろそろのんびりして、たのしくやってもいい時期よ、とロイを慰め、本気でそう考えようとした――もっとも、そのことなら、ふたりは週末や休暇、それに職場でも、いつもけっこうたのしくやってきたといえる。しかし、この予想外の脱線行為には、一種の妖気がただよっていた。そして、ロイ

自身も、早目の夕食の席で、昼間の出来事に首をひねっているようすだった。だから、もういい。彼は二度とそんなことをするつもりはないのだし、ふたりともその出来事を忘れてしまうにかぎる。まあ、ときどきあとで思いだして、笑い話にすることはあるにしても。

ところが、就寝する直前、ロイのいかつい手で作られた自然石の暖炉の赤いおき火をふたりで見つめている最中に、ふとロイはこういったのだ。「まだある」

「まだあるって、なにが?」とメアリーはききかえした。

「きょうの昼間のことさ。おれがはいった店のひとつは旅行代理店だった」その種の店はイリアムに一軒しかなく、あまり繁盛していなかった。

「それで?」と彼女はいった。

「おれはなにかの申し込みをした」彼の口ぶりは、まるで夢を思いだしているようだった。

「支払いもすませた。手続きもぜんぶすませた。十一月になったら、ふたりで飛行機に乗ってエクアドルへ行こう。そこで〝世紀の大自然クルーズ〟に参加するんだ」

●

ロイとメアリーのヘップバーン夫妻は、バイア・デ・ダーウィン号の処女航海のための公告宣伝企画に反応した最初の客だった。このとき、かんじんの船は、まだスウェーデンのマルメーにある竜骨と、ひと山の青写真でしかなかった。イリアムの旅行代理業者は、ちょうどそのツアーのポスターを受けとったばかりだった。彼がそれを店内の壁にテープで貼りつ

けている瞬間に、ロイ・ヘップバーンがはいってきたのだ。

ここで個人的感想をさしはさんでよければ——このわたしもマルメーで一年ほど溶接工として働いていたが、バイア・デ・ダーウィン号は、まだわたしの作業を必要とするほどの形をととのえていなかった。わたしがあの鉄の処女のために文字どおりおつむをなくしたのは、春がきてからである。質問——春がきて、おつむをなくさない人間がいるだろうか?

●

しかし、先をつづけよう。

イリアムの旅行ポスターには、ひどく奇妙な鳥が火山島の崖ぶちに立って、美しい白塗りの客船が波をけたててくるのをながめていた。この鳥は黒くて、体のサイズは大きめのアヒルぐらいだったが、首は蛇のように細長く柔軟だった。しかし、なによりも奇妙なのは、鳥のくせに翼らしいものが見当たらないことで、これはほぼ事実に近かった。この鳥はガラパゴス諸島の固有種、つまり、この惑星でもここにしか見つからない種類の生物だった。翼は小さくて、ぴったり胴体の上に折り畳まれ、魚とおなじように水中を深く速く泳ぐことができる。これは、魚を常食とするほかの鳥たちがしなければならないこと、つまり、魚が水面に出てくるのを待って、くちばしをひろげたまま急降下するよりも、はるかに割のいい魚捕

りの方法なのだ。この大成功者の鳥は、人間から〝コバネウ〟という名で呼ばれていた。この鳥は、魚のいるところへこちらから出向くことができる。魚が致命的な過ちをおかすまで待っていなくてもすむ。

この鳥の先祖は、進化の過程のどこかで、翼というものの価値を疑いはじめたのにちがいない。ちょうど一九八六年当時の人間が、巨大脳の利点を真剣に疑いはじめたように。もし、ダーウィンの自然選択の法則が正しいとすれば、小さな翼を持つウは、ちょうど漁船のように海岸から沖へ乗りだすことによって、空を飛ぶウのどれよりもたくさんの魚をとったにちがいない。その仲間がまたたがいにつがいあい、その子孫の中でいちばん小さい翼を持つものは、先祖以上に優秀な魚捕りとなって、以下そのくりかえし。

●

いま、それとおなじことが人間にも起こったわけだが、もちろん、それは翼の問題ではなかった。人間にはもともと翼がない。それは両手と脳の問題だった。こうして人間は、魚が餌のついた釣針にひっかかったり、網に飛びこんだり、なにやかやをしてくれるまで待つ必要がなくなった。今日では、魚がほしくなった人間は、ちょうどサメのように、紺碧の海の中で魚を追いかければよろしい。

わけはない。

8

その年の一月でさえ、ロイ・ヘップバーンがそのツアーの申し込みをすべきでない理由は、すでにごまんとあった。全世界に経済危機がやってくるだろうこと、そして、船が出発するころにはエクアドルの人びとが飢えかかっているだろうことは、まだ明らかになっていなかった。しかし、問題はメアリーの仕事だった。近く一時解雇でむりやり教職から引退させられることをまだ知らなかった彼女は、ちょうど学期のまんなかにあたる十一月末から十二月初めにかけて堂々と三週間の休暇をとることなど、とうていむりだと思っていた。

それにまた、これまで一度も現地へ行ったことはないにしても、彼女はガラパゴス諸島にすっかり食傷していた。この島々については、いやというほどたくさんの映画やスライドや本や雑誌記事があり、それを学校の教科で毎年毎年使ったものだから、なにかの驚きがむこうで自分を待ちうけているとは、夢にも思わなかった。

運命を知るよしもなく。

メアリーとロイは、結婚生活のあいだを通じて、一度も合衆国の外に出たことがなかった。

もし、本当に羽根を伸ばして、ふたりで豪華な旅行をたのしめるなら、彼女としてはむしろアフリカへ行きたかった。そこの野生動物のほうがはるかに興味しんしんだし、生存闘争もはるかに激烈だからだ。結局のところ、ガラパゴス諸島の生物は、犀や河馬やライオンや象やキリンなどに比べれば、あまりぱっとしない顔ぶれだった。

事実、このツアーを前にして、彼女はある親しい友だちにこう打ち明けたことがある。「急にこういいたい気持になっちゃったわ。生きているかぎり、わたしはもうアオアシカツオドリなんて見たくもない！」

運命を知るよしもなく。

●

しかし、ロイと話すときのメアリーは、この旅行に対する懐疑を隠していた。いずれは夫も、一時的に軽い脳の機能不全におちいったことに自分で気づくだろう、と確信していたのだ。しかし、三月にロイが失業し、メアリーも六月には職を失うことがわかった。これで、旅行の時期は、すくなくとも現実的になったわけだった。そして、このツアーは、ロイのますます気まぐれになってきた想像力の中で大きくふくれあがり、「……おれたち夫婦が待ちかねている、たったひとつのたのしみ」となった。

●

この夫婦がなぜ職を失ったかについて——ゲフコ社は、イリアムでの操業を近代化するために、ホワイトカラーとブルーカラーの区別なく、全作業員の大半を一時解雇した。マツモトという日本企業が、その近代化をひきうけた。マツモトは、バイア・デ・ダーウィン号のオートメーション化もひきうけていた。マツモトは、またメアリーとおなじ時期に妻を同伴でホテル・エルドラドに泊った若いコンピュータの天才、＊ゼンジ・ヒログチを雇っている会社でもあった。

マツモト・コーポレーションがコンピュータとロボットを導入しおわったあかつきには、たった十二人の人間でゲフコ社の全業務を切りまわせる予定だった。そこで、まだ子供を生めるか、すくなくとも未来に野心的な夢をいだける若い人びとは、ぞろぞろとこの町を去っていった。メアリー・ヘップバーンがホホジロザメに食われて死ぬ二週間前、八十一回目の誕生日にいった言葉をかりれば、それは「……まるでハーメルンの笛吹きが町を通りぬけたよう」だった。とつぜん、教育しようにも子供たちがほとんどいなくなり、そして町は納税者不足で破産におちいった。こうしてイリアム高校は、最後の卒業生を六月に送りだすことになった。

●

四月には、ロイが手術不能の脳腫瘍に罹っていると診断された。こうして〝世紀の大自然クルーズ〟は、彼の唯一の生きがいとなった。「すくなくとも、それまでおれはがんばれる

と思うよ、メアリー。十一月——そう遠い先の話じゃない、そうだろう?」
「そうよ」と彼女はいった。
「それまではおれも生きられるさ」
「まだ何年も何年も生きられるわよ、ロイ」
「とにかく、あのツアーにだけは行きたい」と彼はいった。「赤道のペンギンを見たい。それだけでおれは充分だ」

●

ロイのまちがいはますます多くなっていたが、ガラパゴス諸島にペンギンがいるという言葉は正しかった。ガラパゴスのペンギンは、給仕長の衣装をまとってはいるものの、やせこけた鳥である。それでなければ生きていけない。もし、世界の半分むこうで南極の浮氷の上に住む親戚のように、厚い脂肪に包まれていたならば、岸に上がって溶岩の上で産卵したり、雛を育てたりするあいだに、強い日光にあぶられて死んでしまうだろう。
コバネウとおなじように、彼らの先祖も、やはり飛行の魅力に背を向けた——そしてその代わりに、より多くの魚をとるほうを選んだのだった。

●

百万年前、できるだけたくさんの人間活動を機械に譲りわたそうとしたあの謎の熱狂につ

いて——これこそ人間が自分たちの脳はまったくのできそこないであると認めた、その証拠のひとつでなくてなんだろうか？

9

ロイ・ヘップバーンが死にかけている最中に、また、ついでにいうなら、イリアムの町ぜんたいが死にかけている最中に、そして、この男と町の両方が、健康で幸福な人類社会にとって有害な増殖物によって殺されようとしている最中に、ロイの巨大脳は彼を説得してこう信じこませた。グアヤキルとおなじく赤道地帯にあるビキニ環礁で一九四六年に行なわれた合衆国の原爆実験に、自分は水兵として立ち会ったことがある。そこでロイは、自国の政府相手に何百万ドルかの損害賠償の訴えを起こすつもりだ、といいだした。なぜなら、ビキニで浴びた放射線のために、まずメアリーとのあいだに子供が生まれなくなり、そして、こんどは脳にガンが発生したからだ。

たしかに一時期、ロイは海軍に勤務したことがあるが、それを除けば、アメリカ合衆国を相手どろうとするこの訴えは根拠薄弱だった。かりに裁判になっても、彼が一九三二年生まれであることを、政府側の弁護士が証明するにはなんの苦労もないだろう。そこから計算すると、被曝のさいに彼は十四歳だったことになる。

こんな時間的矛盾ぐらいでは、政府が彼に命じてやらせた、いわゆる下等動物を使っての

残酷な実験に関するなまなましい記憶は、すこしも薄らがなかった。ロイによると、彼はほとんどだれの手もかりずに、まず環礁のいたるところに杭を打ち込み、それからいろいろな動物をその杭につないだ。「やつらがおれを選んだのは」とロイはいった。「動物がいつもおれを信用したからさ」

これだけは本当だった——どんな動物もロイを信用した。彼は高卒で、ゲフコ社の技能習得プログラムのほかに専門教育を受けておらず、一方メアリーはインディアナ大学で動物学の修士号をとっているのに、実際に動物を扱うことにかけては、ロイのほうがメアリーよりもはるかにうまかった。たとえば、ロイは小鳥に小鳥語で話しかけることができたが、これは父方と母方どちらの先祖も有名な音痴がつづいたメアリーには逆立ちしてもできない芸当だった。飼い犬であれ、農場の動物であれ、ゲフコ社の番犬であれ、子豚をしたがえた雌豚であれ、いくら気が荒いと評判の動物でも、ロイにかかると、ものの五分で大の仲よしになってしまう。

だから、動物たちを杭につないだときを思いだして、ロイが涙を流すのは、むりからぬことだった。もちろん、そうした残酷な実験が、いろいろな動物、羊や豚や牛や馬や猿やアヒルや鶏やガチョウに対して行なわれたことは事実だが、ロイのいうような動物園であるはずはなかった。彼の話では、クジャクやユキヒョウやゴリラやワニやアホウドリにいたるまで杭につないだというのだ。彼の巨大脳の中で、ビキニはノアの箱舟の正反対のようなものになっていた。ありとあらゆる種類の動物がひとつがいずつ、原爆で殺されるためにそこに運

ばれてきたのだ。

●

ロイの物語の中でいちばん常軌を逸したくだりは、もちろん、本人からするとすこしも常軌を逸していないのだが、こういうことだった——「ドナルドもそこにいたよ」ドナルドというのは、ちょうどそのころ、イリアムの町のその付近、おそらくはヘップバーン家のすぐ外をうろついていた雄のゴールデン・レトリーバーで、まだ四歳になったばかりだった。

「なにがつらいたって」とロイはいった。「ドナルドを杭につなぐほどつらいことはなかったな。できるだけそいつを先に延ばしていたんだが、とうとうそれ以上は延ばせなくなった。ドナルドを杭につなぐのが、おれの最後の仕事になったんだ。あいつはおとなしく杭につながれてから、おれの手をなめて、尻尾をふったっけ。で、おれは泣きながら、といってもぜんぜん恥ずかしいと思わないが、あいつにこういったんだ。『じゃ、またな、相棒。おまえはこれからべつの世界へいくんだ。そこはきっとここよりもいい世界だぜ。どんな世界だって、ここより悪いはずはない』」

●

ロイがこうした芝居をはじめるようになってからも、メアリーはまだ毎週欠かさず授業をつづけ、残されたわずかな生徒たちに、巨大脳を与えられたことを神様に感謝すべきだと教

えていた。「その代わりに、キリンの首や、カメレオンの保護色や、犀の厚い皮や、オオツノジカの枝角をもらっていたほうがよかったと思いますか？」と彼女はたずねるのだった。その他いろいろ。

まだ、昔ながらのたわごとをぶちあげていたのだ。

そう、それからメアリーはロイの待つ家に帰り、脳がどれほどいいかげんなものであるかを、彼の実演によって思い知らされるのだった。ロイは、検査のための短い期間を除いて、入院はしなかった。しかも、聞きわけがよかった。車の運転は禁じられたが、その理由をちゃんと理解して、メアリーがジープのステーションワゴンのキーを隠しても、文句をいわなかった。それどころか、もうこれからはあまりキャンピングにも行けないだろうから、あの車を売ってはどうだ、とさえいった。おかげでメアリーは、自分の留守のあいだ、ロイの世話をしてくれる看護婦を雇う必要もなかった。近所の退職者たちが、わずかな謝礼でも喜んでロイの話し相手をつとめ、ロイがあぶないことをしないように見まもってくれた。

ロイが手のかからない患者なのはたしかだった。しょっちゅうテレビをながめ、庭から一歩も外に出ずに、何時間もたのしそうに遊んだ。ドナルドと、つまり、ビキニ環礁で死んだはずのゴールデン・レトリーバーといっしょに。

●

しかし、ガラパゴス諸島に関する最後の授業をしているうちに、メアリーはある懐疑にと

りつかれて、五秒間ほど絶句することになる。その懐疑は、もし言葉で表現するなら、こんなものであったかもしれない——「ひょっとすると、わたしは表の通りからこの教室に迷いこんで、年若い生徒たちに人生の謎を説明しようとしている、気のふれた中年女かもしれない。そして、生徒たちは、わたしがなにごとにつけても完全にまちがっているのに、わたしのいうことを信じこむんだわ」

メアリーはまた、偉大なはずの過去の教師たちすべてに対して、懐疑をいだかずにはいられなかった。彼らは、健康な脳の持ち主であったにもかかわらず、ロイとおなじように、なにが本当に起こっているかについて、完全な思いちがいをしていたのだ。

10

ガラパゴスの島々の数は、百万年前にはどれぐらいあったのだろうか？　大きい島が十三、小さい島が十七、そして、ごくちっぽけな島が三百十八、その中には、海面からほんの一、二メートル頭をのぞかせた岩礁にすぎないものもあった。

今日では、大きい島が十四、小さい島が七つ、ごくちっぽけな島が三百二十六。相当激しい火山活動がいまもなおつづいているわけだ。わたしは冗談にこういう――神々はまだ怒っているらしい。

そして、ほかの島々から遠く離れて、ぽつんとひとつ存在する最北端の島は、いまなおサンタ・ロサリアと呼ばれている。

●

そう、そして百万年前の一九八六年八月三日、＊ロイ・ヘップバーンという名の男は、ニューヨーク州イリアムのこぢんまりしたささやかな家で、臨終を迎えようとしていた。最後まで彼が歎き悲しんだのは、妻のメアリーとのあいだに子供がいないことだった。自分の死

んだあとで、ほかのだれかと子供を作れと、妻にすすめることもできなかった。メアリーの排卵はすでに止まっていた。

「おれたちヘップバーン家もこれで絶滅だな、ドードー鳥のように」彼はそういってから、とりとめのない口調で、進化の系統樹から見れば果実も葉もない枯れ枝となった、ほかの多くの生物の名を挙げた。「オオツノジカ」と彼はいった。「ハシジロキツツキ」と彼はいった。「ティラノサウルス」と彼はいった。その他いろいろ。しかし、最後の最後まで、お得意の辛口のユーモアは、思いがけぬときに口をついてとびだした。彼はこの物悲しい点鬼簿の中へ、冗談半分にふたつの名をつけたしたが、それらも子孫が絶えているのはたしかだった。「天然痘」といったあとに、彼はつづけた。「ジョージ・ワシントン」

●

最後の最後まで、彼は自国の政府に放射線を浴びせられたと、心の底から信じていた。メアリーと、臨終が間近だということでそこに付き添っていた医師と看護婦に向かって、彼はこういった——「おれに対して腹を立てているのが、全能の神だけだったらなあ！」

メアリーはこれを夫の幕切れのせりふと受け取った。そのあとの彼は、まるで死んだように見えたからだ。

しかし、それから十秒後に、紫色の唇がふたたび動いた。メアリーは彼の言葉を聞こうと身を乗りだした。それを聞きもらさなかったことは、彼女の終生の喜びになるだろう。

「人間の魂ってどんなものか知ってるかい、メアリー」と目を閉じたままで彼はささやいた。「動物には魂がない。魂は自分の一部で、脳がちゃんと働いてないときにそれとわかるところだ。おれはいつもわかってたよ、メアリー。といってそれをどうにもできゃしないが、いつもわかってた」

それからの彼の行動に、メアリーも部屋の中のみんなも肝をつぶした。とつぜんらんらんと目を輝かせて、ベッドの上に起きあがったのだ。そして、「聖書を持ってこい！」と家中にひびきわたるような大声で命じた。

彼が病気になって以来、特定の宗教に関するなにかが話題に出たのは、これがはじめてだった。彼もメアリーも教会には行かないし、せっぱつまった状況でもお祈りなど唱えないほうだったが、聖書だけは家のどこかに置いてあった。それがどこなのか、メアリーはよく思いだせなかった。

「聖書を持ってこい！」と彼はくりかえした。「女房、聖書を持ってこい！」これまでに彼が彼女を「女房」と呼んだためしはなかった。

そこでメアリーは聖書を探しにいった。それは予備の寝室で見つかった。ダーウィンの『ビーグル号航海記』や、ディケンズの『二都物語』といっしょに。

＊ロイは起きあがって、またメアリーを「女房」と呼んだ。「女房——」と彼は命じた。「聖書の上に手をのせて、おれのいうとおりに復唱しろ。「わたし、メアリー・ヘップバーンは、死の床にある最愛の夫に対して、ここにふたつの厳粛な約束をします」

彼女はそう復唱した。そのふたつの約束が奇怪なもの、おそらく政府相手の訴訟に関したものであることを、彼女は予想していたし、内心それを望んでもいた。それなら、ふたつとも守れる可能性がないからだ。しかし、そうは問屋がおろさなかった。
最初の約束は、いつまでもくよくよ悲しんだりせずに、できるだけ早く再婚します、というものだった。
第二の約束は、十一月になったらエクアドルへ行き、彼の代理も兼ねて、〝世紀の大自然クルーズ〟に参加します、というものだった。
「おれの霊魂は、道みちずっときみにくっついていてやるからな」と彼はいった。そして息が絶えた。

●

こうして、いまメアリーはグアヤキルにきて、自分も脳腫瘍ではないかと疑っているわけだった。メアリーの脳はすでに彼女をクローゼットの中へ追いやった。赤いイブニングドレスからガーメントバッグをとりはずさせるためだ。このドレスをメアリーは〝ジャッキー・ドレス〟と呼んでいた。そんな愛称をつけたのは、ジャクリーン・ケネディ・オナシスもおなじツアーに乗客として参加する予定だと聞いて、彼女によい印象を与えたかったからである。
しかし、クローゼットの中のメアリーは、オナシス未亡人がグアヤキルへやってくるほど

酔狂ではないことを知っていた——兵士たちが街路や屋上をパトロールし、公園にタコツボや機関銃座の穴を掘っているような町へやってくるはずがない。

ガーメントバッグをドレスから脱がせようとしているうちに、ドレスがハンガーからはずれ、下に落ちた。床の上の赤い血だまりそっくりだった。

メアリーはそれを拾いあげようともしなかった。もう、現世の物には用がないと信じていたからだ。しかし、彼女の名前の頭に星印がくっつくには、まだ時期が早すぎた。それどころか、彼女はもう三十年も生きつづけることになる。しかも、この惑星上のある生きた材料を使って、疑いもなく人類史上の最も重要な実験者の名に価する業績をあげることになる。

11

もしメアリー・ヘップバーンが自殺よりも盗み聞きをしたい気分であったなら、クローゼットの壁に耳をくっつければ、隣室のひそひそ話が聞きとれたかもしれない。

彼女は両隣りの部屋にどんな客が泊っているかも知らなかった。前夜にこのホテルへ着いたときには、ほかにひとりの客もおらず、それ以来、自分の部屋を一歩も出ていないからだ。

そのささやきの発生源は、コンピュータの天才＊ゼンジ・ヒログチと、その身重の妻で、生け花、つまり日本のフラワー・アレンジメント技術の教師であるヒサコだった。

反対側の隣室にいるのは、＊アンドルー・マッキントッシュの盲目の娘で、まだ十代のセリーナ・マッキントッシュと、やはり女性である盲導犬のカザックだった。メアリーが犬の吠える声を一度も耳にしなかったのは、カザックがもともと吠えない犬だからだ。

カザックは吠えないだけでなく、ほかの犬と遊んだり、面白そうな匂いや音を探検にいったり、先祖たちの天然の獲物だった動物たちを追いかけたりもしなかった。まだカザックが小犬のころ、巨大脳を持った人間たちはこの小犬に敵意を示し、カザックがそのたぐいのこ

とをすると食べ物をくれなかった。人間たちは、最初からカザックにここがどんな惑星であるかを思い知らせた。ここでは、犬類にとって自然な行動が法律違反なのだ——なにからなにまで。

人間たちは、カザックが性的衝動にわずらわされないように、生殖器もとり除いてしまった。ここでいっておくと、この物語の登場人物は、まもなくたったひとりの男性と、雌犬を含めたおおぜいの女性とに煮つめられることになる。ただし、外科手術のおかげで、カザックは厳密には女性といえない。メアリー・ヘップバーンとおなじように、カザックも進化のゲームからはずされていた。カザックは、だれにも遺伝子を伝えることができなかった。

●

セリーナとカザックの部屋のむこうには、開いた連絡ドアがあって、そこにセリーナの壮健な父親、実業家で冒険家でもある＊アンドルー・マッキントッシュの部屋があった。彼と未亡人のメアリー・ヘップバーンは、どちらも野外スポーツの愛好家だったから、けっこう気が合ったかもしれない。だが、このふたりは出会わない運命だった。前にもいったように、＊アンドルー・マッキントッシュと＊ゼンジ・ヒログチは、日暮れまでに死ぬことになる。

ちなみに、ジェイムズ・ウェイトは、ただひとり、できるだけほかの客から離れた二階に部屋を与えられていた。彼の巨大脳は、自分が無害平凡に見えると自画自賛していたが、それはとんだ錯覚だった。ホテルの支配人は、ウェイトをなにかの種類の悪党だと見ぬいてい

た。

●

ホテルの支配人は、悲しそうな顔つきの中年男で、その名を＊ジークフリート・フォン・クライストといい、エクアドルでも歴史の古い、総じて裕福なドイツ人社会の一員だった。キートにいる彼の父方の伯父ふたりが、このホテルだけでなくバイア・デ・ダーウィン号の持ち主でもあり、そのふたりが、ほんの二週間だけ、しかもその期間はいま終わりに近づいているのだが、〝世紀の大自然クルーズ〟の乗客の受け入れに手落ちのないよう、このホテルの監督を甥にまかせたのだ。彼は莫大な遺産をうけついで、ふだんは遊んで暮らせる身分だったが、そうした生活を恥じて、一族の事業にいわば〝一役買う〟よう、叔父たちからしむけられたのだった。

彼は結婚しておらず、しかも生殖をしたことがなかったから、進化論の観点から見ると、とるにたりない存在だった。ひょっとしたら、メアリー・ヘップバーンの再婚の相手という可能性も考えられたかもしれない。しかし、彼もやはり死ぬべき運命だった。＊ジークフリート・フォン・クライストは、日暮れを生きのびはするが、それから三時間後に津波にのまれて溺死することになる。

いまは午後四時だった。このエクアドル生まれのドイツ人は、うるんだ青い目とたれさがった口ひげのせいもあって、まるでその夜に死ぬのを予期しているかに見えたが、実はわた

し同様、未来予知能力を備えてはいなかった。ただし、その午後には、ふたりともおなじことを感じていた。この惑星が自転軸の上でよろめいていること、つぎになにが起きるともかぎらないことを。

ちなみに、*ゼンジ・ヒログチと*アンドルー・マッキントッシュは、銃創が原因で死ぬことになる。

●

この物語の中で、*ジークフリート・フォン・クライストは重要でないが、彼のただひとりの肉親、彼よりも三歳年上で独身の兄アドルフは、まちがいなく重要だ。バイア・デ・ダーウィン号の船長、アドルフ・フォン・クライストは、事実、今日の地球上に生きるすべての人間の先祖となるのだから。

メアリー・ヘップバーンの助力を得て、彼はいわばその後の時代のアダムになる。しかし、イリアム出身のこの生物教師は、すでに排卵が停止しているため、彼のイブになりたくてもなれなかった。そこで、彼女はその代わりに、もっと神に近い役割に甘んじることになる。

そして、この重要でないホテル支配人のきわめて重要な兄は、ちょうどその瞬間、ニューヨーク発のがら空きの旅客機に乗って、グアヤキル国際空港に到着するところだった。それまでの彼は、ニューヨーク市で〝世紀の大自然クルーズ〟の宣伝に一役買っていたのだ。

かりにメアリーが壁ごしにヒログチ夫妻のひそひそ話に耳をかたむけたとしても、このふたりがなにを悩んでいるかは理解できなかったろう。そのひそひそ話は、このふたりが流暢にしゃべる唯一の言語である日本語でとりかわされていたからだ。*ゼンジは英語とロシア語がすこしできた。ヒサコは中国語がすこしできた。エクアドルでのいちばん普通に使われているスペイン語やケチュア語やドイツ語やポルトガル語は、ふたりともまったくできなかった。

ここでわかるのだが、このふたりも、すばらしいはずの脳から受けた仕打ちについて、やはり苦々しい思いをいだいていた。とりわけふたりがくやしがったのは、おめおめとこうした悪夢の中へ送りこまれたことだった。なぜなら、*ゼンジは世界でもいちばん頭のいい人間のひとりだと思われていたからだ。しかも、このふたりが、事実上、強引な*アンドルー・マッキントッシュの囚人にされたのは、もとはといえば*ゼンジの責任であり、ヒサコの責任ではなかった。

つまりはこういうことである――*マッキントッシュは盲目の娘と盲導犬を連れて、その約一年前に日本を訪れ、そこで*ゼンジと知り合い、彼がマツモトの社員として手がけているすばらしい研究のことを知った。テクノロジー的にいえば、*ゼンジはまだ二十九歳の若さで、すでに祖父となったようなものだった。彼はそれ以前に、多くの国の話し言葉を一瞬

にして翻訳できるポケット・コンピュータを生みだし、それを〝ゴクビ〟と名づけていた。そのあと、マッキントッシュの日本訪問のころになると、＊ゼンジはすでに新世代の音声即時翻訳機の試作品を生みだし、それを〝マンダラックス〟と名づけていた。

＊アンドルー・マッキントッシュは、株券や債券を売って運転資金と利益を稼ぎだしている投資銀行の経営者だったが、若い＊ゼンジと内密に接触し、会社に給料で雇われるのは愚の骨頂であり、＊マッキントッシュの助けをかりて自分の会社を設立すれば、あっというまにドル建ての億万長者、円建ての兆万長者になれる、と入れ知恵をした。

＊ゼンジは、考える時間がほしい、と答えた。

この予備交渉は、東京のスシ・レストランで行なわれた。スシとは冷やした米飯を生魚で包んだもので、百万年前に人気のあった料理である。輝かしい未来の人間が、だれもかれもほとんど生魚しか口にしないようになるとは、当時のだれひとり、夢にも思っていなかった。

赤ら顔で騒々しいアメリカの企業家と、控え目で、彼に比べると人形のような日本の発明家は、ゴクビを使って意思を通じあった。どちらも相手の国の言葉がうまく話せなかったからである。当時は、何千台何万台のゴクビが、世界中で使われていた。ふたりがマンダラックスを使うのはむりだった。マンダラックスの唯一の完成試作品は、マツモト・コーポレーションの＊ゼンジのオフィスで、厳重な監視のもとにおかれていた。こうして＊ゼンジの巨大脳は、彼の国でいちばんの大金持ちである天皇とおなじぐらい金持ちになる夢をもてあそびはじめた。

それから数ヵ月後の翌年一月、メアリーとロイのヘップバーン夫妻がたくさんのものに感謝したいと考えたのとおなじ一月に、＊ゼンジは＊マッキントッシュから一通の手紙を受け取った。それは、まる十ヵ月の余裕をおいた招待状で、メキシコのユカタン州メリダの郊外にある彼の別荘に滞在してから、その建造資金の融資に彼が一役買ったエクアドルの豪華客船、バイア・デ・ダーウィン号の処女航海の乗客になってほしいというものだった。

英語で書かれた＊マッキントッシュの手紙にはこんな文句があり、それを理解するために、＊ゼンジはゴクビの手をかりなくてはならなかった。——「この機会を利用して、じっくりおたがいを知りあいましょう」

●

＊マッキントッシュがおそらくユカタンで、でなければ、疑いもなく、〝世紀の大自然クルーズ〟のあいだに、＊ゼンジから手に入れたものは、＊ゼンジが新会社の社長になるという契約書への本人の署名で、＊マッキントッシュはその会社の株を売買するつもりだった。ジェイムズ・ウェイトとおなじように、＊マッキントッシュも一種の漁師だった。彼はシャツの値札ではなく、日本のコンピュータの天才を餌に使って、投資家たちをつかまえようともくろんでいた。

ここまできてわかったことがある。わたしが語らなければならない物語は、百万年の歳月にまたがっているのに、出だしから結末まであまり変化がない。出だしでも、結末でも、わ

たしは人間のことを、その脳の大きさには関係なく、漁師として語っている。

●

こうして十一月になったいま、ヒログチ夫妻はグアヤキルにやってきた。*マッキントッシュの忠告にしたがって、*ゼンジは雇い主たちに行先のことで嘘をついていた。マンダラックスの創造ですっかり疲れきったので、二カ月間、いっさいの仕事、いっさいの連絡から遠く離れて、ヒサコと水入らずの休暇をたのしみたい、と彼らを言いくるめたのである。彼はこんな誤った情報を雇い主たちの巨大脳に植えつけた――乗組員つきのスクーナーをチャーターして、メキシコのある港からカリブ諸島遊覧の旅にでかけるつもりだが、その船名は教えたくないし、どこの港から出航するかも教えたくない。

すでに〝世紀の大自然クルーズ〟の乗客名簿はでかでかと発表されていたが、*ゼンジの雇い主たちは、最も生産的な社員とその妻がその船に乗る予定であることを知らずじまいだった。ジェイムズ・ウェイトとおなじように、この夫妻も偽名を使っていた。

そして、これもジェイムズ・ウェイトとおなじように、夫妻は杳として消息を絶った！だれかがこの夫妻を探そうとしても、どこにも見つからなかっただろう。いくら巨大脳を使ってふたりの行方を追おうとしても、そもそも出発点の大陸からまちがっているのだ。

12

メアリー・ヘップバーンと隣りあったホテルの一室で、ヒログチ夫妻は声をひそめて、*アンドルー・マッキントッシュという男は狂人ではないかと話しあっていた。

これは大げさだった。*マッキントッシュはたしかに粗野で強欲で思いやりに欠けていたが、狂人ではなかった。彼の巨大脳が世の中で起こっていると信じていることは、実際に起こっていた。セリーナとカザックとヒログチ夫妻を自家用のリアジェット機に乗せ、自分で操縦桿を握ってメリダからグアヤキルへと飛ぶあいだにも、彼はこんな事態を予想していた――この町は戒厳令下か、またはそれに近い状態にあり、商店はすべて閉鎖され、町をうろつく飢えた群衆はますます数がふえ、そしてバイア・デ・ダーウィン号はおそらく予定どおり出航しないだろう。その他いろいろ。

ユカタンの別荘にある通信設備を使って、彼はエクアドルだけでなく、自分の知りたいと思うどの土地についても、たえず最新の情報をがっちりつかんでいた。それとともに、これから行く土地でなにが待ちうけているかを、自分の盲目の娘には打ち明けたが、ヒログチ夫妻には秘密にしておいた。

グアヤキルにやってきた彼の真の目的は、これもヒログチ夫妻には秘密で、娘にだけ打ち明けたのだが、できるだけたくさんのエクアドル資産を底値で買い取ることだった。その中には、たぶん、エルドラドとパイア・デ・ダーウィン号も含まれているかもしれない——そして、金鉱と油田、その他いろいろも。その上、彼はこうしたビジネスの機会を＊ゼンジ・ヒログチと分かちあい、彼がエクアドルきっての資産家になれるように金を貸して、永久に自分に縛りつけておく魂胆だった。

●

＊マッキントッシュはヒログチ夫妻に、エルドラドの部屋でじっと待っているように、と言いふくめてあった——まもなく、すばらしい知らせを持っていくから、というのだ。彼はその午後いっぱい電話にとりついて、エクアドルの財界人や銀行と話しあっていた。彼が持っていくつもりの吉報というのは、あと一、二日のうちに、彼とヒログチ夫妻が自分のものと宣言できるようになる、すべての資産に関するものだった。

それから、彼はこういうつもりだった。「もう、〝世紀の大自然クルーズ〟なんか鬼にでも食われろ！」

●

ヒログチ夫妻は、もはや＊アンドルー・マッキントッシュがどんな吉報を届けにくるとも

考えられなくなっていた。ふたりは彼を狂人と信じていたが、皮肉なことに、この誤った観念をふたりに植えつけたのは、＊ゼンジ自身の創造物、すなわちマンダラックスだった。すでに世界で十台にふえたこの機械のうち、九台は東京にあり、あとの一台はゼンジがこの旅にたずさえていた。マンダラックスは、ゴクビとちがって、翻訳機であるばかりか、ホモ・サピエンスをおそう最もありふれた一千種類の病気を、十二種類の神経症も含めて、かなりの精度で診断することもできた。

マンダラックスが医学の分野でおこなったことは、実をいえば単純そのものだった。マンダラックスは、本物の医師たちがするように、つまり、ある質問をしてから、その答によってつぎの質問をするというやりかたで、ひとつながりの問答をするようにプログラムされていた。たとえば――「食欲はありますか？」のつぎは、「便通は規則的ですか？」で、そのあとはたぶん、「どんな便でしたか？」などなど。

ユカタンで、ヒログチ夫妻はそうしたひとつながりの問答形式をとって、＊アンドルー・マッキントッシュの行動をマンダラックスに説明した。とうとう最後にマンダラックスは、トランプのカード大の画面に日本語でこんな言葉を表示した――「病的人格」と。

●

なんの感情もなく、なんの心配もないマンダラックスはさておき、ヒログチ夫妻にとって不幸なことに、このコンピュータはこんな説明を補足するようにプログラムされてはいなか

った。その疾患が大半のものに比べてごく軽いこと、その患者はめったに入院治療を受けることもなく、また実をいうとこの惑星の中で最も幸福な人たちであること——また、彼らの行動は周囲の人たちに苦痛を与えるだけで、彼ら自身はたいてい平気であること。これが本物の医師なら、さらにつづけて、日ごろ町で見かける何百万人もの人たちも、果たして病的人格かどうか判定のつけにくい中間領域に属している、と説明したかもしれない。

しかし、ヒログチ夫妻は医学知識にうとかったので、この診断をまるで恐ろしい病気のようにうけとった。そして、なんらかの方法で*アンドルー・マッキントッシュから逃れ、早く東京へ帰りたいと考えた。しかし、どれほど悔やんでみてもふたりはその男に依存している身の上だった。ふたりがマンダラックスを使って、悲しそうな顔つきのホテル支配人から聞きだしたところによると、グアヤキル発の商業航空路線はぜんぶ運休で、チャーター便の会社も電話に出ない、という。

そんなわけで、呆然自失したヒログチ夫妻にとって、グアヤキルから脱出可能な方法は、ふたつしか残されていなかった——*マッキントッシュのリアジェット機に乗るか、それともバイア・デ・ダーウィン号に乗るかだが、その船が翌日に出航できる見込みはますます怪しくなっていた。

13

百万と五年前に、＊ゼンジ・ヒログチはゴクビの父となり、ついで百万年前に、この若き天才はマンダラックスの父となった。そう、そして彼がマンダラックスの父となったとき、彼の妻は彼の種を受けた最初の人間の子を生もうとしていた。

母親のヒサコが胎児に伝えた遺伝子については、不安があった。ヒサコの母親は、アメリカ合衆国が日本の広島に原爆を投下したとき、放射線に被曝していたからである。そこで、胎児に異常がないかどうか、ヒサコの羊水の標本が東京で検査された。ちなみに、羊水の塩分濃度は、バイア・デ・ダーウィン号がやがてその中に姿を没するだろう大洋の水とまったく同一だった。

検査の結果、胎児は正常と診断された。

その検査によって、胎児の性別の秘密も明らかにされた。やがてこの世界に生まれてくるのは女の赤ん坊で、またこの物語に女性がふえることになる。

●

検査では、胎児のささいな欠陥までは探知できなかった。たとえば、これは事実ではないけれども、胎児がメアリー・ヘップバーンのように音痴であるかもしれないとか――それともまた、これはやがて事実とわかるのだが、胎児がオットセイのようにつやつやした美しいにこ毛でおおわれているかもしれないとか。

＊ゼンジ・ヒログチが父としてもうけた唯一の子供は、かわいいけれども、にこ毛でおおわれた娘で、父親はとうとうその娘を見ることができずじまいだった。

彼女はガラパゴス諸島の北端にあるサンタ・ロサリア島で生まれることになる。そして、アキコと名づけられることになる。

●

アキコがサンタ・ロサリア島で成人したあかつきには、体の内部は母親にそっくりだが、ちがった種類の皮膚を持つことになる。これに比べて、ゴクビからマンダラックスへの進化の階梯は、パッケージの中身の徹底的な改良ではあっても、表皮には目立った変化はない。アキコは、日焼けからも、泳ぐときには冷たい水からも、溶岩の上にすわったり寝そべったりするときはやすりのような表面からも、うまく保護されていた――一方、彼女の母親の素肌は、島の生活におけるこうした日常の危険に対して、まったく無防備だった。しかし、ゴクビとマンダラックスは、内部にいちじるしい差があっても、高耐衝撃性の黒いプラスチックでできた、高さ十二センチ、幅八センチ、厚さ二センチの、ほぼ同一のケースの中に宿っ

ていた。
どんなばかにもヒサコとアキコの見分けはつくが、ゴクビとマンダラックスは専門家にしか見分けがつかなかった。

●

ゴクビとマンダラックスは、どちらもその背中に、ケースと同一平面にした感圧性のボタンがついており、これを使って、人間がその中にある仕掛けと意思を通じあえるようになっていた。表にも裏にもおなじ大きさのスクリーンがあり、そこに文字を出すこともできた。このスクリーンは太陽電池としても働き、小型電池に充電する仕掛けだが、この点でもゴクビとマンダラックスはまったくおなじだった。
どちらも、スクリーンの右上の隅にピンの頭ほどのマイクがついている。ゴクビもマンダラックスも、人間が話す言葉をこのマイクで聞きとってから、ボタンによる指図にしたがって、翻訳した言葉を文字に変え、スクリーンに表示する。
どちらの機械を扱うにしても、二ヵ国語の会話がすらすら流れるようにするためには、操作者が手品師のように手先が敏捷で器用でなくてはならない。たとえば、わたしがポルトガル人に対して英語で話しかけるとすれば、まずポルトガル人の口のあたりにその機械を近づけておいて、しかも相手のしゃべることを英語に翻訳した文字が読みとれるように、スクリーンを自分の目のそばにおかなくてはならない。それからこんどは、わたしのしゃべること

が機械に聞きとれるように、すばやく裏をひっくりかえし、わたしのしゃべることがスクリーンを通じて彼に読みとれるようにしなければならない。
現存の人間はだれひとり、ゴクビやマンダラックスを扱えるだけの器用な手と巨大な脳を持っていない。そういえば、だれひとり針に糸を通せないし――ピアノを弾くことも、鼻の穴をほじくることもできない。

●

ゴクビは十種類の言語しか翻訳できなかった。マンダラックスは一千種類の言語を翻訳することができた。ゴクビは、いまマイクから聞こえているのがどの言語であるかを教えてやる必要があった。マンダラックスは、ほんの二言三言をきいただけで、それが一千種類の言語の中のどれであるかを的中させることができたし、命令されなくても、その言葉を操作者の言語に翻訳してのけた。
どちらもきわめて正確な時計と万年暦を兼ねていた。＊ゼンジ・ヒログチのマンダラックスの時計は、彼がホテル・エルドラドにチェックインしてから、三十一年後、メアリー・ヘップバーンがその機械ごとホホジロザメに食われるまでに、たった八十二秒遅れただけだった。
ゴクビも時間の経過を測る正確さではそれに負けなかったが、そのほかのすべての点で、マンダラックスはその父親をはるかに凌いでいた。マンダラックスは、父親より百倍も多く

の言語の仲介と、当時の医師が束になってもかなわないほど、数多くの病気の正しい診断ができるだけではなかった。マンダラックスは、もし命令されれば、どの年にどんな重要な出来事があったかを列挙することができた。たとえば、もしあなたがこの機械の背中にあるボタンを押して、ダーウィンの生年である1802という数字を打ちこんだとすれば、こんなことを教えてくれるのだ。アレクサンドル・デュマとヴィクトル・ユーゴーもやはりその年に生まれ、ベートーヴェンが第二交響曲を完成し、フランスがサント・ドミンゴの黒人反乱を弾圧し、ゴットフリート・トレヴィラーヌスが〝生物学〟という用語を創始し、イギリスで『木綿工場における徒弟の健康および道徳に関する法律』が制定された。その他いろいろ。それはまた、ナポレオンがイタリア共和国の大統領になった年でもある。

マンダラックスは、二百種類のゲームのルールを知っていたし、大芸術家と大技術者が書きのこした五十種類の基本原理を暗誦することもできた。さらに、指令されれば、世界文学から選んだ二万もの有名な引用句を思いだすことができた。だから、もしあなたがその背中に、たとえば〝日暮れ〟という言葉を打ちこんだとすれば、このような高尚な感慨がスクリーンに現われたはずだった——

日暮れと宵の明星、
われを呼ぶ清らなる一声！
われ海原に出でゆくとき、

砂州に嘆きのなからんことを。

アルフレッド・テニソン(一八〇九―一八九二)

●

＊ゼンジ・ヒログチのマンダラックスは、彼の身重の妻と、メアリー・ヘップバーン、盲目のセリーナ・マッキントッシュ、アドルフ・フォン・クライスト船長、そのほか六人の女性とともに、やがてサンタ・ロサリア島で三十一年間の島流しになる運命だった。しかし、こうした特殊な状況のもとでは、マンダラックスはほとんど役に立たなかった。

マンダラックスの該博な知識が無用の長物なのに腹を立てて、船長はそれを海へ投げこむぞと威嚇した。彼の人生の最後の日、彼が八十六歳、メアリーが八十一歳のとき、船長はこの威嚇を実行に移すことになる。いわば新しいアダムである彼の最後の行動は、知恵のリンゴを紺碧の海に投げこむことだった。

●

サンタ・ロサリア島特有の状況のもとで、マンダラックスの医学的助言がまるであざけりのようにひびくのは、避けられないことでもあった。ヒサコ・ヒログチが、彼女の死まで二十年間もつづいた重い鬱病に罹ったとき、マンダラックスがすすめたのは、新しい趣味、新しい友人、転地や転職、それにリチウム塩剤だった。セリーナ・マッキントッシュの腎臓が、

まだ三十八歳の若さで衰えはじめたとき、マンダラックスはなるべく早く適当な臓器提供者を見つけなさいと助言した。ヒサコのにこ毛におおわれた娘のアキコが六歳になって、親友のオットセイから感染したらしい肺炎で寝こんだとき、マンダラックスは抗生物質をのめとすすめた。そのころ、ヒサコと盲目のセリーナはいっしょに暮らし、まるで夫婦のようにアキコを育てていた。

また、サンタ・ロサリア島のぼた山の上で、なにかの出来事のお祝いが開かれるときには、その場にふさわしい世界文学からの引用句が求められることがあったが、この場合もマンダラックスが出すのはいつもへまな答だった。アキコが二十四歳で、やはりにこ毛におおわれた女の子、この島での最初の第二世代の人間を産みおとしたときに、マンダラックスが寄せた祝辞は、つぎのようなものである——

もしいちばん高い丘の上で首を吊るされても、
わが母よ、おお、わが母よ!
その愛はまだおれを追ってくるだろう、
わが母よ、おお、わが母よ!

ラドヤード・キプリング(一八六五—一九三六)

そして——

暗い子宮の中で芽ぶいたあと、
母のいのちがわたしを人間にした。
誕生までの月日のあいだ、
母の美しさが共有の地をはぐくんだ。
しかし、母のいくばくかの死がなければ、
わたしは目も見えず、息も、身じろぎもできなかった。
ジョン・メイスフィールド（一八七八—一九六七）

そして——

有益なる労苦と優しき世話を
人間にさずけたまいし主よ！
われらはなんじに感謝を捧ぐ、
母とみどりごをつなぐ絆に。
ウィリアム・カレン・ブライアント（一七九四—一八七八）

そして——

あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。

聖書

アキコの娘の父親は、船長の子供の中でもいちばん年長のカミカゼで、そのときまだ十三歳だった。

14

現人類の発祥の地、サンタ・ロサリア島のコロニーでは、最初の四十一年間に数多くの出産はあったが、正式な結婚はなかった。しかし、そもそものはじまりから、ペアは組まれていた。ヒサコとセリーナは、死ぬまでペアを組んだ。船長とメアリー・ヘップバーンは最初の十年間ペアを組んでいた——このペアが解消したのは、彼には絶対に許せないことを彼女がしたから、つまり、彼の精液を無断で使ったからである。そして、ほかの六人の女性も、ひとつの家族として暮らしてはいたが、やはりペアを組み、きわめて親密な姉妹関係を結んでいた。

二〇二七年に、カミカゼとアキコがサンタ・ロサリア島初の結婚式をとりおこなったとき、初代の定住者たちは、もうみんなとっくの昔に曲がりくねった青いトンネルをくぐって来世に姿を消したあとで、マンダラックスは南太平洋の海底でフジツボにおおわれていた。もしかりに、マンダラックスがまだ健在で、婚姻についての意見を求められたとしても、その答の大部分は不愉快なものであったろう。たとえば——

結婚――主人と、女主人と、奴隷二名から成るが、合計では二名にしかならない共同生活体。

アンブローズ・ピアス（一八四二―？）

そして――

恋から生まれた結婚は、ワインからとれた酢――
悲しく、すっぱく、酔えない飲み物。
かぐわしい天上の美味も日々に饐え、
ありふれた家庭料理の味となる。

ジョージ・ゴードン・バイロン（一七八八―一八二四）

その他いろいろ。
ガラパゴス諸島最後の結婚、すなわち地球上最後の結婚は、西暦二三〇一一年にフェルナンディナ島で行なわれた。もう今日では、だれひとりとして、結婚とはどういうものかを知らない。結婚の全盛期に、マンダラックスがこの慣習に対して投げかけた冷笑は、おおむね正しかったといわざるをえないようだ。このわたしの両親も結婚によっておたがいをみじめにしただけだったし、メアリー・ヘップバーンも、サンタ・ロサリア島で老婆になってから

のある日、にこ毛におおわれたアキコに、イリアムの町中を探しても、本当に幸福な結婚をしていた夫婦は、おそらくわたしとロイだけだったろう、と述懐したことがある。
その当時の結婚がそれほど厄介なものだったのは、これまた、さまざまな悲嘆の扇動者、あの巨大脳のしわざである。あの扱いにくいコンピュータは、いろいろの問題についていろいろの相反する意見を同時にいだくことができる上に、ひとつの意見や問題からべつのそれへと電光石火のスピードで切りかわることができたので、ストレスを背負った夫婦の論議は、まるで目かくしをしてローラースケートをはいた人びとの喧嘩のような結末を迎えかねなかった。
たとえば、ヒログチ夫妻にしてもそうだ。メアリーがクローゼットの壁ごしに聞いたひそひそ話は、この夫婦がそのとき、自分たちとおたがいに関する意見、また愛とセックスと仕事と世界とその他いろいろに関する意見を、電光石火のスピードで切りかえたことによる産物だった。
ある瞬間のヒサコは、夫がひどいまぬけであり、自分自身とおなかの中の娘は自力で救うしかないと考えた。だが、つぎの瞬間には、夫がみんなのいうとおりの天才であり、自分はなにも心配しなくていい、夫がこの窮地からまもなくやすやすと自分たちを救いだしてくれる、と考えるのだった。
ある瞬間の*ゼンジは、頭の中で、妻がたよりなく、お荷物でしかないことをのろった。だが、つぎの瞬間には、頭の中で、この女神とまだ生まれていない娘のために、もしそうす

る必要があるなら自分は死んでもいい、と誓うのだった。
すくなくとも子供を育てあげるまで、ということは当時の人間の場合、十四年かそれぐらいの期間だが、いっしょに暮らすたてまえになっていた生き物の頭の中で、狂気とはいわないまでも、こうしたうつろいやすい感情が駆けめぐることに、いったいどういう利点があったのだろう?

●

＊ゼンジは、気がついてみると、沈黙のまっただなかでこう口を切っていた。「きみの悩みはなにかほかにあるな」彼がいったのはこんな意味である――彼女がいらいらしているのは、ふたりがはまりこんだ苦境そのものよりも、もっとなにか個人的なことで、しかもそうなったのはかなり前からではないのか。
「いいえ」と彼女は答えた。これも巨大脳の特徴のひとつだった。巨大脳には、マンダラックスが逆立ちしてもできないことができた――それは際限なく嘘をつくことだった。
「先週からずうっと、きみはなにかを悩んでいた」と彼はいった。「なぜ胸の中のもやもやを吐きだしてしまわないんだ? どういうことなのか話してみろよ」
「なんでもないわ」と彼女は答えた。果たして真実を話しているのかどうか、つねにまったく見当もつかないこんなコンピュータと、だれが十四年間もいっしょに暮らしたがるだろう?

このふたりの会話は、わたしがこの物語で使っている百万年前の慣用的なアメリカ英語ではなく、日本語だった。ちなみに、＊ゼンジが神経質にマンダラックスをもてあそび、片方の手からもう片方の手へと持ちかえているうちに、うっかりそのボタンをいじったため、どちらのしゃべる言葉もせっせとナヴァホ語に翻訳されていた。

●

「そうね——どうしても知りたいならいうけど——」とヒサコはとうとう打ち明けた。「あれはユカタンでオムー号に乗っていたときだったわ」オムー号は、＊マッキントッシュが持っている長さ百メートルのヨットである。「ある日の午後、マンダラックスをいじっていたの。あなたが海底の宝探しで水にもぐっているあいだに」

これは＊マッキントッシュが、ろくに泳げない＊ゼンジをむりやり誘ってやらせていたことだった。スキューバ・ダイビングで四十メートルの深さに沈んだスペインのガリオン船までもぐり、割れた皿や球形砲弾を持ち帰るのだ。＊マッキントッシュは、盲目の娘セリーナの右手首と自分の右足首とを三メートルのナイロンのロープでつなぎ、彼女にも潜水をやらせていた。

「そしたら偶然、マンダラックスがあることをやれるのがわかったの。マンダラックスがそんなことをやれるのを、なぜかあなたはわたしにいい忘れたようね」ヒサコはつづけた。

「それがなんだか当ててみたい？」

「いや、べつに」こんどは彼が嘘をつく番だった。

「マンダラックスは、とても優秀なお花の先生なの」

もちろん、これはヒサコが自分でつねづね誇りにしていたことだった。しかし、彼女の自尊心は、小さな黒い箱が彼女の教えていることを教えられるだけでなく、それを一千種類の外国語でやれるという発見によって、いちじるしく傷ついたのだ。

「そのことは前から話そうと思っていたんだ。本当だよ」

これもやはり嘘だった。そもそもマンダラックスが生け花を知っていることをヒサコが発見する可能性は、銀行金庫の文字錠の組み合わせをいい当てるのとおなじくらいに、かぎりなくすくないからだ。彼女はマンダラックスの使い方をおぼえるのにひどく消極的だったし、その傾向は死ぬまでつづくことになる。

しかし、オムー号の上でヒサコが所在なげにそのボタンをもてあそんでいるとき、なんたることか、とつぜんマンダラックスは彼女にこう告げたのだ。最も美しい花の配置にはひとつかふたつ、多くて三つの要素がある。その三つの要素を配置する上で、とマンダラックスはいった——三つともがおなじであることや、三つのうちふたつがおなじであることはあるが、三つともべつべつであることはありえない。マンダラックスは、複数の要素の配置における各要素の高さの理想的比率、また、各要素とその花瓶または水盤、または籠の直径と高さの理想的比率を、彼女に告げた。

生け花も、蓋をあけてみれば、近代医学の問診技術とおなじように、たやすく体系化でき

るのだった。

マンダラックスに生け花やそのほかの知識を教えこんだのは、＊ゼンジ・ヒログチ自身ではなかった。彼はそうした仕事を部下にまかせていた。マンダラックスに生け花を教えた部下は、ヒサコの有名な生け花教室へテープレコーダーを持ちこんで、つぎにその講義を煮つめただけだった。

●

＊ゼンジはヒサコにむかって、マンダラックスに生け花を教えたのは、オナシス夫人をびっくりさせるためで、実は〝世紀の大自然クルーズ〟の最後の夜に、その機械を彼女にプレゼントするつもりだった、と弁解した。「ぼくがそうしたのはね、あの人の大好きなのは美しいものだと聞いたからだよ」

これはたまたま真実だったが、ヒサコは彼を信じなかった。一九八六年には事態がそこまで悪化していた。あまりにも嘘が氾濫しているので、もうだれひとり、だれのいうことも信じないのだった。

「ええ、そうよね」とヒサコはいった。「オナシス夫人のためにそうしたんでしょうとも。そして妻の名誉を高めるためにもね。あなたはわたしを不滅の人びとの中に入れてくれたん

だわ」彼女がいうのは、マンダラックスに引用されるような大思想家たちのことだった。
ヒサコはすっかりいじわるな気分になって、彼の業績をできるだけおとしめようとした。彼女にいわせれば、ちょうど＊ゼンジが彼女の業績をおとしめたのとおなじように。
「きっとわたしはよほどのおばかさんなのね」と彼女はいい、この発言をマンダラックスは忠実にナヴァホ語に翻訳して、スクリーンに表示した。「あなたのやったことにどれほど悪意があるか、ほかの人間に対するどれほどの軽蔑があるかに気がつくのに、とんでもなく時間がかかってしまったんだもの」
彼女はさらにつづけた。「＊ヒログチ博士、あなたは自分以外のみんながこの星の場所ふさぎでしかなくて、おまけに騒々しい音を立てたり、貴重な自然資源をむだにしたり、たくさんの子供を生みすぎたり、生ゴミをほったらかしにしたりしているとお考えなのよね。だから、あなたがた天才に対してわたしたちができるわずかなくだらない奉仕も、機械にまかせてしまったほうがずっとましな場所になる、とおっしゃりたいんでしょ。あなたがいま耳かき代わりに使っているそのすばらしいマンダラックス――それも結局は、語学や数学や歴史や医学や文学や生け花や、そんなものの知識を持った人間に、もうお金を払ったり、お礼をいったりせずにすまそうというけちな根性から出た、自我肥大症患者の逃げ口上じゃないの？」

人間ができることをすべて——そう、なにからなにまで——機械に肩代わりさせようという当時の大流行について、わたしの意見はすでに述べたとおり。そこへちょっとつけ加えておきたいが、SF作家であったわたしの父が書いた長篇小説に、スポーツ・ロボットを作ってみんなの笑いものになった男の話がある。この男が創りだしたのは、打つたびにホール・イン・ワンをやってのけるゴルフ・ロボット、シュートするたびにきまるバスケットボール・ロボット、サーブするたびにエースを出せるテニス・ロボット、などなどだった。

最初のうち、人びとはそうしたロボットになんの用途も見いだすことができず、この発明家の妻は、ちょうどわたしの母が父を捨てて家を出ていったように、彼を捨てて家を出ていく——そして彼の子供たちは父親を精神病院へ入れようとする。だがそのとき、発明家は広告宣伝業者に声をかけ、自動車やビールや剃刀や腕時計や香水、その他あらゆる商品のコマーシャルを、このロボットたちにやらせてはどうか、と教える。父によると、この発明家は巨万の富を築いたという。なぜなら、おびただしい数のスポーツ・ファンが、このロボットたちにあやかろうとしたからである。

そのわけをわたしに聞かれても困る。

15

さて、＊アンドルー・マッキントッシュは、盲目の娘の部屋で電話が鳴るのを――ヒログチ夫妻とわかちあえる吉報が届くのを――待っていた。彼はスペイン語に堪能で、その日の午後は、マンハッタン島にある自分の会社や、浮き足立ったエクアドルの財界人や官僚との電話にかかりきっていたのだ。彼が娘の部屋で商談をするのは、自分がなにをしているかを娘に聞かせたいからだった。このふたりはとても仲がよかった。セリーナは母親を知らなかった。母親は彼女を生みおとす最中に亡くなったからである。

わたしはいまセリーナのこと、あの見えない緑色の瞳のことを、造物主の実験のひとつとして考えている――なぜなら、この盲目は親譲りのものであり、子孫に伝えることができるものだったからだ。グアヤキルにいたときの彼女は十八歳で、生殖には最適の時期が行く手に持っていた。やがてメアリー・ヘップバーンが、サンタ・ロサリア島で船長の精液を無断使用する実験に加わらないかと彼女の意向をただしたとき、セリーナはそれを拒否することになる。だが、もしセリーナが盲目になにかの利点を見いだしていたなら、それを後代に伝えることもできたろう。

若き日のセリーナは、グアヤキルにいるあいだ、社会病質者の父親が電話で権謀術数をふるっているのを聞いてはいたが、やがて自分が二部屋隣りにいるヒサコ・ヒログチとペアを組み、にこ毛におおわれた赤ちゃんを育てることになるとは、知るよしもなかった。

グアヤキルで彼女がペアを組んでいた相手は父親だった。父親は、どうやらこの惑星を所有しているらしく、いつでも好きなときに、どこでも好きなところで、なんでも好きなことができるらしかった。セリーナの巨大脳は、彼女にこう告げていた。父親の断固たる人格が創りだした一種の電磁バブルの中で、セリーナは安全におもしろく一生を送ることができるだろうし、そのバブルは、父親が死んだあとも——いよいよ来世への青いトンネルをくぐる順番が父親にまわってきたあとも——彼女を守りつづけてくれるだろう、と。

●

忘れないうちに——サンタ・ロサリア島では、セリーナは目が見えないために、ほかのどの定住者より恵まれた利点を持つことになった。それは彼女にとって大きな喜びだったが、といって、つぎの世代に伝えるほどの値打ちのないものだった。

その島でのセリーナは、幼いアキコのにこ毛の感触を、ほかのだれよりも敏感にたのしむことができたのだ。

●

＊アンドルー・マッキントッシュはエクアドル財界の巨頭連にこう告げた。これから自分が指定するエクアドルの受託者には、いまなお全幅の信頼がおけるアメリカ・ドルで五千万ドルを、いつでも即座に振り替える用意がある、と。当時、アメリカの各銀行が持っていた富と称するものは、まったく架空の存在、重みも実体もないものになっていたため、エクアドルにかぎらず、有線または無線のメッセージを受信できるところならどこにでも、また、どんなに大きい金額でも、即座に振り替えることができた。

＊マッキントッシュがキートから届くのを待っていたものは、その金額とひきかえに、エクアドル人たちがどんな資産を、彼自身と、娘と、ヒログチ夫妻の名義へ、おなじく即座に振り替えられるか、という知らせだった。

そこで支払われるのは彼自身の金ですらなかった。どういう金であるかはともかく、彼はそれをチェース・マンハッタン銀行から借りることにして、すでに話もつけてあった。どういう金であるかはともかく、銀行はそれをどこかで見つけて、彼に貸すことになっていた。

そう、もしこの取引がまとまれば、エクアドルはその蜃気楼のかけらを有線または無線で肥沃な国々に振り替えて、それとひきかえに食物を受けとることができるだろう。

そして、人びとはその食物をガツガツ、ムシャムシャと食いつくし、あとには排泄物と思い出しか残らなくなる。そのとき、小さなエクアドルはどうすればよいのだろう？

＊マッキントッシュの電話は、五時三十分きっかりにかかってくることになっていた。それにはまだ半時間待たなくてはならないので、彼はフィレ・ミニョンのレアを二人前、付け合わせもそろえてルーム・サービスに注文した。ホテル・エルドラドには高級食料品の在庫がまだたっぷりあった。それは到着予定の〝世紀の大自然クルーズ〟の乗客、とりわけオナシス夫人のために貯蔵されたものなのだ。ちょうどこのとき、兵士たちはホテルの周囲にどの方角にも一ブロックの距離をおいて、有刺鉄線を張りめぐらしている最中だった——食料品を守るために。

おなじことが波止場でも行なわれていた。バイア・デ・ダーウィン号の周囲にも有刺鉄線が張りめぐらされたのだ。この船には、グアヤキルの町のだれもが知っていることだが、一日三回のグルメ料理が、二度とおなじ献立をくりかえさずに、十四日間——しかも、百人の乗客に——提供できるだけの材料が積みこまれていた。この美しい船をながめれば、ちょっと掛け算のできる人間なら、こんな考えをいだいてもふしぎはない——「おれは腹がぺこぺこだし、女房やがきどもも腹がぺこぺこだし、おふくろやおやじも腹がぺこぺこだ——ところが、あそこには四千二百人分のごちそうが積んでありやがる」

セリーナの部屋へ二人前のフィレ・ミニョンを運んだ男も、やはりその掛け算をすませたあとだったし、彼の巨大脳の中には、ホテルの食料置場で食べられるごちそうの目録がちゃんと詰まっていた。彼自身はまだ腹をすかしてはいなかった。ホテルの従業員は、まだ食事をあてがわれていた。彼の一家は、エクアドルの標準からいくと小家族で、身重の妻と、義母と、父親と、彼が引き取ったみなしごの甥とで成り立っていたが、いまのところはそこそこに食べていた。ほかの従業員とおなじように、彼もホテルから食料品を盗んで、家族のみやげにしていたからだ。

この男はヘスース・オルティスだった。つい最近、階下でジェイムズ・ウェイトのお相手をした、あの若いインカ人のバーテンである。支配人の*ジークフリート・フォン・クライストの命令で、オルティスは急にルーム・サービスにまわされ、支配人がバーテンをひきうけることになった。ホテルはとつぜん人手不足におちいっていた。ふたりの正規のルーム・サービス係が、姿を消してしまったからだ。もっとも、そのふたりが姿を消しても、さしつかえはないようなものだった。どのみち、ルーム・サービスの仕事がそう忙しくなるとは思えない。それに、ふたりはどこかで昼寝しているのかもしれない。

そこでオルティスは、調理場の中でこの二枚のステーキのことを自分の巨大脳でじっくり考えたあと、エレベーターに乗り、それからセリーナの部屋をめざして廊下を進んだ。ホテルの従業員たちは、それほど満腹しているわけでもなく、それほどたくさんの食物を盗んでいるわけでもなかった。そのことを彼らはいちおう誇りにしていた。最高の食物は、彼らの

いう〝セニョーラ・ケネディ〟、つまりオナシス夫人のために、まだちゃんと残してあった。〝セニョーラ・ケネディ〟は、彼らからすると、いまなおやってくると思われている、すべての有名な金持ちの権力者たちを指した集合名詞なのだった。

オルティスの脳はとても大きいため、百万長者となった彼とその扶養家族が主演する映画を、頭の中に映写することができた。そして、少年とさして変わらないこの若者は、純真そのものなので、その夢がきっと本当になると信じていた。自分はなにも悪い習慣に染まっていないし、いくらでも働く気があるのだから、すでに百万長者になっている人びとから人生で成功する秘訣を教わりさえすればこっちのものだ、と。

さっき、彼は階下でジェイムズ・ウェイトからいい暮らしをするための助言を聞きだそうとしたが、あまり満足のいく収穫は得られなかった。ウェイトが、滑稽なほど風采は上がらないくせに、クレジット・カードとアメリカの二十ドル札でぎっしりふくらんだ財布を持っていることを、オルティスは畏敬の目で見てとったのだ。

セリーナのドアをノックしながら、オルティスはステーキについてこんなことを考えていた——この部屋の人たちはこれを食べる資格があるし、自分も百万長者になれば、これを食べる資格ができる、と。オルティスは、きわめて頭のいい、進取の気性に富んだ青年だった。十歳のときからグアヤキルのホテルにつとめて、六カ国語に堪能になったが、これはゴクビの知っている言語の半数を超え、ジェイムズ・ウェイトやメアリー・ヘップバーンが知っている言語の六倍、ヒログチ夫妻が知っている言語の三倍、マッキントッシュ父娘が知ってい

る言語の二倍に達していた。彼はまた腕のいいコック兼パン焼き職人でもあり、夜間学校の会計学の講座と商法の講座を卒業していた。

だから、セリーナに部屋の中へ通されたときの彼は、そこで見聞きするすべてのものを好きになりたい心境だった。セリーナの緑の瞳に視力がないことを、彼はすでに聞いていた。聞いていなければ、おそらくごまかされたことだろう。彼女の動きにしろ、外見にしろ、とても盲目とは思えなかった。彼女はすてきに美しかった。自分の巨大脳にそそのかされて、彼はセリーナを一方的に恋してしまった。

●

＊アンドルー・マッキントッシュは天井から床までの一枚ガラスの窓ぎわに立ち、沼沢地とスラム街のむこうに停泊したバイア・デ・ダーウィン号をながめていた。その船は、彼の予想によると、日が暮れるまでに、彼のものか、それともひょっとしてセリーナのものか、それともひょっとしてヒログチ夫妻のものになる予定だった。五時三十分に電話してくるはずの人物、雲の上にあるキートの財界人が作った緊急同盟の親玉は、ゴットフリート・フォン・クライストといって、エクアドル最大の銀行の取締役会長であり、エルドラドの支配人とバイア・デ・ダーウィン号の船長の叔父に当たり、そして、兄のヴィルヘルムと共同で、その船とホテルを所有していた。

いましがたフィレ・ミニョンを届けにきたオルティスをふりかえりながら、＊マッキントト

ッシュは、ゴットフリート・フォン・クライストにスペイン語でどう切りだすべきかを、頭の中でリハーサルしていた――「親愛なる同業者よ、いろいろの吉報を話してくれる前に、まず、きみの名誉にかけて確認してくれんかね。いまわたしは自分のホテルの最上階から、遠くにある自分の船をながめている、と」

●

＊マッキントッシュは素足で、カーキ色のショーツしかはいておらず、前あきのボタンを止めてない上に、下着をつけていないので、大型箱時計の振り子のようなペニスがまる見えだった。

●

そう、話の途中だが、つい驚嘆したくなるのは、この男が生殖ということ、生物学的に大成功をおさめることに、いかに無関心だったかである――これほど性的露出症の傾向があり、この惑星の生命維持装置をできるだけたくさん自分の所有物だと主張したい熱病にうかされていて、なおかつそうなのだ。当時の最も有名な生命維持装置の蓄積者たちは、たいていごくわずかな子供しか生まなかった。もちろん例外はある。しかし、さかんに生殖する人びと、子孫の安楽のためにいちばん多くの所有物を必要とするはずの人びとは、たいていの場合、自分の子供たちを心理学的障害者に仕立てあげていた。彼らの子孫はゾンビであることが多

く、ほかの男女からあっさりと持ち物を巻きあげられた。巻きあげるほうの強欲さときたら、およそ人間という動物がどう転んでも使いきれないほどたくさんのものを残していった先祖たちに比べても、ひけをとらなかった。

＊アンドルー・マッキントッシュは、自分自身の生死さえ気にかけていなかった――スカイダイビング、高性能エンジンを搭載した自動車レース、などなどに対する彼の熱狂ぶりがそれを裏づけていた。

だから、こういうしかない。当時の人間の脳は、生命をどこまで粗末に扱えるかについて、ひどく口数の多い、無責任な発案者になっていたため、未来の世代の利益のために行動することまでが、ちょうど限られた範囲の愛好家がたのしむゲームのように扱われた――たとえば、ポーカーや、ポロや、証券市場や、SF小説の執筆のようなゲームのように。

当時は、人類の生存を確保しようという試みを退屈しごくなものと考える人間が、だんだんふえていた。そんな人間は、＊アンドルー・マッキントッシュひとりではなかった。いうならば、テニス・ボールを打ったり打ちかえしたりするほうが、はるかに面白いのだった。

●

盲導犬のカザックは、セリーナのキングサイズ・ベッドの足もとにある手荷物台のそばにすわっていた。カザックは雌のシェパードだった。いまのカザックは、胴輪（ハーネス）もハンドルもつ

けていないので、気楽にふるまうことができた。肉の匂いにそそのかされたカザックの小さな脳は、自分に命じて大きな茶色の目で切望をこめてオルティスを見上げさせ、尻尾をふらせていた。

当時の犬は、いろいろの匂いを嗅ぎわけることにかけては、人間よりもはるかにすぐれていた。その後、自然選択に関するダーウィンの法則のおかげで、現人類はカザックとおなじぐらい鋭敏な嗅覚を持つことになった。しかも、現人類はひとつの点で犬を凌ぐことになった。水中でも物の匂いがわかるのだ。

犬は、百万年もの学習期間があったというのに、いまなお水にもぐることさえできない。いまもむかしとおなじように、のらくらしている。犬はまだ魚をとることができない。もっとも、その期間を通じて、動物界ぜんたいが、生存技術の改善という面では驚くばかりに気乗り薄だったのだ。人類を唯一の例外として。

16

*アンドルー・マッキントッシュが、そこでヘスース・オルティスにいったことは、無礼きわまりない上に、全エクアドルにひろがった飢餓の苦しみを考えれば危険きわまりない発言であり、そこからすると彼の巨大脳がなにかのひどい重病にかかっているとしか思えなかった——もし、つぎに起こることを気にかけるのが、精神の健康のしるしであるとすればだ。しかも、彼がこの人好きのする、人のいい給仕に与えたとほうもない屈辱は、意図的なものではなかった。

*マッキントッシュは中背で箱に似た体形をした男で、その頭は大きな箱の上にもうひとつの箱を重ねたように見え、胴体には非常に太い手足がついていた。彼は、メアリー・ヘップバーンの夫のロイが生前そうであったように、精力的で有能な野外スポーツ愛好家だが、ロイとはちがって、恐ろしい危険をおかすことがなによりも好きだった。*マッキントッシュの歯はとても大きく、まっ白く、完璧なので、それをたっぷり見せつけられたオルティスは、ついグランド・ピアノの鍵盤を連想してしまった。

*マッキントッシュは彼にスペイン語でこういった。「ステーキの蓋をとって、犬が食え

るようにふたつとも床の上へおけ。おいたら、とっとと出てうせろ」

●

歯といえば——サンタ・ロサリア島にも、ガラパゴス諸島のどの人間定住地にも、歯医者がいたためしはない。百万年前の時代でも、歯医者がいなければそうなっていたにちがいないが、島の典型的な住民は、三十歳にならないうちに男女ともすっかり歯が抜けおちるばかりか、それ以前にも頭の割れそうな歯痛にたびたびおそわれる。しかも、これがたんなる虚栄心への打撃だけにとどまらないのはたしかだ。いまでは、生きた歯ぐきに生えた歯だけが、人間の唯一の道具なのだから。

いや、まったくの話。歯をぬきにすると、現人類はなんの道具も持っていない。

●

メアリー・ヘップバーンと船長は、サンタ・ロサリア島に到着したとき、すでに三十歳をずいぶん上まわっていたが、しごく丈夫な歯を持っていた。これは定期的に歯医者へかよって、虫の食った部分を削ったり、膿をとり除いたり、などなどをしてもらったおかげである。しかし、ふたりとも、死ぬころには歯が一本もなくなっていた。セリーナ・マッキントッシュは、ヒサコ・ヒログチといっしょに自殺したときもまだ若かったので、まだたくさんの歯が残っていたが、それでも全部がそろっているわけではなかった。ヒサコはそのとき、すで

に歯が一本もなくなっていた。
もし、わたしが百万年前の人間の肉体を、まるでだれかが市場に出そうとしている機械を批評するような調子で批評するとしたら、おもにふたつの点を指摘するだろう。そのひとつは、すでにこの物語の中でくりかえしたように——「脳が大きすぎて、実用的ではない」ことだ。もうひとつは、こういう指摘になるだろう——「人間の歯はいつも故障がちだ。たいていの場合、とても一生はもたない。進化におけるどんな事件の連鎖のおかげで、われわれは口の中いっぱいの腐りやすい陶器を与えられたのか?」
もしこういえるなら、どんなにいいだろう。あれほどの短期間に、あれほどたくさんの恩恵を人間に与えてくれた自然選択の法則は、歯の問題についてもちゃんと手を打ってくれた、と。ある意味ではたしかにそうなのだが、その解決法は過激だった。自然選択の法則は、人間の歯をもっと長持ちするようにはしてくれなかった。逆に、人間の平均寿命を約三十年切りつめたのだ。

●

では、グアヤキルに、そして*アンドルー・マッキントッシュがヘスース・オルティスにフィレ・ミニョンを床の上におけと命じた場面にもどろう。
「あの、なんとおっしゃいましたか?」とオルティスは英語でききかえした。
「その皿をふたつとも犬の前におけ」と*マッキントッシュはいった。

そこでオルティスはそうしたが、彼の巨大脳は完全に混乱して、自分自身と、人間性と、過去と未来と、宇宙の性質に関するオルティスの意見を根本から改訂しはじめた。

犬の前に皿をおいたオルティスがまだ背すじをのばさないうちに、＊マッキントッシュはふたたびこういった。「とっとと出てうせろ」

●

いまでさえ、それから百万年を経たいまでさえ、こうした人間の無作法を書きしるすだけで、心が痛む。

百万年後のいまでさえ、人類に代わって謝罪したい気分になる。わたしにいえるのはそれだけだ。

●

もしセリーナが盲目についての造物主の実験だとすれば、彼女の父親は冷酷非情についての造物主の実験だった。そう、ヘスース・オルティスは金持ちへの憧れについての造物主の実験であり、わたしは飽くことを知らぬのぞき趣味についての造物主の実験であり、わたしの父は冷笑癖についての造物主の実験であり、わたしの母は楽天主義についての造物主の実験であり、バイア・デ・ダーウィン号の船長は根拠のない自信についての造物主の実験であり、ジェイムズ・ウェイトは無目的な強欲についての造物主の実験であり、ヒサコ・ヒログ

チは抑鬱についての造物主の実験であり、アキコはにこ毛についての造物主の実験だった。その他いろいろ。

ここで、『末たのもしい怪物時代』という、父の長篇小説が思いだされる。この小説に出てくる惑星では、類人生物たちが、最後の最後まで、いちばん真剣な生存の問題をなおざりにしてきた。その結果、酸性雨ですべての森が枯れ、すべての湖が汚染され、産業廃棄物ですべての地下水が飲用に適さなくなり、などなどの事態を迎えたとき、類人種族は自分たちが奇怪な子供たちの親になっていることに気づく。翼や枝角やひれがついていたり、百もの目があったり、ひとつも目がなかったり、ばかでっかい脳があったり、脳がなかったり、その他いろいろ。これらは、ひょっとするとこの類人種族よりもりっぱな惑星住民になれるかもしれない生物についての造物主の実験なのだ。その大半は死ぬか、それとも銃で撃たれたりなにかして殺されるが、残った少数のものはなかなか末たのもしいところを見せる。そして、近親婚で自分に似た子供たちをもうける。

百万年前、わたし自身が生きていた時代を、ここで〝末たのもしい怪物時代〟と名づけたいと思う。ただし、その時代の怪物の大部分は、奇怪な体型というよりも奇怪な性格を持っていた。現在では、体型の面でも性格の面でも、そうした実験はまったく行なわれていない。

●

当時の巨大脳は、残酷という以外に目的のない残酷な仕打ちができるだけではなかった。

下等動物にはまったく感じられないさまざまな苦痛を感じることもできた。ヘスース・オルティスがエレベーターでロビーへ下りる途中に感じた痛み、＊マッキントッシュの言葉で胸をえぐられた痛みは、地球上のほかのどんな動物にもわからない痛みだった。このさき生きていく力が自分に残されているかどうかにも、彼は確信が持てなくなっていた。
おまけに、彼の脳はひどく複雑にできているので、ほかの下等動物が逆立ちしても見られないようなさまざまの映像を、頭蓋の中で見ることができた。それはすべて架空のものであり、すべてが純然たる人間の意見の問題だった――ちょうど＊アンドルー・マッキントッシュが、電話機から適当な言葉が伝わりしだい、即座にマンハッタンからエクアドルへ振り替えようとしている五千万ドルのように。オルティスはセニョーラ・ケネディ、すなわちジャクリーン・ケネディ・オナシスの映像を見たが、それは彼が前に何度も見た聖母マリアの像と見分けがつかなかった。オルティスはカトリック教徒だった。エクアドルではだれもがカトリック教徒だった。フォン・クライスト一族もみんなカトリック教徒だった。エクアドルの熱帯雨林に住む食人種、あの神出鬼没のカンカ・ボノ族もカトリック教徒だった。
このセニョーラ・ケネディは美しく悲しく汚れなく親切で、しかもできないことはなにひとつない。オルティスの頭の中の彼女は、一団の天使をしたがえており、その天使たちも、やはり〝世紀の大自然クルーズ〟に参加する予定で、その中にはすでにホテルにいる六人の客も含まれている。オルティスはその一団のだれからも徳行しか期待しておらず、そして飢餓がはじまるまで大半のエクアドル人がそう思っていたように、その一団のエクアドル訪問

はこの国の歴史に残る輝かしい瞬間であり、およそ考えられるかぎりの贅沢が気前よく国民の上にふりまかれるだろう、と思っていた。
ところがいま、そのすばらしい訪問者であるはずのひとり、*アンドルー・マッキントッシュの正体が、オルティスの頭の中に映像としてあるほかのすべての天使ばかりか、セニョーラ・ケネディその人までを汚染してしまったのだ。
こうして、その頭から肩までの肖像は、吸血鬼のように牙を生やし、顔の皮膚がぺろりと剝げ落ち、頭髪だけがあとに残った。いまやそれは小さなエクアドルに悪疫と死をもたらすことしか考えない、歯をむきだした髑髏(どくろ)となっていた。

●

不気味なその映像を、オルティスは頭から締めだすことができなかった。もしかしたら、外の猛暑へ出ていけば消えてくれるかもしれないと考えて、*ジークフリート・フォン・クライストがバーから呼びかけるのにも耳をかさず、ロビーを横ぎった。*フォン・クライストは、いったいどうしたのか、どこへ行くつもりか、などなどと彼に問いかけていた。オルティスはこのホテルの最高の従業員、いちばん忠実で、機転がきいて、しかもつねに快活な従業員なので、*フォン・クライストは彼にたよりきっていたのだ。

●

ちなみに、このホテルの支配人が、べつに同性愛者ではなく、精液を顕微鏡で調べても異常はない、などなどの事実にもかかわらず、なぜ子供がなかったかという理由はこうである——彼は五分五分の確率で、ある遺伝性の不治の脳疾患、今日ではだれも知らないハンティントン舞踏病という病気の保因者だった。その当時、ハンティントン舞踏病は、マンダラックスが診断をくだすことのできる、最もよく知られた一千種類の病気のひとつだった。

今日、ハンティントン舞踏病の保因者がひとりもいないのは、カジノの大当たりのような偶然のおかげである。当時、＊ジークフリート・フォン・クライストに保因者の可能性ができたのも、おなじくひょんな偶然のおかげである。彼の父親は、二度の生殖をおこなったあと、中年になってはじめて自分が保因者であることを知ったのだ。

そしてもちろん、それは＊ジークフリートよりも長身で魅力的な兄、バイア・デ・ダーウィン号船長のアドルフが、やはり保因者かもしれないことを意味していた。そこで、まもなく子なしで死ぬことになる＊ジークフリートと、やがて全人類の共通の父親となるアドルフは、百万年前に、見上げた没我的理由から、生物学的に重要な性交にたずさわることを辞退したのだ。

●

＊ジークフリート・フォン・クライストは、ふたりにこうした遺伝子の欠陥があるかもしれないことを秘密にしていた。秘密にしたことで、たしかにふたりはばつの悪い思いをまぬ

かれた——その上、それはふたりの身内ぜんたいを保護することにもなった。もし、ハンティントン舞踏病を子孫に伝える可能性がこの兄弟にあるとわかれば、フォン・クライスト一族は、たとえ保因者の確率がゼロであっても、よい結婚相手を見つけるのがむずかしくなっていたろう。

早くいえば——この病気は、父方の祖母を通じてこの兄弟に伝わったものだった。その祖母は、父方の祖父の二度目の妻で、子供をひとりだけもうけた——この兄弟の父親、エクアドル生まれの彫刻家で建築家でもあるセバスティアン・フォン・クライストを。

その欠陥は、どれほどまずいものだったのか？ そう——にこ毛でおおわれた子供を生むより、はるかにまずいものだった。

事実、マンダラックスが知っているいろいろの恐ろしい病気の中でも、ハンティントン舞踏病は最悪のものだったかもしれない。すくなくとも、すべての驚きの中で、いちばん陰険、いちばん意地悪なものだったとはいえる。この病気は、ふつう、それを受けついだ不運な人間が成人してかなりの年齢になるまで、どんな検査でも探知できないように鳴りをひそめている。たとえば、この兄弟の父親は、五十四歳になるまで、かげりのない、ゆたかな人生を送ってきた——そのあとで、不随意的なダンスがはじまり、現実にはないものが見えるようになった。やがて彼は妻を殺したが、この事実はもみ消された。殺人のあったことは警察に報告されたが、警察はそれを家庭内の事故として処理したのだ。

といううわけで、この兄弟はもうこれで二十五年間にわたって、いつ発狂するかもしれない、いつダンスと幻覚がはじまるかもしれない、と覚悟していた。どちらにもそうなる確率は五分五分にあった。もし、どちらかが発狂すれば、それは彼がまたつぎの世代にその欠陥を伝えることが可能な証拠になる。もし、どちらがが発狂せずに高齢の老人になれば、それは彼が保因者でなく、また、彼の子孫のだれも保因者でない証拠になる。そのときになってはじめて、もし彼が生殖をおこなっていても無事だったということがわかるわけだ。

●

そして、ちょうどコインで表か裏かの勝負をしたように、結果的には船長が保因者ではなく、弟のほうがそうだとわかった。すくなくとも、あわれな＊ジークフリートは、長く苦しまなくてすんだ。彼が発狂したのは、あとほんの数時間しか命がないというとき――一九八六年十一月二十七日、木曜日の午後だった。そのとき、彼はエルドラドのバーの奥で、ジェイムズ・ウェイトを前にすわらせ、ダーウィンの肖像画をうしろにして立っていた。彼はいましがた、いちばん信用のおける従業員、ヘスース・オルティスが、なにかひどくうろたえたようすで表口から出ていくのを見かけたところだった。

その瞬間、＊ジークフリートの巨大脳は、つかのま彼をすーっと発狂状態へひきこんでか

ら、ふたたび正気の世界へ連れもどした。

●

この病気の初期段階、この不運な弟が知ることになる唯一の段階では、患者の魂が自分の脳の危険な状態に気づいて、強い意志力で精神の健康に近いものを維持することができる。そこで、＊ジークフリートはなに食わぬ表情をたもち、平常どおりの業務にもどろうと、ウェイトにこんな質問を浴びせた。

「どういうお仕事をなさっているんですか、フレミングさん？」

＊ジークフリートがこの言葉を口にしたとたん、それは彼の耳に不愉快なひびきとなってもどってきた。まるで空のドラム缶の中に向かってありったけの声でどなっているようだった。物音に対してきわめて敏感になったのだ。

そしてウェイトの返事は、小声であったにもかかわらず、やはり耳をつんざく大音響となった。「以前は技術屋だったよ」とウェイトは答えた。「だが、実をいうと、家内が死んでから、仕事だけでなく、万事に興味がなくなってね。いまのぼくは、死にぞこないとでもいうところかな」

●

そんなわけで、ヘスース・オルティスは、＊アンドルー・マッキントッシュに悪質な侮辱

を受けたあと、ホテルから出ていった。すこし気が落ちつくまで、そのへんを歩きまわるつもりだった。しかし、まもなく彼は、ホテルの周辺一帯が有刺鉄線と兵士たちによって交通遮断線に変えられたことを知った。そうした柵の必要性は明らかだった。鉄条網のむこう側では、あらゆる年齢層の群衆が、むなしい期待であることを知りつつ、ひょっとして食べ物を持ってきてくれたのではないかと、盲導犬のカザックとおなじように切望をこめた目で彼をながめていた。

オルティスは柵の中にとどまり、ホテルのまわりを三周した。一周するたびに、洗濯室の開いた戸口の前を通りすぎた。戸口のすぐ内側には、灰色のスチール製の箱が壁にとりつけられていた。彼はその中になにがあるかを知っていた――ホテル内の電話機を外の世界と結びつけている接続部分だ。百万年前の善良な市民はそういう箱を見ると、こんなことを考えたものだった。「電話会社の組み立てたるものは、いかなる人間もこれを分解するべからず」

そう、ヘスース・オルティスの脳の中の表立った感情も、それと似たりよったりだった。これほどおおぜいの人にとって大切な箱を、自分はけっしてこわしたりしない。だが、当時の脳はおそろしく巨大だったため、その持ち主をも欺くことができた。オルティスの脳は、はじめて洗濯室の前を通りすぎたときから、そこにあるすべての電話線を切り離したいと思ったが、そうしたよくない市民行動に彼の魂がどれほど強く反対するかを知っていた。そこで、オルティスが麻痺状態になるのを防ぐため、彼の脳は、おおよそこんなことをいって彼

を安心させた。「いや、いやー——もちろん、そんなことをするわけはないさ」
第四周目に、脳はオルティスを洗濯室の中へはいらせたが、この行動については、ちゃんと表向きの理由を用意していた。善良な市民である彼は、ホテルのお客、メアリー・ヘップバーンの洗濯物、その前夜にどうやらべつの宇宙へ消失したらしい緑色のパンツ・スーツを探しにきたのだ、と。
そして、それからオルティスは箱をあけ、接続部分をひきちぎった。百万年前の典型的な脳は、数秒のうちにグアヤキル最良の市民を凶暴なテロリストに変えたのだ。

17

マンハッタン島では、ある中年アメリカ人の広告代理業者が、自己の傑作であった〝世紀の大自然クルーズ〟の破壊に思いをめぐらしていた。彼は、クライスラー・ビルの中空の塔頂にあるこの新しいオフィスへ引越してきたばかりだった。以前、そこはあるハープ製造会社のショールームだったが、その会社は破産してしまった——ちょうどイリアム市や、エクアドルや、フィリピンや、トルコなどなどのようにだ。この男の名前はボビー・キングという。

マンハッタン島はグアヤキルとおなじ時間帯に属していたので、彼のひたいに刻まれた深いしわをそのまま真南に延長していけば、その末端は、グアヤキルの*アンドルー・マッキントッシュのひたいに刻まれた、それ以上に深いしわに重なるはずだった。こちらでは、*マッキントッシュが死んだ電話機に大声で生命を吹きこもうとしていた。*マッキントッシュは、ますます横柄さの増す声で、「もしもし！　もしもし！」とさけんでいたが、箱形の頭の真横にくっつけているのが、ガラパゴスの海イグアナの剝製であったとしても、結果はおなじことだったろう。

ボビー・キングは、デスクの上に海イグアナの剝製を飾っていた。そればかりか、それを電話機とまちがえるふりをして、これまでに何人かの客を面白がらせたこともあった。剝製を耳に当てて、「もしもし！　もしもし！」と呼びかけるのだ。

しかし、まちがいなくいまのキングは、そんな冗談をたのしむ気分ではなかった。彼は自分なりのやりかたで、チャールズ・ダーウィンに負けないほど、ガラパゴス諸島を有名にするのに貢献してきた——バイア・デ・ダーウィン号の処女航海はまさしく〝世紀の大自然クルーズ〟になるだろうと、十カ月間の広告宣伝キャンペーンを張り、全世界の人びとに売りこんだのだ。その過程で、彼はガラパゴス諸島の数多い生物を名士に仕立てあげた。コバネウや、アオアシカツオドリや、盗賊グンカンドリや、その他いろいろを。

彼のクライアントは、エクアドルの観光省、エクアトリアアナ航空、それにホテル・エルドラドとバイア・デ・ダーウィン号の所有者、つまり、＊ジークフリートとアドルフ・フォン・クライスト船長の父方の叔父たちだった。ちなみに、ホテルの支配人も、船長も、食うために働く必要はなかった。ふたりとも遺産のおかげでべらぼうに羽振りがよかったが、それでもやはり忙しい目をするほうがよいと考えたのだ。

まだだれからもそういわれたわけではないが、いまのキングには確実だと思えることがあった。自分の仕事がまったくむだ骨であったこと、〝世紀の大自然クルーズ〟がけっして実現しないだろうことだ。

彼のデスクの上にある海イグアナの剝製について——この爬虫類を、彼はツアーのトーテ

ム像に近い動物に仕立てあげた。その絵をバイア・デ・ダーウィン号の船首の両側に描かせ、それをシンボルマークにして、あらゆる広告とあらゆる宣伝文書の頭に飾らせた。
現実の海イグアナは、体長一メートルをゆうに超えることもあり、その姿は中国の竜のように恐ろしい。しかし、実をいうとこの動物は、海草だけを例外にして、そのほかの生物にとってはレバーソーセージのように無害である。現在の海イグアナの生活はつぎのようなものだが、これは百万年前の生活そっくりそのままだ。
この動物は敵というものを持たないので、じっと一ヵ所にすわって、中距離のかなたをなんとなく見つめ、なにもほしがらず、なんの悩みもなく、腹がすくのを待っている。それからよたよたと海へはいり、ゆっくりと、あまり達者でない泳ぎかたで、岸から数メートルの距離まで出ていく。それから潜水艦のように水中へもぐり、しこたま海草を腹につめこむが、このときはまだ消化ができない。この海草を消化するためには、まずそれを加熱しなければならない。
そこで海イグアナはぽこんと水面に浮き上がり、岸へ泳ぎ帰り、それからまた溶岩の上で日なたぼっこをする。こうして自分を蓋のあるシチュー鍋に見立て、日ざしが海草を煮てくれるまで、どんどん体を熱くしていく。その間、前とおなじように中距離のかなたをなんとなく見つめるが、こんどはひとつちがいがある。ときおり、鼻から塩水を吹きだし、その塩水の温度はどんどん上がっていくのだ。
わたしがこの島々で過ごした百年のあいだに、自然選択の法則は、この特殊な生存方式を

改善することも、いや、それをいうなら、改悪することもできなかったらしい。

●

キングは、その時点で六人の人物が実際にグアヤキルに到着し、まだ〝世紀の大自然クルーズ〟に参加するつもりで、ホテル・エルドラドに泊っていることを知っていた。これはちょっとしたショックだった。彼としては、すでにグアヤキルへ行く手配をした乗客も、現地のひどく不穏な状況をニュースで知って旅行をとりやめるだろうと、たかをくっていたのだ。

その六人の名前は、ぜんぶわかっていた。中のひとりはまったく知らない男だった。ウィラード・フレミングというカナダ人である。これが実はジェイムズ・ウェイトなのはいうまでもない。どうしてその男の名前が乗客名簿にまぎれこんだのか、キングには見当もつかなかった。乗客名簿は、メアリー・ヘップバーンと、日本人の獣医夫婦をべつにすると、すべて強力なネームバリューのある顔ぶれと、流行を創りだせる顔ぶれで占められているはずだった。

メアリー・ヘップバーンが現地にきているのに、夫のロイがいないことも、キングにはふしぎだった。ロイが死んだことをまだ知らなかったのである。しかし、有名人ぞろいの乗客名簿の中でまったく無名の存在であるにもかかわらず、ヘップバーン夫妻については、〝世紀の大自然クルーズ〟の申し込み一番乗りという理由から、ある程度のことは知っていた。

ちょうどそのころから、キングは本当の有名人をこの旅行に誘いこめるかどうか、疑いを持ちはじめたのだった。
事実、ヘップバーン夫妻が申し込んだとき、キングはこのふたりをトーク番組や新聞のインタビューなどなどにひっぱりだして、ミニ有名人に仕立てあげようかとも考えた。結局、ふたりには会わずじまいだったが、メアリーに電話までかけた。全国でも最高の失業率を持つ冴えない工業町で、実にありふれた職業についているこの夫婦に、むなしい希望とは知りつつ、なにか興味深い面はないかと望みをつないだのである。夫婦のどちらかに、有名な先祖か親戚がいるかもしれないし、ロイがどこかの戦争の英雄だったかもしれないし、ふたりが富くじで大当たりをとったことがあるかもしれないし、それとも最近なにか不幸な目にあったかもしれない、などなど。
そして、去る一月にキングがメアリーとかわした会話の一部は、こんなふうに進行した――

「えーと――わたしの遠い先祖がダニエル・ブーンでした」とメアリーがいった。「実家の苗字はブーンだし、生まれもケンタッキーなんです」
「すばらしい！」とキングはいった。「あなたはダニエル・ブーンのひい、ひい、ひい孫娘にあたるとか、そういうことですか？」
「それほど濃いつながりじゃないと思いますわ。あんまり興味もなかったから、くわしく調べてみませんけど」

「しかし、実家の苗字はブーンなんですな」
「ええ、でもそれはたんなる偶然の一致ですわ。父方の苗字はブーンですけど、父はダニエル・ブーンの一族じゃありません。ダニエル・ブーンとのつながりがあるのは、母方のほうです」
「もし、あなたのお父さんの苗字がブーンで、しかもケンタッキー人だったとすると、ダニエル・ブーンとなにかのつながりがあったはずだ、そう思いませんか？」
「いいえ、べつに。だって、父の父親はハンガリーから移住した馬の調教師で、ミクローシュ・ゴンボーシュという名前をマイクル・ブーンに変えたんですから」
あなたやご主人がもらった賞か表彰状がなにかありませんかと聞かれて、メアリーは、夫があれだけゲフコ社につくしたからにはたくさんの賞をもらう値打ちはあると思うが、あの会社はトップの管理職にしかそういうものを出さない、と答えた。
「軍隊の勲章とか――そんなものはありませんか」と彼はきいた。
「彼は海軍でしたけど」と彼女は答えた。「戦争には行かなかったんです」
もし、キングが電話したのがその三カ月後で、しかも電話に出たのがロイであったなら、もちろん、太平洋の原爆実験でのロイの悲しい活躍ぶりを、耳にたこができるほど聞かされたことだろう。
「お子さんはおありですか？」とキングはきいた。
「いいえ、ふつうの意味では」とメアリーは答えた。「でも、わたしは生徒のひとりひとり

を自分の子供と思っているし、ロイもボーイスカウト活動に熱心で、自分の隊員のひとりひとりを息子のように思ってますわ」
「ごりっぱな信念ですね。奥さんとお話しできて、とてもたのしかったです。では、おふたりですばらしい旅行を満喫してください」
「ええ、そうするつもりですわ。でも、まだ校長先生に話を切りだす勇気がありませんの。学期の途中で三週間も休みをとるなんて」
「お帰りになってから、生徒たちにいろいろとすてきなみやげ話ができるじゃありませんか。校長先生もよろこんであなたを送りだしますよ」ちなみに、キングは一度もガラパゴス諸島を自分の目で見たことはなかったし、またこれからも見ることはないだろう。メアリー・ヘップバーンとおなじく、彼もそこの映像をいやほど見せられた口だった。
「そうそう――」とメアリーは電話を切りしなにいった。「さっきのおたずねですけど、賞や表彰状や勲章やそんなものがないかと……」
「なにかありましたか?」とキングはきいた。
「わたしはもうじき一種の賞をもらえそうなんです。というか、わたしには賞のように思えるんですけど。でも、まだわたしが知らないことになっているので、お話ししていいかどうか」
「いっさい他言はしません」
「ごく偶然のことからわかったんですが」とメアリーは言葉をつづけた。「今年の最上級生

が卒業記念アルバムをわたしに贈ってくれますの。その献辞の中で、わたしにあるあだ名をたてまつってくれたんですけど、それをたまたま印刷屋で見てしまいました。友だちの代わりに出産通知をとりにいったときにね。彼女、双子を生んだんです――男と女の」
「ほほう！」とキングはいった。
「あのすてきな生徒たちが、わたしにどんなあだ名をつけてくれたかご存じ？」
「いや」
「〝母なる自然の化身〟ですって」

●

そういえば、ガラパゴス諸島には墓というものがない。海がすべての死体を好きなように役立てている。しかし、かりにメアリー・ヘップバーンの墓があったとしたら、ほかのどんな墓碑銘よりもこれ以上にぴったりしたものはないだろう。『母なる自然の化身』――いったい、彼女のどこがそんなに母なる自然に似ていたのか。サンタ・ロサリア島でのまったく絶望的状態の中でも、まだ彼女は人間の赤ん坊を生みだそうとした。なにものをもってしても止められないのは、彼女があらんかぎりの力で生命をどこまでも存続させようとする意欲だった。どこまでも、どこまでも、どこまでも。

18

グアヤキルに到着した六人の不幸な客のひとりがメアリー・ヘップバーンだと聞かされたとき、ボビー・キングは何カ月ぶりかに彼女のことを思いだした。おそらくロイも同行しているのだろうと考えた。このふたりは切っても切れないおしどり夫婦に思えたし、それにホテル・エルドラドの支配人がうっかり彼の名前を落とした可能性もありそうだった。ホテルからのテレタイプ通信は、刻一刻と混乱の度を加えていたからだ。

●

ついでながら、キングはわたしの名前まではとにかく、すくなくともわたしのことを知っていた。

バイア・デ・ダーウィン号の建設中に、工員がひとり死亡したことを。

しかし、迷信深い人間がその船に幽霊がいると思っても困るので、彼はその情報を公表したがらなかった。ちょうどフォン・クライスト一族が、その成員のひとりにハンティントン舞踏病で入院したものがいること、また、そのふたりに五分五分の確率でその病気の保因者

の可能性があることを、世間に知らせたがらなかったのとおなじように。

●

サンタ・ロサリア島での長い同棲生活のあいだに、船長は自分がハンティントン舞踏病の保因者である可能性を、メアリー・ヘップバーンに話したろうか？　船長がその恐ろしい秘密を打ち明けたのは、一行が島に漂着してから十年が経ち、彼女が彼の精液を勝手気ままにもてあそんでいることを発見したときだった。

●

エルドラドの六人の客の中で、キングが面識のあるのはふたりだけだった。＊アンドルー・マッキントッシュと、盲目の娘のセリーナ——それに、もちろん、セリーナの愛犬、カザック。マッキントッシュ父娘を知っているものは、だれでもこの犬を知っていたが、外科手術と訓練のおかげで、カザックには性格がないも同然だった。マッキントッシュ父娘は、キングのクライアントである何軒かの有名レストランの上得意だったし、また、＊マッキントッシュは、犬と娘を連れずに、キングのクライアントの何人かと対談番組に出たこともあった。キングは、セリーナと犬といっしょに、楽屋のモニター・テレビでそれをながめた。そのときの印象からすると、父親のそばにいないときのこの娘は、犬よりもいくらか個性がある程度だった。しかも、彼女の話題は父親のことにかぎられていた。

＊アンドルー・マッキントッシュは、対談番組への出演を実にたのしんでいた。彼が対談番組のゲストとして歓迎されるのは、その放言癖にあった。彼は、もしいくらでも使える金があったら、この人生は面白くてたまらない、と断言してはばからなかった。彼は金持ちでない人びとを哀れみ、軽蔑した。その他いろいろ。

サンタ・ロサリア島での苦しい生活のおかげで、セリーナは来世への青いトンネルをくぐる前に、父親とはっきりちがった性格を発達させることになる。彼女はまた日本語にも堪能になる。巨大脳の時代、身の上話の結末はどっちに転ぶともかぎらなかった。

このわたしがいい見本だ。

●

ロイとメアリー・ヘップバーンにつづいて、〝世紀の大自然クルーズ〟の乗客名簿に加わったのは、マッキントッシュ父娘とヒログチ夫妻だった。それが二月のことである。ヒログチ夫妻は＊マッキントッシュの招待客になる予定だが、偽名を使って旅行する手筈だった。＊ゼンジ・ヒログチが＊マッキントッシュと取引していることを、雇い主たちに感づかれないように。

キングや、ジークフリート・フォン・クライストや、そのほかこのツアーの関係者たちの知るかぎりでは、ヒログチ夫妻はケンザブロー夫妻であり、＊ゼンジは獣医だった。

ということは、エルドラドの客のちょうど半数が、触れ込みどおりの人間ではなかったこ

とを意味する。このようにさかんな巨大脳特有の欺瞞に、ささやかなおまけがもうひとつ加わっていた。メアリー・ヘップバーンの払い下げ戦闘服の左の胸ポケットには、以前の所有者の苗字がまだ〝カプラン〟と縫いとられたままだった。やがて彼女とジェイムズ・ウェイトがついにカクテル・ラウンジで顔を合わせたとき、彼は偽名を名乗り、彼女は本名を名乗ったのに、彼のほうは委細かまわず彼女を〝カプランさん〟と呼びつづけ、そしてユダヤ人をしきりにほめちぎったりした。その他いろいろ。

のちにふたりはバイア・デ・ダーウィン号のサンデッキで、船長の媒酌のもとに結婚して、彼女はウィラード・フレミングの妻となり、彼はメアリー・カプランの夫となる。

こうした混乱は今日では起こりえない。というのは、もうだれにも名前がないからだ——それに職業もなく、語るにたる身の上話もない。もし、だれかが評判に近いものを持てるとしたら、それは体臭だけであり、これは生まれてから死ぬまで変えようがない。だれもがつねに素顔で生きており、それでけりがつく。自然選択の法則は、この点で人間をこの上なく正直にした。男女を問わず、だれもが見かけどおりの人間なのだ。

●

＊アンドルー・マッキントッシュがバイア・デ・ダーウィン号の処女航海に三つの船室を予約したとき、ボビー・キングはいぶかしく思った。＊マッキントッシュが持っている自家用ヨットのオムー号は、この船に近い大きさなので、そうしようと思えば、自分でガラパゴ

ス諸島へ行けるはずだ——なにもほかの乗客と鼻をつきあわせたり、〝世紀の大自然クルーズ〟が押しつけるやかましい規則にしたがう必要はない。たとえば、このツアーの乗客は、好きなときに島へ上陸するわけにはいかないし、そこで好きなようにふるまうこともできない。いつもガイドの付き添いと監督を受けなくてはならない。ガイドはすべてサンタ・クルス島のダーウィン研究所の科学者から訓練を受け、自然科学の分野の学士号を持っている。

そこで、ある晩レストランとクラブのはしごをやっていたキングは、＊マッキントッシュとその娘と犬が、〈エレインズ〉という有名人の溜まり場で夕食をとっているのを見かけ、そのテーブルに足を運んで、彼らがこんどのツアーに参加してくれたことをたいへん光栄に思う、とあいさつした。そして、できれば参加の理由を聞かせてもらえないかとたのんだ——そうすれば、その理由を餌に、ほかの有名人をこの旅行に誘えるかもしれない。

マッキントッシュ父娘にあいさつしたあとで、キングは同席しているほかのふたりがだれであるかに気づいた。彼はそのふたりと前に話をしたことがあったから、こんどもそうした。片方は、この惑星で最も尊敬されている女性、ジャクリーン・ブーヴィエ・ケネディ・オナシス夫人であり、その夜の彼女の連れは、大舞踊家のルドルフ・ヌレエフだった。

ちなみに、ヌレエフはもとソビエト連邦の国民で、政治的亡命者に対する保護をイギリスに求めたのだった。その当時はわたしもまだ生きていたし、そして政治的亡命者に対する保護をスウェーデンに求めたアメリカ国民でもあった。

そう、そしてどちらもダンスが好きだった。

キングは相手が外洋航行ヨットを持っていることを思いだす危険をおかして、バイア・デ・ダーウィン号のどこに魅力を感じたのかと*マッキントッシュにたずねた。知能が高く、本もよく読んでいる*マッキントッシュは、わがまま勝手で無知な人びとが野放しでガラパゴス諸島へ上陸して、どれほどの損害をもたらしたかを、滔々とまくしたてた。その内容は、彼が毎月一ページあまさず読む《ナショナル・ジオグラフィック》誌の記事の受け売りだった。その記事の論点によると、エクアドルが全世界連合艦隊ほどの規模の海軍を持たないかぎり、人びとがこの島々へ上陸して好きほうだいをやらかすのを防ぐことはむりだから、このこわれやすい生息場所を保存するためには、ひとりひとりの人間に自制心を植えつけるしかないのだ。「この惑星のいかに善良な市民も」と記事は論じていた。「充分に訓練されたガイドの付き添いなしに上陸すべきではない」

●　●

メアリー・ヘップバーンと、船長と、ヒサコ・ヒログチと、セリーナ・マッキントッシュそのほかの一行がサンタ・ロサリア島に漂着したときは、訓練されたガイドがひとりも付き添っていなかった。そこで、最初の二、三年というものは、このこわれやすい生息場所に、とてつもない大混乱がまきおこることになる。

そして、あやうく大事にいたる寸前に一行は気づく——自分たちが破壊しているのはおのれの生息場所であること、自分たちがたんなる訪問者ではないことに。

〈エレインズ〉のレストランで、＊マッキントッシュは、偽装されたイグアナの巣を踏みにじる人間のブーツや、カツオドリの卵を盗む心ない人間の手、などなどの物語をして、呪縛にかかった聞き手たちを怒り悲しませた。しかし、彼の物語った野蛮行為の中でいちばん聴き手の心を動かしたのは、これも《ナショナル・ジオグラフィック》誌の受け売りだが、オットセイの仔の写真をとろうとして、まるで人間の赤ん坊のように抱きあげる人たちのことだった。あとで、その仔が母親に返されても、オットセイの母親はもう乳をやろうとはしない。その仔の体臭が変わってしまったからだ。

「そこで、優しい自然愛好家の胸に抱かれる光栄に浴した、そのかわいいオットセイの仔はどうなるか？」と＊マッキントッシュはたずねた。「餓死するんだよ——たった一枚の写真のためにね」

したがって、ボビー・キングの質問に対する彼の答はこうだった——自分が模範を示すことによって、ほかの人びとにも〝世紀の大自然クルーズ〟に参加してもらいたいと思う。

わたしから見ると、この男が熱心な自然保護論者として自分を売りこんだのはお笑い草であるとしか思えない。彼が取締役になっている会社や、彼が大株主になっている会社の大多数は、悪名高い水や土や大気の汚染者であったからだ。しかし、なにかを大切にするという能力を欠いてこの世に生まれてきた*マッキントッシュにとって、それはお笑い草ではなかった。そこで、この欠陥を隠すために、彼は名優となり、すべてのものを心から大切に思っているふりをして、自分自身をすら欺いたのだ。

それより前、おなじ程度の確信をもって、彼は自分の娘に、なぜオムー号ではなくバイア・デ・ダーウィン号に乗ってガラパゴス諸島へ行くかという理由を話したことがあった。オムー号にヒログチ夫妻を乗せると、マッキントッシュ父娘以外に話し相手がいないので、ふたりは監禁された気分になるかもしれない。ひょっとすると、そうした状況で夫妻が恐慌をきたし、*ゼンジが交渉をつづけることを断わって、妻といっしょに飛行機で帰国したいから、もよりの港へおろしてくれといいだすかもしれない。

百万年前に権力の座についていたおおぜいの病的人格者と同様、*マッキントッシュもたいていのことを、ほとんどなにも感じないで、衝動的にやってのけた。その行動の論理的な説明は、ゆっくり創作されて、いつもあとでつけたされるのだった。

いまをさかのぼる巨大脳の時代、こうした種類の行動がその歴史の要約にほかならなかったのは、わたしが光栄にも参加した戦争だった。それをベトナム戦争という。

19

大多数の病的人格者とおなじように、＊アンドルー・マッキントッシュも自分の話が真実であるかどうかをあまり気にかけなかった――そのために、彼の話はたいそう説得力があった。こうして彼がオナシス未亡人とルドルフ・ヌレエフを深く感動させたため、ふたりはボビー・キングに〝世紀の大自然クルーズ〟のもっと詳しい情報をせがみ、キングはそれを翌日の朝、特別のメッセンジャーに届けさせた。

運よく、ガラパゴス諸島のアオアシカツオドリの生活を扱ったドキュメンタリーがその晩の教育テレビ番組で放送予定だったので、キングはそれを見てほしいというメモを同封した。のちに、この鳥は、サンタ・ロサリア島の小さな人間植民地の存続に不可欠な役割を果たすことになる。もし、この鳥がこれほどまぬけでなく、人間の危険性についてこれほど忘れっぽくなければ、初代の定住者たちは九分九厘まで確実に餓死していただろう。

●

この番組の見せ場は、イリアム高校でメアリー・ヘップバーンが毎年くりかえしていたこ

の島々に関する授業の見せ場とおなじく、アオアシカツオドリの求愛ダンスを撮影した場面だった。そのダンスはこんなふうである——

二羽のかなり大きい海鳥が溶岩の上に立っている。大きさはコバネウぐらい、やはりくねくね動く長い首と、やすのようなくちばしがある。しかし、この鳥は飛行を断念したわけではないので、大きな力強い翼を持っている。両脚とその先の水かきは、ゴムのようにあざやかな青色。この鳥は空から急降下して魚をつかまえる。

魚！　魚！　魚！

片方は雄、もう片方は雌だが、どちらもおなじように見える。どちらもそれぞれの用事にかまけて、おたがい同士にまったく関心がないように見える——もっとも、この鳥は虫も植物の種も食べないので、溶岩の上ではたいしてすることがない。また、巣を作る材料を探すわけでもない。その時期には、まだ早すぎる。

雄はそれまで忙しそうにやっていたことをやめる。といっても、とりたててなにかをしていたわけではない。雄は雌がそこにいるのを目にとめる。雄は雌から目をそらし、またそちらに目をもどす。この間、じっと立ったまま、まったく無言。二羽ともちゃんと声は出るが、このダンスのあいだは、どちらもまったく無言だ。

雌はあっちこっちをながめているが、そのうちにふと雄と目が合う。二羽の距離は、五メートルからそれ以上もある。

メアリーが高校でこのダンスの映画を見せるときには、いつもこの場面で、まるで雌を代

弁するようにこういうのだった――「いったい、この風来坊はわたしにどうしろというのかしら？　まったくもう！　へんなやつ！」
雄はあざやかな青色をした片足を上げる。それを空中で扇のようにひろげる。
メアリー・ヘップバーンは、ふたたび雌の身になりかわって、こういうのだった。「いったいあれはどういうこと？　世界の七不思議のつもり？　あれがこの島でたったひとつの青足だとでも思ってるの？」
雄は上げた足をおろし、もう片足を上げ、それと同時に一歩だけ雌に近づく。それから雌の目をじっと見つめ、また最初の足を見せ、つぎにもう片足を見せる。
メアリーは雌を代弁してこういう。「わたし、もうここから出ていくわ」しかし、雌はそこから出ていかない。溶岩の上にかわづけになったようだ。一方、雄は雌に両足をかわるがわる見せながら、着実に近づいてくる。
と、そこで雌は自分の青い片足を上げ、メアリーがいう。「そんなに自分の足がきれいだと思ってるの？　じゃ、もっときれいな足を見せたげようか。そうよ、こんな足がもう一本あるのよ」
雌は片足を下ろし、もう片足を上げ、それと同時に雄へ一歩近づく。
メアリーはここでいつも口をつぐむ。もう、擬人的なジョークは切り上げだ。これからあとは鳥たちにショーをまかせればいい。どちらの鳥も、いずれ劣らぬ厳粛かつ堂々たる態度でおたがいに近づいて、とうとう胸と胸、爪先と爪先が接しあう。

イリアム高校の生徒たちは、鳥たちの交尾が見られるとは期待していなかった。この映画は、毎年五月の初めに、メアリーが春の到来を祝う恒例の教育行事として講堂で映写したためにすっかり有名になり、鳥たちの交尾の場面がカットされているのは周知の事実になったからだ。

だが、それにもかかわらず、この鳥たちが本番撮影でやっていることは、こよなくエロチックだった。すでに胸と胸、爪先と爪先を接しあった二羽の鳥は、しなやかな首を旗竿のようにまっすぐ上に伸ばす。それから頭をできるだけのけぞらせる。そして、長い喉とあごの下をくっつけあう。二羽の鳥がそこに作りあげるのは、ひとつの塔――四本の青い足をいしずえにして天を指している、ひとつの構築物だ。

これこそ荘厳きわまりない結婚である。

そこには証人もいなければ、なんとすてきなカップルだろう、なんとみごとなダンスだろう、と祝ってくれる仲間のカツオドリもいない。メアリー・ヘップバーンが高校で映写した映画は、ボビー・キングがオナシス夫人とルドルフ・ヌレエフに見せたがった教育テレビ番組のそれとおなじだったが、唯一の証人は、巨大脳を持った撮影班の人間だけだった。

この映画の題名は『スカイ・ポインティング』といい、これは二羽の鳥のくちばしが重力の引きとは正反対の方向を指す瞬間に対して、巨大脳を持つ科学者たちが与えた名称とおなじだった。

オナシス夫人はこの映画にすっかり感動したため、さっそくその翌日、秘書に命じてボビ

ー・キングにこんな問い合わせの電話を入れさせた――〝世紀の大自然クルーズ〟に出るバイア・デ・ダーウィン号のメインデッキに、外側の特別室をふたつ予約したいのだが、まだ間に合うだろうか、と。

20

メアリー・ヘップバーンは、この求愛ダンスについて短い詩かレポートを書いてくる生徒がいると、余分に点をやることにしていた。生徒たちの約半数がなにかを書いてきたが、そのまた約半数は、このダンスをこの動物が神をあがめている証拠と考えていた。残りの回答は千差万別だった。ある生徒が書いてきた詩は、メアリーにとって死ぬまで忘れられないものとなり、のちにマンダラックスにも教えこんだ。その生徒はノーブル・クラゲットという名で、のちにベトナム戦争で戦死した――しかし、彼の詩はマンダラックスの内部におさまって、古今東西の最高の文筆家たちが残した名句の仲間入りを果たすことになる。その詩はこういうものだった――

もちろんきみが大好き、
だから子供をつくろう。
その子もきっとそっくり
親とおなじことをいう。

「もちろんきみが大好き、
だから子供をつくろう。
その子もきっとそっくり
親とおなじことをいう。
「もちろんきみが大好き、
だから子供をつくろう。
その子もきっとそっくり
親とおなじことをいう――」
以下このくりかえし。

ノーブル・クラゲット（一九四七―一九六六）

一部の生徒が、ほかのガラパゴスの生物のことを書いてもいいかとたずねると、メアリーは優秀な教師なので、もちろん「いいわよ」と答えた。いちばん人気のある代役は、カツオドリを悩ませる盗賊、あのオオグンカンドリだった。この鳥の世界のジェイムズ・ウェイトは、カツオドリが捕った魚を食べて生き、自分の巣の材料もカツオドリの作った巣から失敬する。一部の生徒はこの習性を面白がったが、その生徒たちはいつもたいてい男だった。
もうひとつ、オオグンカンドリの雄のユニークな身体的特徴も、自分の性器の勃起能力に関心のある未成熟な人間男性の関心をひかずにはおかなかった。オオグンカンドリの雄は、

交尾期がくると、のどの根元にあるあざやかな赤い風船をふくらませて、雌の注意をひこうとする。交尾期の典型的な集団営巣地は、空から見ると、まるで人間の子供たちの大パーティーで、どの子供も赤い風船をもらったようだ。その島は、事実、オオグンカンドリの雄で足の踏み場もなくなる。彼らは頭をのけぞらせ、夫としての資格証明を肺の力で破裂せんばかりにふくらませる――一方、頭上では雌たちが輪を描いて飛びまわる。

一羽また一羽と、赤い風船のどれかを選びおわった雌たちは、空から降りてくる。

●

メアリー・ヘップバーンがオオグンカンドリの映画を映写しおわったあと、教室のブラインドが巻きあげられ、もう一度明かりがつくと、生徒のだれかが、これもまたたいていは男性だが、あるときは冷静に、あるときはコメディアン気どりで、あるときは女性を憎み恐れながら、にがにがしげに、かならずこんな質問をするならわしだった――「雌はいつもいちばん大きいのを選ぶんですか?」

メアリーはこれに対して、マンダラックスが知っている引用句とおなじように、毎回一語一句にいたるまで不変の答を用意していた。

「それに答えるためには、オオグンカンドリの雌にインタビューしなくてはなりませんが、わたしの知るかぎり、だれもまだそれをやった人はいません。でも、一生をかけてこの島の研究をした人たちはいます。その意見によると、雌たちは、いちばん巣を作るのに適当な場

所をとった赤い風船を選ぶようです。生存という点から見てすじが通っていることは、よくわかりますね。
さて、そこで話はたいへん奥深い謎にもどってきます。アオアシカツオドリの求愛舞踏は、アオアシカツオドリの生存の要素、つまり、巣作りにも魚捕りにも、まったくなんの関係もないようです。では、いったいなんに関係があるのか？ それをあえて〝宗教〟と呼んでいいのか？ それとも、そうする勇気がなければ、すくなくともそれを〝芸術〟と呼んでいいのか？
みなさんの感想をどうぞ」

●

オナシス夫人がとつぜんじかに自分の目で見たくなったアオアシカツオドリの求愛舞踏は、この百万年のあいだにみじんも変わっていない。この鳥たちは、敵を怖がることもまなばなかった。また、飛行を断念して潜水艦になろうという傾向も見せなかった。
アオアシカツオドリの求愛ダンスの意味について——この鳥たちはあざやかな青色の足をした巨大分子であり、この問題にはえり好みができないのだ。彼らの天性からして、そんなダンスをするしかないのである。
そのむかし、人間は種々さまざまなダンスができるか、あるいはまったくダンスをしないかの巨大分子で——どちらになるかはめいめいの勝手だった。わたしの母は、ワルツ、タン

ゴ、ルンバ、チャールストン、リンディ、ジルバ、ワトゥーシ、ツイストを踊ることができた。父は特権に甘えて、どんなダンスも踊ろうとしなかった。

21

オナシス夫人が〝世紀の大自然クルーズ〟に参加したいといったとたんに、だれもかれもがそれにならったので、喫水線下のちっぽけな船室をあてがわれたロイとメアリーのヘップバーン夫妻は、ほとんど完全に忘れられてしまった。三月末にキングは乗客名簿を発表することができたが、それにはオナシス夫人を筆頭に、魅力の点で彼女にひけをとらない名前がきら星のように並んでいた――ヘンリー・キッシンジャー博士、ミック・ジャガー、パロマ・ピカソ、ウィリアム・F・バックリー・ジュニア、そしてもちろん*アンドルー・マッキントッシュ、それにルドルフ・ヌレエフ、ウォルター・クロンカイト、などなど。ゼンジ・ケンザブローという偽名で予約した*ゼンジ・ヒログチは、ほかの乗客たちと曲がりなりにも釣り合いをとらせるため、発表の中では、動物医学の世界的権威ということになっていた。

ふたつの名前がこの名簿から故意に省かれたのは、いったいこのふたりは何者だという質問が出ないようにするための、苦肉の策だった。ふたりとも、実は無名の人物だったからだ。そのふたりというのは、喫水線下のちっぽけな船室をあてがわれた、ロイとメアリーのヘッ

プバーン夫妻だった。

しかし、そのときから、この小さな尻尾をちょんぎられた名簿が公式名簿となった。だから、エクアトリアナ航空が、名簿に記載された全員に電報を打ち、バイア・デ・ダーウィン号の出航前日にたまたまニューヨーク市におられるお客さまのために、夜間の特別便を仕立てます、と知らせたときも、メアリー・ヘップバーンはこの通知を受けとらなかった。その通知によると、市内のどこにいても、リムジンが迎えにきて空港へ送ってくれる予定だった。機内の客席はどれもベッドに変わるし、ツーリスト・クラスの座席は取りはらわれてキャバレーのテーブルとダンスフロアに改造され、そこでエクアドルの民族バレエ団が、インディオ各部族の固有の踊りを上演する予定で、神出鬼没のカンカ・ボノ族の火踊りもそこに含まれている。機内の食事は、フランス最高のレストランにふさわしいワインをそろえた豪華版である。このすべてが無料提供なのだが、ロイとメアリーのヘップバーン夫妻は、そのことを知らずじまいだった。

そう、そしてみんなが六月に受けとった手紙も、このふたりには届かなかった――それはエクアドル大統領、ホセ・セプルベーダ・デ・ラ・マドリード博士からのもので、まずホテル・エルドラドで一行に敬意を表した正式朝食会ののち、花に飾られた馬車のパレードに参加してほしいという招待状だった――パレードはホテルから桟橋までつづけられ、そこで乗船するという段取りである。

また、メアリーは、キングが十一月一日にみんなに打った電報も受けとっていなかった。

その電報は、世界経済の水平線上にある嵐雲が、たしかに気にかかるものであることを認めていた。しかし、エクアドル経済は依然として安定しているので、バイア・デ・ダーウィン号が予定どおり出航できない理由はどこにもない、と請けあっていた。キングが知っていて、しかもそこに書かれていないのは、すでに日本と合衆国を除いたあらゆる国からのキャンセルがあいつぎ、乗客名簿がおよそ半分に削られたという事実だった。そんなわけで、まだ旅行するつもりでいる乗客のほぼ全員が、ニューヨーク市からのその特別便に乗り合わせることになっていた。

ところで、いましがたキングの秘書は彼のオフィスへこんな知らせを持ちこんだのだ——ラジオのニュースで、国務省がアメリカ国民に、ここ当分はエクアドルへ旅行しないようにと警告していますす。

キングがこれまでの自分の最高の仕事と自負していた計画も、これでおじゃんだった。まったく造船学の素養なしに、キングはその船の魅力を何倍にもしてのけたが、それはアントニオ・ホセ・デ・スクレ号という名を考えていた船主たちを説得して、バイア・デ・ダーウィン号という名に変えさせたからだった。あの島々まで往復するありふれた二週間の旅を、キングは世紀の大自然クルーズに変身させた。どうしてそんな奇跡ができたのか？　それを〝世紀の大自然クルーズ〟という名でしか呼ばなかったからだ。

もし、いまキングが確実視しはじめたように、バイア・デ・ダーウィン号が翌日正午に〝世紀の大自然クルーズ〟へ出航しなければ、ある種の副作用が彼のキャンペーンにおよぶ

のは避けられない。彼は宣伝パンフレットで人びとに自然の歴史を教えこみ、オナシス夫人や、キッシンジャー博士や、ミック・ジャガーなどが見るだろう驚異を書きたてた。彼はふたりの有名人を創りだした――キングがこの処女航海の調理室主任として雇ったのちに、〝フランス最高のシェフ〟と発表したロベール・ペパンと、バイア・デ・ダーウィン号の船長、アドルフ・フォン・クライストである。船長は、大きな鼻と、口に出せない個人的悲劇を世界から隠しているようなムードを武器に、テレビの対談番組で第一級のコメディアンぶりを発揮していた。

キングのファイルには、ジョニー・カーソンが司会する《ザ・トゥナイト・ショー》に船長が出演したときの対談の写しがあった。船長は、この番組でも、ほかのどのテレビ番組でも、エクアドル海軍予備役提督であることを表わす、まばゆいばかりの金色と白の軍服を着こんでいた。対談はこんなふうに運んだ――

●

カーソン　フォン・クライストという名前は、あんまり南米風じゃないですな。

船長　インカの名前だ――インカではいちばんありふれた苗字だよ。ちょうど英語の〝スミス〟や〝ジョーンズ〟に相当する。スペインの探検家たちの手記をまとめた本があるが、それによると彼らがインカ帝国を破壊したのは、あまりにも異端的だという理由で――

カーソン　ははあ？

船長　きみもあの本は読んだろうね。
カーソン　座右の書ですよ――ヘディ・ラマーの自伝『春の調べと私』と並んで。
船長　それなら知っているだろう。彼らが異端の罪で火刑にしたインディオのうち、三人にひとりはフォン・クライストという苗字だった。
カーソン　ところで、エクアドル海軍の規模はどれぐらいですか？
船長　潜水艦四隻。つねに四隻とも潜航中だ。一度も上がってこない。
カーソン　一度も上がってこない？
船長　何年も何年もな。
カーソン　しかし、無線連絡はあるんでしょう？
船長　いや。無線封止をしたままだ。これは乗組員の発案でね。こちらは喜んで報告を聞きたいんだが、彼らのほうが無線封止の継続を望んでいる。
カーソン　どうしてそんなに長く潜航しているんですか？
船長　それは本人たちに聞いてもらうしかないな。エクアドルは民主国だからね。海軍軍人のわれわれでさえ、なにをしてよいか、わるいかについては、きわめて大きな自由裁量の余地を与えられている。
カーソン　一部の人たちは、ヒトラーがいまも生きている――しかも南米に住んでいる、と考えているようですが。その可能性はあると思いますか？
船長　わたしの知るかぎり、エクアドルにも、喜んでヒトラーを晩餐に招きたい人間がいる

のは事実だ。

カーソン　ナチのシンパですか。

船長　そのへんはよく知らんな。まあ、その可能性はあるだろうが。

カーソン　もし、喜んでヒトラーを晩餐に招きたいとすれば、当然――

船長　当然、それは食人種にちがいない。わたしが考えていたのは、カンカ・ボノ族さ。彼らはだれだろうと喜んで晩餐に招くだろうな。彼らは――なんといったかな？　ここまで出かかっているんだが。

カーソン　今回はパスしますよ。

船長　彼らは――彼らは――カンカ・ボノ族は――

カーソン　ごゆっくりどうぞ。

船長　思いだしたぞ！　彼らは〝ノンポリ〟だ。まさにその言葉があてはまる。カンカ・ボノ族はノンポリだ。

カーソン　しかし、おなじエクアドル国民なんでしょう？

船長　そう。もちろんだ。民主国といっただろうが。食人種にも一人一票。

カーソン　実は何人かのご婦人から、あなたにたずねてほしいとたのまれた質問があるんですがね。立ち入ったことをおききしてもさしつかえなければ――

船長　なぜ、わたしのような美貌と魅力の持ち主が、これまでに一度も結婚の喜びを味わったことがないのか？

カーソン　その問題では、わたしも若干の経験がありますから――ご存じかどうかはともかく。

船長　それは相手のご婦人に対して公正を欠くからだよ。

カーソン　どうも立ち入りすぎた質問だったようですな。話題を変えましょう。このへんで、お持ちいただいたアオアシカツオドリの映画を――

船長　いやいや。わたしはその理由を話すのにやぶさかじゃない。なぜ結婚できなかったか？　それは結婚する相手の女性に対して公正を欠くからだ。わたしには、いつ潜水艦を指揮せよという命令がくだるかもしれん。

カーソン　命令がくだれば、あなたは潜航して、そのまま上がってこなくなる。

船長　それが伝統だ。

●

キングは大きなため息をついた。デスクの上の乗客名簿からは、半分ほどの名前が抹消されている――メキシコ人や、アルゼンチン人や、イタリア人や、フィリピン人などなど、愚かにも自国の通貨で財産を持ちつづけた人たちだ。あとの人たちは、すでにグアヤキルにいる六人を除いて、みんなニューヨーク市にいるから、電話で簡単に連絡がつく。

「これからほうぼうへ電話をかけなくちゃならんな」とキングは秘書にいった。

秘書は、電話ならひきうけましょうか、といった。キングは、「いや」と答えた。その義

務をいまさら人まかせにしたくはなかった。これだけの有名人を説得してツアーに参加させ、最も強力なネームバリューのある人びとを、まるで恋人を口説くようにして誘いこんだのは、この自分なのだ。それなら、悪いニュースを彼らに伝えるのも、やはり恋人らしく、自分がじきじきにやるしかない。すくなくとも、その大部分はさほど苦労せずに連絡がとれる。配偶者や同伴者なども含めて総勢四十二名だが、その日のゴシップ欄にも報道されたように、時間待ちのあいだをたのしく過ごすため、何ヵ所かの晩餐会へ思い思いに集まることになっていた。そのうちに、迎えのリムジンがやってきて、グアヤキル行き十時発エクアトリアナ特別便に間に合うよう、彼らをうやうやしくケネディ国際空港へ送りつける手筈だった。

それに、すくなくとも、返金などのめんどうな話はしなくてすむ。この旅行は、乗客に一セントの負担もかけないたてまえだったからだ――それどころか、彼らはすでに統一デザインのスーツケースと化粧バッグを受けとっている。おまけにパナマ帽も。

自分と秘書の悲しさをはぐらかすために、キングは剝製の海イグアナを使っておふざけを演じた。それを手にとって、受話器のように耳に当てると、こういったのだ。「ミセス・オナシスですか？　残念ながら、あなたが落胆なさるようなお知らせがあります。結局、アオアシカツオドリの求愛ダンスは見られなくなりました」

●

キングの詫びの電話は、雄々しい儀礼的行為にすぎなかった。その夜十時の飛行機に乗ろ

うと思っている人間は、もうひとりもいなかったからである。ちなみに、その夜の十時には、すでに*アンドルー・マッキントッシュも、*ゼンジ・ヒログチも、船長の弟の*ジークフリートも死んで、来世への青いトンネルをくぐる短い旅を終えることになる。

キングが連絡をとった乗客名簿の人びとは、すでに全員がそれからの二週間を過ごす新しい計画を立てていた。大半は、安全な合衆国内でのスキーに切りかえていた。ある晩餐会に集まった六人のあいだでは、アリゾナ州フェニックスの減量テニス・スクールへ入る相談が、すでにまとまっていた。

そして、キングがオフィスを出る前に電話した最後のひとりは、この十カ月で非常に親密な友人になった人物、キート出身の詩人で医師でもある、エクアドルの国連駐在大使、テオドーロ・ドノソ博士だった。ドノソ博士が医学の学位を取得したのはハーヴァード大学であり、またキングが交渉に当たった何人かのエクアドル人も、やはり合衆国で教育を受けていた。バイア・デ・ダーウィン号の船長アドルフ・フォン・クライストは、アナポリスの合衆国海軍兵学校の卒業生だった。船長の弟の*ジークフリートは、ニューヨーク州イサカのコーネル・ホテル・スクールの卒業生だった。

大使館では、らんちきパーティーのような騒々しい物音がしていたが、ドノソ博士はドアを閉めて、その音を遮断した。

「そちらの人たちはなにを祝っているんですか?」とキングはきいた。

「あれは民族バレエ団」と大使は答えた。「カンカ・ボノ族の火踊りを練習しているんだ

よ」

「彼らは旅行が中止になったのを知らないんですか？」とキングはきいた。

いいや、知っているという答が返ってきた。ただ、彼らは故郷の家族のためにドルを稼ごうと、しばらく合衆国に残って、ナイトクラブや劇場で、ボビー・キングがこんどの宣伝キャンペーンであれほど有名にしてくれたダンス――カンカ・ボノ族の火踊り――を上演する予定だ、と。

「その一座に本当のカンカ・ボノ族はいるんですか？」とキングはきいた。

「わたしの推測では、本当のカンカ・ボノ族はもうどこにもいない」と大使は答えた。事実、大使はエクアドルの熱帯雨林に住むこの小民族の絶滅について、『最後のカンカ・ボノ族』と題する二十六行の詩を書いていた。その詩のはじめでは、十一人のカンカ・ボノ族がいた。詩の終わりではそれがたったひとりになり、その彼も病気におかされている。しかし、これは創作だった。この詩人も、エクアドル人の大半とおなじく、一度もカンカ・ボノ族を見たことがなかった。その部族の数が十四人に減ったという話を、前にどこかで聞かされ、文明の侵食によって彼らが最後の絶滅を迎えるのは避けられないと思ったのだ。

彼の知るよしもないことがだが、その後一世紀たらずのあいだに、地球上のあらゆる人間がおもにカンカ・ボノ族の血を受けつぎ、それにフォン・クライストとヒログチの血がちょっぴり混じることになる。

そしてこの驚くべき情勢の変化をもたらしたのは、主として〝世紀の大自然クルーズ〟の

最初の乗客名簿に記載されていた、徹底的に無名なふたりの人物の片方だった。つまりメアリー・ヘップバーンである。もうひとりの無名の人物は彼女の夫で、彼もまた人類の運命を形作るのに重要な役割を果たした。自分自身の絶滅に迫られていたとき、喫水線下のちっぽけな船室を予約したことによって。

22

ドノソ大使の『最後のカンカ・ボノ族』に関する二十六行の追悼詩は、控え目にいってても時期尚早だった。それよりも、『最後の南アメリカ大陸人』や、『最後の北アメリカ大陸人』や、『最後のヨーロッパ大陸人』や『最後のアフリカ大陸人』や、『最後のアジア大陸人』に対して、紙上で涙をそそぐべきだった。

それはともかく、彼の推測の中で正しかったのは、つぎの一、二時間でエクアドル国民の士気がどうなるかについて、電話でボビー・キングにいった言葉だった――「むこうのみんなは、オナシス夫人が結局やってこないと聞かされて、きっとうろがくるだろう」

「たった三十日のあいだに、がらりと情勢が変わることもあるんですな」とキングはいった。

「〃世紀の大自然クルーズ〃はエクアドル国民が待望する多くのもののひとつにすぎなかった。とつぜん、それが唯一のものになってしまった」

「まるでわれわれは、大きなクリスタル・ボウルいっぱいのシャンペン・パンチを用意したようなものだよ」とドノソはいった。「ところが、一夜のうちに、それがニトログリセリン入りの錆びたバケツに変わってしまったんだ」彼の説によると、〃世紀の大自然クルーズ〃

は、エクアドルが解決不能の経済危機に直面するのを、すくなくとも一、二週間先送りにしてくれたという。北に接するコロンビア政府と、南と東に接するペルー政府は、すでに転覆して、いまや軍事独裁政権に変わっていた。事実、ペルーの新指導者は、国民の巨大脳の注意をすべての難問からほかにそらすため、エクアドルに宣戦布告をする寸前だった。

●

「もし、オナシス夫人がいまむこうへ行ったら」とドノソはいった。「国民は彼女を救いの神、奇跡を行なう人として迎えるだろうね。きっとこんな期待を持つだろう。彼女なら、食料を満載した船団をグアヤキルに呼びよせてくれる——そして、合衆国の爆撃機にたのんで、子供たちのためのシリアル食品や、ミルクや、新鮮な果物をパラシュートで投下させてくれる、と!」

ここでいっておきたいが、今日では、生まれてから九ヵ月すると、もうなにごとにつけても救いを期待できなくなる。九ヵ月というのは、現人類の幼児期の長さだ。

●

このわたしは、十歳になるまで愚行や不注意からの救いを受けることができた——母が父とわたしを残して家を出ていくまではだ。それ以後、わたしは自力で生きるようになった。メアリー・ヘップバーンは、二十二歳で修士号をとるまで、両親から独立しなかった。バイ

ア・デ・ダーウィン号の船長、アドルフ・フォン・クライストは、二十六歳になるまで、賭博の借金や、酒酔い運転、暴行、公務執行妨害、器物損壊などなどの告発から、そのつど両親に救いだされていた——彼の父親がハンティントン舞踏病になって、彼の母親を殺すまではだ。そこではじめて彼は、自分のおかした過ちの責任を自分でとるようになった。

そのむかし、幼児期がしばしば長びいた時代には、生まれついての習慣で、両親が亡くなったあとでさえも、おびただしい数の人びとがまだこう信じていることが意外でもなんでもなかった。だれかが——神か、聖者か、守護天使か、生まれ星か、それともなにかが——自分を見まもってくれている、と。

今日では、だれもそんな幻想を持っていない。だれもが、ごく幼いうちから、この世界が実はどんな場所であるかをまなびとるし、不注意な兄弟姉妹や両親がシャチやサメに生きながら食われる現場を目撃しなかったものは、めったにいない。

●

百万年前には、人間が——人口が食料の供給を上まわらないようにするため——機械的手段を用いて、精子が卵子を受胎させるのを防いだり、受胎した卵子を子宮からとりのぞいたりすることが、果たして正しいか、まちがっているかについて、激しい論議がたたかわされた。

その問題は、今日ではすっかり解決し、だれも不自然なことをしなくてすむ。シャチやサ

メが人口をほどほどに調節してくれるおかげで、だれも飢えることがない。

●

メアリー・ヘップバーンはイリアム高校で、生物学だけでなく、性教育の科目も受け持っていた。このため、自分では一度も使ったことのない、さまざまな産制用品の説明をしなければならなかった。メアリーにとって、あとにも先にも唯一の愛人は夫だったし、それに彼女もロイも最初から赤ちゃんをほしがっていた。

ロイとの長年の濃厚な性生活でも妊娠できなかった彼女は、人間の女性というものが、男性とのほんのつかのまの、無感覚で一見ささいな接触でも、いかに妊娠しやすいかを、生徒たちに警告しなくてはならなかった。しかも、教えはじめて二、三年のうちに、メアリーの教訓物語の大半は、彼女が個人的に知っている生徒、お膝元のイリアム高校の生徒が主人公をつとめるものになっていた。

この高校では、歓迎されない妊娠が一件もなしに終わる学期は一度もなかったし、忘れもしない一九八一年の春の学期では、それが六件もあった。たしかに、これらの赤ちゃんを生んだ若い母親の約半数は、自分のまぐわった相手に対する真実の愛を口にしていた。しかし、あとの半数は、圧倒的としかいいようのない反証を前にしても、記憶にあるかぎり、子供の誕生という結果をもたらすような行為にはたずさわったことがない、と断言するのだった。

そしてメアリーは、忘れもしない一九八一年の春学期の終わりに、女性の同僚たちにこう

もらすことになった。「人によっては、カゼを引くみたいにあっさり妊娠するのね」たしかに、ここにはひとつの共通点があった——カゼも赤ん坊も、その発生原因となるのは、粘膜をこよなく好む微生物である。

●

サンタ・ロサリア島で十年間暮らしたあと、メアリー・ヘップバーンは身をもってそれを知ることになる。十代の処女が、射精することしか念頭になく、彼女に好感さえ持っていない男性の精液によって、いかにあっさり妊娠するかを。

23

というわけで、やがて彼が全人類の父親になるとはつゆ知らずに、わたしはグアヤキル国際空港からタクシーでバイア・デ・ダーウィン号へと向かうアドルフ・フォン・クライスト船長の頭にとりついた。やがて人類が、ひょんな偶然でひとつの小さな点にまで切りつめられ、そのあと、これまたひょんな偶然で、ふたたび拡大する運命になっていることなど、夢にも知らなかった。巨大脳を持った何十億人もの人びとがてんでんに手足をばたつかせ、繁殖に繁殖を重ねていく混沌状態が、いつまでもいつまでもつづくものと信じていた。そうした無計画な大混乱の中で、一個人に重要な働きができるとは、およそ信じられなかった。

だから、わたしが船長の頭を乗り物に選んだのは、巨大な賭博場でスロット・マシンに一枚のコインを入れたところ、とたんに大当たりが出たようなものだった。

なによりもわたしがひきつけられたのは、彼の軍服だった。彼は予備役提督用の白と金色の軍服を着ていた。生前のわたしは新兵にしかなれなかったので、軍隊階級も社会的地位もきわめて高い人間の目に、いったい世界がどんなふうに見えるものかを知りたかったのだ。

その結果、彼の巨大脳が隕石の雨のことを考えているのを知って、わたしは首をひねった。当時の経験では、よくあることだった——特に興味深い状況のもとで、だれかの頭の中にとりついてみると、その人間の巨大脳が、当面の問題とまったく無関係なことを考えていたりするのだ。

船長と隕石の雨については、こんないきさつがある。彼は合衆国海軍兵学校で教官の話にほとんど注意をはらわず、クラスのどんじりの成績で卒業した。それだけでなく、もし両親が外交筋から手をまわさなければ、天測航法の試験でカンニングをした廉で放校処分にされるところだった。しかし、そんな彼も、隕石に関するある日の講義にだけは強い印象を受けた。教官の話によると、外宇宙からの巨大な岩石の雨は、数十億年にわたってごくありふれた現象だったし、その衝撃がものすごいものであったために、恐竜を含めた多くの生物の絶滅を招いた可能性もある。当然、そんな惑星破壊物がいつまた落下してこないわけでもないのだから、敵のミサイルと隕石を区別できるような観測機器を早急に開発すべきだ。さもないと、外宇宙からのまったく無意味な怒りが、第三次世界大戦の引き金をひくことにもなりかねない。

そして、この黙示的な警告は、まだ父親がハンティントン舞踏病におかされない前でさえ、船長の脳の配線にぴったり合致したので、その後も彼は、これがいちばん可能性の高い人類絶滅の筋書きだと信じこんだ——隕石の雨が。

船長にとっては、そのほうが第三次世界大戦よりもはるかに上品で、詩的で、そして美し

い人類絶滅の道だった。

●

船長の巨大脳をよりよく知るようになって、ようやくわたしは理解した。戒厳令下のグアヤキルで飢えた群衆をながめながら、彼が隕石の雨のことを考えた裏には、一種の論理が働いていたのだ。隕石の雨の華々しさがなくても、グアヤキルの人びとにとって、この世界は終わりつつあるように見えたのだから。

●

ある意味で、この男もすでに隕石に撃たれていたといえる――彼の父親による母親の殺害という隕石に。そして、人生が無意味な悪夢であり、なにが起こっているかをだれも見まもっていないし、気にかけてもいないという彼の心境は、実のところわたしにはごくなじみ深いものだった。

それはわたしがベトナムであの老婆を撃ったときに味わった気持だ。やがてメアリー・ヘップバーンが人生の終わりにそうなるように、その老婆も歯が一本もなく、腰が曲がっていた。わたしが撃ったのは、その老婆が、小隊でのわたしの無二の親友と最大の敵とを一発の手榴弾で殺した直後だった。

この出来事で、わたしは生まれたことを後悔し、石になりたいと思った。できれば、自然

の秩序に奉仕している石のひとつになりたい、と思った。

●

船長は空港から、彼の弟のいるホテルにも寄らずに、まっすぐ彼の船に向かった。ニューヨーク市からの長い空の旅でシャンペンを飲みつづけていたため、ひどい頭痛をかかえて。そしてバイア・デ・ダーウィン号に乗船したときには、船長としての彼の機能が、予備役提督としての機能とおなじく、まったくのお飾りであることが、わたしにも明らかになった。ほかの人間が航法と機関を受け持ち、乗組員の規律を維持しているあいだに、彼は有名人の乗客たちとひたすら社交にはげむ予定だった。彼は操船について無知同然だったし、また知る必要も感じていなかった。ガラパゴス諸島に関する彼の知識も、同様にお粗末なものだった。これまでに提督として、バルトラ島にある海軍基地と、サンタ・クルス島にあるダーウィン研究所を儀礼訪問したことはある――これも、彼が名ばかりの艦長をつとめる軍艦に、実質的には乗客として乗りこんだようなものだ。しかし、それ以外の島々は、彼にとって未知の世界だった。むしろ、たとえばスイスのスキー・スロープや、モンテ・カルロのカジノのカーペットの上、それともパームビーチのポロ競技場の厩舎でなら、もっと博識なガイドがつとまったかもしれない。

しかし、反面――それがなんだというのか？　〝世紀の大自然クルーズ〟には、ダーウィン研究所で訓練を受け、自然科学の学士号を持ったガイドや講師が、ちゃんと付き添うこと

になっていたのだ。船長は彼らの話を謹聴し、ほかの乗客といっしょにこの島々のことを勉強するつもりだった。

●

船長の頭蓋の中にとりついたわたしは、最高司令官になった気分を味わえるものとたのしみにしていた。だが、その代わりに味わったのは、社交界の蝶になった気分だった。タラップを渡るところまでは、ありとあらゆる軍隊的な敬意のしるしでむかえられた。しかし、いったん乗船してしまうと、どの高級船員も乗組員も、われわれに指示を求めなかった。オナシス夫人をはじめとする一行の到着に対して、最後の準備が進められているというのに。

船長の知るかぎり、依然としてこの船は翌日に出航の予定だった。彼は航海の中止を知らされていなかった。エクアドルにもどってまだ一時間しか経っていないし、まだ、ニューヨークのうまい料理で満腹し、頭痛のするほどシャンペンをきこしめしていたので、自分とその船とがどれほど恐ろしいトラブルにはまりこんでいるかに、すこしも気づいていなかった。

●

自然選択の法則をもってしてもまだ改善できない人間の欠点が、もうひとつある。現人類も、満腹したときには百万年前の先祖たちとまったくおなじで、自分たちがどれほど恐ろしいトラブルにはまりこんでいるかに気づくのが、あきれるほどのろい。そんなときにかぎっ

て、サメやシャチに対する見張りがおろそかになる。
百万年前には、これがとりわけ悲劇的な欠点だった。たとえば*アンドルー・マッキントッシュのように、この惑星の状態をいちばんよく知っている人間、際限のない浪費と破壊にブレーキをかけるだけの富と権力を持った人間は、当然ながら満腹していたからだ。
したがって、彼らから見れば、万事がつねに好調だった。
すべてのコンピュータ、計器、ニュース収集家と分析家、データバンク、資料室、あれこれの専門家を思いのままに使えても、あの問題、この問題がどれほど急を要するかについて最終決定をくだすのは、つねに目も耳もない、満腹した胃袋だった。たとえば、酸性雨による北アメリカやヨーロッパの森林の破壊がどれほどひどいかといった問題に関しても。
そして、これこそ満腹した胃袋が当時与えただけでなく、いまも与えつづけている種類の助言であり、船長がバイア・デ・ダーウィン号の一等航海士、エルナンド・クルスから、ガイドがまだひとりも姿を見せず、連絡もよこしていないこと、すでに乗組員の三分の一が、家族を心配して船を脱走したことを聞かされたときに、彼のふくらんだ胃袋が与えた助言もやはりそうだった――「そうあせるな。にっこりしろ。自信を持て。いまに万事がうまくおさまってくれるさ」

24

メアリー・ヘップバーンは、船長のひょうきんな言動を《ザ・トゥナイト・ショー》のほかに《グッド・モーニング・アメリカ》でも満喫した。そのかぎりでいえば、自分の巨大脳にグアヤキルへ行くようしむけられる前から、すでに彼女は船長をよく知っている気になっていた。

船長が《ザ・トゥナイト・ショー》に出演したのは、ロイが亡くなってから二週間後のことで、その悲しい出来事があって以来、はじめて彼女を大声で笑わせてくれたのは、この男だった。がらんとした売り家にぐるりを囲まれた、ささやかな自宅のリビングルームで、メアリーは自分が声を上げて笑っているのに気づいた。水中に潜航したまま、二度と浮上しないのが伝統だという、ばかばかしいエクアドルの潜水艦隊の話を聞いて。

彼女は、フォン・クライストが、自然と機械が大好きな点では、ロイにそっくりではないかと想像した。でなくて、どうしてバイア・デ・ダーウィン号の船長に選ばれるわけがあるだろう?

そこで、彼女の巨大脳は、ブラウン管の船長の映像に向かって、彼女にこんなことをいわ

せた。ほかにだれもそれを聞いている人間はいなかったが、彼女の魂がひどく当惑するのを承知で――「もしかして、わたしと結婚する気はありません？」

●

やがてわかるのだが、ロイと暮らしていたおかげで、彼女はすくなくとも船長より機械のことにくわしかった。ロイが亡くなったあとで、たとえば芝刈り機がどうしても始動しないときなど、彼女は点火プラグを交換して、ちゃんと動かすことができた――船長が逆立ちしてもできない芸当だった。

それに、彼女はガラパゴス諸島のことをよく知っていた。やがて一行がある島へ漂着したとき、その島の名を正しくいいあてたのはメアリーだった。船長は、彼の巨大脳が万事をめちゃくちゃにしたあとも、自尊心と権威の切れはしにすがりついて、その島をラビダ島だと断言した。見当はずれもいいところだし、だいいちその島を見たこともないのに。

そして、その島がサンタ・ロサリア島だと識別する手がかりをメアリーに与えたのは、そこで優位を占めているフィンチの種類だった。ちなみに、このぱっとしない小鳥は、たいていの観光客にとっても、メアリーの生徒たちにとっても、およそ興味をそそらないものだったが、若き日のチャールズ・ダーウィンにとっては、ゾウガメや、カツオドリや、海イグアナや、そのほかこの島々に棲むどんな動物にも劣らず、胸おどる存在だった。そのわけはこうである――どのフィンチも一見よく似かよっているが、実は十三のこまかい種に分かれて

おり、どの種にもそれぞれ特別な食物と、その食物をとる特別な方法があるからだ。
これらのフィンチと縁の近い親類は、南アメリカ大陸にもどこにもいない。彼らの祖先も、やはりノアの箱舟か、天然の筏に乗ってきたのかもしれない。フィンチが一千キロもの大洋横断飛行を試みるのは、およそこの鳥の習性に反しているからである。
この島々にはキツツキがいないが、キツツキがいたら食べるだろう餌を食べるフィンチはいる。このフィンチは木をつつけないので、小枝かサボテンのとげを太く短いくちばしにくわえ、それを使って虫を隠れ家からほじくりだす。
べつの種類のフィンチは血吸い鳥で、不注意なカツオドリの長い首を血がにじんでくるまでつつく。それから、この完全食餌を心ゆくまですする。この小鳥は、人間からゲオスピザ・ディフィキリスと呼ばれている。
この奇妙なフィンチのおもな営巣地、彼らのエデンの園は、サンタ・ロサリア島である。そこはガラパゴスの島々から遠く離れており、めったにだれも訪れないので、このゲオスピザ・ディフィキリスの群れがいなければ、メアリーもその島の名を聞くことがなかったろう。それに、この血吸い鳥ぐらいしか生徒たちの興味をひきつけられるフィンチがいない、という事実がなければ、そんなにくわしくこの小鳥の話をしなかったろう。
偉大な教師である彼女は、生徒たちに調子を合わせるため、この小鳥のことを「……ドラキュラ伯爵にもってこいのペット」と説明した。このまったく架空の伯爵が、大半の生徒にとって、たとえば彼らの国の創設者でしかないジョージ・ワシントンよりもはるかに重要な

人物であるのを、彼女は知っていた。
生徒たちはドラキュラのことならくわしく知っていたから、メアリーはさらにジョークをこんなふうに拡大することができた。結局のところ、伯爵がゲオスピザ・ディフィキリスをペットにしても、あまりかわいがってやれないかもしれない。なぜなら、彼女が〝ホモ・トランシルヴァニエンシス〟と名づけた生物は、昼間ずっと眠っているのに対して、ゲオスピザ・ディフィキリスは夜間ずっと眠っているからだ。「ですから、たぶん」と彼女は悲しそうなふりをしていうのだった。「ドラキュラ伯爵にとって最高のペットは、やはりデスモドンティーデ科の一員にとどめをさすでしょう。つまり、一般的な名前でいえば——〝吸血コウモリ〟です」
それからメアリーはそのジョークの仕上げに、こういうのだった。「もし、みなさんがサンタ・ロサリア島へ行くことがあって、ゲオスピザ・ディフィキリスを一羽殺したとしたら、それが永久に生きかえってこないようにするには、どうすればいいでしょうか？」彼女の答はこうだった。「もちろん、その心臓に小さな杭を突き刺して、死骸を十字路に埋めるのです」

しかし、若き日のチャールズ・ダーウィンにとって、ガラパゴス諸島のフィンチのどこがそれほど示唆に富んでいたかというと、それはこの小鳥が、大陸のもっと分化の進んだ、もっと多種類の小鳥に似た行動をせいいっぱいにまねているからだった。まだそのときでもダーウィンは、もしそう考えてすじが通るならば、造物主がすべての生物を、ちょうどダーウィンが世界一周の旅で発見したとおりの状態で創られた、と信じるつもりだった。しかし、彼の巨大脳はこんな疑問を持たずにはいられなかった。ガラパゴス諸島の場合、なぜ造物主が、小さな陸鳥のありとあらゆる仕事を、それには不向きなことの多いフィンチに与えられたのだろうか？　もしこの島々にキツツキ型の鳥を棲まわせるべきだと考えられたのなら、どうして造物主は本物のキツツキをお創りにならなかったのか？　もし吸血鬼を棲まわせるのが名案だと思われたのなら、なぜその仕事を吸血コウモリではなく、こともあろうにフィンチにお与えになったのか？　こともあろうに、吸血フィンチとは？

●

そして、メアリーはこの知的な問題を生徒たちに提出してから、いつもこうしめくくるのだった。

●

「みなさんの感想をどうぞ」

バイア・デ・ダーウィン号が乗りあげた黒い岩礁にはじめて上陸したとき、メアリーは足をつまずかせた。ころんだはずみに、右手の甲にすり傷をこしらえた。たいして痛くはなかった。彼女はざっとその傷をあらためた。すり傷からは、血が小さな粒になってにじみだしていた。

しかし、そこで一羽のフィンチが、まったく恐れを知らぬようすで、彼女の指にとまった。彼女は驚かなかった。フィンチが人間の頭や手や茶碗の上にとまるという話は、いやになるほど聞かされていた。そこで彼女はこの歓迎に答えようと決心し、手をじっとさせたまま、優しくその小鳥に語りかけた。「いったい、おまえは十三種類のフィンチのうちのどれなの?」

彼女の質問がわかったのか、その小鳥は自分がどの種類かを示すように、彼女の指の関節ににじみ出た赤い粒をすすった。

そこで彼女はもう一度その島を見まわした。自分がそれからの一生をその島で過ごし、何千回もの食事を吸血フィンチに提供することになろうとは、夢にも思わなかった。いまやすっかり尊敬の念の失せてしまった船長に向かって、彼女はいった。「ここがラビダ島だといったわね?」

「いった」と船長は答えた。「そのことには確信がある」

「あらそう。こんな目にあったあなたにこんなことをいうのは心苦しいけれど、こんどもあなたのまちがい」とメアリーはいった。「ここは絶対にサンタ・ロサリア島だわ」

「どうしてそんなに確信があるんだね?」

彼女は答えた。「この小鳥さんがいまそう教えてくれたの」

25

マンハッタン島では、ボビー・キングがクライスラー・ビル最上階のオフィスの明かりを消し、おやすみと秘書にあいさつして帰宅した。彼はもうこの物語に二度と顔を出さない。彼がその瞬間から、多忙な歳月ののち、来世への青いトンネルに入るまでにやったことは、どれひとつとして、人類の未来になんの関係も持たない。

ボビー・キングが帰宅したのとおなじ瞬間、グアヤキルでは*ゼンジ・ヒログチが身重の妻に腹を立て、ホテル・エルドラドの自分の部屋をとびだした。彼の妻が、ゴクビについでマンダラックスを創りだした彼の動機に関して、許せないことをいったからだ。彼はエレベーターのボタンを押し、指をぱちんと鳴らし、荒い息をした。

そのとき廊下に現われたのは、彼がいちばん会いたくない人物、彼から見るかぎりすべてのトラブルの原因に思える人物、すなわち*アンドルー・マッキントッシュだった。

「おや——そこにいたのかね」と*マッキントッシュはいった。「いま、知らせようと思っていたんだよ。どうも電話線が故障したらしい。それさえ直れば、すぐに吉報が届くはずだ」

今日もなおその遺伝子が生きつづけている＊ゼンジは、まず妻、そしてこんどは＊マッキントッシュのおかげでかっと逆上して、なにもしゃべれなくなった。そこで、マンダラックスのキーをたたいて、こんなメッセージを日本語で書き、＊マッキントッシュが読めるよう、その小さなスクリーンに訳文を表示させた――『いまは話をしたくない。わたしは非常に気が立っている。どうかひとりにしてほしい』

ちなみに、ボビー・キングとおなじく、＊マッキントッシュも人類の未来について、これ以後はなんの影響力も持たなくなる。もし、それから十年後に彼の娘がサンタ・ロサリア島で人工授精に同意していたら、話はまたがらりと変わっていただろう。こういってもさしつかえないと思うが、もし彼がその場に居合わせたなら、船長の精液を使ったメアリー・ヘップバーンの実験に、よろこんで娘を参加させただろう。もし、セリーナにもうすこし冒険心があったら、今日のみんなは＊マッキントッシュとおなじように、遠いむかしローマの軍団をうちやぶったスコットランドの豪胆な戦士の血を受けつぐことになったかもしれない。せっかくの機会を逃したとは！　マンダラックスならこういうところだ――

口で言い、文字に綴る言葉のかずあるなかで、
最も悲しいのは、「あのときああしていたら！」
ジョン・グリーンリーフ・ウィッティアー（一八〇七―一八九二）

「なにかわたしにできることはないか?」と*マッキントッシュはいった。「きみの役に立てるなら、どんなことでもするよ。いってみたまえ」
*ゼンジは、首を横にふることさえできないのに気づいた。彼にできるのは、目をかたくつむることだけだった。そこへエレベーターが到着したが、*マッキントッシュがいっしょに乗りこんできたことを知ったとき、*ゼンジはいまにも頭のてっぺんがふっとびそうな気になった。
「いいかね――」と*マッキントッシュは下降の途中でいった。「わたしはきみの友人だ。なんでも話してくれ。もし、わたしがきみの神経にさわるなら、ころがるドーナッとおまんこしてろ、といってくれたってかまわん。まっさきに同情するのはわたしだ。わたしだってまちがいをおかす。人間であるからには」
ロビーまで下りたとき、*ゼンジの巨大脳は、非実際的で、幼稚ともいえる助言を彼に与えた。なんとか*マッキントッシュから逃げだせ――このスポーツ好きのアメリカ人とかけっこをしても勝てる、と。
そこで、彼はホテルの正面ドアから、ディエス・デ・アゴスト通りの交通遮断地域へ飛びだしていった。*アンドルー・マッキントッシュもそのすぐ横にくっついていた。
ふたりがあっというまにロビーを横ぎって、夕暮れの表通りへ出ていったため、フォン・クライスト家の不運な弟、*ジークフリートは、カクテル・ラウンジのバーの中から、大声でふたりに注意するひまさえなかった。「いけない! いけない! わたしなら外出はしま

せんよ！」そうさけんだときは、もう手遅れだった。そこで彼はふたりのあとを追って駆けだした。

●

百万年後に影響を残すような多くの事件が、この惑星のごく限られた空間で、ごく短時間のうちに起こりつつあった。フォン・クライスト家の不運な弟が＊マッキントッシュと＊ヒログチのあとを追いかけているころ、幸運な兄のほうはバイア・デ・ダーウィン号のブリッジのすぐ後部にある自分の船室で、シャワーを浴びていた。彼のほうはただ生きつづけ、生き残る以外に、人類の未来にとって格別重要なことをしているわけではなかったが、一等航海士のエルナンド・クルスという男は、猛烈な影響のある行動をとろうとしていた。

たまたまこのとき、クルスはサンデッキに出て、あたりで目につく唯一の船、ずいぶん前から河口に投錨中のコロンビアの貨物船、サン・マテオ号をながめていた。クルスは船長と同年配のがっしりした、頭の禿げた男で、ガラパゴス諸島へはほかの船でもう五十回も往復していた。バイア・デ・ダーウィン号をマルメーから回航した基幹定員のひとりでもあった。彼がグアヤキルでこの船の艤装を監督しているあいだに、船長は合衆国で宣伝ツアーをやっていたのだ。この男の巨大脳には、この船のありとあらゆる部分、船底にある強力なディーゼル・エンジンから、大サロンのバーの裏側にあるアイスメーカーにいたるまでの、完全な理解がしまいこまれていた。その上、彼は乗組員ひとりひとりの長所と短所を知りつくし、

彼らの尊敬をかちえていた。

本当の船長はこの男だった。この男が実際に船を動かしてくれるからこそ、いま鼻歌まじりでシャワーを浴びているアドルフ・フォン・クライストが、食事どきに乗客を座談のとりこにし、夜にはご婦人方のひとりひとりとダンスをすることもできるというものだった。

クルスは、たまたま自分が見つめているもの、サン・マテオ号と、その錨綱のまわりに溜まりたまった天然の植物製の筏に対して、なんの関心もなかった。その錆びた小さい貨物船はすっかり定着物として腰をすえてしまったので、生命のない岩がそこにあるのとおなじだった。しかし、いま彼は気づいた。小型タンカーがサン・マテオ号のそばに横づけになり、親鯨が子鯨に乳をやるように乳をやっている。タンカーからは、柔軟なチューブを通して、ディーゼル燃料が放出されている。それはサン・マテオ号のエンジンにとって、母乳に相当するものだった。

それというのも、サン・マテオ号の持ち主が、コロンビア産のコカインとひきかえに多額のアメリカ・ドルを受けとり、このドルをエクアドルへ密輸して、ディーゼル燃料だけでなく、なによりも重要な商品である食料、つまり、人間にとっての燃料を買いこんだからである。つまり、まだある程度の国際交易は行なわれていたわけだ。

サン・マテオ号への燃料と食料供給を可能にした腐敗行為の細部までは、クルスも知りようがなかったが、一般的な腐敗行為について彼が思案をこらしていることはたしかだった。すなわち——流動資産を持っている人間は、それに価する人間であろうとなかろうと、なん

でもほしいものを手にいれることができる。シャワー室にいる船長はそういう人間であり、クルスはちがう。クルスが苦労しながら一生かけてコツコツためた金は、すべてスクレであったため、紙屑同然になりさがった。

やっと家へ帰れるとわかって、天にも昇る心地でいるだろうサン・マテオ号の乗組員を、クルスはうらやんだ。夜明けに起きてから、クルスも家に帰ることを真剣に考えつづけていた。空港のそばのすてきな家には、身重の妻と十一人の子供が、おびえながら待っている。家族が彼を必要としているのはまちがいない。しかし、これまでは、どんな理由があろうとも、義務に縛られた船を見捨てるのは、彼にとって一種の自殺、人格と評判のすべての美点を棒にふる行為に思えたのだ。

だが、いまの彼は、とにかくバイア・デ・ダーウィン号をおさらばしようと心にきめた。サンデッキの手すりを軽くたたき、スペイン語で優しくこういった。「スウェーデンのお姫さまよ、達者でな。夢の中で会おうぜ」

彼の事例は、エルドラドの電話線を切ったヘスース・オルティスのそれとよく似ていた。彼の巨大脳は、いまこそ反社会的な行動をするときだという結論を、最後の最後まで彼の魂から隠しとおしてきたのだ。

●

こうして船の全権は、アドルフ・フォン・クライストにゆだねられることになった。航海

術についても、ガラパゴス諸島についても、それだけの大きな船の運営や維持管理についても、てんから無知な男に。

船長の無能さと、エルナンド・クルスが自分の肉親のそばへ駆けつけようとした決心との組み合わせは、その当時こそドタバタ喜劇でしかなかったが、やがて今日の人類にとってはかりしれない価値を持つことになった。喜劇とはそんなものだ。厳粛なはずの問題も、底を割ってみればそんなものだ。

●

もし〝世紀の大自然クルーズ〟が計画どおり実現していたら、この船長と一等航海士の職務の分担は、百万年前に数多くの組織がとっていた運営法の典型的なものになっていたろう。名目上の長は社交上のたわごとを専門にひきうけ、副長になった人間は、実際にどうして物事が動いていくのか、実際になにが起こっているのかを理解する責任を負わされる。

運営のうまくいっている国は、たいていそうした共生関係の二人組を指導者の座においていた。そのむかし、ほうぼうの国がよく自殺的な過ちをおかしたことをふりかえると、いまにして思いあたるのだが、そうした国の政治組織は、エルナンド・クルスなしに、アドルフ・フォン・クライストだけを指導者の座において、物事を処理しようとしたのにちがいない。すべてが手遅れになったあと、生き残った国民は、彼ら自身が創りだした廃墟の中から這いだし、そして気がつくのだ。彼らがみずからに課した苦しみのかずかずをなめているあいだ

じゅう、指導者の座にあるものは、だれひとりとして、実際にどうして物事が動いていくのか、なにがどうなっているのか、実際になにが起こっているのかを理解していなかったことに。

26

フォン・クライスト家の幸運な兄、今日の人類の共通の父祖は、痩せて背が高く、鷲鼻だった。大きな頭の上でカールした髪は、若いころは金色だったが、もう真白になっていた。一等航海士が重要な問題を受け持つという了解のもとに、彼がバイア・デ・ダーウィン号の指揮をまかされた裏には、＊ジークフリートがホテルの監督をまかされたのとおなじ理由があった。キートにいる叔父ふたりが、有名人の乗客と貴重な財産を保護する仕事を、近縁の身内にやらせたいと考えたのだ。

船長も、その弟も、キートの山手のひんやりしたもやの中に美しい屋敷をかまえていたが、ふたりとも二度とそれを見ることはできなかった。このふたりは、殺された母親と、父方と母方の祖父母から、莫大な遺産をもらっていた。その中に無価値なスクレはほとんどなかった。大部分の資産はニューヨーク市のチェース・マンハッタン銀行に信託されて、アメリカ・ドルか日本円に変わっていた。

シャワー室の中で踊りまわっている船長は、自分に心配事が山ほどある、グアヤキルの町とおなじぐらいの悩みをかかえている、とは思わなかった。どんなことが起きても、エルナ

ンド・クルスがなんとかしてくれるはずだった。
彼の巨大脳はひとつの名案らしいものを思いつき、体を乾かしたあとでクルスに伝えようと考えた。もし、乗組員たちが船から逃げだしそうな雲行きなら、クルスからこんな注意をさせよう。バイア・デ・ダーウィン号は、厳密にいえば軍艦であり、したがって脱走者は、海軍軍規に照らして厳罰に処せられる、と。
これは悪い法律だったが、この船が記録の上ではエクアドル海軍の一部だという船長の認識は正しかった。船長自身、その夏にこの船がマルメーから到着したとき、提督として艦隊への加入を歓迎したのだ。この船の甲板にはまだカーペットが敷いてなく、むきだしの鋼板のここかしこには栓をした穴があって、もし万一戦争が起きた場合、機関銃や、ロケット砲や、爆雷投下機などなどの台座をとりつけられるようになっていた。
その場合、バイア・デ・ダーウィン号は武装した軍隊輸送船に生まれかわるのだ。船長が《ザ・トゥナイト・ショー》でいったように、「……下士官兵百名ごとに、十本のドンペリニョンと、ひとつのビデを備えた」輸送船に。

●

船長がシャワー室で考えたことはほかにもあるが、それはみんなエルナンド・クルスの発案になるものだった。たとえば、この航海がもし——というより、そうなることはほぼ確実に思えるが——キャンセルされた場合、この船が略奪者に荒らされないよう、クルスと数名

の部下の手でどこかの沼沢地の奥に投錨する。クルスはそうした旅に船長が同行すべき理由を思いつけなかった。

もし、大混乱が起きて、この町の近くに安全な停泊所がない状況になった場合、クルスはこの船をガラパゴスのバルトラ島にある海軍基地へ回航しようと考えていた。この場合も、クルスは船長が同行すべき理由を思いつけなかった。

それとも、信じられないことながら、もしニューヨーク市からの有名人たちが、予定どおり翌朝に到着するようなら、船長がぜひとも船内にいて、一行を歓迎し、安心させなければならない。その一行を待つあいだ、クルスはバイア・デ・ダーウィン号を、コロンビアの貨物船サン・マテオ号のように沖合いへ投錨しておく。そして有名人たちがやってきて、乗船の用意がととのったとき、はじめて船を桟橋にもどす。それから、なるべく早く船を安全な外海に出し、それからニュースの情勢しだいでは、実際に彼らを約束のガラパゴス諸島遊覧の旅へ案内することになる。

しかし、もっと可能性が高いのは――一行をどこかグアヤキル以外の安全な港へ上陸させることだ。といっても、ペルーや、チリや、コロンビアの港、いや、それをいえば、南アメリカの西海岸ぜんたいがだめだろう。この国々の住民は、エクアドルの住民とおなじように自暴自棄になっているからだ。

パナマにはまだ可能性がある。

エルナンド・クルスは、もし必要なら、有名人たちをはるばるサン・ディエゴまで運ぶつ

もりでいた。船内には、それだけの長い航海をもちこたえるだけの食料も、燃料も、水もある。それに、有名人たちは途中で友人や近親に電話を入れ、世界各地からのニュースがどんなに悲惨なものであっても、自分たちは例によって贅沢三昧の生活を送っている、と報告できるだろう。

●

船長がシャワー室の中で検討しなかった緊急対策があるとすれば、それは彼自身がこの船の全責任をあずかり、しかも補佐してくれるのはメアリー・ヘップバーンだけ、という事態だった——そして、彼自身がこの船をサンタ・ロサリア島に乗り上げさせ、そこが現人類の発祥の地になるという事態だった。

●

マンダラックスのよく知っている引用句に——

小さな怠慢が大きな災難を生みだすこともある……一本の釘がたりないために蹄鉄が失われ、蹄鉄がたりないために馬が失われ、馬がたりないために乗り手が失われる。

ベンジャミン・フランクリン（一七〇六—一七九〇）

そう、そして小さな怠慢が、それとおなじぐらい簡単に、僥倖を生みだすこともある。バイア・デ・ダーウィン号にエルナンド・クルスがたりなかったために、人類は救われた。クルスがいれば、絶対に船をサンタ・ロサリア島へ乗りあげさせたりはしなかっただろうから。

そして、いまクルスは、キャデラック・エルドラドで桟橋をあとにするところだった。車のトランクには、〝世紀の大自然クルーズ〟のために準備された山海の珍味がぎっしり詰まっていた。その日の明け方、まだ軍隊も飢えた群衆もやってこない前に、彼は家族のためにそれだけの食料を盗みだしたのだ。

その車は、バイア・デ・ダーウィン号の艤装と糧食購入の賄賂で買ったものだが、ホテルとおなじ名前がついていた——それは彼のスペイン系の先祖が探しまわってついに見つけられなかった、伝説上の偉大な富と成功の都市とおなじ名前でもあった。彼の先祖は、その昔、よくインディオを拷問にかけたものだ——エルドラドのある場所を白状させるために。

今日では、だれかがだれかを拷問することなど、想像もつかない。ひれ足と口だけでは、拷問はおろか、だれをつかまえることができるだろう？　そもそもどうやって人間狩りを実行できるだろう？——いまではだれもがすばらしいスピードで泳げる上に、いくらでも長く水中に潜っていられる。しかも、こちらが追っている相手は、ほかのみんなとおなじような外見をしているだけでなく、どんな深さのどんな場所にでも隠れることができるのだ。

エルナンド・クルスは、人類のために一役を果たしおわった。

ペルー空軍も、まもなく一役を果たすことになる。しかし、それはその晩の六時がきてからで、＊アンドルー・マッキントッシュと＊ゼンジ・ヒログチが死んだあとのこと——その時刻にペルーはエクアドルに宣戦を布告するだろう。ペルーはエクアドルより十四日間も長く破産状態にあったため、飢餓もそれだけ進んでいた。地上軍の兵士は、武器を持ってぞくぞくと家へ帰っていた。小さなペルー空軍だけがまだ健在で、軍事政権はとっておきの食料をそっちへまわし、戦力を維持していた。

●

空軍がこれほど士気旺盛である理由のひとつは、破産以前にクレジットで購入され、納入された最新式の装備だった。フランス製の新型戦闘爆撃機が八機あって、そのどれにも日本製の脳のついたアメリカ製の空対地ミサイルが備えつけられている。このミサイルはパイロットからの指示によって、レーダー信号、あるいはエンジンの熱をたよりに、目標へ誘導される。パイロットのほうは、地上とコクピット内のコンピュータで指示を受ける。どのミサイルの弾頭にもイスラエル製の新式爆薬が装填されており、その破壊力は、合衆国が第二次世界大戦中にヒサコ・ヒログチの母親の上に落とした原爆の五分の一に相当する。

この新式爆薬は、巨大脳を持った軍事科学者たちから、大きな恩恵とみなされていた。核兵器ではなく、通常兵器を使って人びとを殺傷しているかぎり、彼らは人道的な政治家と賞

賛されるのだ。核兵器さえ使わなければ、第二次世界大戦の終わりからはじまったすべての大量殺人を、だれも正しい名前で呼ぼうとしないらしい。それはまちがいなく〝第三次世界大戦〟なのだが。

ペルーの軍事政権は、戦争に踏み切った公式の理由をこう述べた――ガラパゴス諸島は本来ペルーのものであり、ペルーはいまからそれをとりもどすだろう、と。

●　●

今日のだれも、百万年前にいちばん貧乏な国が持っていた程度の兵器を作る頭さえない。そう、そしてこれらの兵器はしょっちゅう使われていた。わたしの一生を通じて、この惑星のどこかで、すくなくとも三つの戦争が同時に行なわれていない日は一日もなかった。

そして自然選択の法則は、こうした新しいテクノロジーに対して、まったく無力だった。犀でもなければともかく、どの生物種の雌も、火にも、爆弾にも、銃弾にもめげない赤ん坊を生みだせるとは思えなかった。

自然選択の法則が、曲がりなりにもわたしの時代に生みだすことができたのは、いくら恐ろしいことがたくさんあっても、それを怖がらない人間だった。ベトナムで、わたしは何人かのそんな人間と知りあった――そんな人間と知りあうことが可能ならば。そして＊アンド

ルー・マッキントッシュもそんな人間のひとりだった。

27

セリーナ・マッキントッシュは、来世への青いトンネルの奥で父親と再会するまで、父親が死んだことを確認できなかった。彼女がたしかに知っているのは、父親がエルドラドの彼女の部屋を出て、廊下で*ゼンジ・ヒログチと短い言葉をかわしたことだけだった。それからふたりはいっしょにエレベーターで下へおりていった。そのあとは、ふたりともまったく消息が絶えてしまった。

ついでながら、セリーナが盲目なのにはこんなわけがあった——彼女は色素性網膜炎に罹っていて、これは女系の先祖から受けついだ欠陥遺伝子が原因だった。彼女はその遺伝子を母親からもらった。母親は目がよく見えたので、自分が確実にその遺伝子を持っていることを夫に隠していたのだ。

これがホモ・サピエンスの罹る一千の重病のひとつである以上、マンダラックスもその病気のことをよく知っていた。マンダラックスは、サンタ・ロサリア島でメアリーに質問されたとき、生まれついての盲目であるセリーナの症例を重症と判定した。ゴクビの息子、マンダラックスにいわせると、色素性網膜炎の遺伝子は、その宿主にある期間この世界を見せて

おくのが普通で、長いときにはそれが三十年にもおよぶ。セリーナ自身がメアリーに話したことも、マンダラックスによって確認された——もし彼女が赤ん坊を生めば、その赤ん坊が盲目である確率は五十パーセント。そして、もしその赤ん坊が女の子なら、盲目であるなしにかかわらず、成長して孫を生んだ場合に、その孫が盲目である確率も五十パーセント。

●

色素性網膜炎とハンティントン舞踏病というわりあいめずらしい遺伝病が、サンタ・ロサリア島の最初の定住者によって心配の種になったのは、驚くべき偶然だった。定住者の数はわずか十人にすぎなかったから。

すでに述べたように、船長はさいわいにも保因者でないことがわかった。セリーナはまちがいなく保因者だった。だが、もし彼女が子供を生んでいたとしても、現人類はやはり色素性網膜炎から解放されていただろう——自然選択の法則と、サメとシャチのおかげで。

●

ちなみに、彼女と愛犬のカザックが外の群衆の騒ぎに耳をかたむけていたとき、彼女の父親と＊ゼンジ・ヒログチはこんなふうにして死んだ——背後から頭部を撃ちぬかれ、苦痛を感じるいとまもなく。ところで、ふたりを射殺した兵士にも、その影響が百万年後のいまなお見てとれる、あるささやかな行為の功績を認めてやるべきだろう。わたしのいうのは射撃

て、店内へ押し入ったことである。

もし彼がその店へ盗みにはいらなかったら、今日の地球上にはおそらくひとりの人間も生きていなかっただろう。いや、真剣な話。あの兵士が狂気におかされていたことを、現人類のだれもが神に感謝しなくてはならない。

彼の名前はヘラルド・デルガード二等兵といって、部隊からの脱走者だった。そのさいに、救急箱と水筒、ナイフ、自動突撃小銃、手榴弾二個、挿弾子数個などなどを持ち逃げしていた。彼はまだ十八歳で、偏執性分裂病だった。実弾を支給されたのがそもそものまちがいだった。

デルガードの巨大脳は、事実ではない種々さまざまなことを彼に告げていた――彼が世界一のダンサーであること、彼がフランク・シナトラの息子であること、彼のダンスの才能をねたんだ人びとが、小型無線機で彼の脳を破壊しようとしていること、その他いろいろ。

デルガードは、グアヤキルのおおぜいの人びととおなじように飢餓にせまられ、自分の最大の問題は小型無線機を持つ敵だと考えた。明らかに廃業したとわかるみやげ物店の裏口から押し入ったとき、そこは彼にとってみやげ物店ではなかった。そこは彼にとって、エクアドル民族バレエ団の本部で、いまから自分が本当に世界一のダンサーであることを実証するつもりだった。

今日でもまだ妄想の種はつきない。実際に起こってもいないさまざまな事柄に対して、人びとは熱狂的に反応する。これはカンカ・ボノ族からの遺産かもしれない。しかし、妄想にとりつかれた人びとも、いまでは武器を握れないし、それに彼らから泳いで逃げることも簡単だ。かりに彼らが手榴弾や、機関銃や、ナイフや、そのほか古い世界が残していったいろいろの武器を見つけたとしても、ひれ足と口だけでどうやってそれを使えるだろう?

わたしがコホーズに住んでいた子供のころ、母がサーカスへ連れていってくれたことがある。うちにはそんな金の余裕はなかったし、それに父はサーカスが嫌いだったのにだ。そのサーカスには、よく仕込まれたアシカやオットセイがいて、鼻の上にボールを乗せたり、ラッパを吹いたり、合図によってひれ足を打ち合わせたり、などなどの芸当をやってのけた。しかし、そんな芸達者たちも、機関銃の装塡と撃発準備をしたり、手榴弾の安全ピンを抜いたり、それをかなり正確に遠くへ投げたりすることは、いくら努力してもとうていむりだったろう。

デルガードのような狂気におかされた人間が、どうして陸軍へ入隊できたかについて——ちょうどわたしがアメリカ海兵隊へ入隊したときとおなじように、彼が徴兵官と話しあったときには、外見も行動も正常だったからだ。デルガードが入隊したのは、ちょうどロイ・ヘップバーンが亡くなった夏のころで、しかも〝世紀の大自然クルーズ〟と特別に関係がある短期間の兵役だった。彼はめかしたてた部隊の一員として、オナシス夫人やその他の有名人の前で威風堂々と行進する予定になっていた。隊員には突撃小銃や鉄帽などなどが支給されるが、けっして実弾は与えられないはずだった。

そしてデルガードはすばらしい行進者であり、真鍮のボタンや靴のすばらしい磨き手でもあった。しかし、そこでエクアドルはこの経済危機に揺さぶられ、兵士たちに実弾が配られることになった。

彼はすばやい進化の痛ましい一例だったが、それをいえばどんな兵士もおなじだろう。わたしが海兵隊の基礎訓練キャンプを卒業し、ベトナムへ送られて実弾を支給されたときには、市民生活をいとなんでいたころの弱々しい動物の面影は、もはやどこにも見当たらなかった。そして、わたしはデルガード以上にひどいことをやってのけた。

●

話をもとにもどして——デルガードが押し入った店は、エルドラドの向かい側にある閉鎖された商店街の一角に属していた。ホテルの周囲に有刺鉄線を張りめぐらした兵士たちは、

この商店街を障壁の一部とみなしていた。だから、デルガードがその一軒の裏口をこじあけ、表口の錠をはずし、髪の毛ほどドアをあけて外をのぞいたとき、彼はその障壁にほかのだれかが通れるような穴をあけたことになる。この突破口が、人類の未来に対する彼の貢献だった。なぜなら、そのすぐあとで、きわめて重要な人びとがそこをくぐって、ホテルにたどりつくからだ。

●

ドアの隙間から外をのぞいたとき、デルガードはふたりの敵をそこに見いだした。敵のひとりは彼の脳を混乱させようと小型無線機をふりかざしている——と、すくなくとも彼には思えた。それは小型無線機ではなかった。それはマンダラックスであり、ふたりの敵と見えたのは、＊ゼンジ・ヒログチと＊アンドルー・マッキントッシュだった。ふたりはバリケードの内側にそって早足で歩いていたが、これはホテルの客である以上、当然の権利だった。＊ヒログチはまだカンカンに怒っており、＊マッキントッシュはそんな彼をひやかすように、きみは人生を真剣にとりすぎるのではないかといった。ふたりはデルガードが身をひそめている店の前を、さっさと通りすぎた。そこでデルガードは表のドアから外に出ると、正当防衛と信じてふたりを射殺した。

もうこれで、ゼンジ・ヒログチとアンドルー・マッキントッシュの名前の頭に星印をつけなくてもすむ。わたしがそうしたのは、エルドラドの六人の宿泊客のうちでふたりが日暮れ

までに死ぬことを、読者におぼえていてほしかったからだ。
いまでは彼らのみんなが死んでしまった。百万年前に、数多くの人びとが適者だけしか生存できないと考えていた世界に、きょうも日が暮れる。

●

生存者のデルガードは、また店の中へひっこみ、裏口へと向かった。そこでもっとおおぜいの敵をやっつけて、自分が生き残るつもりだった。
しかし、裏口の外にいたのは、褐色の肌をした六人の幼い乞食の子供たちで――そのみんなが女の子だった。恐ろしい兵隊の化け物が、殺人兵器の一揃いを持って中からとびだしてきたとき、この少女たちは飢えきって、すっかり死を覚悟していたため、逃げだそうともしなかった。その代わりに、少女たちは口を大きくあけた――そして、茶色の目を上に向け、自分の腹をたたき、自分ののどを指して、どれぐらいひもじいかを教えた。
当時は、エクアドルのその裏小路だけでなく、世界中で子供たちがそんなしぐさをしていた。
そこで、デルガードはそのまま歩きつづけ、そのあと逮捕もされず、罰も受けず、病院へも収容されなかった。彼は、兵士たちでごったがえした町の兵士のひとりにすぎず、だれも彼の顔をはっきり見てはいなかったし、鉄帽の影になっているその顔は、どのみち、ほかのみんなとそんなにちがってもいなかった。そして、偉大な生き残りにふさわしく、彼はその

翌日にある女性をレイプして、一児の父親になった。その子供は、やがて南アメリカ大陸に生まれてくる、最後の一千万人かそこらのうちのひとりだった。

●

彼が去ったあと、六人の幼い少女は食物か、それとも食物と交換できるなにかがないかと、店の中へはいってきた。この六人は、東の山奥にあるエクアドルの熱帯雨林からやってきた孤児だった。この少女たちの親は、空から撒かれた殺虫剤のために死に絶えてしまった。そして、この少女たちはパイロットの手でグアヤキルへ運ばれ、そこで浮浪児になったのだ。この少女たちは、おもにインディオの血を受けついでいたが、その祖先には黒人もいた——遠いむかしに熱帯雨林へ逃げこんだアフリカの奴隷が。

この少女たちはカンカ・ボノ族だった。この少女たちはサンタ・ロサリア島で一人前の女性に成長し、そこでヒサコ・ヒログチといっしょに、すべての現人類の母となるだろう。

●

しかし、サンタ・ロサリア島へたどりつく前に、まずこの少女たちはホテルへたどりつかねばならなかった。そして本来なら、兵士たちとバリケードがきっとそれをはばんだはずだった。あのヘラルド・デルガード二等兵が、店の中に通路をひらいておいてくれなかったならば。

28

やがてこの少女たちは、サンタ・ロサリア島へ渡り、フォン・クライストという若いエクアドル人のパイロットがいなければ、そもそもグアヤキルに居合わせはしなかっただろう。その年の夏、あたかもロイ・ヘップバーンが埋葬された翌日に、ヒメネスは四人乗りの水陸両用機で、熱帯雨林の上空を飛んでいた。場所はティプティニ川の上流で、この川は太平洋ではなく大西洋にそそいでいる。ヒメネスはフランスの人類学者と生存のための道具一式を、ペルーの国境に近い下流のある地点に運びおろしたばかりだった。そこからフランス人は、神出鬼没のカンカ・ボノ族の捜索にとりかかる予定だった。

ヒメネスはつぎに、そこから五百キロの先、ふたつの高く険しい山脈の壁を越えた先にあるグアヤキルをめざした。グアヤキルでは、アルゼンチンからきた百万長者のスポーツマンふたりを乗せて、ガラパゴス諸島のバルトラ島へ飛ぶ予定だった。このふたりは、すでに遠洋用の釣り船と乗組員をチャーターしていた。しかも、彼らの狙いは、ありふれた魚ではなかった。ふたりが釣り上げようとしているのはホホジロザメ、つまり、その三十一年後に、

メアリー・ヘップバーンと、フォン・クライスト船長と、マンダラックスをまるのみにしたのとおなじ生物だった。

●

ヒメネスは、川岸の泥の上にこんな文字が書かれているのを、空中から目にとめた――SOS。彼は川の上に着水し、それから飛行機をアヒルのようによたよたと岸へ這いあがらせた。

彼を迎えたのは、八十歳になるカトリックの司祭、バーナード・フィッツジェラルド神父だった。神父はアイルランドからやってきて、半世紀ものあいだ、カンカ・ボノ族の中で暮らしていた。いっしょにいる六人の幼い少女は、カンカ・ボノ族最後の生き残りだった。神父とこの少女たちが川岸の泥を踏みつけて、文字を書いたのだ。

ちなみに、フィッツジェラルド神父は、オナシス夫人の最初の夫で三十五代目の合衆国大統領であるジョン・F・ケネディと共通の曾祖父を持っていた。もしかりに、神父がインディオとのあいだに子供をもうけていたら、現存のあらゆる人間がアイルランド貴族の血を誇れたかもしれない――もっとも、今日では、だれもそんなものを誇りにはしないだろう。

なにしろ、誕生してわずか九カ月後には、自分の母親がだれであったかも忘れてしまうのだから。

この少女たちがフィッツジェラルド神父と聖歌隊の練習をしているあいだに、部族のみんなが殺虫剤の空中散布を浴びたのだった。まだ死にきれずにひどく苦しんでいる犠牲者もいるので、年老いた神父は彼らといっしょにあとに残る決心をしていた。しかし、この少女たちだけはどこかへ連れていってやってほしい、と神父はヒメネスにたのんだ。だれかが世話をしてくれるような場所へ。

●

そこで、わずか五時間のうちに、この少女たちは石器時代からエレクトロニクス時代へ、ジャングルの淡水の沼沢地からグアヤキルの半塩水の湿地へと運ばれることになった。少女たちが話せるのはカンカ・ボノ語だけで、それを理解できるのは、ジャングルの中で死にかけているわずかな数の身内と、あとでわかったことだが、グアヤキルにいるうすぎたないひとりの老白人だけだった。

ヒメネスはキートの出身なので、少女たちを泊めてやれるような家をグアヤキルに持ってはいなかった。彼自身がホテル・エルドラドに部屋を借りている身分だった。のちに、その部屋にはセリーナ・マッキントッシュとその愛犬が泊ることになる。警察に相談した上で、彼はダウンタウンの大聖堂に隣りあった孤児院へ少女たちを連れていき、そこの尼僧たちは喜んで養育の責任をひきうけてくれた。当時は、だれにも行きわたるだけの食料がまだたっぷりあったのだ。

ヒメネスはそれからホテルに帰り、この物語をそこのバーテンに話した。バーテンはヘース・オルティスといって、のちにすべての電話線を外界から絶縁したのとおなじ人物である。

●

こんなわけで、ヒメネスは人類の未来に多大の影響を残した飛行士のひとりとなった。もうひとりは、ポール・ティベッツというアメリカ人である。第二次大戦中に、ヒサコ・ヒログチの母親の上へ原爆を落としたのはティベッツだった。もしかりにティベッツが原爆を落とさなくても、現人類はにこ毛におおわれていたかもしれない。しかし、彼のおかげで、より早くにこ毛が発達したことはまちがいない。

●

孤児院は、カンカ・ボノ語をしゃべれる通訳を募集した。応募してきたのは、年とったのんだくれのこそ泥で、この純血の白人は、驚くべきことに、いちばん色白な少女の祖父でもあった。若いころ、彼は貴重な鉱物を探しに熱帯雨林へはいりこみ、そこで三年間カンカ・ボノ族といっしょに暮らした。フィッツジェラルド神父がはじめてアイルランドからやってきたとき、まっさきに歓迎して部族に引き合わせたのもこの男だった。

彼の名前はドミンゴ・ケセダといい、由緒ある家柄の生まれだった。彼の父親はキート中

央大学の哲学部長をつとめた。だから、もしそうする気があれば、現人類は、連綿とつづいたスペインのインテリ貴族の後裔だ、と自慢することもできる。

●

わたしがまだコホーズに住む子供で、自分の小家族の生活についてなにも自慢の種を見いだせなかったころ、おまえの血管にはフランス貴族の血が流れている、と母が話してくれたことがあった。あのフランス革命さえなければ、いまごろおまえはあの国にある広大な領地で、お城に住んでいたかもしれない、というのである。それは母のほうの家系だった。母がつづけていうには、わたしの家系を通じて、おまえは独立宣言の署名者のひとり、カーター・ブラクストンとも血のつながりがある。だから、自分の血管に流れている血を考えても、胸を張って生きていかなければいけない。

これはすごいぞ、とわたしは思った。そこで、タイプライターに向かっている父のじゃまをして、父の家系からはなにを受けついでいるかをたずねてみた。当時のわたしはまだ精子がどんなものかも知らなかったので、父の答はそれから何年かあとになるまで理解できなかった。

「せがれよ」と父はいったのだ。「おまえは先祖代々意志の強い、機転のきく、小さな小さなオタマジャクシの家柄の生まれだ――そのどれもがチャンピオンばっかりだぞ」

ケセダ老人は、戦場のような悪臭をぷんぷんさせて、信用できるのはこのわしだけだ、と幼い少女たちに教えた。少女たちはそれを信じた。というのも、この老人が仲間のひとりの祖父であり、しかも少女たちと話ができるただひとりの人間だったからである。少女たちにしてみれば、彼の話をなにからなにまで信じるしかなかった。懐疑的になる理由さえなかった。この新しい環境は、多雨林となんの共通点もないからだ。少女たちがかたくなに誇り高く守りぬきたい真理はたくさんあったが、それらはこれまでグアヤキルで見たどんなものにも応用がきかなかった。ただひとつ例外があるとすれば、それは百万年前の都市圏では命にかかわるほど危険な、むかしながらのこんな信仰だった——身内の者が害をするはずはない。実をいうと、ケセダは少女たちを恐ろしい危険にさらすのを承知で、盗みや乞食をさせ、年頃になるやならずで娼婦に仕立てる腹づもりだった。彼がこんなことをするのは、自分の巨大脳が渇望している自尊心とアルコールを供給するためだった。ようやく彼にも、富と権力をあわせ持った人間になれる日がきたのだ。

●

ケセダ老人は少女たちを町の見物に連れだした。孤児院の尼僧たちは、この老人が公園や大聖堂や博物館などなどを案内してやっているものと思いこんでいた。だが、実をいうと、この老人が教えていたのは、観光客がどんなにいやな連中であるか、どこで彼らを見つけ、どうやってたぶらかせばいいか、彼らがどこに貴重品を隠している率が高いか、というよう

なことだった。そして少女たちは、警官に見つからないうちに警官を見つける遊びに上達し、もし敵がつかまえにきたときの用心に、ダウンタウンのうまい隠れ場所をおぼえこんだ。

●

少女たちにとって、この町での最初の一週間は〝ただのごっこ〟だった。だが、そのあと、ドミンゴ・ケセダじいさまと少女たちは、尼僧と警察から見るかぎり、完全に蒸発した。この年とった腹黒い現人類の先祖は、少女たちを波止場のそばの空き倉庫へ引越させた――たまたまその倉庫は、バイア・デ・ダーウィン号が競りあう予定になっていた、あの二隻の古い客船の片方が使っていたものだった。倉庫がからっぽなのは、観光事業がすっかり下火になって、その船が廃業に追いこまれたためだ。

すくなくとも、少女たちにはおなじ仲間があった。そして、サンタ・ロサリア島の初期の生活では、メアリー・ヘップバーンが赤ん坊をさずけてくれるまで、それが彼女たちにとって最大の慰めになった。すくなくとも、少女たちにはおなじ仲間があった――そして自分たちの言語と、自分たちの信仰と、ジョークと、歌と、その他いろいろがあった。

やがて、サンタ・ロサリア島でつぎつぎに来世への青いトンネルをくぐるたびに、彼女たちが子孫に残していくのもそれだった。すくなくともおなじ仲間がいるという慰めと、カンカ・ボノ族の言語と、カンカ・ボノ族の宗教と、カンカ・ボノ族のジョークと歌。

グアヤキルでの古き悪しき日々のあいだに、ケセダ老人は自分の悪臭ふんぷんたる体を実験台にして、まだ幼い少女たちに、娼婦の基本技術と態度を教えこんだ。

少女たちは、経済危機のくるずっと前から、疑いもなく救助を必要としていた。そう、そして陰惨きわまりない教室となった倉庫では、ほこりまみれの窓のひとつが、ちょうど額縁のように、すぐ外に停泊したバイア・デ・ダーウィン号の船尾をとりかこんでいた。その美しい白い船がまもなく自分たちを運ぶノアの箱舟になろうとは、少女たちの知るよしもないことだった。

●

少女たちはとうとう老人から逃げだした。盗みと乞食をつづけながら、宿なしの生活を送りはじめた。しかし、どういうわけか、観光客を見つけるのは日に日にむずかしくなり、しまいにはどこをあさっても食べ物がなくなった。少女たちはいまやすっかり飢えきって、だれかれかまわず近づいていては、口を大きくあけ、目をぎょろりと上に向け、小さなのどを指さして、どれぐらい長いこと食べ物にありついていないかを示すのだった。

そしてある日の午後、少女たちはエルドラドをとりまく群衆の騒ぎにひきつけられた。そこでシャッターをおろした商店の裏口が開いているのを見つけ、ヘラルド・デルガードが、

アンドルー・マッキントッシュとゼンジ・ヒログチを射殺した直後にそこから出てくるのを目撃した。少女たちは店の中に入り、表口から外に出た。そこは兵士たちが設けたバリケードの内側なので、もう少女たちがエルドラドにはいるのをさえぎるものはなかった。こうして少女たちは、カクテル・ラウンジにいたジェイムズ・ウェイトの情にすがることになる。

29

このころ、メアリー・ヘップバーンは自分の部屋でベッドに横になり、〝ジャッキー・ドレス〟のポリエチレン袋で頭をすっぽり包んで、自分を殺そうとしていた。ポリエチレン袋の内側はいまやすっかり熱を持ち、彼女は幻覚におそわれ、自分は大むかしの帆船のむし暑い船倉で仰向けにされたゾウガメだと思いこんだ。彼女はむなしく空をひっかいた。ちょうど仰向けにされたゾウガメがやるように。

よく彼女が生徒たちに話したように、太平洋を渡る大むかしの帆船は、ガラパゴス諸島に立ちよって、無防備なゾウガメをつかまえたものである。ゾウガメは仰向けにされたまま、飲まず食わずで何カ月も生きつづける。しかも、動作がのろく、おとなしく、体は大きく、数は多い。噛みつかれたり、ひっかかれたりする心配なしに、船乗りたちはゾウガメを生け捕りにできる。それから彼らはこの動物自身の役に立たない甲羅を橇代わりにして、岸で待っているロングボートまでひきずっていく。

彼らは暗がりの中へゾウガメを仰向きにして貯え、いよいよそれを食べるときがくるまで、ほったらかしにしておく。船乗りたちにとってゾウガメの美点は、冷蔵したり、すぐに食べ

たりしなくても、つねに新鮮な肉でいてくれることなのだ。

●

イリアムでの毎年の経験から、メアリーは知っていた。これほど疑いを知らない動物を、人間がこれほど残酷に扱ったことに対して、生徒のだれかがきっと怒りを表明するだろうことを。その機会をとらえて、彼女はいつもこういうことにしていた——自然界の秩序は、人間という動物がまだ現われない前から、ゾウガメにきびしい仕打ちをしてきたのだ、と。かつては、何百万頭ものゾウガメが、温帯地方の大小すべての陸地をのそのそ這いまわっていたものだ、と彼女はいうのだった。

だが、やがてある種の小動物が進化して、齧歯類となった。彼らはあっさりとゾウガメの卵を見つけ、それを食べた——すべての卵を。

あっというまに、世界各地のゾウガメにとって、おしまいの日がやってきた——齧歯類のいない、少数の島に住んでいた一族を除いて。

●

窒息状態のメアリーがゾウガメになった自分を想像したのは、予言的でもあった。遠い遠い大むかしに大部分のゾウガメに起こったのとよく似たことが、いま人類の大部分に起ころうとしていたからだ。

肉眼では見えないある種の微生物が、ドイツのフランクフルトで毎年開かれる国際ブックフェアを皮切りに、人間の卵巣の中のすべての卵子を食いつくしはじめた。ブックフェアにやってきた女性たちは、微熱と、ときには視野のかすみを訴えた。熱は一、二日で下がったが、そのあとの彼女たちはメアリー・ヘップバーンとそっくりおなじに――つまり、子供の生めない体に――なってしまった。この病気の予防法は、ついに発見されなかった。やがて、この病気は世界各地にひろがることになる。

巨大なゾウガメが小さな齧歯類(げっしるい)によって滅ぼされかけたのは、さながらダビデとゴリアテの物語だった。いま、ここにその物語がまたくりかえされるのだ。

●

そう、そしてメアリーは死に近づき、来世への青いトンネルが見えるところまでやってきた。そのあたりで、彼女は自分をそこへ連れてきた巨大脳に反旗をひるがえした。顔からポリエチレン袋をむしりとり、死ぬのをやめて階下へおりていった。そしてそこに見いだしたのは、ジェイムズ・ウェイトがバーのうしろからピーナツやオリーブやマラスキノ・チェリーやカクテル・オニオンをとりだして、六人のカンカ・ボノ族の少女に食べさせている現場だった。

このぎごちない博愛の構図は、それからの一生、メアリーの脳の中に刻みつけられたままになった。その後の彼女は、いついつまでも、ウェイトが愛他的で、同情心の深い、愛すべ

の高い評価をくつがえすようなことは、一度も起こらずにすんだ。

ほかのすべての悪事に加えて、この男は人殺しだった。

ウェイトが殺人を犯したいきさつはこうである――

彼がマンハッタン島の男娼であったころ、肥った富豪がバーにいた彼に声をかけ、きみのすてきな新品の青ベロアのシャツにはまだ値札がくっついている、と教えた。この客の血管には、王家の血が流れていた！　この客はクロアティア＝スラヴォニアのプリンス・リチャードといって、イギリスのジェイムズ一世、ドイツのフリードリヒ三世、オーストリアのフランツ・ヨゼフ一世、フランスのルイ十五世の直系の子孫だった。彼はマディソン街の北で骨董店をいとなんでおり、ホモではなかった。彼がウェイト青年に持ちかけた相談は、絹の化粧着の帯で自分の首を絞めてから、できるだけ死に近づいたところでそれをゆるめてくれないか、というものだった。

プリンス・リチャードには妻とふたりの子供がいたが、みんなでスイスへスキー旅行にでかけて留守だった。彼の妻はまだ排卵のある若さだったから、三人目の高貴な遺伝子の持ち主が生まれてくるのを、ウェイト青年が防ぎとめた可能性もある。

また、こうもいえる――もしかりに、プリンス・リチャードがそのとき殺されなかったら、彼とその妻は、ボビー・キングから〝世紀の大自然クルーズ〟に参加しないかと誘われていたかもしれない。

彼の未亡人は、やがてネクタイのデザイナーとして大成功をおさめ、〝プリンセス・シャーロット〟と自称するようになる。もっとも、彼女は平民の生まれで、スターテン島の屋根職人の娘だったから、その称号を使ったり、彼の紋章を使ったりする権利はなかった。にもかかわらず、その紋章は、彼女がデザインしたあらゆるネクタイにくっついていた。
故アンドルー・マッキントッシュも、プリンセス・シャーロット・タイを何本か持っていた。

●

ウェイトの前で、この肥満した、あごのない貴族は、四柱式寝台の上へ仰向けに寝て、大の字になった。この寝台は、プリンスにいわせると、ハンガリーのヨゼフ一世の母、ノイブルク王城のエレオノーレの持ち物だった。ウェイトは、すでに適当な長さに切りそろえてあるナイロンのロープで、彼の手足を寝台の太い柱に縛りつけた。そのロープがしまわれていたのは、寝台の裾のひだ飾りに隠された、秘密の引き出しだった。これまた古い引き出しで、かつてはノイブルク王城のエレオノーレの性生活の秘密がそこに隠されていたという。
「もがいてもはずれないように、ちゃんときつく縛ってくれ」とプリンス・リチャードはウェイト青年にいった。「だが、血行を止めないようにな。壊疽（えそ）になるのはごめんだ」

彼の巨大脳は、ここ三年間、すくなくとも月に一回は、彼にこんなことをするようにしむけていた——赤の他人を雇って自分を縛らせ、それからあと一歩のところまで首を絞めさせるのだ。なんという生存計画！

●

クロアティア＝スラヴォニアのプリンス・リチャードは、おそらく先祖の幽霊が見まもる前で、ジェイムズ・ウェイト青年に、意識がなくなるまで首を絞めてくれ、と指示した。そのあと、彼が〝ジミー〟という名でしか知らないウェイト青年は、こんな調子でゆっくり二十まで数をかぞえなくてはならない——「千と一、千と二……」などなど。

おそらくジェイムズ王と、フリードリヒ皇帝と、フランツ・ヨゼフ皇帝と、ルイ王が見まもる前で、ユーゴスラヴィアの王位請求者のひとりであるプリンスは、首に巻きつけた帯のほかは、体や衣服のどの部分にもさわるな、と〝ジミー〟に強く念を押した。自分はこれからオルガスムを経験するだろうが、〝ジミー〟が口や手を使ってその快感を高めようとしてはならない。「わたしはホモではない」とプリンスはいった。「わたしはきみを従僕として雇ったのだ——男娼としてではなく」

プリンスは言葉をついだ。「ジミー、もし、わたしが考えているような人生をきみが送ってきたとすれば、これは信じにくいことかもしれん。だが、わたしにとってこれは神聖な体験だ。だから、それを神聖にたもってくれ。でないと、百ドルのチップはやれん。よくわか

ったかな？　わたしは並みはずれた人間なのだ」

●

プリンスはウェイトにそこまで打ち明けなかったが、彼の巨大脳は、彼が意識をなくしているあいだにちょっとした映画を見せてくれるはずだった。その映画に出てくるのは、のたうつ青いチューブの一方の末端である。直径は約五メートル、内部はトラックが走れるほど広く、竜巻の漏斗のように明るい。しかし、竜巻のような唸りは出していない。その代わりに、まるでガラスのハーモニカを吹いているような、この世のものならぬ音楽が、約五十メートル奥にあるもう一端から聞こえてくる。そのチューブのねじれぐあいによって、プリンス・リチャードは奥の穴からむこうの景色をちらとのぞくことができる。金色の点や、緑の茂みらしいものを。
いうまでもなく、それは来世へのトンネルだった。

●

そこでウェイトは、教えられたとおり、この自称ユーゴスラヴィア解放者の口内へ小さなゴムのボールをつっこみ、すでに適当な長さに切って寝台の柱に貼りつけてあった粘着テープで、口をふさいだ。
それからウェイトはプリンスの首を絞め、巨大脳への血液供給と、肺への空気供給を断っ

た。ウェイトは、プリンスが意識を失ってからゆっくり二十までかぞえる代わりに、彼がオルガスムに達し、のたうつチューブを見たあと、ゆっくり三百までかぞえつづけた。それには五分かかった。

これはウェイトの巨大脳のたくらみだった。彼自身が特にやりたくてやったことではなかった。

●

もしウェイトが、謀殺か故殺か、それとも政府が彼の犯罪につけたなんらかの罪名で裁判にひきだされたとしたら、おそらく一時的精神異常を申し立てたことだろう。自分の巨大脳が、その瞬間にちゃんと働いていなかった、と主張したことだろう。百万年前には、それがどういうことかを知らない人間はだれもいなかった。

つかのまの脳の故障を詫びる言葉は、あらゆる人間の日常会話の主成分だった――「おっとっと」「失礼」「おけがはありませんか」「そんなつもりはなかったのに」「とっさのことで考えるひまもなくて」「こういうことには保険がかけてあります」「なんとお詫びすればいいか」「装塡してあるとは知らなかったんです」その他いろいろ。

●

プリンスの紋章のはいったサテンのシーツの上には、人間の精液のしずくが大小点々と散

らばり、その中では高貴なオタマジャクシがいっぱい、あてどもなく競泳をつづけていた。ウェイト青年は、サットン・プレースの高級アパートメントをあとにした。彼はなにも盗まなかったし、指紋も残さなかった。ビルの守衛は、彼の出入りを見ていたが、彼の外見についてはわずかなことしか警察に教えられなかった。ほっそりした若い白人で、まだ値札のくっついた青いベロアのシャツを着ていた、という以外には。

そして、サテンのシーツの上で、行き場もなくうろうろしている何億もの高貴なオタマジャクシには、なんとなく予言めいたところがあった。人間の精液に関するかぎり、ガラパゴス諸島を除いた全世界が、ちょうどそのサテンのシーツとおなじ状態になろうとしていたのだ。

あえてこうつけくわえるべきだろうか——「あといくばくもなく」と？

30

さて、ここで＊ジェイムズ・ウェイトという名前の頭に星印をつけよう。＊ジークフリート・フォン・クライストのつぎに死ぬのはこの男だということを示すためにだ。＊ジークフリートは、あと一時間半ぐらいで、一足先に青いトンネルに入り、＊ウェイトは、洋上へ乗りだしたバイア・デ・ダーウィン号のサンデッキでメアリー・ヘップバーンと結婚してから、約十四時間遅れてそのあとを追うことになる。

●

そのむかし、マンダラックスいわく――

終わりよければすべてよし。

ジョン・ヘイウッド（一四九七？―一五八〇？）

これがぴったりあてはまるのは、＊ジェイムズ・ウェイトの人生である。彼は悪魔の子と

思われてこの世界に生まれ、たちまち折檻がはじまった。ところが、人生の終わりに近づいたいまになって、彼はカンカ・ボノ族の少女たちに食物を与える喜びを知り、驚きにうたれた。むこうは心から感謝しており、そして助けてやるのは実に簡単なことだった。バーの中には、スナックや、付け合わせや、調味料のストックがふんだんにあったからだ。慈善行為をする機会にはこれまで一度もめぐりあわなかったが、こうしてその機会がやってきてみると、彼はすっかり夢中になった。この子供たちにとって、ウェイトは生命そのものだった。

そこへ、彼がその午後ずっとそう願っていたように、ヘップバーン未亡人が現われた。彼としてはこの女性の歓心を買う必要さえなかった。彼女は彼が子供たちに食物をやっているのを見て、たちまち好感をいだき、その前日の午後、グアヤキル国際空港からホテルへくる途中でおおぜいの飢えた子供たちを目撃したこともてつだって、彼にこういった――「まあ、あなたはりっぱだわ！　りっぱだわ！」その場でそう思いこんだ彼女は、以後その確信を変えることがなかった――この人は外にいる子供たちを見て、食べ物をやろうと中へ呼びよせたのだ、と。

「わたしはどうしてそうなれないのかしら？」とメアリーは言葉をついだ。「上の部屋でなにもせずに自分を哀れんでいただけ。本当なら、あなたとおなじようにここへきて、ここの食べ物を外のかわいそうな子供たちとわかちあわなければいけなかったのに。あなたを見ていると、自分が恥ずかしくて――でも、わたしの脳は最近うまくはたらかないんです。ときどき、自分の脳を殺してやりたくなるぐらいに」

彼女は子供たちに英語で話しかけたが、その言語は先方にまったく通じなかった。「どう、おいしい?」とか、「ママやパパはどこ?」とか、そんなことを。
この幼い少女たちは、とうとう英語をおぼえずじまいだった。サンタ・ロサリア島では、最初からカンカ・ボノ語が多数派の言語であったからである。一世紀半のうちに、それは全人類の多数派の言語になる。それから四十二年後に、カンカ・ボノ語は全人類の唯一の言語になる。

●

さしあたって、メアリーが子供たちのためにもっとましな食べ物を探す必要はなかった。バーの中にふんだんにおいてあるピーナッツとオレンジが、申し分ない食事になってくれた。子供たちは、おいしくないものを吐きだした——チェリーや、グリーン・オリーブや、小さなオニオンを。こと食事に関しては、だれの世話もいらなかった。
したがって＊メアリーと＊ウェイトはそれを見物するだけでよく、雑談をかわしながらおたがいに親密になった。
＊ウェイトは、人間がこの地上に置かれたのはおたがいに助けあうためであり、だから自分はこの子供たちに食べ物をやったのだ、といった。この子供たちは世界の未来であり、したがって、この惑星の最高の自然資源でもある、といった。
「自己紹介させてください。ぼくはサスカチェワンのムース・ジョーからきたウィラード・

フレミングです」
メアリーは自分の名と身分を明かした。もと教師で、未亡人であることを。
彼は、自分がどれほど教師を尊敬しているか、若いころの自分にとってどれほど教師が大切な存在だったかを語った。「もし、高校のときにあの先生がたに教わらなかったら、マサチューセッツ工大へは行かなかったと思いますよ。おそらくどこの大学へも行かなかっただろうな——おそらく父とおなじように、自動車の整備工になっていたでしょう」
「で、なんになられたの？」
「人間の抜けがらですよ。家内がガンで亡くなってからはね」
「あら！　ごめんなさい！」
「いやいや——べつにあなたの責任じゃない」
「ええ」
「その前は、風車の技術者でした。とっぴな考えにとりつかれましてね。これだけのきれいな無料のエネルギーがまわりにあるのに、むだにするのはもったいない。どうです、とっぴな考えでしょう？」
「すばらしい考えだわ。夫とよくその話をしたことがありますのよ」
「電力会社に嫌われましてね。石油王や、石炭王や、原子力トラストにも」
「ええ、わかりますわ！」
「あの連中も、もうぼくのことを気にせずにすむ。妻が亡くなってから事業をたたんで、世

界中をさまよい歩いているんです。自分がなにを探しもとめているのか、よくわかりません。見つける価値のあるものが存在するのか、それさえ大いに怪しいと思いますね。ただ、ひとつだけは確実だ——ぼくはもう二度と人を愛せない」
「この世界に与えられるものを、そんなにたくさんお持ちなのに！」
「もし、ぼくがまただれかを愛するとしたら、それは最近のみんなが夢中になるらしい、きれいなだけでおつむのからっぽなカワイコちゃんじゃない。あれにはがまんできません」
「そうでしょうね、わかるわ」
「ぼくは贅沢に慣らされたんですよ」
「でも、それはご自分の努力があったからよ」
「自分にこうたずねますよ。『いまのぼくに金がなんの役に立つ？』と。きっとあなたのご主人もよい夫だったにちがいない。ぼくの家内がよい妻だったように——」
「彼はりっぱな人でした。とてもすばらしい人でした」
「だから、きっとあなたもおなじ質問をなさっているにちがいない。『ひとりぼっちの人間にとって、お金がなんの役に立つの？』と。かりに、百万ドルの財産があなたにあったとして……」
「あら、とんでもない！　とてもそんな大金は」
「よろしい——それでは十万ドル……」
「そのほうがまだしも近いですわ」

「それもいまとなっては紙屑だ、ちがいますか？　そのお金でどんな幸福が買えるというんです？」
「そうねえ、ある程度の衣食住かしら」
「すてきなお住まいなんでしょうな」
「ええ、まあね」
「それに車。それもたぶん二、三台あるとか」
「車は一台です」
「きっとベンツだ」
「ジープですわ」
「で、株券や証券も持っていらっしゃる。ぼくのように」
「ロイの会社には、持株報奨制度がありましたから」
「なるほど。それに、保険制度、退職金制度――そのほか、中流階級が安定した生活にかける夢のすべてが」
「わたしたちはよく働きましたわ。ふたりとも社会に貢献しました」
「ぼくも職業を持たない妻はいやですね。家内は電話会社に勤めていました。亡くなったあと、死亡給付金やらなにやらを合計したら、相当な額になりましたよ。しかし、かえってこっちは泣きたくなりましてね。結局、自分の生活がどれほど空虚になったかを、思い知らされただけなんですから。それに、家内の小さな宝石箱、長年かけてぼくが贈った指輪や、ブ

ローチや、ネックレス。だが、それを譲ってやる子供たちもいない」
「わたしたちも子供がいませんの」
「われわれのあいだにはいろいろ共通点があるようですな。すると、あなたはだれに宝石類をお譲りになる?」
「あら——そんなにたくさんはないんですよ。いちばん値打ちのあるのは、ロイの母が残してくれた真珠の首飾りだと思います。ダイヤの留め金がついているんです。めったに装身具なんかつけないもんだから、いまのいままであの真珠のことも忘れていました」
「保険をかけておかなきゃだめですよ」

31

あの当時の人びとは、なんとよくしゃべったり、しゃべりかえしたりしたことだろう！　だれもが一日中、「ぶらー、ぶらー、ぶらー」とやらかしていた。なかには、眠っているあいだもしゃべる人間がいた。わたしの父もよく寝言をいった——母に捨てられてからは、それがいっそうひどくなった。わたしが寝椅子の上で眠っていて、真夜中になると、家のなかには父とわたししかいないはずなのに——父が寝室で、「ぶらー、ぶらー、ぶらー」としゃべっているのが聞こえるのだ。それからしばらく静かになったと思うと、また、「ぶらー、ぶらー、ぶらー」がはじまる。

そして、わたしが海兵隊にいたときも、そのあとスウェーデンで暮らしたときも、ときおりだれかがわたしを起こして、寝言はやめろということがあった。自分では、なにをしゃべったかまったく記憶になかった。なにをしゃべっていたかを相手にたずねると、その答はつねに耳新しいものだった。夜だろうと昼だろうと、どのみちそのぶらー、ぶらーの大半になんの意味があったろう？　われわれのお化けじみた巨大で活発な脳からこぼれだす、役に立たない、おせっかいな信号だという以外には？

あの脳ときたら、停止させようがなかった！　こっちが脳にやらせる仕事があろうとなかろうと、むこうはのべつまくなしに働いているのだ！　そして、そのやかましいこと！　ああ、神様、そのやかましいこと！

わたしがまだ生きていたころには、合衆国の町で、若い連中がどこへ行くにもポータブルのラジカセを持ち歩き、雷雨の音さえかき消すほどのヴォリュームで音楽を鳴らしていたものだ。その機械は〝ゲットー・ブラスター〟と呼ばれていた。百万年前には、みんなの頭の中にちゃんとゲットー・ブラスターがあるのに、それでもまだ物たりなかったのだ！

●

これだけの長い歳月のあとでも、まだわたしは自然界の秩序に激しい怒りをおぼえる。百万年前の巨大脳のように、うるさく、的はずれで、破壊的なしろものの進化を許したことにだ。もし、あのしろものが真実を語っていたのなら、みんながそれを持っていたことに意味を認めてもいい。だが、あのしろものは、しょっちゅう嘘ばかりついていた！　＊ジェイムズ・ウェイトがどれほどメアリー・ヘップバーンに嘘八百を並べたかを見たまえ！

そしていま、＊ジークフリート・フォン・クライストは、ゼンジ・ヒログチとアンドルー・マッキントッシュが射殺されるのを目撃したあと、カクテル・ラウンジに帰ってきた。もし彼の巨大脳が真実供述機だったら、彼はメアリーと＊ウェイトに、このふたりが当然知る権利のある情報、このふたりがこれから生きつづけるのにとても参考になる情報を与えただ

ろう——つまり、彼が発狂の第一段階にあること、たったいまホテルの客がふたり殺されたこと、もうあまり長くは外の群衆を防ぎとめられそうにないこと、ホテルと外の世界との連絡が断たれていること、その他いろいろ。

だが、どういたしまして。彼は平静な外見をたもっていた。残った四人の客をうろたえさせたくなかったからだ。その結果、四人の客は、ゼンジ・ヒログチとアンドルー・マッキントッシュがどうなったかを、ついに知らずじまいだった。ついでにいえば、彼らは、その一時間ほどあとに発表されるニュース、ペルーがエクアドルに宣戦布告したというニュースを聞かずじまいだったし、船長もやはりおなじだった。やがてペルーのミサイルがグアヤキル地区の目標に落下しはじめたときも、彼らは船長の言葉を信じてしまうことになる。船長の巨大脳は、べつに真実を語るのに気の咎めを感じたわけでなく、素直にそれを真実だと信じこんで、こういったのだ——あれは隕石の雨である。

そして、サンタ・ロサリア島に、自分たちの先祖がどうしてそこへやってきたのかを知りたがる人間がいるかぎり——そのような好奇心はわずか三千年ほどで消えてしまうのだが——こんな物語がくりかえされた。先祖たちは、隕石の雨に追われて、大陸からここへやってきたのだ、と。

マンダラックスいわく——

歴史のない国は幸福だ。

ベッカリーア侯爵、チェザーレ・ボネサーナ（一七三八―一七九四）

そんなわけで、船長の弟*ジークフリートは、平静そのものの口調で、階上までセリーナ・マッキントッシュとヒサコ・ヒログチを呼びにいってほしい、そしてふたりの手荷物を運んでやってほしい、と*ウェイトにたのんだ。「あの人たちを不安がらせないように、気をつけて」と彼はいった。「万事順調だと知らせてやってください。万一の場合を考えて、みなさんを空港までお送りするだけのことです」ちなみに、グアヤキル国際空港は、ペルーのミサイルの第一目標として、まっさきに破壊される運命にあった。

彼は*ウェイトがヒサコと意思を通じあえるように、マンダラックスを*ウェイトに渡した。さっき、ゼンジの死体のそばからその機械をとりかえしてきたのだ。すでにふたりの死体は見えない場所へ――ドアをこじあけられたみやげ物店の中へ――移されていた。その死体をみやげ物のベッドカバーで覆っておいたのは、ほかならぬ*ジークフリートだった。ベッドカバーには、バーのうしろの壁にかかっているのとおなじチャールズ・ダーウィンの肖像が描かれていた。

●

こうして*ジークフリート・フォン・クライストはメアリー・ヘップバーンと、ヒサコ・ヒログチと、*ジェイムズ・ウェイトと、セリーナ・マッキントッシュと、*カザックをひ

きつれ、ホテルの前に駐車中の華やかに装飾されたバスへと向かった。このバスは——ニューヨークからきた有名人たちを歓迎するために——空港からミュージシャンとダンサーを運んでくるための車だった。カンカ・ボノ族の六人の少女も、彼らといっしょについてきた。わたしが犬の名前の頭に星印をつけたのは、まもなくこの犬がこの少女たちに殺されて食べられてしまうからだ。犬が生きるのに楽な時代ではなかった。

セリーナは父親がどこにいるかを知りたがり、ヒサコは夫がどこにいるかを知りたがった。*ジークフリートは、ふたりとも一足先に空港に向かった、と答えた。彼の計画は、定期便でも、チャーター便でも、軍用便でもいいから、とにかくなんとかしてこの客たちを飛行機に乗せ、安全にエクアドル国外へ脱出させる、というものだった。アンドルー・マッキントッシュとゼンジ・ヒログチに関する真実は、その飛行機が離陸するまぎわに知らせればいい——そこまでくれば、どれほど悲しみで半狂乱になっても、このふたりはまだ生きのびられるだろう。

メアリーを手なずけるため、彼は六人の少女も連れていくことに同意した。少女たちの言葉は、マンダラックスの助けをかりても、まるでちんぷんかんぷんだった。マンダラックスにできることといえば、たぶん二十にひとつの割合で、インカ帝国の共通語であったケチュア語に近い単語を識別する程度だった。ここかしこで、マンダラックスはアラビア語の断片らしいものを聞きとったようにも思った。この言語は、遠い昔にアフリカ奴隷売買の共通語だったことがある。

そういえば、最近あまり聞かなくなった巨大脳のアイデアがある——それは奴隷制度だ。そもそもひれ足と口だけで、どうしてだれかをとらわれの身にしておけるだろう?

32

ちょうど一行がエルドラドの前にとまったバスの中で、めいめいの座席におちついたとき、群衆が手にしたいくつかのラジオから、〝世紀の大自然クルーズ〟中止のニュースが伝わった。それは群衆にとっても、また軍服を着た民間人にすぎない兵士たちにとっても、ホテルの中の食べ物がいまやみんなのものになったことを意味した。百万年ものあいだ、この世界を見てきた人間のいうことだから、信用してほしい――底を割ってみれば、いつもすべての問題は食べ物に帰着する。

マンダラックスいわく――

まず食い物、道徳はそれからだ。

ベルトルト・ブレヒト（一八九八―一九五六）

・

そこでみんなはホテルの入口にむかって殺到し、つかのまバスは人波にのみこまれたが、もちろんバスも、その中の乗客も、食料めあての暴徒にとっては関心のないものだった。し

かし、彼らはバスの車体をなぐりつけ、大声でどなった――すでにほかの連中がホテルの中にはいっており、おそらくもう食べ物は残っていないだろうと知って、やけくそになったのだ。

一方、バスの乗客にとって、これは恐ろしい状況だった。いつバスがひっくりかえされるかもしれない。火をつけられるかもしれない。投石で窓ガラスが榴霰弾(りゅうさんだん)のように飛び散るかもしれない。生存者たちに残された場所は、通路の床だった。ヒサコ・ヒログチは、盲目のセリーナに対して最初の親密な行動をとった。両手で彼女をうながし、日本語でささやきながら、頭を低くして通路にしゃがみこむようにと教えたのだ。それからヒサコは彼女と*カザックのそばにしゃがみこみ、彼女の背中に片手をおいた。

やがて訪れる歳月のあいだ、ヒサコとセリーナはどれほどおたがいをいつくしみあったことだろう！　このふたりはなんと美しく、気立てのよい子供を育ててあげたことだろう！　どれほどわたしはこのふたりを尊敬したことだろう！

●

そう、そして*ジェイムズ・ウェイトは、自分がふたたび子供たちの保護者となっているのに気づいた。通路で恐れおののいているカンカ・ボノ族の少女たちを、身をもってかばっていた。彼としては、できれば自分だけが助かりたかったのだが、メアリー・ヘップバーンがふたりで生きた砦を作ろうと、彼の両手をつかんでひきよせたのだ。もしガラスの破片が

飛び散れば、少女たちでなく、ふたりの体に食いこむはずだった。

マンダラックスいわく――

人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。

聖ヨハネ（紀元前四？―三〇？）

●

さて、このあいだに波止場では、べつの暴徒、エクアドルの社会体系の中で細動している

それこそメトセラなみの長命といわれるだろう。

爆弾が破裂するまで長生きはしないのだから。今日、もし*ウェイトの年齢の人間がいたら、

から受けついだとしても、たいしてちがいはなかったかもしれない。どのみち、だれもその

かったのは、現人類にとって幸運だった。とはいえ、もし現人類が時限爆弾めいた心臓を彼

*ウェイトが生きながらえてサンタ・ロサリア島での交尾ゲームに参加することができな

は彼の知るよしもないことに、どちらも四十代早々で心臓発作を起こして亡くなっていた。

のではなくなったのだ。これまた遺伝の作用だった。実の父娘でもあった*ウェイトの父母、

臓の筋肉が勝手気ままに痙攣しはじめ、そのために循環器系の血行が、もはや秩序正しいも

*ウェイトがこの姿勢をたもっているうちに、彼の心臓は細動を開始した――つまり、心

もうひとつの器官が、バイア・デ・ダーウィン号からその食料だけでなく、テレビ、電話、レーダー、ソナー、ラジオ、電球、羅針儀、トイレット・ペーパー、カーペット、石鹸、鍋釜、海図、マットレス、船外機、ゴムボート、その他いろいろを剝ぎとっていた。この生存者たちは、錨をあげおろしするウィンチまでを持ち去ろうとしたが、結局はめちゃくちゃにそれを壊しただけにとどまった。

すくなくとも、彼らは救命艇を残していった――しかし、その中の救急食料は見逃さなかった。

そしてフォン・クライスト船長は、下着一枚で、命からがらマストの上の見張り台へ逃げだしていた。

●

エルドラドの群衆は、まるで津波のようにバスのそばを通りすぎていった――いうならば、バスを安全な高い陸地に残して。もうバスはどこへ行くのも自由だった。まわりにはもういくらも人影がなかった。いましがたの突進にまきこまれて、けがをしたり殺されたりした少数の人たちが、そこかしこに倒れているだけだった。

そこで＊ジークフリート・フォン・クライストは、雄々しくも痙攣（けいれん）を抑えつけ、ハンティントン舞踏病につきものの幻覚をこらえて、運転席についた。彼は十人の乗客が通路にそのままましゃがみつづけるのがいちばんだと判断した――それなら、外からは見えないし、おた

がいの体熱で気分もおちつくだろう。
エンジンを始動させながら、彼はガソリンが満タンなのを見てとった。そこでエアコンのスイッチを入れ、乗客の一部との唯一の共通語である英語で、すぐに涼しくなるから、と知らせた。これだけは彼にも果たせる約束だった。
外はもう薄暗くなっていたので、彼は駐車灯をつけた。

●

ペルーがエクアドルに宣戦布告したのは、ちょうどそのころである。このとき、ペルーの戦闘爆撃機が二機、エクアドル領上空にあり、一機はそのミサイルをグアヤキル国際空港からのレーダー信号に同調させ、もう一機はそのミサイルを、ガラパゴスのバルトラ島にある海軍基地からのレーダー信号に同調させていた。この基地は、帆走訓練船一隻、沿岸警備艇六隻、洋上タグボート二隻、哨戒潜水艦一隻、乾ドック一台、そしてその乾ドックの上に引き揚げられた駆逐艦一隻の隠れ家だった。エクアドル海軍の中でも、大きさにおいてこの駆逐艦を凌ぐ船は、一隻しかなかった――バイア・デ・ダーウィン号である。
マンダラックスいわく――
それは最高の時代でもあれば、最悪の時代でもあった。英知の世でもあれば、暗愚の世でもあった。信念の歳月でもあれば、不信の歳月でもあった。光の季節でもあれば、

闇の季節でもあり、希望の春でもあれば、絶望の冬でもあった。前途にあらゆるものが満ちあふれている一方で、前途にはなにひとつなく、だれもが一路天国を目ざしているかと思えば、またその正反対の道を歩んでいた。

チャールズ・ディケンズ（一八一二—一八七〇）

33

ときおりわたしはこんな想像をめぐらしてみる。もしサンタ・ロサリア島の最初の定住者が、〝世紀の大自然クルーズ〟の本来の乗客名簿に載った人たちと乗組員であったなら、人類はどうなっていたろうか？　このリストに含まれるのは、フォン・クライスト船長、ヒサコ・ヒログチ、セリーナ・マッキントッシュ、それにメアリー・ヘップバーンをそのままとして、カンカ・ボノ族の少女の代わりに、船員と士官のほか、ジャクリーン・オナシス、ヘンリー・キッシンジャー博士、ルドルフ・ヌレエフ、ミック・ジャガー、パロマ・ピカソ、ウォルター・クロンカイト、ボビー・キング、それに〝フランス最高のシェフ〟ロベール・ペパンと、さらにもちろん、アンドルー・マッキントッシュとゼンジ・ヒログチ、その他の面々である。

それだけおおぜいの人間がやってきても、サンタ・ロサリア島は彼らを養っていけただろう――ぎりぎりかつかつの線で。たぶん、そのあいだに争いや格闘があったかもしれない――もし食料や水が欠乏すれば、殺しあいさえ起きたかもしれない。そして、きっと中には、その争いに勝利をおさめたとき、大自然かなにかがそれを喜んでくれると考える人間も出た

ことだろう。しかし、いくら彼らが生きのびても、子孫を作らなければ、こと進化に関するかぎり、くその役にも立たない。しかも、乗客名簿に記された女性の大部分は、すでに出産可能年齢をすぎていたから、奪いあいをする価値もないわけである。

事実、サンタ・ロサリア島の最初の十三年間、アキコが思春期に達するまでは、出産能力のある女性といえば、盲目のセリーナと、すでにこ毛におおわれた赤ん坊をひとりと、ふつうの赤ん坊を三人生んでいるヒサコ・ヒログチだけだった。そして、おそらく彼女たちみんなが、ときにはむりやりに、勝利者の子を受胎させられることになっただろう。しかし、長い目で見た場合、ミック・ジャガーか、ヘンリー・キッシンジャー博士か、船長か、ボーイか、それともどんな男性が彼女たちを受胎させたにしても、人類はやはり今日のそれとさほどちがっていなかったろう。

長い目で見れば、生き残りはやはり似たりよったりで、最も獰猛な闘士ではなく、最も効率のよい漁師であるだろう。この島々では物事がそのように運んでいくのだ。

●

そういえば、生きたロブスターも、あやうくガラパゴス諸島で生存技術を試されるせとぎわだった。バイア・デ・ダーウィン号が略奪される前には、二百ぴきのロブスターが、船倉の通気された水槽の中に飼われていたのだ。

サンタ・ロサリア島の周囲の海は、水温の低さからすると、たしかにロブスターには好適

だが、ちょっと深すぎるきらいがある。とにかく、ロブスターについてこれだけはいえる――必要にせまられた場合、ほとんどなんでも食えるという点では、人間そっくりなのだ。
そしてフォン・クライスト船長は、とてもとても高齢の老人になってから、水槽に飼われていたロブスターのことを思いだした。年をとるにつれて、大むかしの出来事の記憶が、いっそう鮮明になってきたのである。ある晩、夕食のあとで、彼はヒサコ・ヒログチのにこ毛におおわれた娘アキコを、こんなSFファンタジーでたのしませた。その物語の前提は、あのロブスターがガラパゴス諸島へたどりつき、それから――いま、げんにそうなったように――百万年の歳月が流れた、というものだった。そしてロブスターたちはこの惑星の優占種族となり、都市や劇場や病院や公共交通機関などなどを作りあげる。ロブスターたちはヴァイオリンを弾き、殺人事件を解決し、マイクロ手術をやってのけ、ブッククラブに加入する、その他いろいろ。
この物語の教訓は、ロブスターが人間のやったのとそっくりおなじことをやった、つまり、いっさいがっさいをめちゃくちゃにしてしまったことにある。彼らはみんな普通のロブスターでいたいと思っていた。もはやロブスターを生き茹でにする人間がどこにもいない以上、なおさらだった。
そもそも、ロブスターの苦情の種はそれだけだった――生き茹でにだけはされたくない。だが、二度と生き茹でにされたくない一心で、ロブスターは交響楽団を維持したり、その他いろいろのことをしなくてはならなくなる。船長の物語の主人公は、ロブスターヴィル交響

楽団の第二フレンチホルン奏者で、ちょうどアイスホッケーの選手に妻を寝取られたばかりだった。

●

その物語を創作したとき、船長はよその土地にいる人間たちが絶滅のせとぎわにあることも、また、もしほかの生物が優占種族になろうとする傾向を持っていたとして、それに対する抵抗力が日に日に弱まっていることも知らなかった。船長はそんなニュースを聞かずじまいだったし、サンタ・ロサリア島のほかのみんなも、その点ではおなじだった。もっとも、ここまでの話は、ほかの大きな生物に対して優位を占めた大きな生物にかぎられている。実をいうと、この惑星で最も大きな勝利をおさめているのは、つねに微生物なのだ。あらゆるダビデたちとゴリアテたちの戦いの中で、ゴリアテが勝ったことが一度でもあったろうか？

したがって、大きな生物、目に見える闘士たちのレベルでいえば、人類のように手のこんだ建設と破壊をやらかすためには、ロブスターはたしかに貧弱な候補者だった。だが、もし船長がロブスターの代わりにタコを使って、その皮肉な寓話を物語っていたら、それほど笑いはとれなかったろう。当時もいまとおなじように、このぐにゃぐにゃした生物はよく発達した脳を持っており、その脳のおもな機能は器用な腕を操ることだった。彼らのおかれた状況は、操ることのできる手を持った人類のそれと大差がない。いまに彼らの脳は、魚を捕る以外のことにも、その腕と脳を使えるようになるかもしれない。

しかし、地球での一生を狩猟者として過ごすだけでは満足せず、人類が演じたような果てしない欲望と野心の実験を試みようとするタコには、このわたしもまだお目にかかったことがない。いや、それをいうなら、そのほかのどんな種類の生物にも。

●

人間たちがカムバックして、またもう一度道具を使ったり、家を建てたり、楽器を演奏したり、などなどをするとしたら——こんどの彼らは鼻づらでそれをしなくてはならない。すでに両手はひれ足になり、手の骨はほとんどまったくその内部に隠れて、動かなくなってしまった。どのひれ足にも純粋に飾りでしかない五つの突起がついていて、交尾期になると異性をひきつける。これらは実をいうと、萎縮した五本の指の先端だ。その上、手を操るのに使われていた脳の一部はもはや存在しなくなり、そのためにいまの人間の頭蓋はずっと流線形に近くなった。頭蓋が流線形に近いほど、漁師としては好都合といえる。

●

もし、人間がオットセイのように速く遠く泳ぐことができるなら、むかし先祖がやってきた大陸まではるばる泳ぎ帰るのをさまたげるものが、なにかあるだろうか？　その答—なにもない。

魚が不足したときや、人口過剰になったときには、おおぜいの人間がそれを試みたし、ま

た、これからも試みることだろう。しかし、大陸へたどりついた一行をつねに迎えるのは、人間の卵子を食べる細菌なのだ。

探検はそれでおしまい。

それにまた、ここがこんな平和だというのに、なにを好んで大陸で暮らしてみたいといいだすものがいるだろう？　どの島々にも、いまでは風にそよぐココヤシの木や、大きな白い砂浜や、それに澄みきった青い礁湖ができて、子供を育てるには理想的な場所になったというのに。

そして、人びとがこれほど無邪気でのんびりしているのも、もとはといえば、進化が彼らから手をとり除いたからである。

マンダラックスいわく――

力仕事や、こまかい手先の仕事で、
わたしはいつもこまめに働く。
いまなお悪魔がなまけた手をさがし、
悪事をそそのかそうとしているから。

アイザック・ウォッツ（一六七四―一七四八）

34

百万年前、ペルー空軍のパイロットである若い中佐は、この惑星の大気圏のはずれで、細分された物質のきれはしからきれはしへと、自分の戦闘爆撃機を跳躍させていた。彼の名前はギレルモ・レイエス、そんな高空で生きのびられるのは、服とヘルメットが人工の大気でふくらませてあるからだった。むかしの人間は驚いたことに、不可能な夢を実現させることもできたのだ。

レイエス中佐は、前に仲間の飛行機乗りと、性交より気持のいいものがあるかどうかという議論をして、決着がつかなかったことがある。いま、彼が無線連絡をとっている相手はほかでもないその仲間で、むこうはペルーの空軍基地にいて、ペルーが正式にエクアドルに宣戦した場合、すぐにそれを彼に知らせることになっていた。

レイエス中佐は、自分の飛行機の下に吊るされた巨大な自動推進兵器の脳を、すでに作動させていた。はじめて生命の味を知ったその兵器は、すでにグアヤキル国際空港の管制塔のてっぺんにあるレーダー反射板と熱烈な恋におちていた。グアヤキル国際空港は、エクアドルの軍用機が十機もおかれている以上、れっきとした軍事目標だった。中佐の乗機にぶらさ

っているこの驚くべきレーダー熱愛家は、ある一点でガラパゴス諸島のゾウガメに似ていた──必要とするすべての栄養を、その甲羅の中に持ち合わせているところが。
やがて、そのしろものを発射してもいいぞという連絡が届いた。
そこで、中佐はそのしろものを発射した。
地上にいる彼の仲間は、そのしろものを自由にしてやるのがどんな気持のものかをたずねた。彼は答えた──性交より気持のいいものがついに見つかった、と。

●

発射の瞬間の若い中佐の感覚は、超越的なもの、彼の巨大脳の純粋な産物であるにちがいなかった。なぜなら、ミサイルが恋の達成のために出発したとき、飛行機はべつに震動も偏揺(かたゆ)れもせず、急上昇も急降下もしなかったからである。飛行機はなにもなかったように飛びつづけていた。自動操縦装置が、機体の重量や空気力学上の急激な変化をただちに補正したのだ。
この発射でレイエスの目に見えた効果はこんなものだった──高空にあるため、ミサイルは蒸気の航跡も残さず、また、その排気も透明なので、レイエスの目からすると、円筒があっというまに丸い点に縮まり、その点がけし粒に、そして無になっただけだった。その消えっぷりがあまりにもすばやかったので、存在したことさえ信じられないほどだった。
それでけりがついた。

成層圏でのこの出来事の名残りは、いまやレイエスの巨大脳の中にしかなかった。彼は幸福だった。彼は謙虚だった。彼は畏怖にうたれていた。彼は抜けがらだった。

●

いま自分のやったことを、性交中の男性の行為になぞらえたとしても、それはレイエスが狂気におかされたからではなかった。いったんスイッチを入れれば、もう彼には制御しようのないコンピュータが、発射の瞬間を正確に決定し、そして、彼からなんの助言も必要とせずに、発射機構にこまかい指示を伝えるのだ。どのみち、彼はそんな仕組みをくわしく知りはしなかった。そうした知識は専門家にまかせておけばよい。戦争においても情事とおなじく、彼は大胆不敵で楽天的な冒険家だった。

事実、そのミサイルの発射は、生殖行動における男性の役割と瓜ふたつだった。

レイエス中佐に期待されているのはこういうことだった——ご用命に応じ即時配達します。そう——そしてあっというまに丸い点に変わり、つぎにけし粒から無になった円筒は、いまやほかのだれかの責任になっていた。いまからすべての活動は、それを受け取った側で起こるのだ。

レイエスは自分の役割を果たした。いまや彼はこころよい眠気におそわれていた——そして愉快で誇らしい気分でもあった。

いま、わたしはこの物語をゆがめてはいないかと気になってきた。何人かの登場人物がまちがいなく狂気におかされているため、百万年前にはだれもかれも狂気におかされていたという印象を与えかねない、と。だが、それはちがう。くりかえすが、それはちがう。
あの当時でも大部分の人間は正気だったし、レイエスにも喜んでその普遍的な賛辞を呈したいと思う。ここでも大きな問題は狂気ではなく、人びとの脳があまりにも大きすぎる上に嘘つきなので、実用にならないことだった。

●

これから完璧な仕事をやってのけるそのミサイルを、これこそ自分の作品だといえる単独の人間はだれもいなかった。それは、長年のあいだ巨大脳を結集させて、大自然の大まかな暴力をいかに捕捉し圧縮するか、いかにそれをこぢんまりした包みに入れ、敵の上に投下するかという問題に取り組んできた人びとの共同業績だった。
このわたしもベトナムで、きわめて個人的な体験ではあるが、その種の夢を実現させた——つまり、迫撃砲や、手榴弾や、大砲を使ってだ。人類の助力なしでは、大自然がそれほど狭い空間で、それほど予測可能な破壊をおこなうことは、とうていできなかったろう。
手榴弾を投げた老婆をわたしが射殺したことは、すでに話した。ほかにもそんな話は山ほ

どあるが、わたしがベトナムで見聞きしたどんな爆発も、ペルーのミサイルがその鼻づら、ミサイルの体の中でもいちばん露出した神経末端が集中している部分を、エクアドルのレーダー反射板につっこんだときの爆発にはおよぶべくもなかった。

●

今日では彫刻に興味をもつ人間はだれもいない。ひれ足や口で、どうして鑿(のみ)や溶接トーチが使えるだろう?

とはいうものの、もし、この島々に過去の重要な出来事を記念するモニュメントを建てるとしたら、あれがぴったりかもしれない——爆発の直前、あのミサイルとあのレーダー反射板とが抱擁しあった瞬間である。

モニュメントの溶岩の台座には、そのミサイルの設計と製造と販売と購入と発射にたずさわったすべての人間、高性能爆薬を娯楽産業の一分野とみなしていたすべての人間の感慨を表現するために、こんな言葉を刻んでもよい——

……これこそ有終の美
願ってもない昇天。

ウィリアム・シェイクスピア(一五六四—一六一六)

35

ミサイルがレーダー反射板にフレンチキスをする二十分前、アドルフ・フォン・クライスト船長は、もうバイア・デ・ダーウィン号の見張り台から下りても安全だと判断した。船内のものは根こそぎ持ち去られ、生活用品と航法援助装置に関しては、一八三一年十二月二十七日に世界一周の旅に出発した、あのいさましいちびの木造帆船、軍艦ビーグル号よりも貧弱だった。すくなくとも、ビーグル号には羅針儀と六分儀があったし、この宇宙の時計じかけの中での船の位置を、星の知識からかなり正確に見当づけることのできる航海士たちもいた。その上、ビーグル号には、夜の明かりとしてカンテラと蠟燭があったし、水兵にはハンモックが、士官には枕とマットレスがあった。いまバイア・デ・ダーウィン号で夜を過ごそうとするものは、むきだしの鋼板の上で肘枕をするか、それとも、やがてヒサコ・ヒログチが、もう目をあけていられなくなったときに使うだろう手段を使うしかない。ヒサコは大サロンのはずれにあるトイレで便座に腰かけ、洗面台の上に両腕を組んで、その上にひたいをのせるのだ。

さっきわたしは、ホテルをおそった群衆を津波にたとえた。その波頭はバスの横を通りすぎて、そのまま帰ってこなかった。それに比べると、波止場の群衆はもっと竜巻に似ていた。その凶暴なつむじ風は、いまや夕暮れの中を内陸にむかって移動し、わが身をむさぼりながら——というのは、その構成分子にもいまや略奪するだけの値打ちが出てきたからだが、——ロブスターやワイン、電子機器、カーテン、ハンガー、タバコ、椅子、カーペット、タオル、ベッドカバー、などなどを運んでいた。

そこで船長は見張り台から下りてきた。やわな素足は、梯子の上り下りですりむけてしまった。彼の見わたしたところ、船にも波止場にも、もう人っ子ひとりいなかった。パンツ一枚のまま、とりあえず彼は自分のキャビンへむかった。略奪者たちがせめてなにかの衣類を残してくれていないか、と望みをかけたのだ。しかし、照明のスイッチを入れても、なにも起こらなかった——電球はぜんぶきれいになくなっていた。

とにかく、電気はまだ使える——まだ機関室のバッテリーが健在だからだ。そのわけはこうである——電球泥棒たちが機関室を真暗にしてしまったために、バッテリーや発電機や始動機が盗みだせなくなったのだ。だから、ある意味で、彼らは知らず知らず人類に大きな恩恵をもたらしたことになる。彼らのおかげで、この船はまだ航行ができた。航法援助装置がないため、この船はセリーナ・マッキントッシュとおなじく視覚がない——しかし、それで

も世界のこの地方ではいちばんの快速船であり、もし必要なら、燃料補給なしに二十日間ぶっつづけの全速力で波を切り裂くことができる。ただし、真暗闇の機関室の中で、なにも故障が発生しなければ。

しかし、やがてこんな結果が出ることになる――海上へ出てわずか五日目に、真暗闇の機関室の中で、重大な故障が発生するのだ。

●

もちろん船長には出航計画などあろうはずがなく、ただ自分の裸を隠そうとキャビンの中を手さぐりしていた。そこにはハンカチ一枚、タオル一枚残っていなかった。こうして彼ははじめて衣料不足の味を知るのだが、その当座はたんに不便なだけだったこの欠乏状態は、そのさき彼に残された三十年の人生のあいだに、ますます深刻なものになっていく。昼間は日焼けから、そして夜は冷気から皮膚を守ってくれるものが、もはやまったく手にはいらなくなったのだ。彼をはじめとする初代の定住者たちは、ヒサコの娘のアキコに生まれつき備わったにこ毛のコートを、どんなにうらやんだことか!

日中には、アキコを除いて全員が――すくなくとも、やがてアキコ自身がにこ毛におおわれた赤ん坊たちを生むまでは――鳥の羽根を魚の腸線でつなぎあわせた、こわれやすいケープや帽子をかぶらなければならなかった。

これに逆らって、マンダラックスいわく――

人間は羽根のない二足生物である。

プラトン（紀元前四二七？—三四七）

船長はキャビンの中をさがしまわりながらも、平静をたもっていた。バスルームのシャワーの水がぽたぽた垂れていたので、きっちり栓を閉めた。とにかく、それだけは彼にも修理ができた。それぐらい彼はおちついていた。すでにいったように、彼の消化器系は、まだこれから処理しなければならない食物でふくらんでいた。しかし、それ以上に彼の心の平和にとって重要なのは、だれからも、どんなことについても、たよりにされていないことだった。船を略奪した人びとの大多数は、飢えた身内をおおぜいかかえていた。ちょうどカンカ・ボノ族の少女たちのように、目をぎょろりと上に向け、腹をなで、のどの奥を指している身内を。

船長の有名なユーモアのセンスはまだ健在で、しかもいまはいつよりもそれに浸りたい心境だった。だれに義理立てをして、人生が厳粛なものだというふりをする必要があるだろうか？　この船には、もうネズミさえ残っていないのだ。もともとバイア・デ・ダーウィン号にネズミはいなかったが、これは人類にとってもうひとつの幸運だった。もし、初代の人間の定住者といっしょにネズミがサンタ・ロサリア島へ上陸していたら、六カ月かそこらで人間の食べ物はなにもなくなっていただろう。

そしてそのあとは、ネズミたちも、残された人間を食い、共食いをしたすえに、やはり死にたえたことだろう。
マンダラックスいわく——

ネズミども!
彼らは犬とたたかい、猫を殺し、
揺りかごの中の赤ん坊をかじり、
大桶のチーズをたいらげ、
コックの柄杓からスープをなめとり、
塩漬けニシンの樽を食いやぶり、
よそゆきの帽子の中に巣を作り、
きいきいちゅうちゅうと、
五十あまりの高低音で、
かしましく鳴きたてて、
女のおしゃべりをさえかき消した。

ロバート・ブラウニング(一八一二—一八八九)

船長の器用な指は、真暗なバスルームの中をさぐり、こんどはトイレのタンクの上に飲み

かけの瓶があるのを見つけたが、これにはコニャックが半分残っていたことがあとでわかる。ありとあらゆる瓶のなかで、これが船内に残された最後の一本であり、その中身は、船首から船尾、見張り台から竜骨までをくまなく探しても、人体が新陳代謝できる唯一の物質だった。もちろん、こう言いきるにあたって、食人の可能性は除外してある。船長自身がけっこう食用になるという事実を無視してある。

そして、船長の指が暗闇の中でその瓶の首をしっかりとつかんだせつな、外ではなにか大きく力の強いものが、バイア・デ・ダーウィン号をどんと横柄にこづいた。それと同時に——ひとつ下のボートデッキで男どもの声がした。そのわけはこうである——コロンビアの貨物船サン・マテオ号に燃料と食料を届けたタグボートの乗組員が、バイア・デ・ダーウィン号の二隻の救命艇をもらっていこうとしたのだ。彼らは右舷の救命艇を水面へひきおろすために、船首索を解きはなって、タグボートでバイア・デ・ダーウィン号の船首を河口へ向けかえようとしていた。

こうして、バイア・デ・ダーウィン号を南アメリカ大陸に結びつけるものは、いまや船尾のロープ一本だけになった。詩的にいえば、その後部係船索は、全人類の白いナイロン製の臍(へそ)の緒だった。

●

まかりまちがえば、船長はバイア・デ・ダーウィン号でわたしの幽霊仲間になっていたか

もしれない。しかし、救命艇を盗んだ男たちは、まだ船内にだれかがいるとは思いもしなかった。

このわたしを除けば、ふたたびひとりきりになって、船長は心おきなく酒に浸りはじめた。そうしてなにがいけない？　タグボートは、二隻の救命艇を従順にあとにしたがえて、すでに上流へと姿を消していた。クリスマス・ツリーのように明かりをつけ、ブリッジのてっぺんでレーダー反射板をぐるぐる回転させていたサン・マテオ号も、下流へ去ったので、もう船長がブリッジから好きなことを大声でわめいても、ぶっそうな連中の注意をひくことはなかった。船の舵輪に両手をのせて、船長は星明かりの夜の中へ呼びかけた。「転落者一名！」船長は自分のことをいったのだった。

なにも起こらないだろうとたかをくくって、船長は左舷エンジンの始動ボタンを押した。船の腹部から、健康そのものの巨大なディーゼル・エンジンが、くぐもった、深紫色のごろごろという唸りをひびかせた。彼はもうひとつの始動ボタンを押して、さっきのエンジンの一卵性双生児に生命の贈り物を与えた。このたよりになる、ぐちをいわない奴隷たちは、インディアナ州コロンバスで生まれた――メアリー・ヘップバーンが動物学の修士号をとったインディアナ大学から、さほど遠くないところで。

世間はせまい。

ディーゼル・エンジンがまだ動いたことは、船長からするとコニャックで泥酔する新しい理由になった。彼はエンジンのスイッチを切ったが、そうしてよかったといえる。もし、エンジンが熱くなるまでそのまま運転をつづけていたら、その温度異常が、成層圏にいたペルーの戦闘爆撃機の電子の目にとまったかもしれない。ベトナムのアメリカ軍は鋭敏な感熱計器を持っていて、夜間でも人間の存在、いや、すくなくとも大型哺乳類の存在を探知することができた——その体が、周囲の環境よりもほんのすこし温かいからだ。

いつだったか、わたしが一斉砲撃を命じたら、相手は一頭の水牛だったことがある。たいていの場合、そこにいるのは人間だった——そうっと忍びよってきて、できればわれわれを殺そうとしている人間だった。なんという人生！　もし、すべての武器を捨てて、漁師になれといわれたら、わたしは喜んでそうしたことだろう。

●

そして、船長がブリッジの上で考えていたのも、それに似たことだった——「なんという人生！」などなど。すべてはとても滑稽だったが、彼は笑う気になれなかった。いまや人生が自分の力量を測り、たいした価値はないと判断して、あっさり自分を見捨てたのだ、と思った。運命を知るよしもなく！

船長は、ブリッジと士官室の後方にあるサンデッキのむきだしの鋼板の上へ、はだしで出ていった。サンデッキのカーペットが剝ぎとられたため、武器の台座を据えつけるための栓

をした穴が、星明かりの下でもはっきりと見えた。このわたしも、そのサンデッキの鋼板のうち、四枚を溶接したのだ。しかし、わたしの仕事の大部分、わたしの最高の仕事は、もっと船の奥深くにあった。

船長が星を見上げると、彼の巨大脳は、この惑星が大宇宙に浮かぶちっぽけな砂粒にすぎないこと、彼がその砂粒にくっついた細菌にすぎないこと、彼がどうなろうとなんのちがいもないことを、彼に告げた。むかし、このての巨大脳は、過剰容量を使ってよくこんなことをした——このてのたわごとを並べたてた。なんの目的で？　今日ではどこを探しても、そんなことを考えるものはだれもいない。

こうして船長は流れ星を見ることになった——大気圏のはずれで燃えつきる隕石を。空のそのあたりでは、気密服を着たレイエス中佐が、いま正式にペルーがエクアドルと交戦状態にはいったことを知らされたばかりだった。その流れ星は船長の巨大脳にキューを与え、彼はまたしても驚嘆におそわれた——地球の表面に落下する隕石に対して、なんと人びとは無警戒なのだろう、と。

そしてその瞬間、空港ではとてつもない大爆発が起こった。ミサイルとレーダー反射板がハネムーンに飛び立ったのだ。

●

車体の外側をアオアシカツオドリや海イグアナやペンギンやコバネウなどなどの絵で飾り

たてたホテルのバスは、ちょうどこのとき病院の前にとまったところだった。船長の弟＊ジークフリートは、意識を失った＊ジェイムズ・ウェイトの手当をたのみに、これから病院の中へはいろうとしていた。＊ウェイトが心臓発作を起こしたために、空港行きのバスはまわり道をする羽目になり、かえってそのおかげで乗客全員の命が救われたのだ。
大爆発から発生した巨大な衝撃波の泡は、煉瓦のように濃密だった。バスに乗っていた人びとは、病院そのものが爆発したような気がした。バスの窓ガラスもフロントガラスも中へ吹き飛ばされたが、運よくどれも飛散防止タイプだった。ガラスが榴霰弾に変わることはまぬかれた。そのかわりに、白いトウモロコシの粒に似たものが、メアリーとヒサコとセリーナと＊カザック、あわれな＊ウェイトとカンカ・ボノ族の少女たちと船長の弟の上に、雨あられと降りかかってきた。
おなじようなことがバイア・デ・ダーウィン号の上でも起こる。窓ガラスがみんな内側へ吹き飛ばされ、白い粒が足もといちめんに散らばることになる。
ついさっきまでこうこうと明かりのついていた病院は、もう町ぜんたいとおなじく真暗になって、中からは助けを求めるさけびが聞こえた。バスのエンジンは、ありがたいことにまだ動いており、ヘッドライトは行く手の瓦礫の中に通じた細い通路を照らしだしていた。そこで＊ジークフリートは、刻一刻と悪化する麻痺をこらえて、なんとかそこからバスを発車させた。爆風でやられた病院の中に、もし生存者がいるとしても、彼やこの乗客の中のだれが助けになれるというのだろう？

そして、瓦礫の迷路が作りだす論理は、のろのろ運転のバスを爆心地の空港から遠ざけ、波止場のほうに導いていった。町のはずれから沼沢地を横切って遠洋船の桟橋へ向かう道路には、破壊の跡も見当たらないぐらいだった。このあたりまでくると、衝撃波のほうも打ち倒す相手が見つからなかったのだ。

●

＊ジークフリート・フォン・クライストがバスを桟橋へと走らせたのは、それがいちばん抵抗のすくない道であるからだった。行く先が見えているのは彼だけだった。ほかのみんなはまだバスの床にしゃがみこんでいた。メアリー・ヘップバーンが意識のない＊ジェイムズ・ウェイトをかかえて、カンカ・ボノ族の少女たちからひき離したので、いまの彼はメアリーの膝を枕にして、仰向けに横たわっていた。カンカ・ボノ族の少女たちの巨大脳は、なにが起こっているかについて仮説のはしくれも手にはいらないため、完全に活動を停止していた。ヒサコ・ヒログチとセリーナ・マッキントッシュと＊カザックも、おなじように虚脱状態だった。

そして、みんなの耳が聞こえなくなっていた。衝撃波が、内耳にある骨、体内でいちばん小さな骨に、おそろしい乱暴を働いたからだ。このあとで完全に聴覚を回復するものはだれもいないだろう。船長を例外として、サンタ・ロサリア島の初代定住者は、みんなすこし耳が遠く、そのために会話の大部分は、それがどんな言語であろうと、「えっ？」や、「もっ

と大声で」などなどで占められることになる。
さいわいにして、この欠陥は遺伝性ではなかった。

●

アンドルー・マッキントッシュやゼンジ・ヒログチとおなじように、一行はそれがなんの爆発であったかを、ついに知ることがないだろう——来世への青いトンネルのむこう側で、そうした質問に答が見つかりでもしないかぎりは。その爆発と、そのあともう一度の爆発が、外宇宙から落下する白熱した岩石の衝撃だったという船長の説明を、一行はすんなり受け入れた——ただし、心からそれを信じたわけではなかった。やがて、いろいろのことで、船長が滑稽なほどの誤りをおかしていたことが証明されるからである。

●

麻痺にかかった船長の弟は、耳鳴りの中で聴覚がいくらかもどってきたのを感じながら、バイア・デ・ダーウィン号に近い桟橋の上にバスをとめた。彼はその船が避難所になるとは期待していなかった。だから、その船が真暗で、人っ子ひとりいるようすがなく、窓はすっかり割れ、救命艇がなくなり、船尾のたった一本のロープでかろうじて桟橋につなぎとめられているのを見ても、驚きはしなかった。自由になった船首は桟橋からすこし離れ、タラップが水上にぶらさがっていた。

その船もホテルとおなじように略奪を受けたのだ。桟橋には、ハゲタカどもが残していった包装紙や、段ボール箱や、そのほかのごみが散乱していた。

＊ジークフリートは、兄に会えるとも期待していなかった。船長がニューヨークを出発したのは聞いていたが、実際にグアヤキルへ着いたことは知らされていない。かりに船長がグアヤキルのどこかにいるとしても、おそらく死んだか負傷したかだろうし、どのみち、たいしてだれの力になれるわけでもない。歴史のその時点では、グアヤキルのだれひとりとして、たいしてだれかの力になれる立場ではなかった。

マンダラックスいわく——

天は自分を助ける者を助ける。

ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ（一六二一—一六九五）

＊ジークフリートがとりあえず見つけたかったのは、この混沌状態の中の休憩所だった。それは見つかった。ここには、ほかにだれもいるようすがない。

そこで彼はバスから出て、ハンティントン舞踏病によって起こる不随意的なダンスに似た動作を体操で抑えられないものかとためしてみた——挙手跳躍や、腕立て伏せや、膝の屈伸や、その他いろいろで。

月が昇ってきた。

その瞬間、彼は見た。バイア・デ・ダーウィン号のサンデッキの上に、ひとつの人影が立ちあがるのを。

それは彼の兄だったが、船長の顔は影になっていたため、＊ジークフリートにはわからなかった。

＊ジークフリートは、その船に幽霊がとりついているという内緒話を聞いたことがあった。そこで、これはてっきり幽霊だと思った。わたしだと思った。このレオン・トラウトだと思った。

36

しかし、船長のほうは弟に気づいて、わたしがもし実体のある幽霊だったらそうさけびたくなったかもしれないことをさけんだ。こうさけんだのだ——「〝世紀の大自然クルーズ〟へようこそ!」

●

船長は空になった酒瓶をまだわしづかみにしたまま、弟となるべくおなじ高さに近づこうと、船尾のメインデッキまで下りてきた。*ジークフリートはすっかり耳が遠くなっていたので、ふたりのあいだに横たわる狭い濠へもうすこしで落っこちるところまでにじりよった。その濠に橋を渡しているのは後部係船索、つまり、あの白い臍の緒だった。

「耳がよく聞こえない」と、*ジークフリートはいった。「兄さんもか?」

「いや」と船長は答えた。*ジークフリートよりも爆心から遠かったからだ。しかし、船長は鼻血を出しており、自分ではそれを滑稽に思っていた。サンデッキの上で衝撃波にふっとばされたときに、したたか鼻を打ったのだ。コニャックが彼のユーモアのセンスをつのらせ、

なにからなにまでが滑稽でたまらなくなっていた。
彼は*ジークフリートが桟橋の上でやった体操を、ふたりが父親から受けついだかもしれない舞踏病を茶化したものだと考えた。「さっきのおやじのまねは、面白かったよ」と彼はいった。この会話はすべてドイツ語――この兄弟が幼いときに使った言語、この兄弟が最初におぼえた言語だった。
「兄さん!」と*ジークフリートはいった。「それは悪い冗談だ!」
「なにもかも冗談さ」と船長はいった。
「そこにはまだ薬があるかね? 食べ物があるかね? ベッドがあるかね?」
船長は、マンダラックスがよく知っている引用で答えた――

わたしは山ほど借財がある。持ちものはなにもない。それを貧者に分け与えよう。
フランソワ・ラブレー(一四九四―一五五三)

「酔ってるな!」と*ジークフリートはいった。
「いけないか?」と船長は問いかえした。「どうせおれは道化師だ」コニャックが脳におよぼしたでたらめな損傷によって、彼はひどく自己中心的になっていた。すこしむこうの真暗な、破壊された町の中で、ほかのみんながどんなに苦しんでいるかには、頭がまわらなかった。「乗組員が羅針儀を盗もうとするのを止めたとき、そいつがなんといったか知ってるか

ね、ジギー？」

「いや」＊ジークフリートはそう答えて、また踊りはじめた。

「どきやがれ、この道化師！」と船長は口まねをして、笑いに笑った。「やつは畏れ多くも提督閣下にそういったんだ、ジギー。本来なら、桁端へ吊るし首にするところさ、ヒック——もし、だれかが、ヒック、桁端を盗んでいなければな、ヒック。夜明けを合図に、ヒック——もしだれかが夜明けを盗んでいなければな」

ちなみに、人間はいまでもしゃっくりをする。いまでも、しゃっくりを自由に出したり止めたりする力はない。彼らのしゃっくりを、わたしはしょっちゅう耳にする。広く白い砂浜に寝そべったり、青い礁湖のまわりでぴちゃぴちゃ遊んでいる最中に、彼らが不随意的に声門を閉じ、ひきつるように息を吸いこむ音を。どちらかといえば、いまの人間は百万年前の人間よりもひんぱんにしゃっくりをする。これは進化というよりも、彼らの多くが生魚をよく嚙まずにのみこむことが原因らしい。

そして人びとは、脳が縮んでしまったのに、いまでもむかし以上によく笑う。もしおおぜいの彼らが砂浜に寝そべっていて、中のだれかがおならをすると、ほかのみんなが笑いに笑う。ちょうど百万年前の人びとがそうしたように。

37

「ヒック」と船長はつづけた。「実をいうと、おれの説の正しさが裏づけられたんだよ、ヒック、*ジークフリート。むかしからおれは、大きな隕石がときどき地球に衝突するのを予想しておくべきだといってただろう。その日が、ヒック、ついに、ヒック、きたわけだ」

「さっき爆発したのは病院だよ」と*ジークフリートはいった。彼にはそんなふうに見えたのである。

「病院があんな爆発をするものか」船長はそう答えてから、*ジークフリートがはらはらするのをよそに、手すりの上によじ登って、桟橋へ跳びうつろうとした。実をいうと、たいした跳躍ではなかった——濠の幅は二メートルあるかなしだが、船長はぐでんぐでんだった。

船長はそれでもつつがなく飛行を終え、両膝でどすんと桟橋に着地した。これでしゃっくりは治った。

「船にはほかにだれかいるのかね?」*ジークフリートがきいた。

「ここにいるのは、われわれヒヨッコだけさ」船長は、自分と*ジークフリートがおたがい

同士のほかにだれかを救う責任を持たされていることに、まったく気づかなかった。バスの中の全員は、まだ床にしゃがんでいたからだ。ちなみに、＊ジークフリートは、もしメアリー・ヘップバーンがヒサコ・ヒログチと意思交換をしなければならない場合を考えて、マンダラックスを彼女に預けていた。マンダラックスは、前にもいったように、カンカ・ボノ族との通訳としてはまったく落第だった。

船長は＊ジークフリートの震える肩に片手をおいていった。「弟よ、そうおびえるな。われわれの家系には、長い生き残りの伝統がある。ちょっとした隕石の雨ぐらいが、フォン・クライスト家にとってなんだというんだ？」

「兄さん――」と＊ジークフリートはいった。「あの船をもっと桟橋に近づける方法はないもんかな？」彼はバスの乗客を船に移したほうが、すこしは安全だし、それにすくなくとも窮屈ではないだろう、と思ったのだった。

「船なんかくそくらえだ。なにも残っとらんよ」と船長は答えた。「やつらはレオンのだんなまで盗んでいった」くどいようだが――レオンとはわたしである。

「兄さん――」と＊ジークフリートはいった。「あのバスには十人の客が乗っている。中のひとりは心臓発作を起こした」

船長はバスのほうに目をこらした。「なんで透明人間ばっかりなんだ？」彼のしゃっくりは止まったままだった。

「床にしゃがんでいるんだよ。みんな死ぬほどおびえている」＊ジークフリートはいった。

「たのむから酔いをさましてくれ。わたしはあの人たちの世話ができない。あとは兄さんがやってくれるしかない。もうわたしは、自分の行動もままにならないんだよ、兄さん。こともあろうにこんなときに――おやじの病気が出てしまった」

時間は止まった。こと船長に関するかぎりは。彼にとって、それはなじみ深い錯覚だった。年に数回、それを経験するきまりだった――冗談の種にできないニュースを聞かされたときにかぎってだ。その時間をどうすればもとどおりに動かせるかも、船長は知っていた。その悪いニュースを否定すればよい。

「嘘だろう」と彼はいった。「そんなはずはない」

「面白半分にこんなダンスをしていると思うのか？」＊ジークフリートはそういうと、不随意的なダンスをしながら、兄のそばを離れていった。

ふたたび不随意的に船長に近づきながら、＊ジークフリートはいった。「わたしの人生は終わった。たぶん、生まれてくるべきじゃなかったんだろう。すくなくとも子供は作らなかった。どこかのあわれな女性がまた新しい犠牲者を生まないように」

「おれはどうしていいかわからん」船長はそういってから、みじめにつけたした。「それにくそいまいましいほど酔っている。なんてこった――まさかこんな責任をしょいこむとは思わなかった。へべれけなんだ。なにも考えられない。どうしたらいいか教えてくれよ、ジギー」

船長は泥酔していてなにもできず、目をまるくし、口をぽかんとあけてそばに立っている

だけだった。そのあいだに、メアリー・ヘップバーンとヒサコと*ジークフリートが、気のどくな*ジークフリートのダンスの発作がおさまるたびに、バスを使ってバイア・デ・ダーウィン号の船尾を桟橋にひきよせ、それからバスを船尾のすぐ下まで持っていって、船の下甲板の梯子代わりにした。そうしないと手の届かない高さだった。

そう、たしかに、こんな感想は出てくるだろう。「なんとうまい工夫じゃないか」とか、「巨大脳がなければ、とてもそんなことはやれなかったはずだ」とか、「いまの人間には、とてもそんな名案は思いつかない」とか、その他いろいろ。しかし、もとをただせば、ほかの人間の巨大脳の創造物や行動によって、この惑星がほとんど住めなくなったからで、それがなければ、この人たちがそんなに臨機応変の才能を示す必要もなく、そんなにややこしい困難にぶつかることもなかったのだ。

マンダラックスいわく――

回転木馬でなくしたものは、ブランコでとりかえす!

パトリック・レジナルド・チャーマーズ(一八七二―一九四二)

●

この移動でいちばん手がかかるのは、意識のない*ジェイムズ・ウェイトだろう、とみん

ながが予想していた。やがてわかるのだが、実際には、いちばん手がかかったのは船長だった。泥酔しているために、人間の鎖の輪のひとつとしてはとても信用がおけない上に、バスの後部席にすわって自分がどんなに酔っぱらっているかを歎くばかりだったのだ。

船長のしゃっくりは復活していた。

みんながどうやって＊ジェイムズ・ウェイトを船に運びあげたか、その方法はこうである。桟橋の上には後部係船索のあまりがたくさんあったので、メアリー・ヘップバーンがそのロープの端を使って、彼のためにハーネスを作った。このハーネスは、彼女の発案だった。登山家としての経験がここでものをいう。みんなはハーネスをつけた彼をバスのそばに横たえた。それからメアリーとヒサコと＊ジークフリートがバスの屋根に登り、できるだけそうっと彼をひきあげた。つぎに三人は手すりを越えて、彼をメインデッキへと移しかえた。あとで、彼はサンデッキへ運びあげられ、そこでつかのま——すくなくとも、メアリー・ヘップバーンと正式に夫婦になる手続きのあいだ——意識を回復することになる。

●

＊ジークフリートはそれから下へもどってきて、船長にこんどは彼が乗船する番だと知らせた。船長は、バスの屋根へよじ登りしなに醜態を演じるのがわかりきっていたので、しきりに時間稼ぎをした。泥酔したまま跳びおりるのは簡単だ。しかし、ほんのすこしでも足場の悪いところをよじ登るのは、また別問題である。百万年前、なぜあんなにおおぜいの人間

が、わざと自分の脳の大部分をノックアウトするためにアルコールを飲んだのかは、いまも興味のつきない謎として残っている。ひょっとすると、われわれは進化を正しい方向へ押しやろうとしていたのかもしれない——より小さい脳という方向に。

そこで船長は、時間稼ぎのため、そして、ひとりで立ちあがれないほど酔ってはいるが思慮分別のあるところを見せるため、弟にこういった。「あの男はまだ動かせる状態じゃないだろう」

これには＊ジークフリートもしびれを切らした。「そいつはまずかったな、ええ？——どのみち、あの気のどくなやっこさんはもう動かしちまった。やっぱりヘリコプターを呼んで、ウォードルフ・アストリア・ホテルのブライダル・スイートへ運ばせるべきだったかね」

そして、これがフォン・クライスト兄弟のあいだでとりかわされた最後の言葉になる。そのあと、船長がバスの屋根へ何度も何度もよじ登ろうとしたさいの、「それっ！」や、「がんばれ！」や、「おっとっと！」などなどの掛け声はべつとして。

さて、すっかり屈辱にまみれはしたが、とうとう船長は船の上にたどりついた。すくなくともバスの屋根からデッキへは、だれの手もかりずに登ることができた。それから＊ジークフリートはメアリーに、みんなを連れて船に乗りうつり、＊ウェイトのためにできるだけの看護をしてやってほしいとたのんだ。もちろん、どちらもまだ彼の名がウィラード・フレミングだと信じていた。メアリーはいわれたとおりにした。＊ジークフリートが男としての誇りから、だれの助けもかりずにバスの屋根へよじ登るつもりなのだろう、と思いこんだのだ。

こうして＊ジークフリートはたったひとりで桟橋に残り、みんなを見上げることになった。みんなは彼がすぐに合流してくるものと思ったが、そうはならなかった。意外にも、彼はバスの運転席に乗りこんだ。手足がぴょこん、ぴょこんと思いがけない動きをするのにもかまわず、エンジンを始動させた。全速力で町へひきかえし、車をどこかにぶつけて自殺する計画だった。

だが、バスのギアを入れないうちに、二度目のとてつもない爆発の衝撃波が彼を昏倒させた。こんどの爆発は、町の中でも近くでもなかった。こんどの爆発が起こった場所は、もっと下流で、だれも住んでいない沼沢地のどこかだった。

●

38

二度目の爆発も、最初のそれとおなじだった。ミサイルがレーダー反射板とまぐわったのだ。こんどの場合、その反射板は小さなコロンビアの貨物船サン・マテオ号のてっぺんにあった。そのミサイルに生命の息吹きを与えたペルーのパイロット、リカルド・コルテスは、バイア・デ・ダーウィン号のレーダー反射板に一目惚れさせたつもりだった。だが、もはやバイア・デ・ダーウィン号はレーダーを持っておらず、したがってこのミサイルから見れば、性的魅力はゼロだった。

コルテス少佐がやったことは、百万年前の時代に〝悪気のないまちがい〟と呼ばれたものだった。

ことのついでにいっておこう。もし〝世紀の大自然クルーズ〟が、計画どおりに船いっぱいの有名人を乗せて実施されていたら、ペルーはけっしてバイア・デ・ダーウィン号を爆撃しなかったろう。ペルーも世界の世論に対して、そこまで無神経ではなかったろう。しかし、航海の中止で、この船はいわばまったく別物になった。つまり、それは潜在的な軍隊輸送船であり、それに乗りこんでいるのは、常識ある人間ならだれでもそう考えるように、こっぱ

みじんにふっとばすか、ナパームで焼くか、機関銃で掃射するか、なんにしろ効率よく殺してくれと、むこうからたのんでいるような人間たち、早くいえば〝海軍要員〟なのだ。

●

一方、外海と故郷をめざすコロンビア人たちは、月明かりの沼沢に浮かぶサン・マテオ号の中で、一週間ぶりのまともな食事にありつきながら、こう考えていた。船のレーダー反射板は、回転する聖母マリアのように自分たちを見まもってくれている、けっして自分たちに害をもたらしたりはしない、と。運命を知るよしもなく。

ちなみに、彼らが食べていたのは、もうあまり乳の出ない、年とった乳牛だった。サン・マテオ号に燃料と食料を届けたタグボートの上に、防水シートをかぶせて置いてあったものはこれだった。この雌牛は、岸からは見えないように、桟橋とは反対側から貨物船の上に引き揚げられた。岸には、その雌牛を手に入れるためなら人殺しもやりかねないほど、殺気立った群衆がいたからだ。

エクアドルをいままさに離れる莫大な量の蛋白質――それがその雌牛だった。

●

彼らがその雌牛を引き揚げた方法は興味深い。彼らは吊り索も荷役用の網も使わなかった。雌牛の二本の角にぐるぐるロープを巻きつけて、一種の冠を作った。それから、このもつれ

た冠にクレーンのケーブルの端についた鋼鉄のフックをひっかけた。それから上にいるクレーンの運転手が、そのケーブルを巻きとっていったので、まもなく雌牛は宙吊りになった——生まれてはじめて直立の姿勢になり、後足をひろげ、乳房をむきだしにし、前足を水平に突きだしたかっこうは、どことなくカンガルーに似ていた。

この巨大な哺乳動物を作りだした進化の過程も、全体重が首にかかるそんな姿勢をとらされるとは、勘定に入れていなかった。宙吊りになった雌牛の首は、ちょうどアオアシカツオドリか、白鳥か、それともコバネウを思わせるものになってきた。

その当時のある種の巨大脳からすると、雌牛のこの飛行経験は笑いの種であったかもしれない。およそ優美な光景とはほど遠かったから。

やがてサン・マテオ号の甲板におろされたときには、雌牛は重傷のために自力で立つことさえできなかった。しかし、それは予想されたことであり、なんの支障もないことだった。そんな取り扱いを受けた牛でもまだ一週間やそこらは生きつづけ、人間に食われるときがくるまで自分自身の肉を腐敗から防いでくれることを、船員たちは長い経験からよく知っていた。その乳牛に対してなされたやりくちは、帆船時代にゾウガメに対してなされたことの要約版だった。

どちらの場合も、冷蔵の必要はなかった。

幸福なコロンビア人たちがあわれな雌牛の肉を頬ばり、のみこんでいるとき、高性能爆薬の進化における最新の成果、〝ダゴナイト〟が彼らをこっぱみじんにふっとばした。ダゴナイトは、いうならば、おなじ会社が作って〝グラッコ〟と名づけた、ずっと力の弱い爆薬の息子だった。いうならば、グラッコはダゴナイトの父となり、そしてこの親子は、ギリシア火薬や、黒色火薬や、ダイナマイトや、コルダイトや、TNTの末裔となったのだ。

だから、こういってもよいかもしれない。このコロンビア人たちは雌牛をひどく虐待したが、それに対する懲罰は迅速でしかも恐ろしいものだった。なによりも巨大脳を持ったダゴナイトの発明家たちのおかげで。

●

このコロンビア人たちがどれほど雌牛を虐待したかに比べると、音よりも速く空を飛んでいるリカルド・コルテス少佐は、大むかしの高潔な騎士のように見えるかもしれない。そして彼自身も、雌牛のことや、ミサイルがなんに命中したかをまったく知らずに、自分のことをそう考えていた。彼はバイア・デ・ダーウィン号が破壊されたことを上官に無線で報告した。それから、その午後、空港へミサイルを発射し、すでに基地へ帰還しているレイエス中佐に、スペイン語のこんなメッセージを伝えてほしいとたのんだ——「まったくだ」

まもなくレイエス中佐は、ミサイルの発射が性交のように爽快だという意見に、親友が同意したことを知ることになる。そしてコルテス少佐は、自分が破壊したのがバイア・デ・ダ

ーウィン号ではなかったことを知らずにおわり、河口で挽肉にされてしまったコロンビア人たちの友人や親族は、彼らの身の上になにが起きたかを知らずにおわることになる。

●

空港に落ちたミサイルは、ダーウィン的表現からすると、サン・マテオ号に落ちたそれよりも、はるかに有効だった。そのために、それがなければ自分の種の子孫をふやすはずだった何千もの人間と、鳥と、犬、猫、ネズミ、などなどが死んだ。

沼沢での爆発で死んだのは、十四人の乗組員と、船にいた約五百ぴきのネズミ、それに二、三百羽の鳥と、若干のカニ、魚、などなど。

しかし、食物連鎖の最底辺、自分たちの排泄物と先祖たちの死骸で沼地の汚泥を作りあげている何億何兆の微生物にとっては、おおむねそれは効果のない攻撃だった。こうした微生物にとって、爆発はべつに苦にならなかった。急激なスタートやストップに対して、それほど敏感ではないからだ。バスのハンドルを握って自殺を考えていた＊ジークフリート・フォン・クライストのように、急停止で自殺することは、彼らにはできない相談だった。

彼らはとつぜんある界隈からべつの界隈へと移された。以前の界隈をまわりにくっつけたまま空中を飛行し、しぶきを上げて落下した。この爆発の結果、彼らの多くは雌牛やネズミや乗組員などなどの高等生物の残骸にありついて満腹し、かえって以前よりも繁栄を経験したぐらいだった。

マンダラックスいわく――

自然がいかにわずかなもので満足するかを見るのはすばらしい。

ミシェル・エケム・ド・モンテーニュ（一五三三―一五九二）

グラッコの息子、高貴なダイナマイトの直系子孫であるダゴナイトの爆発は、河口に津波を巻きおこし、六メートルに達したそれはグアヤキル港の桟橋からバスを押し流して、ジークフリート・フォン・クライストを溺死させた。どのみち死にたがっていた彼を。

もっと重要なことに――その大波を食らって、人類の未来を大陸につなぎとめていた白いナイロンの臍の緒が、ぷっつりと切れた。

その大波はバイア・デ・ダーウィン号を一キロも上流に運びあげ、そこの浅瀬の泥の上へそっと船をおきざりにしていった。バイア・デ・ダーウィン号は、月光だけでなく、グアヤキルのいたるところで発生した火災の、毒々しくぎらつく炎に照らされていた。

船長はブリッジにたどりついた。彼ははるか下方の暗闇の中にある双子のディーゼル・エンジンを始動させた。彼が双子の推進機を目ざめさせると、船は静かに泥の州を離れた。船は自由になった。

船長は舵をとって、川下をめざし、外海をめざした。

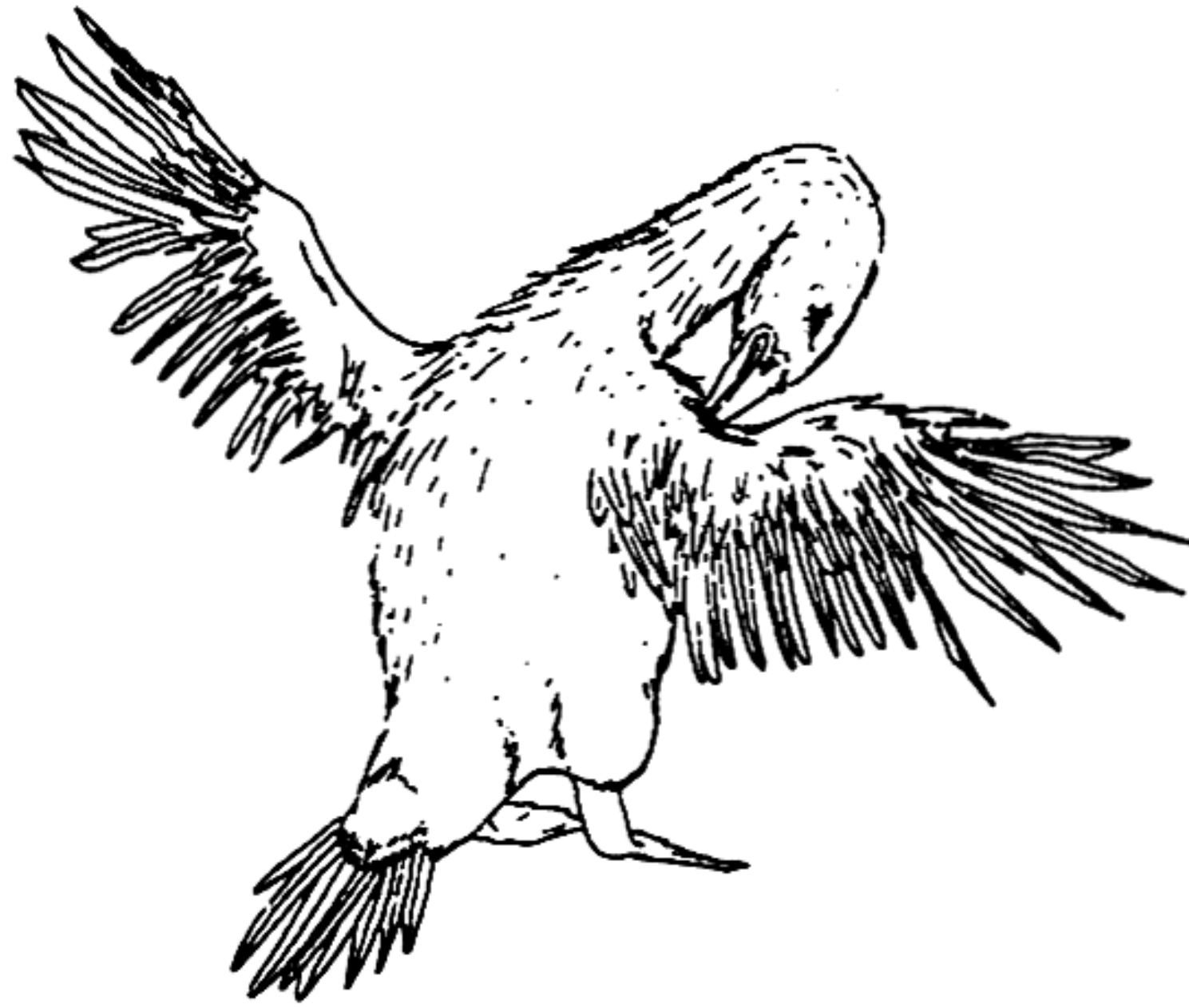
マンダラックスいわく――

船は、大地から切り離された破片となり、あたかも小惑星のようにさびしくすばやく進んでいった。

ジョゼフ・コンラッド（一八五七―一九二四）

ところで、バイア・デ・ダーウィン号はたんなる船ではなかった。人類からすれば、この船は新しいノアの箱舟だった。

第二部　そして、それから

1

そして、それから、夜闇の中、この白い新造客船は、海図も羅針儀も航海灯もなしに、冷たく深い海を最大速力で切り裂いていった。人類の意見によれば、それはもはや存在しない船だった。人類の意見によれば、こっぱみじんにふっとんだのは、サン・マテオ号ではなく、バイア・デ・ダーウィン号なのだから。

それは陸地の影もないところを、船長と乗客十名のうち七名の遺伝子を運んで、ひたすら西へと冒険に乗りだした幽霊船だった。その冒険は、いまのところ百万年もつづいている。

わたしはその幽霊船の幽霊だった。わたしは巨大脳を持つSF作家、キルゴア・トラウトの息子である。

合衆国海兵隊の脱走兵でもある。

わたしはスウェーデンで政治的亡命者に対する保護と市民権を与えられ、マルメーの造船所の溶接工になった。ある日、バイア・デ・ダーウィン号の船体内側で作業中に、一枚の鋼

板が落下してきて、苦痛を感じるいとまもなく首を切り落とされた。だが、わたしは、来世への青いトンネルに足を踏み入れるのをこばんだ。
わたしにはいつなりとも実体化できる能力があるが、この幽霊稼業のごく初期に、たった一回しかその能力を使ったことがない——船がマルメーからグアヤキルへの回航の途中、北大西洋で嵐に遭遇したときに、雨と風波の激しい瞬間を狙って、ためしてみたのだ。わたしはマストの上の見張り台に出現し、基幹定員のひとりだったスウェーデン人がそれを見た。彼は酔っていた。首のないわたしの体は船尾を向き、両手を上にのばしていた。その両手は、断ち切られた首をバスケットボールのように高々とさしあげていた。

●

だから、グアヤキルからのあわただしい出発のあと、バイア・デ・ダーウィン号のブリッジにアドルフ・フォン・クライスト船長と並んで立ち、最初の夜が明けるのを待っているときも、わたしはだれの目にも見えなかった。船長は夜どおし起きていたので、もう酔いはさめたが、ひどい頭痛に悩まされていた。彼がメアリーにむかって「……両眼のあいだの金色のネジ」と表現した頭痛に。
船長はそのほかにも、前夜の屈辱的な醜態のおみやげをいっぱいかかえていた——バスの屋根によじ登ろうとして、何回も落ちたときの打撲傷と擦過傷。彼にしても、自分がなにかの責任を託されるとわかっていたら、けっしてあんなふうに泥酔はしなかったろう。すでに

そのことは、メアリーに説明ずみだった。メアリーも夜どおし起きていたのだ——士官室の船尾寄りにあるサンデッキの上で、＊ジェイムズ・ウェイトを介抱しながら。
＊ウェイトはサンデッキの上で、メアリーの丸めたシャツを枕にして寝かされていた。船内は、ほかのどこも真暗だったからである。すくなくともそこなら、月が沈んだあとも星明かりがあった。予定では、日が昇ったら彼を船室へ運びこむことになっていた。むきだしの鋼板の上で、生きながら天日で丸焼きにされないように。
ほかのみんなは、ひとつ下のボートデッキにいた。セリーナ・マッキントッシュは大サロンで自分の愛犬を枕にしており、六人のカンカ・ボノ族の少女もそこにいた。この子供たちはおたがい同士を枕にしていた。ヒサコは大サロンのはずれにあるバスルームを選び、便器と洗面台のあいだにはさまるようにして眠りこんでいた。

●

メアリーが船長に預けたマンダラックスは、ブリッジの引き出しにおさまった。船内広しといえども、中になにかがはいっている引き出しはこれだけだった。引き出しが半開きになっていたため、マンダラックスはその夜のあいだにとりかわされた言葉の大半を立ち聞きして、それを翻訳することができた。でたらめなセッティングのおかげで、マンダラックスはあらゆるものをキルギス語に翻訳したが、その中には船長の作戦計画も含まれていて、それはつぎのようなものだった。これからガラパゴスのバルトラ島へ直行する。そこには修理ド

ックと、飛行場と、小病院がある。そこには強力な無線局もあるから、あの二度の爆発がなんであったかもわかるし、また、万一あれが広範囲な隕石の雨か、それともメアリーがほのめかしたように、第三次世界大戦の勃発だとした場合には、ほかの世界がどうなっているかもわかるだろう。

そう、そしてこの計画は、キルギス語に翻訳されようが、だれも知らないどこかの言語に翻訳されようが、結局はおなじことだった。なぜなら、船がとっているコースは、もののみごとにガラパゴス諸島をそれるからだ。

船が大きくコースをそれることになった原因は、船長の無知だけでも充分だったろう。だが、最初の夜、しらふに返る前に、船長はコースを何度も何度も変更することで、自分のミスの上塗りをしたのだ。思いだしてほしいが、彼の巨大脳は、隕石の雨がやってくると、彼に信じこませていた。流れ星を見るたびに、彼はそれが海に落下し、津波をひきおこすものと予想した。

そこで船長は、その波を船の鋭い舳で受けようと舵をとったのだった。日が昇ってみると、彼の巨大脳のおかげで、船はもうどこにいるのやら、どこをめざしているのやら、さっぱりわからなくなっていた。

●

一方、＊ジェイムズ・ウェイトのかたわらで、眠りと目ざめの中間をさまようメアリー・

ヘップバーンは、そうするだけの脳のない現人類がもうやらなくなったことをやっていた。過去をもう一度生きていたのだ。彼女は処女にもどっていた。彼女は寝袋の中にいた。そして、ようやく白みはじめた夜明けに、ホィッパーウィルヨタカの鳴き声で目をさまされかかったところだった。彼女がキャンプにきたのは、インディアナ州立公園——生きた博物館、ヨーロッパ人が、野生動物や、食用にならない植物の存在を許さない、というお触れを出す前の面影を残した土地の一部だった。若いメアリーが自分の繭である寝袋から顔を出してみると、朽ちかかった倒木や、せきとめられていない流れが見えた。彼女が横たわっているのは、幾歳月もの死と廃物とが作りだした、かぐわしい腐植土の上だった。もし、あなたが微生物であるか、それとも木の葉を消化することができるなら、そこには食べ物がいっぱいあった。しかし、百万と三十年前の人間にとっては、なんの朝食のごちそうもそこにはなかった。

時は六月初め。さわやかな季節。

鳥の声は、五十歩ほど先のイバラとハゼの木の茂みから聞こえてくる。この目覚まし時計に彼女は感謝したかった。ゆうべ眠りについたときも、このように早朝に目ざめ、寝袋を繭と考えて、そこから、いま自分がやっているように、活動的な成人として、しなやかに、なまめかしく抜けだすつもりだったから。

なんという喜び！

なんという満足！

すべては完全無欠だった。メアリーの連れである女友だちは、まだ眠りこけていた。
そこで彼女は弾力のある森林地の床を忍び足で歩き、仲間の早起き鳥を見ようと茂みに近づいた。だが、そこに見つけたものは鳥ではなく、瘦せて背の高い、水兵服を着た、きまじめそうな青年だった。ホィッパーウィルヨタカの鋭い鳴き声を口笛でまねていたのは、この青年なのだ。これが彼女の未来の夫であるロイだった。

●

メアリーは気分を害し、混乱を味わった。こんな山奥ででくわした水兵服は、とりわけ異様な眺めだった。邪魔者に踏みこまれた感じがしたし、それに、おびえて当然なのかもしれなかった。だが、もしこの奇妙な男が彼女を追いかけようとすれば、まずイバラのもつれあった茂みをくぐりぬけなければならない。こちらは服を着たまま眠ったので、ストッキングだけの足をのぞけば完全武装といえる。
青年は彼女の足音を聞きつけた。彼は驚くほど鋭い耳をしていた。彼の父親もそうだった。親譲りの特性なのだ。そして、彼が先に口を切った。「おはよう」
「おはよう」とメアリーも答えた。のちに彼女はこんなことをいうだろう——自分がエデンの楽園のただひとりの住人だと思っていたところへ、水兵服を着た生物が現われ、すでになにもかも所有しているようにふるまった、と。そしてロイはこんなふうにいいかえすだろう。とんでもない、なにもかも所有しているようにふるまったのは、そっちのほうだ、と。

「ここでなにをしているの?」と彼女はきいた。
「この公園のこのあたりで眠っている人間がいるとは、思わなかったもんでね」と彼は答えた。その点で彼の言い分は正しく、メアリーもそれを知っていた。彼女と友人とは、この生きた博物館の規則を破っていたのだ。ふたりがキャンプを張ったのは、夜になると下等動物しかいないはずの場所だった。
「あなたは水兵さん?」と彼女はきいた。
するといい、彼はそうだ――いや、つい最近までそうだった、と答えた。自分は海軍を除隊になったばかりで、故郷へ帰る前にヒッチハイクで全国を旅しているのだが、軍服を着ていたほうが車に乗せてもらえる確率が高いのだ、と。

●

今日では、どれかがだれかに対して、メアリーがロイにそうしたように、「ここでなにをしているの?」とたずねることは意味がない。今日では、だれかがある場所にいる理由が、つねに単純で明白だからである。ロイがしゃべったようなこみいった身の上話は、いまのだれも持ち合わせていない。つまり、彼はサンフランシスコで除隊になり、もらった切符を払いもどして、その金で寝袋を買い、それからはヒッチハイクでグランド・キャニオンや、イエローストーン国立公園や、そのほか前から行ってみたかったいくつかの場所をめぐり歩いているのだった。彼はとりわけ鳥に興味を持っていて、鳥の言葉で鳥たちと話ができた。

たまたま彼はカーラジオで、とっくに絶滅したと思われていた生物種、ハシジロキツツキのつがいが、インディアナの小さな州立公園で目撃されたというニュースを聞いた。彼はさっそくそっちへ足を向けた。このニュースは、やがて誤報とわかる。太古の森に住んでいたこの大きく美しい鳥は、本当に絶滅していた。人間たちが自然の生息地を荒らしたからである。もはやこの鳥にとっては、充分な朽ち木も、平和も、静けさもなくなったのだ。

「あの鳥には、平和と静けさがたっぷり必要だったんだよ」とロイはいった。「それはおれもおなじだし、きみもおなじだと思う。だから、もしきみの邪魔をしたんなら、あやまるよ。もっとも、鳥がしないようなことはなにもしてなかったがね」

メアリーの巨大脳の中で、ある自動装置にカチッとスイッチが入り、彼女の膝ががくがくになり、みぞおちが冷たくなった。彼女はこの青年と恋におちたのだった。

もう、当節こんな思い出はなくなった。

*ジェイムズ・ウェイトが、メアリー・ヘップバーンの夢想をこんな言葉でさえぎった――「あなたを心から愛している。どうか結婚してください。ぼくは淋しい。

2

怖くてたまらない」
「あまり無理をなさっちゃだめよ、フレミングさん」と彼女はいった。彼は一晩じゅう断続的に求婚をくりかえしていたのだ。
「手を握らせてください」と彼はいった。
「放してくださらなくなるから」
「放すと約束しますよ」
そこでメアリーは彼に手をさしだし、彼は弱々しくその手を握った。彼は未来や過去になんのヴィジョンも持っていなかった。彼は細動する心臓に毛の生えたものにすぎなかった。ひとつ下の階で、振動する便器と洗面台の隙間にはさまっているヒサコ・ヒログチが、胎児と子宮に毛の生えたものでしかないのと、ちょうどおなじように。
ヒサコはおなかの赤ちゃん以外に生きがいがないんだわ、とメアリーは思った。

いまでも人びとは、これまでどおりしゃっくりをするし、いまでもだれかがおならをすると、ひどく面白がる。そして、いまでもだれかが病気になると、あやすような声音で病人をなぐさめる。船の上で＊ジェイムズ・ウェイトの相手をしていたときのメアリーの声音は、今日でもよく聞かれるのとおなじ声音だった。言葉がついていてもいなくても、その声音は、いまの病人が聞きたがっていること、そして百万年前に＊ウェイトが聞きたがったことを伝えることができる。

メアリーは＊ウェイトにこんな意味のことをいろいろの言葉を使って話したが、彼女の声音だけでもおなじメッセージは伝わったろう――「わたしたちはあなたが好きだ。あなたは孤独ではない。万事もきっとうまくおさまる」うんぬん。

●　　　●

もちろん、今日の看護人は、だれひとりメアリー・ヘップバーンのようにこみいった性生活を送ってはいないし、今日の病人も、だれひとり＊ジェイムズ・ウェイトのようにこみいった性生活を送っていない。今日の人間のラブ・ストーリーは、どんなものでも、その山場はごく単純な質問に要約されてしまう――その当事者たちにさかりがついているか否か。いまの男女は、おたがいと、相手のひれ足の突起などなどに対して、年にたった二回だけ――

それとも、魚が不足した年には一回だけ――どうしようもなく興味をいだく。すべては魚しだいだ。
メアリー・ヘップバーンや*ジェイムズ・ウェイトは、年がら年じゅう、ある適当な組み合わせの状況さえ揃えば、恋で常識をくつがえされる可能性があった。
サンデッキの上で、ちょうど日が昇る直前、*ウェイトはメアリーと真剣に恋におち、メアリーは彼と――いや、むしろ、彼のつけた仮面と――真剣に恋におちた。その一晩じゅう、メアリーは彼を「フレミングさん」と呼びつづけたが、彼のほうはファースト・ネームで呼んでくれといわなかった。なぜか？　それは彼が偽名のファースト・ネームを思いだせなかったからである。
「あなたを大金持ちにしてあげる」と*ウェイトはいった。
「あらあら」とメアリーはいった。「もういいのよ」
「複利で」
「あまり無理をなさっちゃだめよ、フレミングさん」
「どうか結婚してください」
「そのことはバルトラ島で話しあいましょうね」
メアリーは彼に、生きがいとしてバルトラ島を与えたのだった。その一晩じゅう、彼女は優しいささやき声で、バルトラ島に待っているいろいろのすばらしいもののことを、まるでそこが一種の楽園であるかのように、彼に物語った。そこのドックでは、聖者や天使が一行

を出迎え、ありとあらゆる食物や医薬が待っているだろう、と。
彼は自分が死にかけているのを知っていた。「あなたは大金持ちの未亡人になれるよ」
「もうその話はよしましょうね」
メアリーがまもなく実際に彼と結婚し、そのあと未亡人になるからには、彼女が法的に相続するはずの遺産について、ここで触れておこう。もし、この世界でいちばんの巨大脳を持つ探偵たちがそれを探しにかかったとしても、ささいな一部分さえ発見できなかったろう。この地域社会、あの地域社会とめぐり歩いた先で、＊ウェイトは実在しない慎重細心な市民をひとりずつ作りあげた。彼らの富は、たとえ惑星そのものがどんどん貧しくなっても、ふえつづける一方で、しかも合衆国やカナダの政府がその安全を保証してくれていた。もっとも、メキシコのグアダラハラにあった彼の銀行預金は、ペソ建てのため、もうとっくに消えていたが。
もし、彼の富が、当時ふえつづけていた割合でふえつづけていたなら、＊ジェイムズ・ウェイトの遺産はいまや全宇宙を包含していたろう――ギャラクシーや、ブラックホールや、彗星や、無数の小惑星や、流れ星や、船長の隕石群や、各種の星間物質――すなわち、ありとあらゆるものを。
そう、そしてもし人類の人口が、当時ふえつづけていた割合でふえつづけていたなら、それはいまや＊ジェイムズ・ウェイトの遺産を――ということは、ありとあらゆるものを、その重さにおいてしのいでいたろう。

なんという不可能な拡張の夢を、人類はほんの昨日まで、ほんの百万年前まで、いだきつづけていたことか！

ついでながら、*ウェイトは生殖をおこなったことがあった。むかしあの骨董品商を来世への青いトンネルに送りこんだだけでなく、自分の跡継ぎをも誕生させていた。殺人者と父親を兼ねたという点で、ダーウィン的基準からすれば、なかなかのものといわなければならない。

3

彼が父親になったのは、まだ十六歳のときだった。百万年前の人間の男性にとっては、性的絶頂期である。

そのとき、彼はまだオハイオ州のミッドランド・シティに住み、暑い七月の日ざかりに芝生を刈っていた。その庭は、べらぼうに羽振りのいい自動車ディーラーで、ファースト・フード・レストランの地方チェーンの経営者でもあるドウェイン・フーヴァーという男のものだった。この男には妻がいたが、子供はなかった。フーヴァー氏は商用でシンシナティへ出張しており、家の中にはフーヴァー夫人だけがいた。*ウェイトは何度もこの芝生を刈りにきたことがあるが、まだ夫人の顔をおがんだことがなかった。彼女が隠遁者になったのは、*ウェイトが聞いた話によると、アルコールと医者に処方してもらったドラッグへの依存癖

がついて、もう人目のある場所へ出ていけないほど彼女の巨大脳が気まぐれになっているからだった。
　当時の＊ウェイトは美貌だった。彼の母親と父親もやはり美貌だった。彼は美貌の家系の出だった。ひどく暑い日だというのに、＊ウェイトはシャツをぬがなかった——何軒もの里親から受けた折檻の傷痕だらけなのが恥ずかしかったのだ。のちに彼がマンハッタン島で男娼になってからは、客がその傷痕に——タバコの火や、ハンガーや、ベルトのバックルなどで作られたそれに——強い興奮を感じるのだが。
　＊ウェイトは性的な機会を求めてはいなかった。マンハッタンへ逃げだす決心をしたばかりで、警察に逮捕の口実を与えるようなことをしたくはなかった。彼は警察によく知られており、べつになんの犯罪もおかしていないのに、窃盗事件だのなんだのがあるたびに取調べを受けていた。どのみち警察は彼に目をつけていた。警官はいつも彼にこんなことをいうのだった——「なあ、若いの、遅かれ早かれ、おまえはでっかいまちがいをやらかすにきまってるんだ」
　そこへフーヴァー夫人が、あるかなしの水着をつけて、表のドアから現われた。水泳プールは裏手にあった。彼女の顔はやつれ果て、歯はぼろぼろだったが、それでも体の線は依然としてとても美しかった。彼女は、家の中へいらっしゃいと、彼に声をかけた。中はエアコンがきいているし、アイス・ティーかレモネードでも飲んで、すこし涼めば、と。
　つぎに気がついてみると、ウェイトは彼女とセックスしており、そして彼女がわたしたち

ふたりはおなじ種族、どちらも迷える魂だといいながら、彼の傷痕などなどにキスをしているところだった。
フーヴァー夫人は妊娠し、そして九ヵ月後に男の赤ん坊を生んだが、フーヴァー氏はそれを自分の子だと思いこんだ。その男の子は美貌で、やがて成長して、ちょうど＊ウェイトとおなじように、ダンスと音楽の才能を発揮した。

●

＊ウェイトが、その赤ん坊の噂を聞いたのは、マンハッタンへ引越したあとのことだが、その子が自分の身内だとはとても思えなかった。それから何年ものあいだ、そのことは忘れてしまっていた。ところが、ある日、彼の巨大脳は、とりたてて理由もなく、とつぜん彼にこう告げた。もしおまえがいなければこの世界に生まれてこなかったはずの若い男が、この世界のどこかを歩きまわっている、と。そういわれて、彼は薄気味悪くなった。あんなささいな出来事のわりには、とてつもなく大きな結果だったから。
なぜあのときの彼に息子をほしがる理由があったろう？　それは彼の心からもっとも遠いことだったのに。

●

ちなみに、現人類の男性の性的絶頂期は、六歳かそこらで訪れる。六歳の男性がさかりの

ついた女性にでくわすと、もはや彼が性交をいとなむのを押しとどめられるものはなにもない。

そして、わたしは彼を気を毒に思う。十六のころの自分がどんなふうだったかを、まだおぼえているからだ。あんなふうに興奮するのは地獄である。当時もいまとおなじように、オルガスムはなんの解放も与えてくれなかった。オルガスムから十分後には、なにが起こるのか？　もう一度やらないと気がすまなくなる。おまけに、宿題がある！

バイア・デ・ダーウィン号に乗りこんだ人びとは、まだそれほど空腹を感じていなかった。みんなの小腸は、＊カザックのそれも含めて、前日の午後に食べたものから、消化できる分子のありったけを絞りとっている最中だった。ガラパゴスのゾウガメのように、わが身の一部を消耗するという生存手段には、まだだれもたよっていなかった。カンカ・ボノ族の少女たちは、飢えがどんなものかをすでに知っていた。ほかのみんなにとっては、それが新しい発見になるだろう。

4

その中で、体力を維持しつづけ、交代で起きていなくてはならない人間がふたりだけいて、それはメアリー・ヘップバーンと船長だった。カンカ・ボノ族の少女たちは船のことも海のことも知らず、カンカ・ボノ語以外の言葉でなにをいわれても、ちんぷんかんぷんだった。ヒサコは緊張病に近い状態だった。セリーナは目が見えず、＊ウェイトは死にかけていた。とすると、船の舵をとり＊ウェイトの看護をする人間は、ふたりしか残されていない。

最初の夜にこのふたりは相談して、昼間はメアリーが舵をとることになった。昼間なら、一行がそこから逃げだした東がどちらの方角であり、話に聞く平和で潤沢な島、バルトラの

横たわる西がどちらの方角であるかを、太陽がはっきりと示してくれるだろう。そして、夜になれば、船長が星を目印にして舵をとる。

そして、どちらか舵をとっていないほうの人間が＊ウェイトのお守りをし、そのあいだにできれば睡眠をとる。たしかに長い当直ではあるだろう。反面、この苦行はごく短くすみそうだ。船長の計算によれば、バルトラ島はグアヤキルからわずか四十時間の距離なのだから。

もしかりに一行が——実際にはそうならなかったのだが——首尾よくバルトラ島にたどりついていたとしたら、そこがもう一個のダゴナイトの航空小包によって破壊され、全滅しているのを見いだしたにちがいない。

●

当時の人間はきわめて多産だったので、そうしたありきたりの爆発では、長い目で見た生物学的影響はないも同然だった。赤ん坊がぞくぞくと生まれてくるので、まだおおぜいの人びとが生き残っているように思われた。長い戦争のあとでさえ、暴力手段によって人口を減らそうという真剣な努力は、いつも水泡に帰するのだった。それらは、広島と長崎への核爆撃をべつにすると、なにも永久的な損傷を残さなかった。ちょうどバイア・デ・ダーウィン号がいくら水を切り裂き、かきまわしても、海にはなんの跡も残らなかったように。

赤ん坊を使ったこの人類のすばやい治癒力が、おおぜいの人びとを元気づけて、こう思いこませたのだ。これらの爆発はただのショー・ビジネス、高度な演劇形式をとった自己表現

であり、それ以外のなにものでもない、と。
しかし、まもなくサンタ・ロサリア島の一小コロニーを除いて、人類が失うことになるものは、なんの跡も残らない海が、水でできているかぎり失うことのないもの——つまり、自己治癒能力だった。
こと人類に関するかぎり、まもなくすべての傷がきわめて永久的なものになるときがくる。そして、高性能爆薬がショー・ビジネスの一分野でなくなるときが。

●

そう、もしかりに人類が、自分で自分に加えた傷を性交によって癒しつづけていたなら、わたしがサンタ・ロサリア島のコロニーについて語ろうとしている物語は、見えっぱりで無能なアドルフ・フォン・クライスト船長を主役にした悲喜劇になることだろう。百万年にまたがる物語ではなく、わずか数ヵ月の物語になることだろう。定住者が、けっして定住者にはならないだろうからだ。彼らはやがて発見され、難船者として救出されたことだろう。
きっとその中には、一行にこんな苦しみをもたらした最大の責任者として、恥じ入った船長の顔が見られたことだろう。
しかし、海上で一夜を過ごしたあとでも、船長はまだ万事が順調だと思いこむことができた。まもなくメアリー・ヘップバーンが操舵を交代してくれるときがくる。そのときには、彼女にこんな指示を与えよう——「午前中は太陽を船尾にたもち、午後には太陽を船首にた

みんなは彼の最低の状態を目撃したのだ。しかし、バルトラ島に着くころには、みんながあの酔態を忘れ、だれもかれも船長こそ命の恩人だといってくれるはずだ、と本人は期待していた。

これもむかしの人間にできて、いまの人間にできないことのひとつである——まだ起こってもおらず、またけっして起こらないだろう出来事を、頭の中でたのしむ芸当。わたしの母はこれの名人だった。いつかそのうちにわたしの父がSFを書くのをやめ、みんなが読みたがっているような小説を書く日がやってくるだろう。そうすれば、美しい町に新しい家が買えるだろうし、すてきな服も買えるだろう、うんぬん。母のおかげで、よくわたしはふしぎに思ったものだった。なぜ神様は手間ひまをかけて、わざわざ現実などというものを創ったのだろう、と。

マンダラックスいわく——

空想は数多くの旅行に匹敵する——しかも、なんと安価なことか！
ジョージ・ウィリアム・カーティス（一八二四—一八九二）

というわけで、船長はバイア・デ・ダーウィン号のブリッジに半裸で立っていても、頭の中ではマンハッタン島にいた。そこには彼の財産の大部分と、それにおおぜいの友だちがい

る。彼はなんとかしてバルトラ島からそこへたどりつき、パーク街にすてきなアパートメントを買うつもりだった。エクアドルなど知ったことか。

●

そこへ現実がずかずかと割りこんできた。きわめてリアルな太陽が昇ってきた。その太陽にはちょっとまずいところがあった。船長は夜どおし西に向かって航行していたつもりだったから、それなら太陽がまっすぐ船尾から昇ってきそうなものだった。ところが、このいじわるな太陽は、たしかに船尾ではあるが、かなり右舷寄りに昇ってきたのだ。そこで彼は、太陽があるべき位置におさまるまで、船を左に向けた。いま修正されたこの失策に責任のある彼の巨大脳は、彼の脳を安心させるために、そのまちがいがささいな、ごく最近のものであり、たぶん夜明けで星が薄れたために起こったものだろう、と告げた。彼の巨大脳は、ちょうど彼が乗客から尊敬してもらいたがっているのとおなじように、彼の魂から尊敬してもらいたがっていた。彼の脳はそれ自身の生命を持っていた。しかし、とんでもない道案内をしてくれた、と彼が自分の脳にクビをいいわたす日はいずれやってくる。

しかし、それはまだ五日も先の話。

このときの船長はまだ自分の脳を信頼したまま、船尾へと向かった。〝ウィラード・フレミング〟の容態を見た上で、計画どおりに、彼を士官室にはさまれた通路の日蔭に移すため、メアリー・ヘップバーンに手をかすつもりだった。わたしがウィラード・フレミングの名前

の前に星印をつけなかったのは、現実にそんな人間がいないからである――だから、死ぬこともできない。
おまけに船長は、メアリー・ヘップバーンという人間にまったく関心がなかったため、彼女の本当の苗字も知らなかった。カプランという苗字だと思っていた。彼女の着ていた払い下げ品の戦闘服、いま＊ウェイトの枕に使われているそのシャツの胸ポケットに、そんな縫いとりがあったからだ。
＊ウェイトも彼女の苗字をカプランと思いこんでおり、彼女がいくら訂正しても直らなかった。その晩のあいだに、彼はこんなことまでいった。「あなたがたユダヤ人はいつも生き残るね」
彼女はこう答えた。「あなたも生き残るわ、ウィラード」
「どうかな。むかしのぼくはそう思っていたよ、カプランさん。だが、もう自信がなくなった。たぶん、まだ死んでない人間みんなが生き残りなのさ」
「あらあら。もっとたのしいお話をしましょう。バルトラ島のお話を」
しかし、そのとき、彼の脳への血液供給は一時的にうまくいったにちがいない。なぜなら、ウェイトがさらにつづけて、これだけの筋道だった理屈を述べたからである。おまけに、小さい皮肉な笑い声までもらした。そして、こういったのだ。
「この世界には、自分たちがどんなに頑強な生き残りかを自慢する人間がおおぜいいる。まるでそれがうんと特別なことのようにね。それがいえない人間は、実は死人だけなんだ」

「まあまあ」と彼女はいった。

●

船長が、日の出のあと、メアリーと*ウェイトの前に現われたとき、メアリーは*ウェイトとの結婚を承諾したばかりだった。ついに根負けしたのである。まるで夜どおし水をくれとせがまれているような感じで、とうとうくれてやるしかなくなったのだ。もし、この男がそんなに婚約をほしがっており、そしてこっちから与えてやれるものが婚約しかないのなら、それを与えるしかない、と。

しかし、彼女はその約束をただちに、それとも、いつか将来に、実行に移さなければならない、とは思っていなかった。たしかに彼女は、この男の身の上話を聞いて好感を持った。その夜のうちに、彼はメアリーがクロス・カントリー・スキーの愛好者であることを聞きだしていた。そして、自分も凍った湖と静かな森にとりまかれ、きれいな新雪の上をスキーで滑っているときが最高に幸福だ、と温かい口調で答えた。彼は生まれてから一度もスキーをしたことがなかったが、むかし、ニュー・ハンプシャー州のホワイト山脈の奥にあるスキー・ロッジの持ち主の未亡人と結婚して、骨までしゃぶったことがあった。春にその未亡人に求婚して、青葉が橙や黄や赤や茶色に変わらないうちに、彼女を文なしにしてしまったのだ。

メアリーが婚約したこの男は、人間ではなかった。彼女がフィアンセとして得たのは、つぎはぎ細工の人間もどきだった。

婚約の相手が何者だろうとたいしてちがいはない、とメアリーの巨大脳は彼女に告げた。バルトラ島に着くまでに結婚することはありえないし、〝ウィラード・フレミング〟は、たとえそれまで生きていたとしても、すぐに集中治療室へ入れられてしまうだろう。だから、婚約を解消する時間は充分にある、と。

そんなわけで、＊ウェイトが船長にこういったときも、彼女はそれが特別重大なことには思えなかった。「すばらしいニュースがあるんですよ。カプランさんがぼくと結婚してくれます。ぼくは世界一の果報者だ」

運命は、いまメアリーに対して、マルメーの造船所でのわたしの断首とおなじぐらい、迅速で論理的ないたずらをやってのけた。

「それは運がよかった」と船長がいったのだ。「公海上にあるこの船の船長として、わたしにはきみたちを結婚させる法的権限があるんだよ。親愛なる諸君、われわれはいまここに神のみもとに集まり——」と船長はいいはじめ、それから二分後には、〝メアリー・カプラン〟と〝ウィラード・フレミング〟を夫婦にしたのだった。

5

マンダラックスいわく――

誓いは言葉にすぎず、言葉は風にすぎない。

サミュエル・バトラー(一六一二―一六八〇)

そして、サンタ・ロサリア島でのメアリー・ヘップバーンは、マンダラックスのこの引用句と、そのほか何百もの引用句をおぼえることになる。しかし、年を重ねるにつれて、彼女は〝ウィラード・フレミング〟との結婚を――この二度目の夫が、船長からふたりは夫婦だと宣言されてからわずか二分後に、微笑をうかべて死んでいたにもかかわらず――ますます真剣に受けとめるようになる。腰の曲がり、歯のない、とてもとても高齢の老婆になってからも、にこ毛におおわれたアキコにこう話して聞かせることになる。「わたしは、すばらしい男をふたりも与えてくださった神様に感謝しているわ」そのふたりとは、ロイと〝ウィラード・フレミング〟のことだった。それは、船長のことをあまり評価していないという、彼

女なりの表現でもあった。そのころ、船長はとてもとても高齢の老人で、アキコを除いたこの島の若い世代全員の父または祖父に当たっていた。

●

アキコはこのコロニーの若い世代の中で、お話を聞きたがるただひとりの人間だったし、特にラブ・ストーリーや、大陸での生活のことを聞きたがった。そこで、メアリーは、一人称で語れるラブ・ストーリーがとてもすくないことを、いつもアキコに詫びることになった。ただ、自分の両親はたしかにおたがいを深く愛しあっていた、とメアリーはよく話し、そして、両親が最後の最後までキスをしあったり、抱きあったりしていたという話に、アキコは大喜びで聞きいった。

メアリーは、ロバート・ヴォイチェホイッツという男やもめとの、そういってよければ滑稽な情事の話で、アキコを笑わせることもあった。ヴォイチェホイッツは、イリアム高校が閉鎖される前の英語科の主任教師だった。ロイと〝ヴィラード・フレミング〟を別にすると、彼女に求婚した唯一の男性でもあった。

そのいきさつはこうである——

ロバート・ヴォイチェホイッツは、ロイが埋葬されてからわずか二週間後に、彼女に電話をしては、デートを申し込みはじめた。彼女はそれを断わり、まだとてもデートをする気になれないことを伝えた。

メアリーは相手をあきらめさせようと全力をつくし、どうかそっとしておいてくれとたのんだのに、ある日の午後、とうとうロバートは彼女の家まで訪ねてきた。ちょうど芝生を刈っている最中に、車で乗りつけたのだ。ロバートは芝刈り機を止めてほしいと彼女にたのんでから、だしぬけに結婚を申し込んだ。

メアリーはよくその車の話をして、アキコを笑わせた。もっとも、アキコは車というものを見たことがなかったし、またそれ以後も見ることはない。ロバート・ヴォイチェホイッツが乗ってきたのはジャガーで、もとはとても美しい車だったが、いまでは運転席の側にいっぱい傷やへこみがついていた。この車は、彼が臨終の床にある妻からもらった贈り物だった。彼女の名は*ドリスといい、アキコはメアリーの物語にあやかって、にこ毛におおわれた娘のひとりにその名をつけることになる。

*ドリス・ヴォイチェホイッツはすこしまとまった金を相続したので、これまで良き夫でありつづけてくれたロバートに、感謝の印としてジャガーを贈ったのだった。この夫婦にはジョゼフという息子がいたが、彼は乱暴者で、まだ母親が生きているうちにその美しいジャガーをこわしてしまった。ジョゼフは一年間刑務所に入れられた——アルコールの影響のもとに自動車を運転した罰として。

脳を縮める昔なじみのアルコールが、またここにも登場する。

ロバートの結婚申し込みは、あたりで唯一の刈りたての芝生で行なわれた。ほかの家の庭は、みんなが立ち退いてしまったために、ふたたび荒野にぶんどられていた。そして、ヴォ

イチェホイッツが求婚しているあいだじゅう、大きなゴールデン・レトリーバーがふたりに向かって吠えたて、危険なふりをしてみせていた。これがロイの最後の日々に大きななぐさめになってくれた、犬のドナルドだった。そのむかしは、犬さえ名前を持っていた。ドナルドは犬である。ロバートは人間である。

さて、ドナルドは無害だった。ドナルドはこれまでだれにも噛みついたことがなかった。この犬が望んでいるのは、だれかに棒きれを投げてもらうことだけだった。そうすれば、彼がそれをくわえてもどってくるから、だれかがまた棒きれを投げ、それをまた彼がくわえてもどってくる、以下このくりかえし。

ドナルドは、控えめにいっても、あまり利口ではなかった。とてもベートーヴェンの第九交響曲が書ける見込みはなかった。ドナルドは眠っている最中にも、よく鼻を鳴らしたり、後足を震わせたりした。棒きれを追いかける夢を見ているのだった。

ロバートは犬が怖かった——まだ五歳のときに、母親といっしょにドーベルマンにおそわれたことがあったからだ。犬の扱い方をこころえているだれかがそばにいるかぎり、ロバートは犬といっしょでも平気だった。犬と一対一になると、それがどんな小さい犬であっても、かならず冷や汗と身ぶるいが出て、髪の毛が逆立つ。だから、極力そんな状況を避けようと、いつも用心していた。

しかし、この結婚申し込みでメアリー・ヘップバーンはすっかり動転して、いきなりわっと泣きだした。これも、いまではだれもやらなくなったことである。彼女は激しい当惑と混

乱におそわれ、彼に対しておろおろと詫びをいってから、家の中に駆けこんだ。彼女はロイ以外のだれとも結婚したくなかった。たとえロイが死んでいても、ロイ以外のだれとも結婚する気はなかった。

こうしてロバートは、表の芝生にドナルドと一対一でとり残された。

もし、ロバートの巨大脳にいくらかでも分別があったら、こんなふうに彼をしむけたろう。うるさい、黙れ、とドナルドを叱りつけながら、ゆっくりと車まで歩く、などなど。だが、巨大脳はそうせずに、彼が背中を見せて逃げだすようにしむけた。しかも、すぐ後ろから追いかけてくるドナルドをしたがえたまま、車の横を通りすぎてしまうほど、彼の脳はまぬけだった――こうして彼は通りを横ぎり、アラスカへ引越した一家が住んでいた空家の前にあるリンゴの木によじ登った。

そこでドナルドはその木の下にうずくまり、彼に向かって吠えたてた。

ロバートは恐ろしさのあまり下りるに下りられず、一時間も木にしがみついていたが、やがてなぜドナルドがそんなに長く単調に吠えつづけているのかといぶかしんだメアリーが、家から出てきて彼を救いだした。

木から下りてきたとき、ロバートは恐怖と自己嫌悪で吐き気におそわれた。事実、そこで嘔吐した。自分の靴とズボンの折り返しをよごしたあとで、彼はどなるようにいった「ぼくは男じゃない。どう見ても男じゃない。もちろん、もう二度ときみに言い寄ったりはしない。もう二度と、どんな女性にも言い寄ったりはしない」

わたしがメアリーの物語をここで受け売りしたのは、アドルフ・フォン・クライスト船長が、五日五晩にわたって海を泡立つほどかきまわしたあげく、どんな島も見つけられなかったときに、自分自身に対してこれとおなじぐらい低い評価をすることになるからだ。

●

船長は舵を北へとりすぎていた――あまりにも北へ。そのため、われわれみんなが北へ寄りすぎていた――あまりにも北へ。もちろん、わたしは空腹を感じなかったし、ジェイムズ・ウェイトも感じなかった。彼はすでに下の調理室の食肉ロッカーの中で、コチンコチンに凍っていた。調理室は、電球を持ち去られ、舷窓もなかったが、電気オーブンやコンロの発熱体の微光で、薄気味悪いながらにまだ明るかった。

そう、それに給水系統もまだ動いていた。どこの蛇口をひねっても、水と湯の両方が勢いよく出てきた。

だから、だれものどを渇かしてはいなかったが、みんながまちがいなく腹をすかせていた。セリーナの愛犬カザックは行方不明だった。わたしがその名前の頭に星印をつけなかったのは、カザックがすでに死んだからである。カンカ・ボノ族の少女たちが、セリーナの眠っているすきにこの雌犬を盗みだし、素手で首を絞め、歯と爪以外のどんな道具も使わずに、皮を剝ぎ、はらわたを抜いたのだ。少女たちはその肉をオーブンで焼いた。ほかのだれも、まだそのことを知らなかった。

どのみち、この犬はわが身を消耗しはじめていた。少女たちに殺されたときには、もう骨と皮だった。

もしかりにサンタ・ロサリア島までたどりついていたとしても、カザックにはたいして未来がなかったろう――ありえない仮定だが、たとえそこに雄犬がいたとしても。どのみち、カザックは去勢されていたからだ。もし、この雌犬がその生涯よりも長くあとに残るなにかをなしとげられたとすれば、それはまもなく生まれてくるにこ毛におおわれたアキコに、犬に関する幼い記憶を与えてやることだけだったろう。最高の状況に恵まれたとしても、島で生まれたほかの子供たちのペットになったり、尻尾をふるところを彼らに見せたり、などなどをするまで、とうていカザックは生きながらえることができなかったろう。どのみち、子供たちは、カザックが吠えるところを記憶しなかったろう。カザックはもともと吠えることができなかったからだ。

6

だれかが涙を流してはいけないので、カザックの不測の死についていては、ここでこういっておこう。「まあ、しかたがない——どのみち、あの犬にベートーヴェンの第九が書けるわけじゃなし」

おなじことを、ジェイムズ・ウェイトの死に対してもいおう。「まあ、しかたがない——どのみち、あの男にベートーヴェンの第九が書けるわけじゃなし」

たいていのものがその一生でなしとげられることはいくら長生きをしてもたかが知れている、と皮肉ったこのコメントは、わたしの発明ではない。まだこの世に生きているときに、ある葬式で、このコメントがスウェーデン語で口にされたのを聞いたのが最初だ。その通過儀礼に浴した死体は、鈍感で人気のない造船所の職長で、ペール・オーラフ・ローセンクィストという名の男だった。彼が若くして、というか、当時の標準から見て若くして死んだのは、ジェイムズ・ウェイトとおなじように、欠陥のある心臓を受けついでいたからである。その葬式に、わたしはおなじ溶接工仲間のヤルマー・アーヴィッド・ブーストロームという名の男と連れだってでかけた。といっても、あれから百万年経ったいま、人の名前にはたい

して意味があるわけではないが。ともかく、教会から帰りしなに、ブーストロームはわたしにこういった。「まあ、しかたがない――どのみち、あの男にベートーヴェンの第九が書けるわけじゃなし」

そのブラック・ジョークはいま思いついたのか、とわたしがたずねると、いや、ドイツ人だった祖父から聞いたのだ、と彼は答えた。彼の祖父は、第一次世界大戦中に西部戦線で戦死者の埋葬を監督した士官だった。この種の作業にまだ不慣れな兵士たちは、これからシャベルで土をかけることになるこの死体、あの死体を見て、もしこんなに若死にしなかったらこの男はどんなことをなしとげたろうかと、感慨にふけることがよくあった。そんな思いやりのある新兵に、古参兵士が投げかける皮肉な文句はかずかずあって、これもそのひとつだった――「そうくよくよするな。どのみち、やつにベートーヴェンの第九が書けるわけじゃなし」

●

このわたしが若くしてマルメーで、しかもペール・オーラフ・ローセンクウィストからわずか六メートルの距離に埋葬されたとき、ヤルマー・アーヴィッド・ブーストロームは墓地を出しなに、わたしについてこういった――「まあ、しかたがない――どのみち、レオンのやつにベートーヴェンの第九が書けるわけじゃなし」

そう、そしてわたしがこの言葉を思いだしたのは、ウィラード・フレミングと信じられて

いた男の死を悲しんで泣いているメアリーを、アドルフ・フォン・クライスト船長がからかったときだった。そのときは、船が海上に出てから十二時間にしかならず、船長はまだ彼女に対して、いや、それをいうなら船内のだれに対しても、かなりの優越感を持っていた。船長はメアリーにどうすれば船を西向きのコースにたもてるかを教えながら、こういった。「赤の他人の死に涙を流すなんて、実に大きな時間のむだじゃないか。きみの話からすると、この男は身寄りもなかったし、もう社会に役立つ仕事にもついていなかった。だから、なにを悲しむことがある？」

わたしが実体のない声として、そこへ口をはさむには絶好のタイミングだったかもしれない。「そう。どのみち、あの男にベートーヴェンの第九が書けるわけじゃなし」と。

船長はそこで一種のジョークを口にしたが、それはあまりジョークのように聞こえなかった。「本船の船長として命令する。泣くのは、なにか泣くことがあったときだけにしなさい。いまは泣くことなどなにもない」

「あの人はわたしの夫でした」とメアリーはいった。「あなたのやってくださった儀式を、わたしは真剣にとりたいんです。もしそれがおかしいなら、笑ってくださってけっこうだわ」ウェイトは、まだなまなましい話題だった。彼はまだ冷凍庫におさまっていなかった。「あの人はたくさんのものを世界に与えてくれたし、このさきも与えてくれたはずです。もし、あの人の命を救うことさえできていたら」

「彼がどんなすばらしいものを世界に与えたというんだね？」

「あの人は風車のことをだれよりもよく知っていました。あの人にいわせると、炭鉱やウラン鉱山はぜんぶ閉鎖してもだいじょうぶなんですって——風力だけでも、世界でいちばん寒い土地を、フロリダのマイアミみたいに温かくできるから。それに、あの人は作曲家でした」

「本当かね?」

「ええ、交響曲をふたつも書いたんですよ」

いましがたわたしがいったことにらみ合わせると、こいつは皮肉だった。ウェイトが、彼の地上最後の夜を選んで、交響曲をふたつも書いたと主張するとは。メアリーはつづけてこういった。いずれ国へ帰ったら、自分はムース・ジョーを訪れて、一度も演奏されたことのないその交響曲を発掘し、どこかのオーケストラにそれを初演してもらうつもりだ、と。

「ウィラードはとても謙虚な人でした」と彼女はいった。

「そのようだね」と船長は答えた。

●

百八時間後、船長は自分がその謙虚な模範的人物の評判と、じかに競争を迫られているのを知った。

「もしウィラードが生きてさえくれていたら」とメアリーがいったのだ。「どうしたらいいか、すぐにわかったでしょうに」

船長はすでに自尊心をすっかり失っており、そして、このさきまだ三十年の人生をあましているのに、二度とそれをとりもどせなかった。これこそ本当の悲劇ではなかろうか？　メアリーからそんなあざけりを受けても、彼は卑屈なままだった。

「わたしはどんな提案にも率直に耳をかすつもりだ。あのすばらしいウィラードならここでどうするかを教えてくれれば、喜んでそうするよ」

船長はすでに自分の脳にクビをいいわたし、自分の魂の助言だけをたよりに舵をとって、船をあっちに向けたと思えば、こっちに向けていた。もし、ハンカチほどの大きさの島でも現われてくれたら、船長は感涙にむせんだろう。そして、そう、いま真正面にあるかと思えば、いまは左舷に、また船尾に、また右舷にとくるくる変わる太陽が、ふたたび水平線に沈もうとしていた。

下の甲板では、セリーナ・マッキントッシュが愛犬を呼んでいるところだった。「カァァァァァーザック。カァァァァァーザック。だれかわたしの犬を見なかった？」

メアリーはさけびかえした。「こっちにはいないわよ」それから、こんなときウィラードならどうしただろうかと想像したすえに、時計や翻訳機などなどを兼ねているマンダラックスが、ひょっとしたら無線機でもあるかもしれない、と思いついた。それを使って救助を求めてみては、と彼女は船長に提案した。

船長はその機械がマンダラックスであることを知らなかった。ゴクビだと思っていた。キートの彼の家には、ハンカチの引き出しに、カフスボタンやネクタイピンや腕時計にまじっ

て、一台のゴクビが入っていた。その前年のクリスマスに弟から贈られたものだが、べつにそれを重宝な道具とは思っていなかった。彼にとってはただのおもちゃだったし、それにこれだけはわかっていた――この機械は絶対に無線機ではない。

いま彼は、ゴクビと思いこんだものの目方を手で量りながら、メアリーにいった。「このがらくたが無線機なら、わたしの右腕と交換してもいいぐらいだよ。しかし、誓っていうが、いくらあのごりっぱなウィラード・フレミングでも、ゴクビで無線通信をするのはむりだったろうな」

「なにかにつけてそんなふうに絶対的確信を持つのは、もうそろそろおやめになったら？」とメアリーはいった。

「おなじことを、わたしも考えた」

「じゃ、ＳＯＳを発信なさい。だめでもともとでしょ？」

「たしかにそうだ。フレミングさん、まったくあなたのいうとおりだ。だめでもともとさ」

船長はマンダラックスの小さなマイクに向かって、百万年前の船が遭難したときに発する万国共通の単語を、くりかえし唱えた――「メイデイ、メイデイ、メイデイ」

それから船長は、もしやそこに返信が現われていないかと、マンダラックスを裏返し、スクリーンを自分とメアリーのほうに向けた。たまたまこのふたりが呼びだしたのは、この機械の知能のうち、ゴクビには欠けていた部分、つまり、五月（メイ）という月も含めて、ありとあらゆる主題に関する引用句をごまんと知っている部分だった。小さなスクリーンには、こんな

謎めいた言葉が現われた——

墜落せる五月、ヤマボウシと栗、花咲くユダの木。
ささやきのなかに
食われ、分かたれ、飲まるるべく……

T・S・エリオット（一八八八—一九六五）

7

船長とメアリーは、つかのまだが、外の世界と連絡がとれたと信じこんだ。もっとも、SOSに対して、そんなに敏速に、そんなに文学的な応答が返ってくるはずはなかった。

そこで船長はもう一度呼びかけた。「メイデイ！　メイデイ！　こちらはバイア・デ・ダーウィン号、現在位置不明。応答を乞う」

すると、マンダラックスは答えた──

来年の五月もうららかだろう、おそらく
だがそのとき、おれたちは二十四だ。

A・E・ハウスマン（一八五九─一九三六）

これで、五月という単語がその機械の内部から引用句を呼びだしていることは、明らかになった。船長は首をかしげた。彼はまだその機械がゴクビで、自分の家にあるのよりはすこ

し高級品なのかもしれない、と思いこんでいた。真相を知るよしもなく！　船長は、そこに出ているのが、〝五月〟という単語に対する応答だと気づいた。そこで彼は〝六月〟をためしてみた。

するといマンダラックスは答えた——

六月はいっせいに花ひらく。

オスカー・ハマースタイン二世（一八九五—一九六〇）

「十月！　十月！」と船長はわめいた。

すると、マンダラックスは答えた——

空は灰色に沈み、
木の葉は縮れて萎び——
木の葉はすがれて萎びたり。
わが悠久の昔の
うらさびしき十月の夜。

エドガー・アラン・ポー（一八〇九—一八四九）

船長がまだゴクビと信じて疑わないマンダラックスには、これでけりがついた。メアリーは、もう一度見張り台へもどって、なにか見えないか探してみる、といった。

しかし、そこへもどる前に、メアリーは船長にまたひとつの痛撃を見舞った。まもなく見えると予想される島の名前を、船長にたずねたのだ。これは海上での三日目に、船長が一日じゅうやってみせたことだった。行く手の水平線のすぐ下にあると思われる島々の名を、つぎつぎに並べたてるのだ。

「目を皿のようにして、よく見張ってくれ。サン・クリストバル島か、それともひょっとしたらヘノベサ島――この船が南へ寄っている程度によってはね」そういったかと思うと、もっとあとでは、「ああ！　これでどこにいるかがわかったぞ。おそらくいまにフッド島が見えてくる――世界でも唯一のガラパゴスアホウドリの営巣地だ。この諸島で最大の鳥だよ」その他いろいろ。

ちなみに、このアホウドリはいまも健在で、いまもフッド島に巣を作っている。この鳥の翼幅は二メートルに達し、いまもむかしとおなじように飛行の未来に賭けている。いまも彼らはそれを将来性充分と考えているのだ。

●

しかし、五日目が暮れようとするときになって、メアリーが近くにありそうな島の名前をたずねたのに、船長は沈黙を守っていた。

そこで彼女がもう一度おなじ質問をくりかえすと、船長はこう答えた。「アララテ山」

●

しかし、見張り台に登ったメアリーは、わたしを驚かせた。ごく奇妙な気象現象とわたしが見誤ったものが、船尾のすぐ上で起こり、そこから——航跡の上に——尾をひいているのを見ても、彼女は驚嘆のさけびを上げないのだ。まったく音はしないが、それはどうやら電気的な性質のもの、たぶん、球電か、それとも聖エルモの火の親類らしく思えた。もと高校教師は、それを直視しているのに、べつだん不思議ともなんとも思っているようすがない。やっとそのときになって、わたしはそれが見えるのが自分だけだと気がつき、そこからその正体を理解した——来世への青いトンネル。あれがまたわたしを追いかけてきたのだ。

それまでに、わたしはそれを三度見たことがあった——断首の瞬間と、それにマルメーの墓地でスウェーデンの土が棺の蓋に湿った音を立てて落ち、ヤルマー・アーヴィッド・ブーストロームが、自分にもベートーヴェンの第九交響曲が書ける見込みはないくせに、わたしのことを、「まあ、しかたがない——どのみち、レオンのやつにベートーヴェンの第九が書けるわけじゃなし」と批評したとき。そして三度目は、このわたしが見張り台に登っていたとき——北大西洋での嵐の最中、みぞれと波しぶきの中で、切りとられた自分の首をまるでバスケットボールよろしく高々とさしあげたときだった。

そこへ出現することによって、青いトンネルが暗黙のうちに発した質問は、このわたしにしか答えられない――どうだ、人生とはいったいなにかという問題に対するおまえの好奇心も、これで底をついたか？　もしその答がイエスなら、わたしは電気掃除機のホースそっくりなしろものの中に足を踏みいれるだけでよかった。バイア・デ・ダーウィン号の電気オーブンやコンロが放っているのとよく似た光で満たされたその青いトンネルの中に、もし吸引力が働いているとしても、その入口に立っているわたしの亡き父、SF作家キルゴア・トラウトは、それを気にしているようには見えなかった。父は筒先のすぐ内側に立って、わたしと話をかわすことができた。

●

父がバイア・デ・ダーウィン号の船尾の真上からわたしにいった最初の言葉はこうだった――「もう愚者の船にはたんのうしたか、坊や？　いますぐパパのところへおいで。こんどの誘いを断わったら、これから百万年間わしに会えんぞ」

百万年！　なんということだ――百万年とは！　父はふざけてはいない。父親としては失格であったにしろ、父はいつも約束を守ってくれたし、故意に嘘をついたことは一度もない。

そこでわたしは父のほうに一歩踏みだしたが、二歩目は踏みださなかった。求愛ダンスにとりかかった雌のアオアシカツオドリのようだった。求愛ダンスとおなじく、そのあやふやな第一歩が時計の刻む最初の音となり、それが抵抗できないものになっていくのだ。まだ筒

先からは遠く離れているのに、わたしはすでに変化していた。バイア・デ・ダーウィン号のエンジンの鼓動はしだいにかすかになり、鋼鉄のサンデッキはしだいに透明になって、真下の大サロンの中が見えてきた。そこではカンカ・ボノ族の少女たちが、彼女たちの無垢な姉妹であるカザックの骨をしゃぶっているところだった。

父のほうへ第一歩を踏みだしたことで、わたしは背後にいるインディオの少女たちや、見張り台にいるメアリー、トイレにいるヒサコ・ヒログチと彼女の胎児、ブリッジにいる意気消沈した船長と盲目のセリーナ、大型冷凍庫の中にある死体について、こんなことを考えた――「なぜ、わたしは赤の他人であるこの連中、不安と飢えの奴隷たちのことを、気にかけたりするのか？　いったい、彼らとわたしになんのかかわりがある？」

●

わたしが二歩目をなかなか踏みださないのを見て、父はうながした。「もじもじするな、レオン。恥ずかしがってる場合じゃない」

「しかし、まだ調査が終わってないんです」とわたしは抗議した。みずから選んで幽霊になったのは、その仕事の付加給付として、人の心を読んだり、人の過去に関する事実を知ったり、壁を透かして物を見たり、一度にいろいろの場所に存在したり、この状況あの状況がどうして生まれたかをとことん追求したり、人間のすべての知識を入手したりできるからだった。「おとうさん――」とわたしはいった。「もう五年だけ待ってください」

「五年！」と父はさけんだ。父はからからうような口調で、これまでにつごう三度わたしが父からせびりとった契約を持ちだした――「あと一日だけ待ってくれ、とうちゃん」「たのむよ、パパ、もう一月」「あと六ヵ月だけくれないか、おやじ」
「しかし、いまはものすごく勉強になっている最中なんですよ。人生が実はどういうものなのか、実はどういうふうに動いているのか、実はいったいどういうことなのかを！」
「わしに嘘をつくな。わしが一度でもおまえに嘘をついたか？」
「いいえ」
「では、わしに嘘をつくな」
「いまのあなたは神様ですか？」
「いや、いまもおまえの父親でしかないさ、レオン――だが、わしに嘘はつくな。いくら盗聴を重ねたところで、おまえが溜めこんだものはただの情報でしかない。野球カードや瓶の王冠のコレクターとおなじことだ。いま持っている全情報からどれだけの答がひきだせるかといえば、マンダラックスとどっこいどっこいさ」
「もう五年だけ待ってください、パパ、とうちゃん、おとうさん、おやじ」
「おまえが勉強したいものを勉強するには、それだけの期間じゃとてもたりん」と父はいった。「いいか、せがれ、だからこそわたしは名誉にかけて言明する――いま、おまえがわしを追いはらえば、今度わしが迎えにくるのは百万年先になるぞ」
父はさらに訴えた。「レオン！　レオン！　レオン！　人間のことを勉強すればするほど、

不愉快になっていくだけだぞ。自分の国のいわゆる最高の賢者たちによって、ほとんど果てしがなく、報われるところがなく、おぞましく、そしてなによりも無意味な戦争に駆りだされたという事実ひとつをとっても、おまえは人類の本性について、永劫に通用するだけの洞察をつかんだものと思ったのに！

いまさら教える必要があるだろうか？ おまえがどうやらそれについてもっともっと多くを知りたがっているらしいそのすばらしい動物が、いまこの瞬間にも、生きとし生けるものをみな殺しにすること請け合いの兵器を、合図さえあれば即座に発射できる準備をととのえて、鼻高々でいることを？

いまさら教える必要があるだろうか？ かつては美しく栄養ゆたかだったこの惑星が、いま空中から見ると、死後解剖で露出されたあわれなロイ・ヘップバーンの病んだ器官そっくりになったこと、そして、成長そのもののために成長し、すべてを食いつくし、すべてを毒で侵しているその見かけ上の癌腫が、実はおまえたち人間の愛する都市であることを？

いまさら教える必要があるだろうか？ これほど万事をだいなしにした動物が、もはや自分の孫たちのまともな生活ぶりさえ想像できなくなり、紀元二〇〇〇年にまだなにか食べ物や娯楽が残っていれば奇跡だと思っていること、そして、その年がたったの十四年先にせまっていることを？

せがれよ、この呪われた船の乗客とおなじように、人類は海図も羅針儀も持たない船長たちに導かれ、その船長たちは、重要な問題などほったらかしで、自分の自尊心をいかに守る

かにきゅうきゅうとして、一瞬一瞬を過ごしているだけなんだ」

●

生前とおなじように、父はまだ無精ひげをのばしていた。生前とおなじように、父はまだ青白くやせこけていた。生前とおなじように、父はまだタバコを吸っていた。そして、わたしが父のほうへもう一歩を踏みだせなかった理由は、疑いもなく、わたしが父を好きでないからだった。

十六のときに家出をしたのは、父のことが恥ずかしくてたまらなかったからだ。

もし、青いトンネルの入口にいるのが、父でなく天使だったとしたら、喜んでそこへ駆けこんだかもしれない。

●

ジェイムズ・ウェイトが家出をしたのは、いつもまわりの人間から肉体的苦痛を与えられるからだった。彼は分娩室からスペインの異端審問に直行したようなもので、里親たちの巨大脳が彼のために考案した拷問は、それぐらい巧妙だった。わたしのほうは、怒って手を上げたことなど一度もない実の父親から逃げだしたのだ。

しかし、まだわたしが幼くて分別もつかないうちから、父は母を永久に追いだす陰謀にわたしを加担させた。母がどこかへ旅行に行きたがったり、友だちをこしらえて食事に呼びた

がったり、ときどき映画やレストランへ行きたがったりすると、わたしにも父といっしょにそれを嘲笑するようにしむけた。わたしは父のいうことをなんでも聞いた。当時は、父が世界一の作家だと堅く信じていた。それぐらいしか自慢できることが思いつかなかったからだ。わたしの一家には友人がなく、近所でもいちばんお粗末な家に住み、テレビや車さえなかった。だから、わたしが父を母から守ろうとするのに、なんのふしぎがあったろう？　とにかく、父の名誉のためにつけくわえると、父は自分が偉いなどとはひとこともいわなかった。しかし、まだ判断力の未熟なわたしは、父が小説を書くのと、しょっちゅう――それこそひっきりなしに――タバコをふかす以外になにもしないのを、偉大さの暗黙の表われとみなしたのだった。

そうそう、ほかにもうひとつだけわたしが自慢できるものがあって、これはコホーズでは事実かなりの重みを持っていた――父はもと合衆国海兵隊員だった。

しかし、十六歳になって、とうとうこのわたしも、母と近所の人たちがとっくに達している結論にたどりついた――つまり、父がおよそ好感の持てない失敗者で、父の作品は最低の出版物にしか載らず、めったに金も払ってもらえない、と。父がそれでもなんの手も打たずに、ただ小説を書いては、しょっちゅう――それこそひっきりなしに――タバコをふかしつづけるのを見て、わたしは思った。この男は人生そのものへの侮辱だ、と。

当時のわたしは、学校で美術以外のあらゆる科目に落第点をとっていた。コホーズ高校で美術の落第点をとったものはだれもいない。そんなことは不可能だ。そこで、わたしは母を

探しに家出をしたのだが、とうとう見つからなかった。

父は百冊以上の本と千篇以上の短篇小説を発表したが、わたしが長い遍歴のあいだに知りあった人間で、父の名前を知っていたのは、たったひとりだけだった。そんなに長い捜索のあとでそんな人間に出会ったものだから、気持の整理がつかず、しばらくは自分が発狂したのではないかと思った。

●

わたしは一度も父に電話をしなかったし、ハガキさえ書かなかった。父が死んだことも知らなかった。自分が死んで、来世への青いトンネルの入口にはじめて父が現われるまでは。

しかし、わたしもたったひとつだけ、父がまだ自慢にしているにちがいないと思われることをして、父を讃えた——合衆国海兵隊に入隊したのだ。一家の伝統である。

そして、なんたることか、いまのわたしも作家になり、父とおなじようにせっせと書き物をしている。どこかに読者がいるというあてもまったくなしにだ。読者はひとりもいない。いるわけがない。

●

そこで、いま父とわたしは、求愛中のアオアシカツオドリのように、人目があろうと——いや、九分九厘なかろうと——しなければならないことをしているのだ。

いま、父は筒先からこういった。「おまえはまったく母親似だな」
「どういうところが？」とわたしはきいた。
「かあさんのいちばん好きだった引用句を知っているか？」
たしかに、わたしは知っていた。そしてマンダラックスも。それがこの本の題辞(エピグラフ)である。

●

●

「おまえは人間が善良な動物で、やがてはすべての問題を解決して、この地上をもう一度エデンの園にすると信じている」
「おかあさんに会わせてくれますか？」とわたしはいった。母がそのトンネルの奥のどこかにいること、母がすでに死んでいることは知っていた。それは、自分が死んでから最初に父にたずねたことだった――「おかあさんのその後を知りませんか？」なにしろ海兵隊に入る前に、母を探してあっちこっちをめぐり歩いたのだから。
「おとうさんのすぐうしろに立っているのは、おかあさんですか？」とわたしはきいた。青いトンネルは、おちつきのない蠕動状態にあった。くねくねのたうつたびに、その内部をかなり奥まで見通すことができた。三度目に父が現われたときも、わたしはその女性を見たことがあり、もしや母ではないかと思ったのだ――だが、そうは問屋がおろさなかった。

「わたしはネオミ・サープよ、レオン」とその女性はわたしに呼びかけた。彼女は隣りの家に住んでいた主婦で、わたしの実の母が蒸発したあと、しばらくのあいだわたしの母親代わりをつとめてくれたことがある。「サープのおばさんよ。おぼえてるわね、レオン？　さあ、いらっしゃい、いつもうちの勝手口からはいってきたような調子で。いい子になるのよ。あと百万年もそんなところに置きざりにされたくないでしょ」

わたしは筒先に向かってもう一歩踏みだした。バイア・デ・ダーウィン号は幻のクモの巣になった。青いトンネルは造船所への行き帰りに毎日わたしを運んでくれたマルメーの市電のように、実質を備えた、実用的な交通手段に思えてきた。

だが、そのとき、わたしの背後にあるバイア・デ・ダーウィン号のクモの糸に似た見張り台から、メアリーとおぼしいおぼろな幻影が、くりかえしくりかえし、なにごとかさけんでいるのが聞こえた。なにかの苦しみを訴えているらしい、とわたしは思った。なにをいっているかは聞きとれなかったが、彼女の口調は、腹に弾を一発くらった人間にふさわしいものだった。

なにをさけんでいるのかをどうしても知りたくなって、わたしは二歩あとずさり、それから向きなおって彼女を見上げた。彼女はすすり泣き、そして笑っていた。見張り台の手すりから身を乗りだし、頭をさかさにして、ブリッジにいる船長にこうさけんでいるのだった

――「おーい、陸地だわ！　陸地！　おお、恵み深い神様、ありがたい神様！　おーい！陸地だわ！　陸地！」

メアリー・ヘップバーンが見たものは、サンタ・ロサリア島だった。もちろん船長は、そこに人間が住んでいることを——でなければ、すくなくともみんなで料理して食える動物が住んでいることを——願いながら、船をそっちに向けることだろう。

残された問題は、つぎになにが起きるかを見るために、わたしがそれに同行するかどうかだ。船の乗客の運命に対する好奇心を満足させるのに、どんな代償を支払わなければならないかは、はっきりしている——百万年間、仮釈放の望みもなく、この地上に幽霊としてとりつくこと。

その決断をわたしに代わってくだしたのは、メアリー・ヘップバーン、またの名〝フレミング夫人〟だった。見張り台での彼女の狂喜ぶりにすっかり注意を奪われていたわたしが、やがてトンネルをふりかえったとき、すでにトンネルは消えていた。

●

いま、わたしはその百万年の刑をつとめおえた。社会だかなんだかに対する自分の負債を、

完全に返済した。もう、いつあの青いトンネルが現われてもふしぎはない。もちろん、わたしはいそいそとその入口に駆けこむだろう。これからここで起きることは、これまでに飽きるほど見聞きしてきたことばかりだろうからだ。たしかに、もうだれにもベートーヴェンの第九交響曲が書ける見込みはない――それともまた、嘘をついたり、第三次世界大戦を起こしたりする気づかいもない。

母のいったとおりだ――いちばん暗い時代にも、人類にはまだ希望がある。

●

一九八六年十二月一日、月曜日の午後、アドルフ・フォン・クライスト船長は、有効な錨を持たないバイア・デ・ダーウィン号を、岸に近い溶岩の浅瀬の上にわざと乗りあげさせた。ふたたび出航の日がくれば、前にグアヤキルでそうしたように、船の自力でそこを離れられる、と船長はかたく信じていた。

船長は、いつ出航するつもりでいたのか？　食料倉庫が、卵や、カツオドリや、イグアナや、ペンギンや、コバネウや、カニや、そのほか食用になってしかも捕まえやすいものでいっぱいになりしだいに。食料のストックが、燃料と水のストックに釣り合うだけのものになれば、そこでゆうゆうと大陸へひきかえし、自分たちを受け入れてくれる平和な港を探せばよい。いうならば、南アメリカ大陸を再発見するわけだ。

船長は忠実なエンジンのスイッチを切った。それがエンジンの忠実さの終わりだった。彼

にはついに理由不明のまま、エンジンは二度と始動しなくなる。
それはコンロやオーブンや冷蔵庫も、まもなくだめになることを意味していた——バッテリーが上がりしだいに。

●

メインデッキの索止め(つな)のそばには、まだ白いナイロンの臍(へそ)の緒、十メートルの後部係船索がとぐろを巻いていた。船長はそれに結び目を作り、メアリーとふたりでそれを伝って浅瀬に下り、あとは岸まで歩いて渡って、卵を集め、まったく人を怖がらない動物たちを殺しにとりかかった。ふたりはメアリーのシャツと、ジェイムズ・ウェイトのまだ値札のくっついた新しいシャツを、食料品袋に使うことになる。
ふたりはカツオドリの首を絞めた。陸イグアナの尻尾を捕まえ、黒い岩にたたきつけた。そして、この虐殺のあいだに、メアリーはすり傷を作り、恐れを知らぬ吸血フィンチが、人間の血をはじめて味見することになる。

●

この殺し屋たちも、海イグアナだけは、てんから食用にならないと考えて、ほうっておいた。この生物の腹の中にある消化途中の海草が、調理ずみのほっかほかのうまい食物であるばかりか、それまでみんなを悩ませたビタミン欠乏症やミネラル欠乏症の妙薬でもあること

が発見されるのは、それから二年ほどあとである。これで一同の食餌は完全なものになる。その上、中にはこのピューレをほかのものよりうまく消化できるために、より健康でぴちぴちした外見に——より好ましいセックスの相手に——なる人間も出てきた。こうして自然選択の法則がはたらきはじめ、その結果、百万年後の現人類は、海イグアナの仲介がなくても生の海草を自分で消化できるようになったため、この生物をほうっておくことにしている。

このほうが、だれにとってもはるかに好都合だ。

しかし、人間はまだ魚を殺すし、魚が不足すると、カツオドリを食べる。この鳥はいまも人間を恐れない。

かりにわたしがもう百万年ここにとどまったとしても、人間は危険だとカツオドリが気づくには、まだとうてい時間がたりないだろう。そう、そしてすでに書いたように、いまでも交尾期になると、カツオドリはダンスに明け暮れる。

●

その夜、一行はバイア・デ・ダーウィン号の上で盛大な宴会をたのしんだ。みんながサンデッキに集まり、デッキそのものが大皿になり、船長が料理長として腕をふるった。カニの肉とみじん切りのフィンチの肉を詰めた、陸イグアナのロースト。溶かしたペンギンの脂肪をかけながら焼いた、卵詰めのカツオドリのロースト。どれもがすばらしい味だった。みんながふたたび幸福になった。

その翌朝、日が昇るのを待ちかねて、船長とメアリーはもう一度上陸し、こんどはカンカ・ボノ族の少女たちを連れていった。少女たちも、ついになにが起こっているかを理解することができた。みんなは殺戮に殺戮を重ね、その死骸を運びに運び、とうとう船の冷凍庫は、ジェイムズ・ウェイトに加えて、もし必要なら一ヵ月はもつほどの鳥とイグアナと卵であふれかえった。いまや一行は潤沢な燃料と水のほかに、無尽蔵の食料、それもおいしい食料を手に入れたのだった。

あとは船長がエンジンを始動させるだけだ。船を東に向かって全速力で走らせればいい。ユーモアのセンスが復活した船長は、メアリーにいった。こんどは、どうころんでも、南アメリカか、中央アメリカか、北アメリカを見逃すはずはない。「……運わるくパナマ運河を通りぬけれればべつだがね。しかし、たとえ運河を通りぬけても、いずれヨーロッパかアフリカにたどりつけることは保証する」

そういって船長は笑い、メアリーも笑った。結局は万事がうまくおさまりそうだった。だが、そこで、エンジンがどうしてもかからないことがわかった。

9

バイア・デ・ダーウィン号が死んだような凪ぎの海に沈んでいったのは、一九九六年九月のことだが、それまでには船長を除く全員が、メアリーのつけたあだ名でこの船を呼んでいた。〝ばたばた窓のブラインド号〟という名で。

この軽蔑のこもった称号は、メアリーがマンダラックスから教わった歌からとったもので、その歌はこんな内容だった——

大海原の旅にうってつけの船は、
〈ばたばた窓のブラインド号〉。
嵐がきても水夫たちはひるまず、
船長これまた平気の平左。
舵をとってはどんな大時化も
せせら笑う筋金入り。
やがて青空のぞいてわかる。

どうやら船長、どこかの寝棚に
もぐりこんでいたらしい。

チャールズ・キャリル（一八四二—一九二〇）

ヒサコ・ヒログチも、その娘のにこ毛に覆われたアキコも、セリーナ・マッキントッシュも、みんなその船を〝ばたばた窓のブラインド号〟と呼んだし、カンカ・ボノ族の少女たちも、意味はわからないなりに、言葉のひびきが気に入ってそう呼んだ。それから月日が経ち、カンカ・ボノ族の女たちが子供を生んだとき、彼女たちは幼いものたちに、自分らは大陸から、いまはもう消えてしまったが、〝ばたばた窓のブラインド号〟という魔法の船に乗ってやってきたのだ、と教えることになる。

アキコは、英語と日本語だけでなく、カンカ・ボノ語をすらすらしゃべれたし、カンカ・ボノ族と会話のできる唯一の非カンカ・ボノ族だったが、それでもうまくカンカ・ボノ語に翻訳できない言葉があった。その言葉とは——〝ばたばた窓のブラインド号〟。

いま、青い礁湖のそばの白い砂浜で日なたぼっこをしている現人類も、もしわたしが彼または彼女の耳にある言葉をささやいたとしたら、カンカ・ボノ族とおなじようにその意味も、滑稽な意図も理解できないだろう。その言葉とは——〝ばたばた窓のブラインド号〟。

メアリーが人工受精計画にとりかかったのは、〝ばたばた窓のブラインド号〟が海底に沈んでまもなくである。このときメアリーは六十一歳。船長の唯一の性的パートナーだったが、船長もすでに六十六歳で、性的衝動はもはやそれほど強烈でなくなっていた。しかも、船長は子供を作るまいと決意していた。子孫にハンティントン舞踏病が伝わる可能性はまだ皆無ではない、と考えたのだ。それに彼には人種的偏見があり、ヒサコにも、その娘のにこ毛におおわれたアキコにも惹かれなかったし、最終的には彼の子供を生むことになるインディオの女たちにはなおさらそうだった。

忘れないでほしい――この人びとはいつかそのうちに救助されることをあてにしていて、自分たちが人類最後の希望だとは知るよしもなかった。だから、性行動にふけったのも、その目的は、しばらくの時間をたのしくすごしたいとか、欲望を処理したいとか、ぐっすり眠りたいとか、そんな単純なものだった。現実に生殖が無責任な行為であることは、だれもが知っていた。サンタ・ロサリア島は子供を育てるのに不向きな場所だし、それに子供が生まれれば、食料の供給にも負担がかかるのだから。

〝ばたばた窓のブラインド号〟がエクアドル海軍の潜水艦隊に合流するまで、メアリーはこのことをだれよりも強く感じていた――つまり、ここで子供が生まれれば悲劇だ、と。

彼女の魂はそう感じつづけたが、巨大脳のほうは、彼女をおびえさせないようにのんびりと、こんな空想をもてあそびはじめた。船長が月に二度ほど彼女の体にそそぎこむ精液を、なんとかして受胎能力のある女性に移しかえることができれば――さてお立ち合い、妊娠し

ましたらお慰み。当時十歳のアキコはまだ排卵していない。しかし、十五歳から十九歳の範囲にあるカンカ・ボノ族の女たちは、りっぱに排卵している。

●

メアリーの巨大脳は、彼女が何度となく生徒にいってきたことを彼女にいった——人間が頭の中でいろいろの考えをもてあそぶのは、たとえその考えが一見どんなに不可能に、それとも非実用的に、それともばかばかしく思えても、なんの害もないし、ことによると非常に有益かもしれない、と。彼女は、イリアムの若者たちに断言した調子で、サンタ・ロサリア島の自分にこう保証した。まるっきりくだらないアイデアでも、それを脳の体操としてもてあそんでいるうちに、現代の——つまり、百万年前の彼女がいう〝現代〟の——科学で最も重要な洞察につながった実例が、いくらでもある、と。

彼女はマンダラックスで好奇心という言葉をひいてみた。

マンダラックスいわく——

好奇心は、活発な精神に備わる永久的かつ確実な特質である。

サミュエル・ジョンソン（一七〇九—一七八四）

マンダラックスが彼女に教えず、また彼女の巨大脳も絶対に彼女に教えようとしなかった

のは、こういうことだった。つまり、もし彼女が実現の見込みのある新しい実験を思いついたとしたら、彼女の巨大脳は、彼女を責めて責めぬき、その実験を実際にやるまで許そうとしないだろう。

これが、わたしにいわせれば、むかしの巨大脳のいちばん悪魔的な側面である。巨大脳はその持ち主におおよそこんなことをいうのだ——「このばかばかしいアイデアは、たぶん実行できるだろうが、もちろん、われわれはそんなことはしない。ただ、考えるのがおもしろいだけだよ」

そしてそのあと、人間はさながらトランス状態で、それを実行することになる——コロセウムの中でふたりの奴隷にどちらかが死ぬまで闘わせたり、その土地で人気のない意見を持った人たちを公共広場で焼き殺したり、人びとを大量に殺すか、都市をまるごとふっとばすだけが目的の工場を作ったり、その他いろいろ。

●

マンダラックスの内部のどこかにあるべきで実はなかったのは、こんな趣旨の警告だった——「この巨大脳の時代には、可能なことはかたっぱしから起こるだろう——だから、おさえて、おさえて」

マンダラックスがそれにいちばん近いことをいったのは、トマス・カーライル（一七九五—一八八一）からの引用句だった——

いかなる種類の懐疑も、それにとどめを刺せるのは行動のみである。

●

離れ小島で、なんの技術的援助もなしに、女性がほかの女性に人工授精をほどこすことができるものだろうか、というメアリーの懐疑が、彼女を行動に踏みきらせた。さながらトランス状態で、気がついたときには、アキコを通訳に連れてクレーターの反対側にあるカンカ・ボノ族のキャンプを訪れていた。

そしていまのわたしは、自分がまだ生きていたころの父、まだコホーズでインクのしみだらけの敗残者であったときの父を思いだしていることに気がつく。父はいつも自分の小説が映画に売れて、もう日雇い仕事に出なくてもよくなり、コックや掃除婦を雇える日がくるのを夢見ていた。

しかし、どれほど父が映画化にあこがれても、父の小説の肝心かなめの場面は、どれをとっても、正気の人間が映画にしたがるようなものではなかった――すくなくとも、人気のある映画を作るつもりならば。

そして、いまのわたしも、これが百万年前なら、その肝心かなめの場面がとうてい人気のある映画にはなりそうもない物語を綴っている。その物語の中では、メアリー・ヘップバーンが、まるで催眠にかかったように、右手の人差し指を自分の体につっこみ、それから十八

歳のカンカ・ボノ族の娘の体内にその指をつっこんで彼女を受胎させるのだ。

のちにメアリーは、自分がカンカ・ボノ族のティーンエイジャーの体を、それもひとりではなく、みんなの体を勝手に使って、無鉄砲で、不可解で、無責任で、まったく常軌を逸した行動をとったことについて、あるジョークを思いつくことになる。もっとも、そのときの彼女は、そのジョークを理解してくれるだろうたったひとりの定住者、つまり船長と、もはや口もきかない仲だったので、そのジョークを自分の胸にしまっておくしかなかった。もし、そのジョークが口にされたとしたら、おそらくこんなふうだったろう——

「もし、まだイリアム高校で生徒を教えていたときにこれを思いついていたら、いまごろはこんな人里離れたサンタ・ロサリア島なんかじゃなく、ニューヨーク州女子刑務所の監房で居心地よく暮らせていたのに」

10

船が沈んだとき、ジェイムズ・ウェイトの死体は、食肉ロッカーの中で、爬虫類や鳥の死体とごっちゃになって沈んでしまった。その爬虫類や鳥の同類は、今日もまだ健在だ。ウェイトに似た死体で、今日でもまだ残っているのは、肉の剝がれ落ちた遺骨だけである。

察するに、この遺骨の主は一種の雄の大猿だったらしい――彼は直立して歩き、異常なほど大きい脳を持っていたが、その目的は、推測するところ、巧妙な関節を備えた両手をあやつるためにあったのだろう。彼は火を手なずけていたのかもしれない。彼は道具を使っていたのかもしれない。

彼は十語あるいはそれ以上のヴォキャブラリーを持っていたかもしれない。

●

船が沈んだとき、船長はこの島で唯一のひげを持っていた。それから一年後には、彼の息子のカミカゼが生まれてくることになる。それから十三年後には、この島は第二のひげ、カ

ミカゼのひげを持つことになる。
マンダラックスいわく――

そのむかし、ひげの爺さんいうことに
「やっぱり心配したとおり！
フクロウ二羽とメンドリ一羽
ヒバリが四羽にミソサザイ一羽
わしのひげじゅう巣だらけじゃ！」

エドワード・リア（一八一二―一八八八）

船が沈んだときには、このコロニーもすでに十年を経たあとで、あまり考えることもなく、あまりすることともない船長は、ひどく退屈な人間になっていた。彼は大半の時間を、この島の唯一の水源である、クレーターのふもとの泉で過ごした。みんなが水をくみにくると、船長はまるで優しく聡明な泉の持ち主、泉の補佐役兼管理人のような顔で、それを迎えるのだった。船長は、彼のいうことがひとこともわからないカンカ・ボノ族にさえも、その日の泉がどんな調子かを教えた。岩の割れ目からしたたり落ちる水のありさまを言葉で表現したのだ――「……きょうはひどく神経質だ」とか、「……きょうはひどく陽気だ」とか、「……きょうはひどくのんびりしている」とかいったふうに。

水のしたたりかたは、実をいうとごく一様で、定住者たちがやってくる何千年も前からそうだったし、もう人間がそれにたよる必要のなくなった現在でもやはりそうである。その仕組みはこういうことで、べつに合衆国海軍兵学校の卒業生でなくても、その謎は理解できる――このクレーターは、雨水を集める巨大な深鉢で、集めた雨水を日光から隠し、火山性の岩屑(がんせつ)の厚い厚い層の下へしまいこんでいる。その深鉢には小さなひびがあり、そこからぽとぽと漏れるのがこの泉なのだ。

いくら船長が暇をもてあましているとしても、この泉にはもう改良の余地がなかった。水は溶岩の大石の亀裂から申し分ない調子でしたたり落ちているし、十センチ下にある天然の水盤がちゃんとそれを受けとめている。むかしもいまも、その水盤は、〝ばたばた窓のブラインド号〟の大サロンのはずれにあったトイレの洗面台とほぼおなじサイズだ。もしかりにその水盤が、船長の介入か、それともなにかの理由で空になったとしても、マンダラックスで測って二十三分と十一秒後には、ふたたびなみなみと溢れるにちがいない。

船長の衰えゆく晩年を、どう表現したものだろうか。彼は静かな絶望を感じていた、とでもいうしかないだろう。しかし、たしかなところ、そんな気持を感じるためなら、なにもわざわざサンタ・ロサリア島へ流されるまでもなかった。

マンダラックスいわく――

大多数の人間は、静かな絶望の生活を送っている。

なぜ、あの当時は、それもとりわけ男性のあいだに、静かな絶望という病気が蔓延したのか？　ここでまた、この物語で唯一の真の悪役を、急いで登場させなくてはならない――人間の巨大脳を。

ヘンリー・デイヴィッド・ソーロー（一八一七―一八六二）

●

今日では、だれも静かな絶望の生活を送ってはいない。百万年前の大多数の人間が静かな絶望の生活を送っていたのは、彼らの頭蓋の中の呪わしいコンピュータが、ほどほどにするとか、遊ぶとかいうことができず、人生がとうてい提供できるはずのないとびきりの難問を、もっともっとと、ひっきりなしにせがむからだった。

●

現在まで人類が奇跡的な生存をつづける上で、わたしの目から見た肝心かなめの事件と状況は、もうこれでほとんど語りつくした。思い出の中にあるそれらは、閉ざされた数多くのドアを開いていく奇妙な形をした鍵束のようだ。そして最後のドアのむこうに、完全な幸福が開けたのである。

疑いもなく、その鍵のひとつは、サンタ・ロサリア島に道具というものがなかったことだ

った。骨と小枝と石と魚の腸を——そして鳥の腸を——のぞいては。
もし、船長がなにかのまともな道具、かなてこや、つるはしや、シャベルや、そんなものを持っていたなら、きっと科学と進歩の名においてなにかよけいなことをやらかし、泉の水を詰まらせるか、それとも水を勢いよく噴きださせて、クレーターの中身を一、二週間でからっぽにしたにちがいない。

●

定住者たちが、人口と食料供給のあいだに築きあげたバランスについては——これもやはり知能というよりは幸運の賜物といわざるをえない。
自然は潤沢を望んだので、食べるものは充分にあった。ほかの島々の鳥たちは繁殖を重ね、過密になった集団営巣地からサンタ・ロサリア島に移住者を送りだし、人間に食いつくされた仲間の巣を乗っとらせた。海イグアナは、長距離泳者でないため、こうした自然の補充計画が望めなかった。しかし、この爬虫類の怪奇な外見からくる嫌悪感と、その腸の中身を知った人間たちは、ほかの食物がよほど不足したときにだけこの生物を栄養源に使うことにしたのだった。
いちばんおいしい食物は、みんなの意見の一致するところ、すべすべした平たい岩の上で、何時間もかけて天日で焼いた卵だった。サンタ・ロサリア島には火がない。次点は、鳥から盗んできた魚だった。そのつぎは、鳥そのものだった。そのつぎは、海イグアナの内臓から

とった緑色のどろどろしたものだった。

事実、自然はすばらしく潤沢だったので、予備食料までちゃんとあり、定住者たちもそれに気づいていたが、結局そこまで手をつける必要がなかった。あたりには老若さまざまのオットセイやアシカが群れていて、交尾期の雄以外は、警戒心もなく、凶暴でもなく、のんびりと遊びたわむれながら、そばを通りすぎる人間たちに色目を使っていたのだ。彼らはりっぱに食用になった。

●

定住者たちがあっというまに陸イグアナを殺しつくしてしまったことは、ひょっとしたら致命的な結果になっていたかもしれない——だが、結局は大きな災厄にならずにすんだ。そうなる可能性もあったのだ。たまたまそうならなかっただけである。サンタ・ロサリア島には前からゾウガメがいなかった。もしいたら、定住者たちはこの動物をも絶滅させただろう。だが、それでも大差はなかったかもしれない。

一方、ここ以外の世界、特にアフリカでは、人びとが何百万人も死んでいったが、それはひとえに不運なためだった。アフリカでは雨が何年も何年も降らなかった。むかしはよく雨が降ったのに、いまではもう二度と雨が降りそうもない感じだった。

すくなくとも、アフリカの人びとの生殖はとまった。それだけはよかった。それだけは救いだった。

ただでさえ乏しい物資の分配のためには。

船長は、カンカ・ボノ族の女たちが妊娠していることに、そのひとりが出産する一ヵ月前まで気づかなかった。たまたま、そこで誕生したのは、この島を故郷とする最初の人間の男性であり、彼はにこ毛におおわれたアキコが与えたあだ名で呼ばれることになった。赤ん坊が男であった喜びをアキコが表現したその名は〝カミカゼ〟——日本語で〝聖なる風〟の意味である。

●

初代の定住者は、全員をひっくるめた大家族を作らなかった。しかし、そのあとの世代は、旧世代の最後の生き残りが死んだあと、全員をひっくるめた大家族を作ることになる。この家族には共通の言語と共通の宗教、それに若干の共通のジョークと、歌と、ダンスなどなどがあり、その大半はカンカ・ボノ族のものだった。そしてカミカゼは、とてもとても高齢の老人になったとき、船長がけっしてならなかったもの、つまり、みんなの尊敬を集める族長になった。そして、アキコはみんなの尊敬を集める女族長になった。

すべては——そうしたランダムな遺伝形質から完全にまとまった人間家族が形作られていく過程は——きわめて急速に進んだ。それは見ていても気持がよかった。もうすこしでわた

しは、そのむかし、巨大脳やなにやかやを持っていたころとおなじように、人間を愛したくなったぐらいだった。

11

カンカ・ボノ族の女のひとりが妊娠したことを船長が知ったのは、ずいぶんあとになってからだった。たしかにそれは、だれも彼にそのことを教えなかったからではあるが、また一方で、カンカ・ボノ族の女たちが、おもに人種的偏見から船長を毛嫌いしていたため、めったに船長の前に姿を見せなかったからである。船長を避けるため、クレーターのむこう側へ水くみにいくのも、船長がたいてい眠りこけている夜更けときめていた。彼女たちは、船長が死ぬまで彼を嫌いぬいた。自分たちが心から愛している子供たちみんなの父親であるにもかかわらず。

しかし、カミカゼが生まれる一ヵ月前に、船長はメアリーと共用している羽根のベッドで眠れなくなった。彼の巨大脳は、ある計画で彼をいらだたせ、もだえさせた。それはクレーターのてっぺんから水源まで岩を掘りすすめ、漏れている場所をつきとめ、だれも文句をいういわれのないもの——つまり、泉の流水量——を自分の手で左右しよう、というものだった。

ちなみに、それは野心的な点でクフ王のピラミッドや、パナマ運河の建設にも負けないほ

どの工事計画だった。
　そこで船長はベッドから抜けだし、真夜中の散歩をはじめた。満月が真上にかかっていた。彼が泉までやってくると、そこには六人のカンカ・ボノ族が、なみなみと水盤に溢れた水を、まるで人なつっこい生き物であるかのように軽くたたきながら、おたがいにしぶきをかけあったり、などなどをしてふざけあっていた。彼女たちはそうやって大いにたのしんでいる上に、まもなくみんなに赤ん坊が生まれるため、いっそう幸福だった。
　船長を見たとたんに、彼女たちの遊びは中断した。船長を邪悪だと思っていたからだ。しかし、船長もうろたえた――すっ裸だったからだ。彼はだれかにでくわすと思っていなかった。イグアナの皮で作ったふんどしをつける手間をはぶいていた。そこで、サンタ・ロサリア島での十年間でいまはじめて、カンカ・ボノ族は彼の性器を見ることになった。彼女たちは吹きださずにはいられなくなり、つぎに笑いがとまらなくなった。

●

　船長は自分の住居へ退却した。そこではメアリーがぐっすり眠っていた。船長はあの笑いを幼稚なものと片づけた。そして、あの中のひとりは、腹に腫瘍ができたか、それとも寄生虫がいるか、それとも化膿しているらしいと思い、あんなにはしゃいでいてもまもなく死ぬことになるだろう、と考えた。
　翌朝、彼がその腫れのことをメアリーに話すと、彼女は奇妙な微笑をよこした。

「あれがにやにやするようなことかね?」と彼はいった。「あら、たいへん――たしかに、にやにやするようなことじゃないわ」
「わたし、にやにやしたかしら?」と彼女はいった。
「あれだけ大きい腫れとなると――」と彼はいった。「ささいなことであるはずがない」
「それには心から同感だわ。とにかく、じっと見まもりながら待つしかないわね。ほかになにができるというの?」
「彼女はとても陽気だった」と船長は驚嘆を表わした。「まったく気にしていないようだった――あんなひどい腫れを」
「あなたがよくいうように、彼女たちはわたしたちとちがうのよ。思考がずっと原始的なの。なにがあっても、それをがまんしてやっていく。どのみち、たいしてなにをどうすることもできないと考えているから、人生をあるがままに受け入れるのよ」
彼女はベッドの上にマンダラックスをおいていた。定住者の中でこの機械をまだ面白がっているのは、彼女と当時まだ十歳のアキコだけだった。もし、彼女たちがいなかったなら、船長かセリーナかヒサコが、マンダラックスの役に立たない助言や、見当はずれの知恵や、滑稽であろうとする鈍重な努力にほとほとうんざりして、とっくのむかしにそれを海に投げこんでいたにちがいない。
事実、船長は、例の〝ばたばた窓のブラインド号〟の滑稽な船長に関する詩をマンダラックスが引用したときから、個人的にこの機械に侮辱されたと感じていた。

そこでメアリーはいま、腹が大きく腫れているのにとても幸福そうな、カンカ・ボノ族の女の見かけの無知さについて、こんなコメントを引きだすことができた。すなわち――

最も幸福な人生は無知の中にある、
悲嘆と歓喜をまなぶ以前に。

ソフォクレス（紀元前四九六―四〇六）

メアリーが船長をおもちゃにしている流儀は、船長のもと同類の男性であったわたしからすると、ひとりよがりで意地悪なやりくちだと思えるものだった。もし、生前のわたしが女性だったら、またちがった受けとりかたをしたかもしれない。たぶん、その当時に男性が演じていた、そしていまも演じている生殖面での限られた役割に対して、メアリー・ヘップバーンがひそかな嘲笑を送ったことに、快哉をさけんだことだろう。その役割だけはいまも変わっていない。いまもあのでっかいでくのぼうどもは、その季節に生きた精液をほとばしらせるしかほかに能がないのだ。

やがて、メアリーのひそかな嘲笑は、しだいに露骨で嫌味なものになってくる。カミカゼが生まれたのち、船長はその子が自分の実の息子であると聞かされ、口角泡をとばして、なぜそんなことを自分に相談もなしにやったのか、と文句をいうことになる。

するとメアリーはこう答える――「あなたはおなかの中に九カ月もあの子をかかえたあげ

く、股のあいだからじたばたもがきながら出てこられるような目にあわずにすむんだもの。あの子に乳をやることもできないんだもの。まあ、あなたが、乳をやりたがるとは思えないけど。それに、子育ての手伝いもできそうにないし。だから、むしろあなたがあの子といっさい関係をもたないほうが望ましいのよ！」
「いくらそうだとしても――」と船長は抗議した。
「ああ、神様――」と彼女はいった。「もし、海イグアナの唾から赤ん坊が作れるものなら、わたしたちはとっくにそうしていたでしょうよ。皇帝陛下をわずらわすまでもなく！」

12

メアリーが船長にそこまでいったあとでは、いままでどおりの関係をつづけられるわけはなかった。百万年前には、どうすればふたりの男女が仲たがいせずに暮らしていけるかについて、巨大脳がさかんに理屈を並べたものだが、メアリーがもしそうしたければ、船長ともうしばらくは仲よく暮らしていける方法が、すくなくともひとつあった。つまり、カンカ・ボノ族の女たちがオットセイやアシカとまぐわった、と船長にいえばよかったのだ。船長はおそらくそれを真に受けただろう。その女たちの道徳性を見くびっていたばかりか、人工授精がおこなわれたとは夢にも思っていなかったのだから。船長にしてみれば、そんなことが可能だとは想像もできなかっただろう。実をいうと、その手順はあきれるほど造作ないものであったのだが。

マンダラックスいわく――

塀を嫌がるなにものかがある。

ロバート・フロスト（一八七四―一九六三）

それにこうつけ加えよう──

そう、しかし、粘膜を好むなにものかもある。

レオン・トロツキー・トラウト（一九四六─一〇〇一九八六）

そんなわけで、メアリーは船長との関係がこわれるのを嘘によって防げたかもしれないが、それでもなぜカミカゼが青い目をしているかの説明はつかなかったろう。ちなみに、現人類は十二人にひとりの割りで、船長の青い目と、縮れた金色の毛を受けついでいる。ときどき、わたしはそうした人間に向かって冗談半分に、「グーテン・モルゲン、ヘル・フォン・クライスト」とか、「ヴィー・ゲーツェス・イーネン、フロイライン・フォン・クライスト？」とかいってみる。わたしの知っているドイツ語は、その程度だ。

今日では、それでも充分でお釣りがくる。

●

メアリー・ヘップバーンは、嘘をついても船長との関係をたもつべきであったろうか？この疑問には、これだけの歳月を経た今日でも結論が出せない。このふたりはもともと理想のカップルではなかった。このふたりが同棲するようになったのは、セリーナとヒサコが組

みになってアキコを育て、カンカ・ボノ族の女たちが、カンカ・ボノ族の信念と態度と暮らしかたの純粋性を守るために、クレーターのむこう側へ引越したあとだった。

ちなみに、カンカ・ボノ族には、自分の名前をカンカ・ボノ族ではないだれからも秘密にしておくという慣習がある。しかし、わたしはほかのみんなの秘密に通じているのとおなじように、彼女たちの秘密にも通じていたし、ここでそれを暴露しても、もうさしつかえはないと思う。船長の子を最初に生んだ女はシンカ、二番目に生んだ女はロア、三番目に生んだ女はリラ、四番目に生んだ女はディルノ、五番目に生んだ女はナンノ、そして六番目に生んだ女はキールだった。

●

メアリーは船長のもとを去って、自分の天蓋と羽根のベッドを作ったあと、いまも船長と暮らしていたときよりべつに淋しいわけではない、とアキコに打ち明けることになる。メアリーが船長に対していだいていたいくつかの特定の苦情は、もし船長自身がふたりの関係を長つづきさせたければ、すぐにも直せるたぐいのものだった。

「仲よくやっていくには、両方の努力が必要なの」とメアリーはアキコに教えた。「片方だけが努力するのなら、最初からしないほうがまし。それじゃうまくいきっこないし、それに努力した片方は、ちょうどわたしがそうだったように、いつもばかにされた気分になる。わたしはむかし本当に幸福な結婚生活をしたことがあるのよ、アキコ。それに、もしウィラー

ドがあそこで死ななかったら、きっと二度目の幸福な結婚生活ができていたわ――だから、どうすればうまくいくかは、よくわかっているの」

メアリーは、船長がその気になれば簡単に直せるのにそうしなかった四つの最も重大な欠点を、こんなふうに数えあげた――

1　この島から救出されたあかつきにはどうするかという計画を語るとき、船長は一度もわたしをその計画の中に含めたことがない。

2　船長はそうすればどんなにわたしを傷つけるかを知っていながら、ウィラード・フレミングのことをばかにし、頭から疑ってかかった。彼が交響曲をふたつも書いたり、風車についてなにかを知っていたりしたはずはない。それどころか、スキーもできなかったろう、と。

3　船長は、わたしがボタンを押しまちがえたときにマンダラックスが立てるピーッという音に、いつもうるさいと文句をいった。そんなに大きな音でもないし、それに、有名な引用句をおぼえたり、新しい外国語を習ったり、などなどの勉強をするのが、わたしにはどんなに大切なことかを知っていながら。

4　船長は、「きみを愛している」というぐらいなら、死んだほうがましだと思っていた。

「おまけに、この四つは大きな欠点だけなのよ」とメアリーはいった。つまり、メアリーが船長に向かって海イグアナの唾うんぬんといったときには、それまで鬱積していた反感のありったけが、一度に吐きだされたわけである。

●

わたしには、この仲たがいが悲劇的なものに思えない。ふたりのあいだには、手のかかる子供もいなかったし、どちらもひとり暮らしにまったく耐えられないわけではなかった。それにどちらのところにも、よくアキコが訪ねてきたし、その後、カミカゼにひげが生えてからのアキコは、彼女自身のにこ毛におおわれた子供たちを連れて遊びにくるようになった。

●

メアリーは、みんなが赤ん坊を持つことを可能にしたのに、カンカ・ボノ族の女たちから特別な地位を与えられはしなかった。カンカ・ボノ族の女たちもその子供たちも、船長を怖がるのとおなじぐらい彼女を怖がり、良いことだけでなく、とても悪いことのできる魔女だと信じていた。

そして二十年が過ぎた。ヒサコとセリーナはその八年前に入水自殺をとげていた。アキコはいまやかっぷくのいい三十九歳の婦人になり、カミカゼとのあいだに七人のにこ毛におおわれた子供をもうけていた——男の子がふたり、女の子が五人。彼女はマンダラックスの助

けがなくても、三つの言語をすらすらしゃべることができた——英語と、日本語と、カンカ・ボノ語である。彼女の子供たちはカンカ・ボノ語しかしゃべらず、英語の単語はふたつしか知らなかった——じいちゃま(グランパー)とばあちゃま(グランマー)である。アキコは子供たちに、船長とメアリー・ヘップバーンをそう呼ばせていた。アキコ自身もこのふたりをそう呼んでいた。

●

ある日の朝、*マンダラックスによれば二〇一六年五月九日、午前七時三十分に、アキコは*メアリーを起こして、*船長と仲直りをするべきだ、*船長はとても病気が重くて、たぶんきょう一日も命がもたないだろうから、と告げた。アキコはその前日の夕方に彼を訪ねてから、子供たちを先に帰して、徹夜で看病をしたのだった。もっとも、してやれることはたいしてなかったが。

そこで*メアリーはでかけたが、彼女のほうもむかしの元気はなかった。彼女は八十歳で——歯が一本もなくなっていた。彼女の背骨は疑問符の形をしており、これは*マンダラックスによると、骨粗鬆症(そしょう)のおかげだった。*マンダラックスに教えられなくても、彼女はそれが骨粗鬆症(そしょう)なのを知っていた。彼女の母親と祖母もやはりこの病気で、死ぬ前には骨が葦のようにもろくなったのだ。これもやはり遺伝性疾患のひとつだったが、現在は知られていない。

*船長の病気について、*マンダラックスは知識に基づいた推測から、それがアルツハイ

マー病であろうという診断をくだした。この老人はもはや自分のことが自分でできなくなり、自分がどこにいるのかもわからなくなっていた。もしアキコが毎日食べ物を運んできて、なだめすかしたりしてすこしでもそれを食べさせなかったら、とっくに飢え死にしていただろう。彼は八十六歳だった。

＊マンダラックスいわく——

この奇怪で多事多難の歴史を
しめくくる最後の大詰めは、
第二の幼児期とたんなる忘却、
歯もなく、目もなく、味もなく、なにもない。
ウィリアム・シェイクスピア（一五六四——一六一六）

そこで＊メアリーは、腰をかがめ、足をひきずりながら＊船長の羽根の天蓋、かつては彼女自身のものでもあった天蓋の下へはいった。あれから二十年、彼女はここへ足を踏みいれていなかった。その天蓋は、彼女が去ってから何度もとりかえられていたし、それを支えるマングローブの柱や杭も、そして羽根のベッドも、もちろんそうだった。しかし、その構造はむかしとおなじで、生きたマングローブを伐りはらった見晴らしが水辺まで開け、遠い遠いむかし、〝ばたばた窓のブラインド号〟が乗りあげた浅瀬を額縁のようにとりかこんでい

た。

　ついでながら、その船をとうとう浅瀬からひき離したのは、その船尾に溜まり溜まった雨水と海水だった。海水は、巨大なスクリューの駆動軸から侵入してきた。船は夜のうちに沈んだ。その船が三キロ真下の海の墓場まで〝世紀の大自然クルーズ〟の最後の一区間を航海するのを、実際に見届けたものはだれもいない。

13

*船長の家の外にある浅瀬は、なんと痛ましい歴史を持っていたことか！ それを彼が毎日見たがったのは、意外な気がする。*ヒサコ・ヒログチと盲目の*セリーナ・マッキントッシュが手に手をとって岸から歩きだし、来世への青いトンネルを探したすえにそれを見つけたのも、なかば水にもぐったその岩礁の先だった。そのとき*セリーナは四十八歳で、まだ生殖力があった。*ヒサコは五十六歳で、しばらく前から排卵していなかった。

アキコは、その浅瀬を見るたびに、まだおろおろするのだった。彼女を育ててくれたふたりの女性の自殺に、責任を感じないではいられなかったのだ――たとえ*マンダラックスが、ふたりの死の原因は*ヒサコの治療困難でおそらくは親譲りの単極性の鬱病にちがいない、といってくれても。

しかし、*ヒサコと*セリーナが死を選んだのが、アキコが自分の所帯を持つようになった直後だというのは、アキコにとって逃れられない事実でもあった。

アキコはそのとき二十二歳だった。カミカゼはまだ思春期になっていなかったから無関係

である。ちょうどアキコはひとり暮らしをはじめた矢先で、それをたのしんでもいた。たいていの人間が巣から飛び立つ年齢をずいぶん過ぎていたから、わたしはそれに大賛成だった。たくましく有能な女性に成長したあとも、彼女が＊ヒサコと＊セリーナからあいかわらず赤ん坊扱いされて、どれほど悲しい思いをしているかを見てきたからだ。しかし、アキコは長い長いあいだそれぞれに耐えてきた——自分が本当にかよわい存在であったときに、ふたりがしてくれたいろいろのことに対して、心から感謝していた。

アキコが家を出た日、このふたりはまだ彼女のためにカツオドリの肉を細かく刻んでいた。信じられますか。

それから一ヵ月ものあいだ、ふたりは食事のたびに、特別に細かく刻んだ肉をアキコにとっておき、その席に彼女がいなくても、片言の幼児語でささやきかけたり、優しく彼女をたしなめたりするのだった。

そのうちに、ある日、人生はもはや生きるに価しないものになったのだ。

●

臨終の＊船長を見舞いにでかけたときの＊メアリー・ヘップバーンは、病気に悩んではいても、まだ自力で生きていた。まだ自分で食べ物をとってきてそれを料理し、自分の家をきちんとととのえていた。彼女はこのことを誇りにしていたし、また、そうあって当然だった。＊船長はこの地域共同体の重荷であり、それは結局アキコの重荷ということになる。＊メア

リーはちがう。彼女は、もし自分がだれかの重荷になったと感じたら、ヒサコとセリーナのあとを追ってあの浅瀬に行き、海底で二度目の夫に再会するつもりだと、口癖のようにいっていた。

＊メアリーの脚と、甘やかされた＊船長の脚とは、好対照だった。この二対の脚が語る物語は、まったくちがう。彼の脚は白く柔らかだった。彼女の脚は、遠い遠いむかし、彼女がグアヤキルへ持ちこんだ登山用ブーツに負けないほど丈夫で褐色だった。

彼女は、この二十年間口をきかなかった相手にいった。「病気がとても重いって聞いたけど」

実をいうと、彼はまだなかなか男前で肉づきもよかった。身なりも清潔できちんとしていた。アキコが毎日彼に水浴びをさせ、ひげと髪の毛を洗って、櫛を入れてやっていたからである。彼女が使う石鹸は、カンカ・ボノ族の女たちが作ったもので、その成分は細かく砕いた骨とペンギンの脂肪だった。

＊船長の病気が腹立たしい理由のひとつは、彼の肉体に自分の世話をする能力がまだちゃんとあることだった。その肉体は＊メアリーのそれよりもずっと丈夫だった。ただ、老朽化した巨大脳が、彼にほとんど寝たきりの生活を送らせ、下の始末を忘れたり、食事をこばんだり、などなどをさせているのだった。

もうひとつ——彼の状態はサンタ・ロサリア島だけのものではなかった。大陸でも、何百万もの老人が、赤ん坊のように無力な状態で、アキコのような思いやりのある年若いおとな

たちに面倒を見てもらっていた。サメやシャチのおかげで、現在では老齢に関するいろいろな問題は、およそ考えられないものになっている。

●

「この魔女はだれだ？」と＊船長はアキコにたずねた。「わしはブスは嫌いだ。こんなブスは見たことがない」

「この人は＊メアリー・ヘップバーン――ミセス・フレミングよ、じいちゃま」とアキコはいった。ひとしずくの涙が、にこ毛の生えた頬をすべりおちた。「ばあちゃまよ」

「こんな女は知らん。たのむ、ここから追いだしてくれ。わしは目をつむる。こんど目をあけたときは、いなくなっていてほしいもんだ」彼は目をつむり、聞こえよがしに数をかぞえはじめた。

アキコは＊メアリーのそばへもどって、彼女のもろくなった右腕をつかんだ。「ばあちゃま――」と彼女はいった。「まさかあんなことをいうとは思わなくて」

すると＊メアリーは大声で彼女にいった。「むかしからこんな調子だったわ」

＊船長は数をかぞえつづけた。

半キロむこうの泉の近くで、勝ちほこった男のさけびと、高らかな女の笑い声が上がった。その男のさけびは、この島では耳なれたものだった。カミカゼが女のだれかをつかまえて、みんなにこれから性交をはじめることを知らせる、いつもの宣言なのだ。このときのカミカ

ゼは十九歳、性的絶頂期をわずかに過ぎたばかりで、当時の島では唯一の生殖力を持つ男性として、いつだれと、あるいはなにと、性交をするかしれたものではなかった。連れ合いの露骨な浮気——これはアキコが耐えなければならないもうひとつの悲しみだった。アキコほど気立ての優しい女はいなかった。

カミカゼが泉のそばでつかまえた女は、彼の叔母にあたるディルノで、もうすでに子供の生める年ではなかった。カミカゼはそんなことなどおかまいなしだった。どのみち、ふたりは性交するのだ。もっと若いころ、彼はアシカやオットセイとまぐわったこともあった。アキコが、カミカゼはそれでよくても、どうかわたしのためにそれだけはやめてほしい、と説得するまでは。

カミカゼによって妊娠したアシカやオットセイは一頭もなかったが、ある意味でこれは残念だった。もし、彼がこの動物たちを受胎させるのに成功していたら、現人類の進化は、百万年よりもっとすくない時間ですんだかもしれない。

まあ、しかし——なにをそう急ぐことがある?

●

＊船長は目をあけ、＊メアリーにこういった。「なぜ出ていかないんだ?」

彼女はいった。「あら、どうかおかまいなく。わたしは十年間あんたと同棲しただけの女だから」

そのとき、カンカ・ボノ族の女のひとりであるリラが、カンカ・ボノ語でアキコに呼びかけた。アキコの四歳の息子のオルロンが腕を折ったので、すぐに家へ帰ってきてほしい、と。リラは、船長の家がとても悪い魔法に侵されていると信じているので、それ以上近づこうとはしなかった。
そこでアキコは＊メアリーに、自分が家に帰っているあいだ＊船長を見ていてほしい、とたのんだ。アキコは、なるべく早く帰ってくるから、と約束した。「いい子にしてなくちゃだめですよ」と彼女は＊船長にいいきかせた。「約束する？」
＊船長はしぶしぶ約束した。

●

メアリーは、アキコにたのまれて＊マンダラックスを持ってきていた。ここ数日間、昼夜に関係なく、＊船長が何度か死のような昏睡におちいった原因を診断するのに使うつもりだった。
しかし、＊船長にその機械を見せて、最初の質問にとりかかろうとしたとき、相手はまったく思いがけない行動に出た——その機械をひったくり、まるでどこも悪くないようにしゃんと立ちあがったのだ。「わしは世界中のなによりも、このちっぽけなくそ野郎が大嫌いだ」そういうと、よろよろ岸まで下りていき、膝の上まである水の中を浅瀬に向かって歩きだした。

あわれな＊メアリーはそのあとを追ったが、とてもそんな大男をひきとめられる状態ではなかった。彼女は＊マンダラックスが水の中へ投げこまれるのを、なすすべもなく見まもった。そこは浅瀬の斜面で、約三メートルほどの深さだった。浅瀬はちょうど海イグアナの背中のように、急な斜面になっていた。

＊メアリーにはそれの落ちた場所がよく見えた。あそこにある——自分が死んだらアキコに譲ると約束した、たいせつな家宝は。そこで、勇敢な老婦人は、ためらいなくそれをとりにいった。そして、片手でそれをつかんだとき、ホホジロザメが彼女とマンダラックスの両方を食べてしまった。

●

＊船長は一時的な記憶喪失におそわれたため、血に染まった海水を見ても、なんのことかわからなかった。自分が世界のどこにいるかもわからなかった。なによりも彼を驚かせたのは、鳥たちの襲撃だった。それは、この島で最もありふれた鳥である無害な吸血フィンチが、彼の床ずれにひきよせられただけのことでしかなかった。しかし、彼にとって、それは新しくも恐ろしい経験だった。

彼は鳥たちを手ではたきおとし、大声で救いをもとめた。しかし、フィンチの数がますます多くなるのを見て、てっきり自分を殺しにきたと早合点した彼は、海の中に飛びこみ、そこでシュモクザメに食われてしまった。この動物の両眼は長い柄の先についていたが、これ

は何百万、何千万年も前に自然選択の法則によって完成されたデザインだった。それは、この宇宙の時計じかけの完璧な一部品だった。修正を要する欠点はまったくなかった。シュモクザメがけっして必要としていないのは、もっと大きい脳だった。
もし、もっと大きい脳を授けられたとしたら、シュモクザメはなにをしたろうか？　ベートーヴェンの第九交響曲の作曲？
それとも、こんな文章を書くだろうか？――

全世界は一つの舞台、
すべての男女はたんなる役者。
それぞれが舞台に登場し、また退場し、
そしてその生涯に一人が多くの役を演じる……

ウィリアム・シェイクスピア（一五六四―一六一六）

14

わたしはこれらの言葉を空気の中に書いている。左手の人差し指の先で――その指も空気だ。母が左ききだったので、わたしも左ききである。いまや、左ききの人間はひとりもいなくなった。みんなが左右のひれ足を、完全な対称をたもって使う。わたしの母は赤毛、アンドルー・マッキントッシュも赤毛だったが、このふたりがそれぞれにもうけた子供であるわたしとセリーナは、その赤褐色の頭髪を受けつがなかった――そして人類もそれを受けつがなかったし、受けつげなかった。いまでは赤毛はひとりもいない。わたしの知り合いには白子がいなかったが、いまでは白子もひとりもいない。オットセイの中には、いまでもときどき白子が生まれる。これが百万年前なら、その毛皮はご婦人のコートに珍重されただろう。それを着て、オペラを見物したり、チャリティー舞踏会に出席するために。

これがそのむかしなら、現人類の生皮は、ご先祖たちのすてきな毛皮のコートになっただろうか？　いうまでもない。

こんなふうに——空気の中に空気で——実体のない言葉を書きつらねることは苦にならないか？　いや——不朽という意味でなら、わたしの言葉は、父の書いた、それともシェイクスピアの書いた、それともベートーヴェンの書いた、それともダーウィンの書いた、どんなものにも負けない。結局、彼らもみんな空気の中に空気で書いていたのだ。いま、わたしはダーウィンのこの言葉を、さわやかな大気の中から摘みとった——

進歩は退歩よりもはるかに普遍的である。

そのとおり、そのとおり。

●

この物語がはじまったころ、宇宙の時計じかけの一部分である地球生物はひどい危険に瀕しているように思えた。たくさんの部品、つまり人間たちが、もはやどこにもしっくりはまらず、自分たちだけでなしに周囲の部品までをこわしていたからだ。あの当時なら、それを修理不能の損害といったかもしれない。

だが、ちがう！

人間のデザイン面でのある修正のおかげで、わたしはこう思うようになった。その時計じかけの一部分である地球生物が、いまそうしているように、永久に時を刻みつづけることができない理由はどこにもない。

●

もし、父のお気に入りだったある種の超自然生物とか、空飛ぶ円盤に乗った宇宙人が、人類を大自然との調和へ向かわせたのだとしたら、はばかりながら、それを見たおぼえはない。わたしはいつなりともこう宣誓する用意がある。自然選択の法則が、外部からの助けをいっさい借りずに、その修理の仕事をやりとげたのだ、と。

海にとりまかれたガラパゴス諸島の環境の中で、いちばん多く生き残ったのは、いちばん魚をとるのがうまい漁師だった。いちばんひれ足に近い手足を持つものが、最高の泳者だった。突き出たあごは、魚をつかまえたり、つかんでいたりするのに、どんな手もおよばないほど便利だった。そして、水中でますます多くの時間を過ごすようになった漁師としては、より流線形に近い体形、より弾丸に似た体形になったほうが――つまり、より小さい脳を持ったほうが――まちがいなく魚をたくさんとれる道理なのだ。

●

こうしてわたしの物語は終わる。あとは、これまでに書きもらしたいくつかの、あまり重

要でない細部をつけたすだけだ。そのつけたしかたにも、これといった順序はない。いまのわたしは締切りに追われている。父とあの青いトンネルが、いつわたしの前に現われるかもしれない。

●

いまの人間も、遅かれ早かれ自分が死ぬことを知っているのだろうか？　いや。卑見によれば、さいわいにして彼らはそのことを忘れてしまった。

●

このわたしは、生前に生殖をおこなったことがあるのか？　合衆国海兵隊に入隊するすこし前に、サンタフェで、ある女子高校生をあやまって妊娠させたことがある。彼女の父親はその高校の校長で、彼女もわたしもそんなにおたがいが好きだったわけでもなかった。若者にはよくある話で、ただ異性と遊びたかっただけなのだ。彼女は中絶手術を受け、その費用は彼女の父親が払った。わたしたちはその子が女であったか、男であったかも知らされなかった。

それでわたしがひとつの教訓をまなんだのはたしかだ。それ以後は、かならず双方どちらかが避妊器具をつけるようにした。わたしは一度も結婚しなかった。

そしていま、こう考えると笑わずにはいられない。もし現人類が愛をかわすのに先立って、

百万年前の典型的な避妊器具をつけるとしたら、どんなことになるだろうか？　しかも、それを両手ではなく、ひれ足を使ってやるところを想像してほしい！

●

わたしがここにいるあいだに、天然の植物製の筏が、乗客のあるなしはともかくとして、どこかから到着したろうか？　いや。バイア・デ・ダーウィン号が座礁して以来、大陸の生物種の中で、この島々へたどりついたものがあるだろうか？　いや。
しかし、それをいうなら、わたしがここへきてからまだ百万年にしかならないのだ――たいした期間ではない、まったくの話。

●

わたしはどうやってベトナムからスウェーデンへたどりついたのか？
わたしの最大の親友と最大の敵を手榴弾で殺した老婆を射殺したあと、そしてわれわれの小隊が彼女の村を焼きはらったあと、わたしはいわゆる〝極度の神経衰弱〟で入院生活を送った。わたしは優しい、愛情のこもった看護を受けた。そして見舞いにきた将校たちは、あの村で起きた事件をだれにもしゃべらないことがどれほど重要であるかを、熱心に説きつけた。そのときはじめてわたしは、自分の小隊が五十九人の村人を殺したことを知った。だれかがあとでかぞえたのだ。

病院から外出を許されて、酔っぱらった上にマリファナでハイになっていたわたしは、サイゴンの娼婦から梅毒をもらった。いまではもうなくなったその病気の徴候が現われたのは、しかし、わたしがタイのバンコクに着いてからだった。そこへわたしはおおぜいの仲間といっしょに、いわゆる〝保養慰労休暇〟に送りだされた。だれもが知っているように、これはもっと多くの娼婦と麻薬とアルコールを意味する婉曲表現だった。当時のタイでは、売春が米につぐ最大の外貨獲得手段だった。
そのつぎがゴム。
そのつぎがチーク。
そのつぎが錫。

●

梅毒にかかったことは、海兵隊に知られたくなかった。もしそのことがばれると、治療を受けるあいだ、給料を減額される。しかも、治療に要した日数が、ベトナムでの一年間の服役期間に上乗せされる。
そこでわたしは、バンコクで民間の医者をさがした。仲間の海兵隊員が、わたしのような患者を扱ってくれる若いスウェーデン人の医者を紹介してくれた。バンコクの医科大学で研究をしている男だった。
最初の診察で、その医者は戦争のことをたずねた。気がつくと、わたしは自分の小隊があ

の村と村人たちに対してやったことを、洗いざらい彼にしゃべっていた。彼はそのときのわたしがどんな気持だったかを知りたがった。その経験でいちばん恐ろしいところは、自分がたいしてなにも感じなかったことだ、とわたしは答えた。

●

「そのあとで泣いたとか、眠れなかったとかいうことは?」と医者はきいた。
「いや、ないです」とわたしは答えた。「実をいうと、病院へ入れられたのも、やたらにおれが眠りたがったからで」
実際、泣きたい気持は起こらなかった。わたしがどんな人間であるにしても、すくなくとも泣き虫とか、涙もろいたちではなかった。海兵隊がわたしを男にしてくれる以前から、涙には縁のないほうだった。赤毛で左ききの母が父とわたしを捨てて出ていったときでさえ、わたしは泣かなかった。
だが、そのときそのスウェーデン人がいったひとことが、わたしを赤ん坊のように泣かせた——遅まきにようやく。わたしが声を上げて泣きだしたのには、医者も意外だったようだ。当のわたしに劣らず。
その医者がいった言葉はこうである——「きみの名前はトラウトだったね。ひょっとしたら、あのすばらしいSF作家、キルゴア・トラウトの親戚じゃないか?」
その医者は、わたしがニューヨーク州コホーズの外で会った人びとの中で、父の名前を知

っていた唯一の人間だった。
はるばるタイのバンコクまでやってきて、わたしは知ったのだ。やけくそで小説を書きつづけていた父の一生が、すくなくともあるひとりの目には、けっしてむだではなかったことを。

●

その医者のひとことで堰を切ったように泣きだしたため、わたしには鎮静剤が必要になった。一時間後、診察室のベッドで目がさめたとき、医者はわたしをじっと見つめていた。ほかにはだれもいなかった。
「気分はよくなったかい?」と医者はきいた。
「いや」とわたしは答えた。「それともよくなったのかな。よくわかりません」
「きみが眠っているあいだに、この病気のことを考えてみた。きみに処方できる強い薬がひとつあるんだが、それを試してみるかどうかは、きみにまかせよう。副作用があることを充分に認識してもらった上でね」
わたしは彼の言葉をこんなふうに解釈した。自然選択のおかげで、梅毒の病原体が抗生物質に対しておそろしく抵抗力が強くなったのだ。と。例によって、わたしの巨大脳はまちがっていた。
医者は、自分には友達がいるから、もしきみが政治的亡命者に対する保護を受けたければ、

バンコクからスウェーデンへ行けるように手配してあげる、といった。
「でも、おれはスウェーデン語がしゃべれません」とわたしはいった。
「だいじょうぶ」と彼はいった。「いまに身につく、いまに身につく」

訳者あとがき

そのむかし——

カート・ヴォネガットが東京でひらかれた国際ペン大会に出席のため来日したのは、一九八四年五月のことでした。そのときの講演会で、ヴォネガットは満員の聴衆を前につぎの作品の構想を語りました。次回作のテーマは社会ダーウィニズムで、日本人も何人か出てくる。この日本人たちはアメリカ人たちやエクアドル人たちと航海に出て難破し、ガラパゴス諸島にたどりつく。そして物語は百万年後に飛び、新しく発達した人類が描かれる、うんぬん。

いうまでもなく、それがこの長篇『ガラパゴスの箱舟』*Galápagos* で、一九八五年にデラコート・プレスから刊行されました。

ヴォネガット夫妻がガラパゴス諸島を訪れたのは、この長篇の出版よりさらに五年も前のことでした。作者によれば——

「もちろん、あの島々の自然はとても魅力的だった。わたしたちがあそこで過ごした期間は、

チャールズ・ダーウィンとちょうどおなじ——二週間だった。ただ、こちらには、ダーウィンよりもいろいろ有利な点があった。ガイドがみんな生物学の学位を持っていること。モーターボートで、楽に島のまわりを移動できること。一八三〇年代にダーウィンがガラパゴスを訪れたときは、漕ぎ舟しかなかったんだからね。それに、なにより重要なのは、わたしたちが進化論を知っていたことだ。あそこへ行ったときのダーウィンは、まだそんなものを知らなかった。『種の起源』が発表されたのは、ビーグル号の航海日誌から二十年もあとだった」

しかし、実際に執筆にとりかかると、この小説はなかなかの難物で、材料がすっかり混ざりあうまでに三年もかかりました。作者の考えた〝人類の進化〟を実現させるためには、登場人物を百万年間、まったく救出の望めない状態で、絶海の孤島に置きざりにしなければならない。そのためには、ほかの大陸の人びとを全滅させるしかない……。

この小説は、おなじ作者の傑作『猫のゆりかご』とすくなからぬ共通点がありますが、面白いコントラストだと思うのは、『猫のゆりかご』がカリブ海の孤島サン・ロレンゾから世界の終末がはじまるのに対し、こちらは世界の終末を逃れた人びとが、孤島サンタ・ロサリアに永住の地を見つけることです。ちなみに、ガラパゴス諸島には、これと同名の島はありません。吸血フィンチが棲んでいることからすると、群島最北端のウォルフ島（ウェンマン島）かダーウィン島（カルペッパー島）がモデルと思われますが、やはりサンタ・ロサリア

もサン・ロレンゾとおなじく、架空の楽園なのでしょう。
作者によると、進化の問題についても、科学的に正確を期するため、細心の注意をはらったとのこと。また、この小説を書くのに骨が折れたもうひとつの理由は、視点人物がなかなか決まらなかったからだそうです。百万年もの歳月にわたって物語を語りすすめられるような人物は、おいそれとは見つからない。ヴォネガットがどんな奇抜な方法でこの問題を解決したか、その種明かしは、これからこの小説をお読みになる方の興味をそぐことになってもいけないので、ここでは控えておきます。
こうした苦労のかいあって、この長篇は、『スローターハウス5』以後わりあいルーズな構成の多かったヴォネガット作品の中で、『ジェイルバード』とともに、最も緻密に作りあげられた、すぐれた出来のものになりました。アメリカでは八五年の秋に出版され、発売当日からベストセラー、ニューヨーク・タイムズでは十五週間、パブリッシャーズ・ウィークリーでは十三週間にわたって、ベストセラー・リストに名前をつらね、各新聞雑誌にも、近年のヴォネガットの最高作として、手ばなしの絶賛に近い書評が並びました。そのいくつかをつぎに掲げます。
「『ガラパゴスの箱舟』は想像力と創意に溢れ、そして、人間の愚考を観想したマーク・トウェイン風の超然たる皮肉が、ユーモアと同情でやわらげられている。しかも、われわれがヴォネガットに求める特質が、磨きあげられた、入念な構成の中にぎっしり詰まっている。

『ガラパゴスの箱舟』は、この作者から期待される自然発生的なウィットを存分に示しているだけでなく、そのなめらかな密度の高さには、熟考と推敲の味が見られる」

——ピーター・リード

『『ガラパゴスの箱舟』は、ヴォネガットの作家歴の要約であり、進化であるように思われる。ここ四十年間彼が執拗に、だが独創的に、追求してきたすべての問題や論点が、この小説に含まれている。また、ここ二十年間のヴォネガット作品の中で、作者のまえがきのない唯一の小説でもある。彼が言いたかったことは、すべて語り手の声をつうじて言いつくされたのだ。そうした自信は充分にうなずける。本書は実にみごとな出来だ——とりわけ、あれほどの巨大脳を持つ作家が書いたものとしては」

——フィラデルフィア・インクワイアラー

「この長篇小説の大半は、登場人物たちの航海以前の生活を紹介することについやされているが、ここでヴォネガットは近年最高の手腕を発揮する。彼が好調なとき、現代人の愚行を一見単純な筆致で描きだすその腕前に太刀打ちできる作家は、だれもいない」

——デトロイト・ニュース

「カート・ヴォネガットほどの人気作家ともなれば、新作が出るたびにこんな質問が出るの

は避けられない――「成功はXをスポイルしたか？」つまり、彼の新作は過去の作品に比べて落ちるのではないか？　年齢的な衰えや、マンネリによって、あのなじみぶかいペルソナも気が抜けてきたのではないか？『ガラパゴスの箱舟』について、こうした質問に答えよう――いや、ヴォネガットは以前と同様にすばらしく、いつにもましてすばらしく、そしていまなお、まさしくカート・ヴォネガットだ」

――トーマス・M・ディッシュ

そして、それから――

本書がハヤカワ・ノヴェルズ版で出たのが九年前。原書の刊行からはちょうど十年。このたび文庫版が出ることになり、できるだけ訳文に手を入れました。前よりすこしでも読みやすくなっていればいいのですが。

その九年間に、ヴォネガットは二冊の長篇小説――『青ひげ』（一九八七）、『ホーカス・ポーカス』（一九九〇）――と、一冊のエッセイ集――『死よりも悪い運命』（一九九一）――を世に出し、どれもが好評を博しました。そのあと、九四年二月に出版予告まで出た長篇 *Timequake* が、どういう事情があったのか、結局現在まで出ずじまいで、ここしばらく新作がとだえていますが、ヴォネガット自身はきわめて元気で、つい最近も（九五年八月）ＣＮＮニュースの画面に登場したとか。訳者は残念ながら見逃したのですが、これは六一年に書かれた傑作短篇「ハリスン・バージロン」（ハヤカワ文庫の『モンキー・ハウスへ

ようこそ』①に収録)が、今回テレビ映画化されたことについてのインタビューであったようです。

ところで、前記の『死よりも悪い運命』の十四章には、「わたしがこれまでに書いた最高の本は、巨大脳が人間生活を耐えられないものにしていると述べた『ガラパゴスの箱舟』である」という一節が出てきます。作者としても、この長篇はよほどの自信作なのでしょう。

今回、手直しのために原作を読みかえして、この傑作への感動を新たにした訳者から読者のみなさんに贈るメッセージはただひとつ——

「この本を読んで笑い、そして泣け!」

(昭和六十一年刊行のハヤカワ・ノヴェルズ版訳者あとがきに手を加えたものです)

ティモシイ・ザーン／野田昌宏＝訳

超戦士コブラ

〈宇宙戦記①〉体内にコンピュータや武器を組みこみ、全身まさに武器庫の特殊部隊員コブラたちの戦いを描く傑作アクションSF。

コブラ部隊出撃！

〈宇宙戦記②〉かつての宿敵トロフト人が人類の植民に最適と推薦した惑星クァサマの調査に赴いたコブラ部隊員たちが見たものは!?

コブラの盟約〔上〕〔下〕

〈宇宙戦記③〉英雄ジョニー・モロウの孫娘をふくむコブラ部隊員たちは、不穏な動きが探知された惑星クァサマ潜入を命じられた。

ブラックカラー

星間大戦に破れた地球民主帝国は、敵の圧制をうち破る最後の手段として、戦略的に隠しておいた超戦艦五隻の回収をはかったのだが

ブラックカラー2／地球潜入

超人的な戦闘能力を持つために不可欠な秘薬の製造法を入手すべく、ケインはブラックカラー軍団とともに地球へ潜入するが……!?

死者たちの星域〔上〕〔下〕

操縦席に死人がいる船だけが、銀河有数の金属鉱山をもつソリテア星系を覆う正体不明の《雲》を突破できるのだ……本格宇宙SF。

スタニスワフ・レム

ソラリスの陽のもとに
飯田規和訳

心理学者ケルビンが観察ステーション駐在員として到着した惑星ソラリスの海は、様々な驚くべき能力を有する生きた知性体だった！

砂漠の惑星
飯田規和訳

消息を断った宇宙巡洋艦捜索のため、無敵号は〈砂漠の惑星〉に降り立った。そこで調査隊は次々と奇怪な光景を目にしていくが……

エデン
小原雅俊訳

惑星エデンで地球人科学者たちが見たものは巨大な生体オートメーション工場、大量の廃棄物、そして累々たるエデン人の死体だった

星からの帰還
吉上昭三訳

十年の探索の旅から帰還した宇宙船プロメテウス号を待ち受けていたのは、その間に百二十七年を経過して変わり果てた地球だった！

捜査
深見　弾訳

雪に覆われたロンドンで続発する死体消失事件。犯人は変質者？　シンジゲート？　それとも……異色のサイエンス・ファンタジイ！

宇宙創世記ロボットの旅
吉上昭三・村手義治訳

今は昔、まだ宇宙が平穏な時を過ごしていたころ、二人のロボット宇宙道士が、様々な種族に手を差しのべんと、勇んで旅に出たが……

ハヤカワ文庫SF

アイザック・アシモフ

ファウンデーション
岡部宏之訳

〈銀河帝国興亡史①〉第一銀河帝国の滅亡を予測した天才科学者セルダンは、帝国を再興すべくファウンデーションを設立したが……

ファウンデーション対帝国
岡部宏之訳

〈銀河帝国興亡史②〉設立後二百年で、諸惑星を併合し着々と版図を拡大していくファウンデーションの前に恐るべき敵が現われた。

第二ファウンデーション
岡部宏之訳

〈銀河帝国興亡史③〉第一ファウンデーションを撃破した超能力者ミュールの次なる目標は？　壮大なスケールで描きだす宇宙叙事詩

宇宙の小石
高橋　豊訳

遙か未来、全銀河は帝国の支配下にあり、放射能にまみれた地球は辺境に浮かぶ小石にすぎなかった。その地球で恐るべき陰謀が……

永遠の終り
深町眞理子訳

未来の平和を守るため過去を矯正する資格をもつ〈永遠人〉ハーランは、愛するノイエスを救うべく十万年未来をめざし逃亡するが⁉

神々自身
小尾芙佐訳

〈ヒューゴー賞／ネビュラ賞受賞〉〈平行宇宙〉との取引が西暦二〇七〇年の世界にもたらした無限エネルギーに隠されていた罠は⁉

アイザック・アシモフ

夜来たる
美濃　透訳

六つの太陽に囲まれた惑星ラガシュに二千年に一度の夜が訪れたとき、何が起こるのか？巨匠の代表作「夜来たる」ほかを収録する。

サリーはわが恋人
稲葉明雄・他訳

陽電子頭脳を搭載し、完全自動制御の夢の車〝サリー〟を盗もうとする男があらわれた……表題作のほか、ヴァラエティ豊かな作品集

停滞空間
伊藤典夫・他訳

〈停滞空間〉を通り抜け、四万年前から連れてこられたネアンデルタール人の少年と世話係の女性の交流を描く表題作など九篇を収録

火星人の方法
小尾芙佐・浅倉久志訳

地球は理不尽にも火星に対し水の供給制限を宣告した。火星の人々がとった火星ならではの対抗策とは？　表題作など四中短篇を収録

木星買います
山高　昭訳

銀河の彼方から地球を訪れた異星人の申し出た〝木星を買いたい〟という珍妙な取引きの目的とは……？　表題作ほか二十四篇を収録

地球は空地でいっぱい
小尾芙佐・他訳

万能ロボットを与えられた人妻、過去を覗く機械、小妖精に襲われたファンタジイ作家……過去、現在、未来の地球を描く傑作短篇集

ロバート・A・ハインライン

巨匠の未来史シリーズ

デリラと宇宙野郎たち
矢野 徹訳
あくことなき執念を燃やし、月探険計画を推進する男を描く「月を売った男」など、デビュー作を含めた初期の傑作短篇五篇を収録。

地球の緑の丘
矢野 徹訳
地球への望郷の想いを描く表題作はじめ、宇宙に進出しはじめた人類の夢と希望を若々しいタッチで綴る、傑作中短篇十一篇を収録。

動乱2100
矢野 徹訳
アメリカ合衆国全体が宗教専制政治下にある近未来。だが、秘かに抵抗組織が作られていた……「もしこのまま続けば」ほか二篇収録

メトセラの子ら
矢野 徹訳
不老不死の遺伝子を持つ〝長命族〟――だがかれらの存在が普通人に知られたとき、全世界はねたみと憎悪の坩堝と化してしまった！

愛に時間を①②③
矢野 徹訳
長命人ラザルス・ロングの四千年の体験をとおして、新しい社会における道徳、人生、愛のありかたを大胆に描きあげた感動の巨篇！

ハヤカワ文庫SF

アーサー・C・クラーク

明日にとどく
山高　昭・他訳
太陽のノヴァ化で滅亡寸前の人類救出をもくろむ異星人を描く「太陽系最後の日」、古代文明の謎を探る「木星第五衛星」などを収録

天の向こう側
山高　昭訳
赤道上空軌道の宇宙ステーションで働く人々の哀歓を謳いあげる表題作ほか、「九〇億の神の御名」「遙かなる地球の歌」などを収録。

10の世界の物語
中桐雅夫・他訳
通信衛星の悪用の可能性を描く「思いおこすバビロン」、致命的な事故に見舞われる宇宙飛行士の物語「イカルスの夏」などを収録。

白鹿亭綺譚
平井イサク訳
パブ〈白鹿亭〉に集まる男たちがくりひろげる荒唐無稽、奇怪千万の物語……SFとユーモアをあざやかに両立させた傑作短篇十五篇

太陽からの風
山高　昭・伊藤典夫訳
太陽ヨットレースに挑む人々の夢とロマンを抒情豊かに謳いあげたネビュラ賞受賞の表題作ほか、人類と宇宙の未来を描き出す傑作集

幼年期の終り
福島正実訳
突如地球に現われ、地球を管理した異星人の想像を絶する真の目的とは？　新たな道を歩みはじめる人類の姿を描く、巨匠の最高傑作

ハヤカワ文庫SF

アーサー・C・クラーク

渇きの海
深町眞理子訳

近未来の月面上で地球からの観光客を満載したまま砂塵深く沈没した砂上遊航船。その救出を企てる人々の苦闘を描く傑作ハードSF

都市と星
山高 昭訳

未知なるものへの好奇心にかられ、地球最後の都市ダイアスパーから外に出たアルヴィンを待つものは……巨匠が描く一大宇宙叙事詩

火星の砂
平井イサク訳

地球-火星間定期航路の初航海に乗りこんだSF作家が見たものは……近未来を舞台に宇宙開発の様相を迫真の筆致で描く傑作SF。

地球光
中桐雅夫訳

重金属の輸出をめぐり一触即発の危機にある惑星連合と地球政府。戦争回避のため、地球の情報部員サドラーが敵地に潜入したが……

宇宙島へ行く少年
山高 昭訳

クイズ番組で優勝し、宇宙ステーション行きの切符を手に入れたロイは、勇躍旅立ったが……大宇宙にあこがれる少年の夢と冒険！

前哨
小隅 黎・他訳

死と静寂が支配する月面に幾千億年も前から存在していた建造物とは？『2001年宇宙の旅』の原型となった表題作など十篇収録

フレデリック・ポール／矢野 徹＝訳

〈ゲイトウエイ〉——壮大なる宇宙SF

ゲイトウエイ

〈ヒューゴー賞／ネビュラ賞受賞〉冒険家たちは、謎のヒーチー人が残したどこへ行くとも知れぬ超光速宇宙船で飛びたっていく……

ゲイトウエイ2
——蒼き事象の水平線の彼方——

冥王星の彼方で発見された謎の宇宙人ヒーチー人の〝食料工場〟——無人のはずのその工場で地球の調査隊が見つけたものとは……？

ゲイトウエイ3〔上〕〔下〕
——ヒーチー・ランデヴー——

ついに解明されたヒーチー人の超光速宇宙船の操縦法。宇宙航行できるようになった人類とヒーチー人との遭遇は時間の問題だった。

ゲイトウエイ4〔上〕〔下〕
——ヒーチー年代記——

ヒーチー人の超テクノロジーのおかげで、人類は飛躍的な発展をとげた。だが、そこにヒーチー人さえ恐れるエネルギー生物が……!?

ゲイトウエイへの旅

ヒーチー人が金星に残していった謎の遺跡を案内する男の命がけのトンネル・ガイドの物語ほか、人類とヒーチーの歴史を描く連作集

グレゴリイ・ベンフォード

アレフの彼方
山高 昭訳

人類は木星の衛星ガニメデを地球化しようとしていた。だがそこには、遙か太古の異星文明が残したという謎の存在アレフがいたのだ

木星プロジェクト
山高 昭訳

神秘にみちた巨大惑星、木星に生命は存在するのか？ 木星上をめぐる観測ステーションの人々は、その問題を究明しようとするが⁉

夜の大海の中で
山高 昭訳

一九九七年、異常な運動をする小惑星イカルスの調査に向かったナイジェルが、イカルスの地表で見たものとは？ 傑作ハードSF。

星々の海をこえて
山高 昭訳

二〇二一年、謎の通信の発信源である八光年の彼方をめざすナイジェルらは、二十年の旅の果てにかつてない恐るべき敵と遭遇した！

大いなる天上の河〔上下〕
山高 昭訳

有機生命の抹殺をもくろむ機械文明のため破滅寸前に追いこまれた人類……人類と機械文明の未来を壮大なスケールで描く傑作長篇。

タイムスケープ〔上下〕
山高 昭訳

〈ネビュラ賞受賞〉破滅に瀕した地球を救うべく、一九九八年の物理学者たちは三十年過去へタキオンで通信を送ろうとするが……⁉

訳者略歴　1930年生，1950年大阪外国語大学卒，英米文学翻訳家
訳書『ターミナル・マン』『サンディエゴの十二時間』クライトン，『どろぼう熊の惑星』ラファティ，『スチール・ビーチ』ヴァーリイ（以上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
FT=Fantasy

ガラパゴスの箱舟

〈SF1118〉

一九九五年十月二十日　印刷
一九九五年十月三十一日　発行
（定価はカバーに表示してあります）

著者　カート・ヴォネガット
訳者　浅倉久志
発行者　早川浩
発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町二ノ二　郵便番号一〇一
電話　〇三－三二五二－三一一一（大代表）
振替　〇〇一六〇－三－四七七九九

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

印刷・信毎書籍印刷株式会社　製本・株式会社川島製本所
Printed and bound in Japan
ISBN4-15-011118-9 C0197